

ガンダムビルドファイターズ《刃》ーブレイドー

オウガ・Ω

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本来動くことができないガンプラを動かす未知の粒子、プラフスキー粒子の発見により世界規模でガンプラバトルが普及し数年

《秋月タカヤ》のビルダー、ファイターとしてまだまだ経験が浅いことを心配した《マスタージャパン》は新進気鋭のチーム《チームナカジマ》と引き合わせる事を決めた

：タカヤとチームナカジマの面々、ライバル達が出逢うとき、熱く、鮮烈な恋をもはらんだガンプラバトルがいま始まる！

pixiv、暁にもマルチ投稿してあります

あと、☆印が在るタイトルには挿し絵を入れてあります

二十年後ではVivid・Strike!のフーカ、リンネが登場します

# 目次

刃ブレイドー番外編、Blade・strike! (前編)	1
刃ブレイドー番外編、Blade・strike! (後編)	7
BLADE・STRIKE!番外編《前編》	27
閑話諸々……本編の過去もしくは未来編	
閑話 天瞳ミカヤ《壹》	35
閑話 闇ーアクムー《貳》	47
閑話 受難!☆《参》	58
ガンビル刃お正月特別バトル!紅の彗星VS紅の鬼神☆	63
特別話 バレンタイン編	76
甘々、ポリッツの日	87
特別話 ガンプラハロウィンパーティー《前編》	93
特別話 ガンプラハロウィンパーティー《後編》	101
閑話 ドイツのマブダチ(幼馴染み)出会い編 New!!	118
閑話 ドイツのマブダチーUnsere Heldin NEW!!	122
閑話 Project《T・A》	126
第一章 刃の名を持つアストレイ	
プロローグ	131
第一話 チームN	134
第二話 強化(前編)	141
第二話 強化(後編)	150

第三話 星光と雷刃（前編） | 159

第三話 星光と雷刃（後編） | 167

第四話 看病（前編） | 181

第四話 看病（後編） | 191

第五話 カレトヴルツフ | 200

第五・五話 嵐の前で | 212

第六話 タカヤのペアは？（前編）☆ | 220

第六話 タカヤのペアは？（中編） | 230

第六話 タカヤのペアは？（後編） | 238

第二章、カレトヴルツフ争奪男女ペアマッチ!!

第七話 開催！☆ | 247

257 第6・5話 とある乙女座の少女《HENTAI》の秘め事《悦》

第八話 星光と騎士 前編 | 264

キャラクター&ガンブラ紹介 | 271

第八話 星光と騎士《後編》 | 283

第九話 武者と墮天使 | 297

カレトヴルツフ争奪ペアマッチ、ベスト8紹介!! | 314

第十話 荒ぶる牙、折れた刃は…… | 325

第十・五話？天災ジェイル・スカリエッティ博士の楽しいガンブラ

講座！ | 348

第十一話 絆のアストレイ、蘇る鉄拳と漆黒《前編》 | 352

第十一話 絆のアストレイ、よみがえる鉄拳と漆黒《後編》

362

第十二話 修理とドキドキバスタイム♥《前編》 | 376

第十二・五話	鏡ーシユピーゲルー	405
閑話休憩。	その頃、クロウは…	411
特別話	七ターわたしとタツくんの初めての…	417
閑話	恋乙女達?…	428
第十三話	もう一つの…:…:アクイ	435
第十三・五話	あきつきたかやの日記(5歳く7歳)	446
	ミカヤのタツくん日記	460
第十四話	若き翼達!! 《前編》	476
第十四話(裏)	とある乙女座の少女《HENTAI》の秘め事…	488
	寸止め!?! new!!	488
第十四話	若き翼達!! 《後編》 ☆NEW!!	492
第十五話	悪夢ー鬼の血脈ー(挿絵ガンプラあり)	513
第十六話	再臨、影の刃!(ーブレイドハートー)	527
第十七話	消えゆく魂、奪われる至宝	533
第十八話	動きだす悪意。模型秘伝帳…そして	542

刃ブレイド―番外編、Blade・strike!  
(前編)

八年前、ドイツ……

「りくた、ふくた、なくなったら……」

「やじや、くろくはヤープンにかえらんでココのこるんじやく」

「いかないで……ここにいてください」

「な、なあ……コレでサヨナラじゃないんだ……いつかココで……八  
年たったらまたドイツで日本対ドイツのガンプラバトルの大会がひら  
かれる……オレはそれにぜつたいにでるからさ……コイツに誓つ  
て必ず！」

「………わかった……やくそくじや……」

「うん……やくそくしよ……くろく」

この日、オレ《秋月クロウ》は親友のりくた、ふくたと互いのガン  
プラ《アスタロトオリジン》、《バエル》、《アスタロト》を出して再会  
を約束してドイツからなんか暖かい目で見えるクソ親父とお袋たちと  
一緒に日本に帰った

刃ブレイド―番外編、Blade・strike! (前編)

あの日から一年、お袋たちやラル大尉、ゲンじいちゃん、ユウじい  
ちゃん、メイばあちゃん。そして《マスターじいちゃん》と鍛錬しな

がら勉強も両立させて修行の旅に出てガン普拉バトル公式、非公式戦を繰り返した：最初は何度も負けてアスタロトもボロボロになった

オレには才能が、ガン普拉バトルのセンスが無いってわかっていた：何度もガン普拉バトルを止めたくなかった。でも

「どうした！立ていクロウ！！地を踏みしめ腰に力を入れ踏ん張らんか！！」

「ぐ、ぬぎぎ……」

「……立たねばお前の友との約束も、両親のイチャコラ空間が家の中だけではなく店内をも浸食するのも防ぐことも叶わぬぞ！！」

「…………ぬ、ぬぎ……」

そうだった：親父とお袋たちのイチャコラをやめさせて、オレの目標で憧れのユウキ・タツヤさんみたいな見る人を楽しくさせ熱くするファイターになって：ドイツでりくた、ふくたにもう一度会う為に！

「ま、まだまだあああああ！！」

「ふふ、その意気やよし！応えよクロウ、流派ガン普拉東方不敗は！！」

「……王者の風よ！！」

……アームレイカーを握り締めアスタロト、オレ自身を立ち上からせ叫んだ：ギシギシするようなアシムレイトから来る痛みに耐えた……何度も修理して改造してバトルして……たくさんのトップファイターとバトルして学んで技術を磨いていくを繰り返していった

そして八年なんてあつと言う間に過ぎて行って…今、オレは

「やっと帰ってきたぞ……………」

八年ぶりのドイツの空の下、あの日にりくた、ふくたと約束をした  
空港のロビーにいる

「おおいクロウ、どうした？」

振り返るとヤジマカンパニー日本選抜チームのカミキ・セカイさん  
が心配そうに声をかけてきた…でも今は…

「ごめんセカイさん、オレ、行かなきゃいけない場所があるんだ……だ  
からホテルに先にいつてて!!」

「あ、まて……………しゃあないか」

ため息まじりのセカイさんの声を背に受けて駆け出した…向かう  
のはりくた、ふくた、孤児院のみんながいる場所、レンタルバイクを  
借りて街中を走らせた

街並みも街路樹もあの時と変わらない…狭い路地をいくつか抜け  
曲がった先には小さな教会があつて院長先生、シスターがパイプオル  
ガンを奏でて生活が苦しくても暖かい場所

りくた、ふくた、孤児院のみんなと一緒にガン普拉を作つて無料の  
バトルシステムで遊んで、親なし子つて苛めてくる奴らからりくたを  
守りながら、ふくたと一緒に喧嘩したり



『お、おいふくた、狭いだろ?』

『くろく、もつとよせや。り♡◆☆がゆぶねはいらんのじや』

『べ、べつにいいです』

風呂にはいったら何でかわかんないけど、りくたは恥ずかしがるし……同じ男なのに背中向けて小さな風呂に入ったよな

…八年か、りくた、ふくた…どんな風になってんかな。りくたはおとなしくて頭も良いから優等生になってるかな。ふくたはオレと同じで喧嘩つばやいし、番長だよな…って考えながら最後の角を曲がってバイクを止めメットを脱いでみた光景に息をのんだ

「……………え……………なんで」

孤児院が無い……………なんでなんだよ…目に見えるのは乾いたサラサラした土地だけ

何度も目をこすってみたけど見えるのは更地になった土地だけ…ふらふらと歩いて膝をついた土を掴んで手を開いた…サラサラと落ちていく

短かったけど、みんなと一緒に過ごした思い出の場所が…無くなってる

「……………院長先生、シスター、みんな、りくた、ふくた……………どこに、どこにいったんだ……………」

ぎげんなよ…やっと来たのに…なんだよコレは!?!いや、もしかした

ら孤児院を移転したのかもしれない。ニルスさんならヤジマ商事ならわかるはずだ。バイクを泊めてある場所にあるいて跨がるとキーを回す…あたりも暗くて雨が降り出した。オレはメットを被りバイクをホテルがある方向に走らせた

途中でフードを被った誰かとチンピラが言い争う場所を通り過ぎたけど、今は急いで孤児院の事を調べなきゃいけないから…

—————  
—————

「以上がヤジマカンパニー選抜チームの選手の詳細よ…リンネ、あなたが戦う相手ファイターなんだけど」

「興味ありません…いつもどおり勝ちますから」

「そう、でも使用するガンプラについては知りたくないかしら？アナタと同じガンダムフレーム、みた感じだと《アスタロトオリジン》ベースの改造機、名前は《アスタロト・ブレイジング》…」

「アスタロト…白いアスタロトですか？」

「え？赤いアスタロトだけど…気になることでも」

「……………いえ、コーチ。トレーニングはここまでにしてガンプラの調整を仕上げます」

「はい、ガンプラの調整はファイターのあなたにしかできなかったわね…明後日の試合、期待してるわよ」

「はい、また明日」

コーチが出てから私はガンプラを手にしパーツの調整、塗料剥離、緩みがないかをチェックする。でも頭に先のコーチが口にした《アスタロト》の言葉が響きます…白いアスタロトだったらよかったのにくろくがドイツに来てくれたんだとおもった…やっぱ子供の際の約束は無理だった

「……………くろくのうそつき……………」

もう私にはくろくしかいないから…明後日の試合、赤いアスタロトは…

「……………全力でやります…」

…ハイライトの消えた瞳がデザインナイフの刃に写し小さくつぶやく少女…欧州U15ガン普拉バトル王者《女王》、リンネ・ベルリネッタ

そして……………

「……………あんたらしっこいんじや！バイト先まできおってからに!!」

「るせえ！俺のガンプラがぼろっちいアスタロトにまけるわけねえんだよ！」

バイト先まで押しかけたチンピラファイターに売り言葉に買い言葉でガン普拉バトルを申し込まれる少女…フリーカ・レヴェイントン

邂逅の時は間近…

前編、了!!

刃ブレイド―番外編、Blade・strike!  
(後編)

ヤジマカンパニー、ベルリネット家のスタッフが明後日に行われる《日独親善ガン普拉バトル大会》の準備に追われている中、会場の近くにあるヤジマカンパニー系列のホテルの一室で新プラフスキー粒子開発、バトルシステム開発責任者ヤジマ・ニルスはクロウと向き合うように椅子に座っていた

「…あ、あの〜ニルスさん。怒ってますよね」

「…クロウ、いままでどこにいたんだい。連絡もよこさずにセカイに言づてして、別行動をとるなんてチームメンバーとしての責任はないのかい？」

「……勝手な行動をしてすいませんでした……」

「………今後はこのようなコトがないように気をつけるんだ。君はヤジマカンパニー選抜チーム、日本の代表の名を背負ってることを忘れないように……」

「はい……」

「………さて、説教はココまでにしよう……さあ部屋に戻……」

「あ、あの……実はニルスさんに頼みたいコトが……」

部屋をでようとし立ち止まるクロウの真剣な眼差しにニルスはバトルフィールド用粒子供給システム調整をする手を止めた

「なんだい？」

「実は、この孤児院について調べて欲しいんです……………」

「……………（……………もしかしたらコレが先の単独行動の理由かな……………）わかった。明日の朝までには調べておくよ」

「あ、ありがとうございます！」

バツとニルスに深く頭を下げクロウは慌ただしく部屋をあとに出  
ていったのを見て軽くため息をつき、ヤジマカンパニー系列会社調査  
部へと孤児院の調査を依頼し再び作業に戻った

刃一ブレイダー番外編、Blade・strike！ 《後編》

ヤジマカンパニー、ベルリネット家との日独親善ガン普拉バトル大  
会当日…すでに大会は熱狂の渦に包まれていた

「次元霸王流！聖・槍・突きい!!」

「うわあああ!!」

赤く猛るような炎を全身に纏いながらセカイさんのカミキバーニ  
ングガンダムの拳がジ・Oとサザビーのミキシングカスタムの分厚い  
装甲を砕き、勢いをつけたまま廃コロニーの外壁を炎のようなプラ  
フスキー流子と共に粉碎していく

相変わらずセカイさんは凄い……………ヤジマ選抜チームとベルリネッ  
タ家が擁するガン普拉ファイター育成ジム《フロンティア・ジム》の

試合は互いの代表者を5人ずつ出して行われるチーム戦

初戦にキジマさんが勝ちを納めての二戦目

「さすがはフロンティアのファイターなだけはある……(ち、こっちの動きを読んでやがるか、いやオレと戦うようにガンプラを仕上げたか……しかもツールギスカよ!!)」

「(ジルコーチの言うとおり、バスターライフルを撃つ時にわずかに腕が下がる……いまだ!!)」

フェリーニさんのガンダムフェニーチェ・リナーシタのわずかな隙を突いての突進、ドーバーガンに仕込んだビームランスで穿ち倒されるなんて……続いているバトルはグレコさんとのバトルは接戦になった

「ガンダムグリップ、変形機構を完全再現しつつ武装追加してるか……だが負けるわけにはいかん!!」

「つ、強い……でもグリップタキオンは負けないんだから!!」

高出力バーニアを展開し超加速の戦いを繰り広げるツールギス・ワルキューレ、ガンダムグリップタキオン……ぶつかり合いながら光の軌跡が火星の空を彩っていく……互いに撃ち、斬り、拳で殴る、蹴る……怒涛の応酬はタイムアップを迎えてVアタック方式に持ち込んで捨て身のビームランサーを上体そらしで交わしてのビームサーベルで逆袈裟で切り払おうとしたけど同時に互いの刃が切り裂いて、まさかの引き分けになった

四戦目はドイツ出身のチョマーさんは……

「ち、はやいな！、だがパーフェクトゲルグク・チョマーカスタムをなめるなよ!!」

「さすがは世界戦常連…ガンプラもファイター技量も高い！でもイフリート・リッターは負けるわけにはいきません!!」

チョマーさんのパーフェクト・ゲルグクと槍と斧を合体させた戦斧を振るうイフリート・リッターのビーム砲撃、電撃の撃ち合いでアバオアクーが半壊するほどだった…でもアーマーパージしてからの格闘戦に持ち込まれて僅差でチョマーさんが負けてしまった…でも

「あ、あの…：…よろしければ今度一緒にガンプラ買いに行きませんか?」

「え? い、いや…：…よ、喜んで!!」

って試合が終わってすぐに相手ファイター、みた感じ元気っ娘な感じでたしかキャリー選手だっけ? いきなり誘われてチョマーさんが慌てふためいていたけど…：…まあ、いいかな。話は戻すけど今のセカイさんの勝利を含めてで2勝2敗1引き分け…

今日のガンプラバトル最終戦…オレのバトルが最後を飾る…軽く頬をパンつと叩くとGPベース、そして相棒《アスタロト・ブレイング》を手にし会場に入ると歓声が湧き上がった

「さあ、皆様! 日独親善ガンプラバトル大会本日最後のバトル、ヤジマカンパニー選抜チーム《アキツキクロウ》選手の入場です!!」

スポットライトに照らされた通路を歩くオレに観客席から拍手と歓声が沸き上がる中、まっすぐ歩いてく

『全日本U15ガン普拉バトル大会を二回制覇、さらには昨年行われガン普拉バトル世界大会においてベスト8進出を果たした若きファイター！愛機であるアスタロト・ブレイジングを駆り戦う姿はまさに紅い鬼……《紅の鬼神》の二つ名は伊達ではありません!!』

いや、紅の鬼神って……ううかいつの間にか広がってるし……中央に12基並べられたバトルシステム筐体の前に立つと反対側にさつきとは違うスポットライトが無数当てられスチームが吹き出した……どうやらオレの相手の入場みたいだ

『続きまして、今大会の主催であるベルリネッタ家擁するフロンティアアジム所属ファイターにしてベルリネッタ家の後継者。ガン普拉バトル欧州U15大会2連続覇者、純白の女王《リンネ・ベルリネッタ》の入場です!』

光に照らされた先にはオレの相手……みた感じ同じ年齢のリンネ・ベルリネッタ選手がふわふわした髪のお袋より若いコーチ?と一緒に歩いてくる

『二年前、彗星のようにヨーロッパでおこなわれるガン普拉バトル大会に出場するや、圧倒的なパワーに加え遠近戦に対応したバトルスタイルは近寄れば相手の防御を貫き、組ませれば豪快に叩きつけ粉碎する姿、使用するガン普拉、ガンダムバエル・ラインを操る姿は《純白の女王》と呼ばれるのに相応しいです。さあ、これより始まる本日最後のガン普拉バトルを勝利するのは誰か?』

簡単な紹介を終え区切った司会者《ストーリーカー》さんから目を離して筐体に立つ……目の前にはリンネ・ベルリネッタ選手がオレを見てる……いやアスタロト・ブレイジングを凝視してたけどすぐに視線を逸らしGPベースを手にスロットに、中央にガン普拉をセットした



あれはガンダム・バエルか……よく見ないとわからないけど相当に使い込まれ補修し強化もされてる……ハルおぼさんのガンプラとにってる……つと今は試合に集中しないと……この試合中継はドイツを含めた欧州すべてに流れる、もし視てるなら気づいてくれるはずだから

昨日未明、ヤジマカンパニー選抜チーム宿泊ホテル

同ヤジマ・ニルス宿泊室

「……孤児院が……閉鎖された？六年前に………なんで」

「落ち着いて聞くんだクロウ……ヤジマカンパニー調査部で調べてわかったコトをいうよ……」

……ふらつきながら椅子に座ってニルスさんから話してくれたのは今から六年前に孤児院を経営していた院長先生が亡くなって運営が難しくなって、まもなくして孤児院の皆はソレゾレ別な場所に預けられたって事までだった

なんだよ……みんな……院長先生、シスターイクス……りくた、ふくた……もう会えないのか……探すための時間も大会中のスケジュールは分刻みでほぼ無いし、何よりチームとして単独行動をとるわけにはいかない

「クロウ、調査部の方でも他の孤児院に行った子や関係者に関しての追跡調査をしている……もしわかったらすぐに君に伝えるよ」

「……はい」

「待つんだクロウ」

そのまま席を立とうとしたけど力が入らない…冷めたコーヒーを飲もうとした時、ニルスさんが口を開いた

「この大会はドイツも含めた欧州全域にリアルタイムで放映される…もしかしたら君が探している孤児院の子たちも観るはずだ」

「!？」

「キミの試合を見れば必ず連絡が来るかもしれない…ガンプラで繋がったら縁が切れていなければ必ずココに」

「会場にあらわれる!!でもアイツら会場に入れるかどうか…」

「心配しなくても大丈夫。一応身元確認をしてから会場に入れるようスタッフに言っておくよ」

「ニルスさん、ありがとうございます！失礼しました!!」

コーヒーを一気飲みしてニルスさんに何度か頭を下げてから部屋をあとにした。向かうのはもちろん工作室、明日のガンプラバトルを盛り上げてオレがドイツに帰って来てることをわかるように最高のバトルをしないと

ブレイジングの塗装のリタッチ、緩み、スレッジハンマーの細かな調整をやりながら新しく削りだしたブレイジングクリスタルを接着、装甲パーツとの摺り合わせを同時平行で進め今朝方に仕上がった

《Press set your GP—Base…Press  
et your GUNPLA》

…んで今、オレはアスタロト・ブレイジング（version2.

5)を静かに台に置く。GPベースを筐体スロットにセット：プラフスキー流子が溢れ出し輝く中、電子音声が響いた

《Beginning[Plavsky. Particle]dis  
persal.

《field5, planet-moon》

バトルフィールドはクレータが穿たれめくれあがった月：月鋼でアスタロトが発見された場所を再現してやがるか……やっべえ、いつも以上に熱くなるってわかる、プラフスキー流子が衣類に反応してバトルジャケットへ再構築、濃紺半袖のジャケットになぜかわかんないけどタービンがついたローラーブーツ。フィンガーオープングローブに紅いマフラー……いつも通りのバトルジャケット姿になる。リンネ・ベルリネットを見たんだけどさ……なんでさ？なんか大人になつてドレスみたいなバトルジャケットを着てる。メタルプレート付きのフィンガーオープングローブ……カッコイイ……

でも今はバトルに集中する！

《Battle・Start》

「秋月クロウ、アスタロト・ブレイジング！」

「……リンネ・ベルリネット。ガンダムバエル・ライン」

「くげ！！／＼いきまます」

勢いよく無重力の海へと飛びながら月面に着地、あたりを警戒する  
：機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズの設定だと人類が生み出す  
も暴走したMAと人類との戦い：《厄祭戦》での最後の決戦の舞台と  
なりソロモン72柱の悪魔の名前を冠する対MA決戦MS《ガンダム  
フレーム》投入、戦局は人類に傾き、月が最後の決戦舞台になり半壊  
させながらも勝利を収め、オレが使うアスタロトが見つかった場所だ

まったくガンダムフレーム同士の戦いに相応しい舞台だ：つて感じ  
た時、気配同時にロックオン警告と同時にアームレイカーを傾け捻ら  
せた、さつきまでいた場所に光が走るのを見てモニターを切り替え見  
えたのは純白に紫のカラーに彩られたASW-G-01：最初に生  
み出されたガンダムフレーム《ガンダムバエル》が再び背中から伸び  
たレールガン兼ウイングからレールガンを撃ちながら迫ってくる

「なんつう正確な射撃だ……でもなあ……」

両肩のバーニアを一気に加速、間合いを詰めながら外側脹ら脛にあ  
るバーニア：《ブレイジングウエポンバインダー》が跳ね上がるとハ  
ンドガンが飛び出し手にし構え引き金を引き絞る。狙うのはレール  
ガンの弾頭：アドウの兄貴のフアングに比べりゃ

「……まだ速さが足りねえ!!オラオラオラ!!」

二対の双銃イクタア、クトウバから無数の銃弾の雨が息つく間も無  
くレールガンの弾を狙い撃ち弾道をそらし急速旋回、重心移動で裁き  
きれないのをかわしながら距離を詰めバーニアスロットを最大に押  
すと瞬く間に肉薄、クトウバ、イクタアを収納しスレッズハンマーを  
両手に構え大きく振りかぶる。この距離はオレの制空け……

「っー」

振り下ろしたはずのスレッジハンマーの先にいたはずのバエル・  
ラインの姿が消え空を切った瞬間、激しい衝撃が左側からアームレイ  
カー越しに伝わりモニターが激しくハンマーに殴られたように何度  
も弾かれたように揺れ、遅れて叩きつけられたような感覚に襲われた

――  
――  
――

「……………」

月面を跳ねながら岩肌に叩きつけられた赤いアスタロトを見なが  
ら構えを解き背を向け歩き出しながら想う：いつものように勝った

レールガンを手ドガンで撃ち落とし、よけた事には驚いたけど予  
想の範囲：たとえ抜けたとしても攻撃の瞬間に僅かな隙が生まれる。  
大型の武器を使う時点でわかりきっていた筈なのに突っ込んで振り  
かぶった。

読みやすい動き：体を沈め迷わず胴へ蹴撃を叩き込んだ：確実な  
手応えと共に振り抜いた

私は負けるわけにはいかない：もうあんな想いは

…………お祖父ちゃん……………!!

もう誰にも蹂躪されない：翻弄されない絶対的な強さを手にする  
：くくちゃんも強くなった私をみたら驚くよね？もう守られてばか

りじゃない。もっと強くなれば喜んでくれるはずだよね

『よくやったわリンネ…これで世界戦に向けて一歩前進したわ』

「…はい……………それに動きがわかりやすくて助かりま……………」

『……………つたたたた…なんてバカちだ……………くうく効いたぜ今の蹴りは』

コーチと私の声に割り込むように響いた声…バエル・リインを通して見たのは首をならしながら立つ赤いアスタロト…確かに決まったはずなのになぜ？今考えることじゃないです。目の前にいる敵を倒して私は強くないと

『……………リンネ・ベルリネッタ……………強いなお前！このまま世界Jrでも充分通用するぜ…』

「……………」

サブウィンドウ越しに笑顔を向けながら訛りのあるドイツ語で話しかけてくる。なんで、そんなに楽しく話すのですか？自分がおかれている状況をわかってないみたいです

『今日はオレにとって一番大事なバトルだ……………だから全力で最高に熱いバトルしようぜ!!リンネ・ベルリネッタ!!』

力強い声と共に赤いアスタロトが地を蹴りバーニアを最大で加速して再接近、大ぶりの構えて策もなく振るってくる。先ほどと変わらない。アームレイカーを引きながら空きの胴へ拳を叩き込んだ…でも固い何かに阻まれました

私の目にうつるのはスレッジハンマーを重ねバエル・リインの拳を

防かぐ姿…まさか予測してたのですか!? 力任せに押し反動を利用して距離をとる。でも赤いアスタロトがない

一体どこに? と索敵センサーから甲高い音が響くと同時にとっさに左腕を前に出すと激しい揺れがアームレイカー越しに伝わってきた。受けた左腕に

スレッヅハンマーをぶつけるアスタロト…あの一瞬で間合いをつめられたの? バエル・ラインの各関節にダメージアラート表示に驚きながら構え連続で蹴りを撃つ

『無影脚? ……でもまだまだああああ!!』

「え? ……つ!」

私のバエルラインの蹴りを両手に構えたスレッヅハンマーで弾きいなしで…でも私の蹴りの前にスレッヅハンマーから破片が跳び亀裂が広がり走っていく、邪魔な盾《スレッヅハンマー》を潰すために返す足で身体を捻り重さを乗せた蹴りを再び浴びせようとしたときでした

『……え……が……れ…』

「? ……え」

私の耳に小さく、はつきりとした声が届いた瞬間でした…蹴りがスレッヅハンマーを捉えようとする寸前、大きく弾け真っ赤な赤い炎、蒼い炎が亀裂からあふれ勢いに負け弾かれながら踏みとどまった私は目にしてしまった

全身から真っ赤な炎を燃えあがらせ、両手に赤と蒼の炎を纏わせ立つ赤いアスタロトの姿を

――  
――

つよい、さすがは欧州U15ガン普拉バトル大会覇者で《純白の女王》、リンネ・ベルリネッタの二つ名は伊達じゃない…それにオレの中でパチパチと熱くなる。

世界Jr.ガン普拉バトル大会に充分通用する強さ…なによりバエルをアソコまで作り込んでるのが実際にバトルして触れてみてよくわかった…もう、オレン中にある火が燃えさかって血が沸騰して止められねえ

無影脚を防ぐたびに感じる重さと力は火に油を注いで激しさを増していく中、心を落ち着かせる…澄んだ水面に波すら立たず、でも熱い炎が突き抜けていく

……燃え上がれ

「……え…が…れ」

自然と紡がれた言葉と同時に目を閉じる…すべてが通り抜けて見えたのは絶え間なく水面に落ちる水滴、やがて止まった時、アシムレイトを発現と同時に頭に浮かんだ言葉を紡ぐ。アスタロト・ブレイジングと一体化し《悪魔の力》を呼び覚ます詠唱がモニターに流れた

W<sup>我</sup>ir<sup>等</sup>, du<sup>は</sup>, du<sup>汝</sup> bist<sup>は</sup> ich<sup>我</sup>!  
Tra<sup>蹂</sup>mp<sup>躑</sup>ling<sup>し</sup>! All<sup>ろ</sup>! Ge<sup>精</sup>ist<sup>靈</sup>bes<sup>憑</sup>itz<sup>依</sup>!!

……阿羅耶識システム《kiriku》と文字がモニターに浮かぶ体の奥が熱くなる、自然に片方の髪を撫でつけるよう逆立てバエル・ラインの姿を捉える今のオレはアスタロト・ブレイジング、名が



示すように燃える悪魔だ…両手《モロテ》に構えるは、Yナノラミネー  
トブレイド《ガツサン》、《ムラマサ》を構え前傾姿勢で構え一気に駆  
ける

バエルリインを操るリンネ・ベルリネッタ…面倒だからリンネも  
こちらに最大加速で接近してくるのが見え瞬く間に肉薄、拳が顔面め  
がけ突き刺さり右頬に激しい痛みと鉄の味にコリつとしたものが広  
がる。ユウキ・タツヤさんとのバトル以上にアシムレイトが強くなっ  
てんな、それ以上にアシムレイトで発動したオレの動きを捉えるなん  
てスゴいな！歯を食いしばりながらガツサンを殴りつけた拳もろと  
も肩口から切り払う

「おらああああ!!」

『っ！リインの腕が……』

切り払われた右腕が宙を舞う光景に声をあげながら残された左腕  
で殴りかかる…鋭く切れのあるプラフスキー粒子を纏い威力を増し  
た拳わかわずけど、拳圧から生まれた風がバトルジャケットに無数の  
キズができ、服の下の身体が切り裂かれていくのがわかる

軽くバックステップを踏み、前へと蹴り上げるように刃を振るい  
リインの胴を風いだ、それでも蹴りと拳打は止まらない。刃で弾きい  
なし束で当て防ぎ、蹴りを喰らうけど…熱く、燃え上がってくる…  
もつとだ

「ぐっ……らあー」

『っ、く………』

燃え上がれ………燃え上がれ………

「っらあー」

『ふっ!!』

胴への蹴り、拳……確実に致命的な一撃を繰り出してくる……戦ってるうちに強くなってる……会場のみんなも歓声が湧き上がってエールが響く度にアシムレイトが強くアスタロトブレijingと結びつき一体化していく……全身が悲鳴をあげているけど気にならないぐらい楽しい

リンネ。お前ヤツパリすごいよ……だから最高の技で決着をつけるぜ！

「……激しく燃えろムラマサアツ！ガツサアアア！」

全身に配置されたブレijingクリスタルから蓄積されていたプラフスキー粒子が爆発的に解放、ガツサンとムラマサの束に埋め込まれたクリスタルからめ蒼と紅の炎が激しく波打ち纏われる

コレがオレの必殺技………

「必い殺っ！ブレijingイイイグッ！ブレイドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「……………ッ！」

激く炎を身に纏いながら加速、今まで以上の速さで繰り出された拳を紙一重で交わすけど左側アンテナが砕かれるも左腕をムラマサで抵抗感もなく切り捨て跳ね、ガッサンで胴を風ぐも意に介さず蹴りが右股装甲を砕きフレームが露出するのも気にとめずムラマサで切り捨て、逆袈裟、胴風ぎを織り交ぜ斬る、斬る、斬る…紅と蒼の炎、剣閃が走るたび装甲が砕かれフレームがむき出しになるバエルリンに最後に舞うように刃が交差し切り捨て抜け刃を振るうと同時に爆発四散した…会場の誰もが波打ったように静まり返っている

《BATTLE ENDED!》

『し、勝者……ヤジマ選抜チーム、秋月クロウ選手です!!』

試合終了と司会の勝利宣言のアナウンスが響き、パチパチと拍手が湧き広がり歓声が怒濤のように会場内に響く……

「はあ、はあ……………つたたた……………結構無茶したかな……………」

歓声の中でふらつきながらGPペース、アスタロトブレイジングを手にとる…リンネの拳打、蹴りを受けた部分がひび割れ亀裂が入ってる。よく頑張ったなブレイジング…でもお前も強い相手と戦えてよかったな…リンネの方をみるとなんか啞然としながら顔を俯かせてる。コーチの人も声かけてるけど聞こえてないみたいだ

「………」

痛む身体に耐えながら向かったのはリンネのいる筐体…たどり着きみると切り裂かれた装甲に対して無傷のバエルのフレームが倒れている…そつと手をふれてみる。うん大丈夫だ

「なにかようかしら秋月クロウ?」

ゆるゆるふわふわした髪に眼鏡の若い女の人がみてる…なんか睨まれてんの気のせい? 確かに熱くなりすぎてやりすぎた感あるけど

「あ、いや…リンネ・ベ…いやリンネ、最高のバトルだった。だから次もやろうぜ楽しいガン普拉バトルを…」

「秋月クロウ選手、インタビューをお願いします!!」

オレの言葉を遮るようにストーリーカーさん? がマイクを向けてくる…ホントはもつと話したかったけど今がチャンスかもと想いマイクを手にした

言うのはもちろん…

「えつと今回の日独親善ガン普拉バトル大会に招いてくれたこと、ありがとうございます!! リンネ・ベルリネット選手をはじめとした素晴らしい選手の方々と会えた事をすごく嬉しいです! あと、こっからはスゴく私的な事になりますけど許してくれるとたすかります…:…:…:クロイツフェルト孤児院のみんな、シスターイクス、シスターシヤンテ、ふくくくくくた! りくくくくくた! オレは『あの日の約束』通りドイツに帰ってきたぞ!! もしコレ見てんなら会場に来てくれ! 一緒にガン普拉バトルやろうぜ!!」

めいっばの声で叫んだらキイーンてマイクから音が響く…V IPルームをみるとニルスさんが顔を隠してため息ついてるし、三代目メイジンカワグチさん、セカイさん、レナートさん、グレコさん、ルワンさん、ジュリアン兄、フェリーニさん、アドウの兄貴、キジマさんたちもなんか暖かい目でみてる…:…:まあ、確かにこの場言うことじゃなかったかもしんない

「……………(……………くちちゃん……………なの?)」

オレにとって大事な約束だから仕方ないし不安だったし…なんでかわからないけどリンネがオレをじいつて視てたけど。そのあと、ニルスさんや三代目メイジンカワグチさんに厳重注意されたけど

これで気づいてくれて皆と再会できるって……………明日からは日独ガン普拉大運動会、溪流下り、シューティング、ランダムで決めた3人のファイター同士の3ON3……………世界本戦を想定したバトルが始まる

フロンティアジム…やり方はオレんちのナカジマジムとは正反対だけど、すくすくつごいファイターがそろってる…リンネと戦うだけじゃなく同じチーム…3ON3競技で組んでみたいし

色んなファイターと凌ぎを削って学べるし。ガン普拉バトルって…マジで楽しい!!

明日に早くなんねえかな……………

んで、あけて翌日…クロイツフェルト孤児院のみんなと会場で再会して、八年間、なにしてたのか?どんな風にして今はどうなのかって色んな話をしたけどふくた、りくたはこなかった…シスターシャント、シスターイクス、シスターセインに二人がどうしてるかをきいたんだけど

『りくた?ふくた?……………ってクロウ、あんた二人のホントの名前知らな…んぐ』

『…シヤンター……………ごめんなさいクロウ…じつは』

孤児院が無くなる前にりくたが養子に貰われて、ふくたが負担をかねないために働きにでたって、知らなかった。オレがマスターじいちやんと修行にでてた間にこんな事ってさ有り得ない…だったら、オレが帰ってきたって知らせるためにはもつと盛り上げないと！

「く〜ち……秋月クロウ選手、私とバトルをしてください」

あのバトル以来、リンネから勝負を挑まれてアスリート競技《溪流下り》の時はマジで追走してストレスでぶっかりそうなるし、シューティング競技は好成绩を収めると無言でみてるし、ランダムで決められた3人でバトル《3ON3》で同じチームになったら残念そうにみてた、でもそのときはオレの苦手なレンジを担当してくれて、白銀の綺麗な髪もだけどスツげえ可愛いし……レヴ母さん同じぐらい胸大きい……あ、べ、べつに巨乳好きじゃないんだからな！

でもさ、工作室やバトルルーム、カフェテリアに現れて再戦申し込んでくるのはやめてくれ。つうかコーチのジルさんは止めてくんないし、やつとのコトで巻いて会場外に逃げ出して喫茶店に入ってベンメル（ドイツのパン、固くもしつとりとした生地が特徴。店によってはヒマワリ、クルミ、ライ麦を混ぜてる場所もある）

食べてたら

「秋月クロウさん、ワシを弟子にしてください！」

店にいきなり入ってきて頭を下げてきたポニーテールが目立つ女の子からの弟子にしてって言葉にベンメルを喉に詰まらせてしまったのを見て慌てふためいて、水を飲ませてくれた。コイツの名前はフリーカ・レヴィントン…あの日、リンネとオレのガン普拉バトルを見

て弟子入りしたいってバイトをやめて此処まで来た、と聞かされマジ驚いた

　　っうかオレはまだマスターじいちゃんから皆伝の印可状をもらってないから、弟子はとれないって言ったんだけど

「……………わしは強くならなあかん理由がある……………だから弟子に……………」

「こ、ことわる！」

……………この日からオレはリンネとフーカから逃げ回る日々が始まった……………

再戦をと迫るリンネから逃げ切ったら、フーカが現れて弟子入りを懇願してが繰り返され、それは大会が終わってからも続いた…孤児院のみんなの所やシスターイクス、シスターシヤンテの所にかくまってもらったりした

　　ふくた、りくたは見つかんないし……………早く日本に帰らないとマユが寂しがって泣いてるのが目に浮かぶし

　　だから、オレはぜったいに逃げ切つてやる！ってしか頭に無くて気づけなかったんだ。……………ずっと探していた、りくた、ふくたともう再会してたことに

刃一ブレイド―番外編、Blade・strike！（後編）

了

BLADE・STRIKE!番外編《前編》

「はあ、はあ……く、早く逃げないと何処にゲートが…はっ!」

息を切らしながら街中を走るオレは咄嗟に岩陰の後ろに身を隠す。  
なぜそうするのかって?それはな……

「く〜ちゃん、く〜ちゃん、どこいるの?」

「く〜、逃げててもムダムダじゃ〜」

オレの名前を呼ぶのはドイツで出会った幼なじみのフーカ・レヴィントン。そしてリンネ・ベルネリツタ…頬が赤いし息も荒いのは解るよな?今、オレ《クロウ・アキツキ》は二人から逃げてます……

だつて

「く〜ちゃん…プレシア義祖母様直伝《モミジクズシ》するから出てきて…ふふ優しく挟んでつつみこみます」

「ワシも昔みたいにぴったり肌を合わせて洗うじゃき…師匠のお師匠…ミカヤ義母様直伝のアワヒメで…う…滾る鬼の益荒男を鎮めてみせる」

………はい、二人のハイライトさん仕事してません、色々ヤバいと口走ってます、そしてオレを捕まえて未成年お断りなプレイをするつもり満々です!

プレシアばあちゃん、ミ〜母さん…なんて事教えてんのさ!ソレもこれも…

「ハハハ、モテモテじゃないかクロウ」



……あっけらかんに他人事みたいに笑う全身簀巻きにされた癖っ毛まじりの長髪に白衣姿の見た感じ妖しげなおじさんに頭が痛くなった

…オレのお袋のお母さん…クイントばあちゃんのお兄さんで旧P P S E、ヤジマのニルス・ニールセンさんとガンプラバトルシステムにB J《バトルジャケット》機能追加をした全世界が望んだ天才技術者……らしい天才《天災》な親戚…ジェイル・スカリエツティ大叔父さん…つたくもうなんでこんな事になったのさ!?!なんでさ!?!

番外編《BLADE・STRIKE!》

数時間前、いつものようにあの二人から逃げきり新型バトルシステム対応バトルジャケットシステムのテストをするためスポンサードしているスカリエツティ研究所に来たんだ

いつ見ても分厚い装甲?近未来的な建物…でも隣にはオレのお婆ちゃん家《ナカジマ・ホビー》があるから色々突っ込みどころ満載だけど…網膜認証と静脈スキャンで扉が開いた

「やあ、よく来たねクロウ!ん?今日もまた逃げてたのかい?」

「う、ひ、ひさしぶりスカリエツティ所長…あれちくお婆ちゃん達は何?」

「ん?ああチンク達ならクイントと一緒にクロウの実家にいつてるんだが、知らなかったかい?」

「え。そうなの…じゃウくお婆さんいないとテストは出来ないんじゃない?」

「いやいや、それなら問題ないさ…今回は新式プラフスキー粒子対応バリアジャケットシステムとあわせた新フィールドテストだからね」

「あ、でもブレイジングは…」

「今回は使わないから安心したまえ。あと今日は飛び入りで二人がテストに付き合っつて貰えるようにしたから…さ、早く入った入った」

大叔父さんに促されエレベーターで地下にあるバトルシステムエリアに向かう。まず目に入ったのは十二基もおかれたシステム、その前にカプセルがあり、半透明のゴーグルと一体化したヘッドギア、フィンガーオープングローブが置かれている

「コレがヤジマと我がスカリエッティ研究所が共同開発している次世代型バトルシステム《DIVER》だよ！グランツ君の意見も採用し全世界規模でリアルタイムでのバトル、ミッション、歴代ガンダム世界のストーリーを体感でき、さらに！コックピットから降りることも出来るんだ!!」

「ま、マジで！」

「でも、まだソコまでは出来てないんだ…」

「い、いきなり持ち上げての落とし込みは無しで…じゃあ何が出来るのか？」

「ん、今回はガンプラを使わないで、このDIVER・GEARで体験して貰おうと考えたんだ。まだまだデータが必要なんだよ。あ、さつき言った二人もすでに入ってるから」

「オレが一番乗りじゃないんだ…でもまあやってみるよ所長」

「そうかい。じゃ、なら善は急げだ…さあつけたつけた。ああ、あとで私も入るから安心したまえ」

背を押されながらフィンガーオープングローブ、最後にDIVER・GEARを被るつて横になると半透明の蓋が静かに閉じ真つ暗になる

ーようこそガン普拉バトルネクスオンライン、ベータサービスへ。これよりDIVER・GEARにあなたのパーソナリティデータを読み込み…完了。これよりフルダイブします。ではこの世界をお楽しみくださいー

データの奔流にのまれて、気がついたら近未来的な街を一望できる小高い草原に立ってる。陽射しもだけど流れる風まで感じるなんてすごいよスカリエッティ大叔父さん！もしコレが完成したら世界中の皆が同時に参加できて、楽しめる

ソレに躰も本物みたいに動くし、木なんか触っても違和感も無い…すんげえどすげえくう。えすばーたい！ソレにあの街。なんかドイツと似てるし

「さて、せっかくだし色んなところ回るかなくもしかしたらベンメルあるかも」

「そうですね。なんか懐かしいね…フーちゃんとワタシと一緒にわけて食べてたよね」

「ああ、あそこのベンメル（ドイツのパン）。しつとりしてるけどヒマワリや松の実入りで美味しかったよなりくた、フータは何故かオレの食べかけを……………え？」

「ふふ、クーちゃん。みくつくけくた」

「リ、リくた!？」

ぎぎぎぎ…と振り返るとリーた。いやリンネがにっこり笑って見て歩いてくるとオレの額…右眉の上にあるキズに触れてきた

「リくた、懐かしいです…でもリンネって呼んでくれると嬉しいかな…クくちゃん」

いつの間にかオレの胸に指で円を描くよう動かしながらうりくた…いやリンネが恥ずかしそうに抱きついてくる…う、うわあ胸部装甲に被弾ツ！ナノラミネート装甲が無力するほど柔らかい？ソレになんかい匂いする。つうかここまでリアルにしすぎだろ!!

「ねえクくちゃん」

「な、なに？リく…リンネ」……リ、リンネ」

「…クくちゃん。私ね…試したいことがあるんだ…協力して欲しいんだ…私とクくちゃんにしか出来ないことなの」

た、試したいこと…は、まさか今までオレを追いかけてきたのは二人でしか出来ないこと

わかった！新しいガンプラのテストバトルしたかったからか…そういうえば昔からだったな。うし！

「いいぞりく…リンネ、じゃさっそくやろうぜ!!」

「うん、じゃあ…ズボン脱いで」

……はい？

「い、今なんて？」

「…ズボンを脱いで…っていったの」

…うん、いろいろ突っ込みどころ満載なんだけど理由を聞くか  
「な、なあリンネ、なんで脱がないといけないのかな」

「だって脱がないとク〜ちゃんの《くうちゃん》を私ので《サンドイツ  
チ》できないから…だめ?」

「いやいやいや! そんな可愛らしく言ってもだめだから!? それにまだ  
早すぎるから!!」

「わたしのクラスの子、最近《ブレイク》して《サンドイツ》や《お  
肌のふれあい》してるよ?」

ていうか! いつから日本はこんなに早く経験して捨てる子がいる  
の!?! リンネの学校で紳士淑女を育て上げる名門《黒森峰学園》だよね  
!?! 少年、老いやすく学なりがたしの精神ドコ消えた!?! くら、ベルトを  
外さないで! 上目遣いもダメだから!! だれかタスケテ〜!!

「みつけたク〜! リンネ!」

「ふ〜ちゃん。なんでココに?」

た、助かった〜、リンネ。可愛らしく首をかしげてもダメだかな  
! ……と、とにかくフーカが女神様みえるよう…助かつ

「リンネを、さがしとったんじゃ! ……まったく。それよりク〜をはな  
さんといて…」

…はい? 離さない…ホワイ!?

「そうだね…一緒にする約束だったよね…」

「そうじゃき…さあつてミカヤ義母様直伝の早脱がしやってみるかのう…大丈夫じゃくくMGデュープストライカーのランナーみてる内に貰うからの、いやあげるンじやったな」

ずいずいっと魅を寄せてくる…うわ。甘い香りが髪から…それにTシャツ越しでもささやかな胸が当たって、ソ、ソコを触るな、さするな！なんとか身をよじろうとしたら手がぐいっと引っぱられた

「ふくちゃんばかりズルイ…くく。わたしのどうかな。大きくなったかな…大きいのですきだよね、モデルグラ○○○ツクスの表紙に隠してたのみたから…どうかな」

…の、のおおおお！お、オレの聖典《ギリギリ♡ネネカ隊水着レイヤ―特集！もう爆発寸前♡♡》バレたあああああ！！

お袋たちや妹にもみつからないように完璧偽装したヤツがああああああああ！！

そ、それより手にかをんじる柔らかくて指先に感じるコレは…：ち、ち…ちくく！！

「…まだダメかな…くくちゃん…でもいまから好きになるようするから…ふふふ、ふふふふ」

ほんのり頬を紅くしてにつこり笑うけど目が。目がね、ハイライトさんが仕事してない！！ど、どうにかしないと。でもベルトが外されてトランクス一枚に？それにフーカもジャージーのしたを脱いで、でえええ！？な、なんで黒のオーバーニー？しかもピンクの装飾付き！？

「リンネ。くくは《あしふえち》じゃ…ワシは胸ないから足でくくの《くう》を」

「わたしは胸で…くすちゃんの《くすちゃん》を《サンドイッチ》…」

ヤバい、ヤバい、ヤバいよお！オレ。間違いなく食べられる！バトルシステムのテストじゃ無いの？ねえって考えてる内に二人がジワジワとにじり寄ってくる

こんままだとオレのが奪われ……………

「目を閉じるんだクロウ！」

カランカランと何かが転がり眩い光が視界を奪う…だれかに手を引かれ走り出した…後ろからリンネとフーカの熱っぽい声を耳にしながら走り。ようやく視界がよみがえって見えたのは

「やあ。無事だったみたいだね…あと。ごめん！わたしの設定ミスだ!!」

軽い感じで笑顔を向けるスカリエツティ大叔父さん…設定ミス…とにかくぶん殴りそうになるのを堪えた

BLADE・STRIKE番外編

現状確認！

クロウ：なんとか守り切る

スカリエツティ：被害無し

フーカ：特殊兵装オーバーニー装備！

リンネ：ネネカ隊水着装備！

閑話諸々……本編の過去もしくは未来編

閑話 天瞳ミカヤ《壺》

「タツくん……」

メデイカルルームに運び込まれ目を覚まさない少年……タツくんの左手を握りしめる……あの頃よりも大きいけど昔と変わらない温もりと柔らかい

でも肩まで貼られた湿布だらけの左腕、額に巻かれた包帯、右頬には大きな絆創膏を見て胸が締め付けられる

先の試合でツクヨミがトランザムに強化した関節部が耐えきれず壊れオーバーヒートして動けなかった……絶対に守るって誓ったのに

「……う、く……」

「……タツくん!？」

気を失っていても痛む左腕に手を添えるようにさする……少しでもタツくんの痛みを少しでも和らげたかったんだ……

そういえば《あの時》もこんな風にしたんだっただね

閑話 天瞳ミカヤ

タツくと私が初めて出会ったのは8年前の春……桜が咲き暖かな陽気が差し込む《ガンプラ天瞳流宗家》道場でひとり稽古していた。その頃の私は《私のガンプラ》の形が見つけられず焦り余裕がなかった



自分の型：コレを見い出さなければガンブラ天瞳流宗家は継げない：一心不乱に刃をつぶした太刀を打ち込む私の背後に気配。反射的に刃を向けてみたのは私よりも幼い小さな男の子。向けた切っ先を不思議そうに見てる

純粋な目もだけでも、犬耳が目立つオレンジ色のパーカー、白のハーフパンツからのぞく足、さらりとした黒髪をみてドキリとなる

「おねえちや、なにしてるの？」

「あ、稽古だ……それよりきみはなんでここに？」

「え？んんくとね……お父さとお母さがつれてきてくれたの……あ、ぼくは《あきつきたかや》だよ」

花が咲き乱れるような笑みに私の身体に雷が落ちたような衝撃……わからないけどナニカが和らいで自然と言葉が口にでた

「あ、わ、わたしは天瞳ミカヤ……」

「てんどう……みかや？……ぼくとなまえにてるね」

「そ、そうかな……《た》と《み》をはぶけばにてるかもね」

「じゃあくまちがえるかもね……んん……じゃあ《かやおねえちや》ってよんでいい？」

屈託のない無垢な笑顔と声……最近、膨らみはじめてきた胸にダインスレイヴが数多に懐中するのを感じたんだ……気がついたら男の子、タツくんのやらかいほっぺに手を添えるように抱きしめていた

「かやおねえちや？……どうしたの？」

「な、なんでもないんだ…ただこうしたいなっってイヤかな？」

「ううん、かやおねえちやの手、きもちいいからあえいよ」

しばらくしてタツくんが居なくなつた事に気づいたユウキ叔父様、メイ叔母様が父様、母様が探しに来るまで愛撫してたのを見られてしまったけど

「あはは、紹介する前に仲良くなってるね…メイ？それに師範どうしました？」

「べつに…何でもないわよう（タカヤがわたしとユウキ、リム、オウマお父様以外に懐くなんて…しかもあんなにハグハグされてる、羨ま可愛すぎよう）」

「……ユウキ、今からでも遅くない。私の娘と早めに姻戚の儀を」

「し、師範!?まだタカヤは四歳ですよ？」

……まあ、いろいろとあつたので割愛させてもらうけど。タツくんはこの日から天瞳家に預けられた…一緒に湯浴みしたり、同衾したり、抱き枕みたいに抱きしめかぐわしい香りと柔らかさを堪能しつつガンブラを作ったりしてまさに充実した日々を送った

でも、なんでタツくんが預けられたのかなんて気にもとめなかつた。そんな時、タツくんを寝かしつけてから後ろ髪引かれる想いしながら部屋を後にした時、父様に道場に来るよう呼ばれ訪れた

「あしむれいと？異国の言葉ですか？」

「……異国……いや異国の言葉であるのは確かだが……近々に世界規模でガンプラを用いた合戦試合《ガンプラバトル》が行われるのは知っていいよう……」

「はい！メイ叔母様、ユウキ叔父様からタツくんの1日、一日をどう過ごしたかを書き綴った日記と朝起きるまでから眠るまでに過ごした写真を送る際に何度も伺い聞いてます。それが先ほどの《あしむれいと》とどう関係しているのですか？」

「……（む、むう……ここまでタカヤくんに懸想しているとは……喜ばしいというか。このまま将来的には、いやいやミカヤはまだ八歳だ……まだ早いかな……まずアシムレイトについてだ。タカヤくんがなぜ私たちに預けられた事と深く関係がある……心して聞くように……」

軽く咳払いした父様が教えてくれたタツくんが預けられた理由は信じられないモノだった

ファイターが強力な自己暗示をかけて自身の魂を込めて作り上げたガンプラと五感を共有、その機体性能を向上させる現象でファイターの精神力が続く限りその効果は発揮しつづける一方で反作用でガンプラが受けたダメージすべて《……》がファイター側に反映されてしまうこと

タツくんは四歳の時に初めてガンプラを作った時に目覚めてしまった。でもガンプラと一体化し過ぎたせいでアシムレイトのオン・オフが出来なくなってしまうことに気づいた時には遅く、様々な医療機関、症例を扱った病院を探し続けていた

そんなとき、過去に天瞳家に同じ症例の人物が修業し克服した事をガンプラ造形術の一派《ガンプラ心形流》珍念和尚から聞き、二人はタツくんを連れて紹介状と共に来たのだと

このときのわたしは父様の言葉を半信半疑できいていた。だってそんな兆候も一度も見せてなかったし、何より一緒にガンプラを作って見せ合って自慢したり。湯浴みしたり、同衾して、ガンプラを作って見せ合って自慢したり。湯浴みしたり、同衾して…それから一年後、私が9歳のときに目のあたりにしてしまった

「できた〜」

「タツくん、早すぎ…わたしもできたよ」

「きようもぼくがいちば〜ん。コレがぼくのガンプラ…：Oガンダム！」

「なら、わたしのはGNフラッグだ！」

「あ！ずるい！！センサーにクリアーパーツ使ってる〜！」

「ふふ、わたしはなにごとにもぜんりよくでやるのさ…：そういうタツくんだってエッジや面だし加工してるじゃないか？」

「むう〜っ。ぼくが《くりあぱーつ》かこうできないのしってるのに〜」

「ふふ、ならばあとでやり方を教えてあげるよ…：手取り足取りにね」

「ほんと！やくそくだよ、かやおねえちゃん。よしいくぞ〜Oガンダム！ぶりよくかいにゆうをはじめめるよ〜」

ぷく〜って頬を膨らませた顔がまぶしいばかりの笑顔を変える。ふふ、誘っているんだねタツくん…：Oガンダムを空に掲げるように走

る姿は萌えて来るじゃないか。そんなに走ったら……

「うわっ!？」

あ、転んだ…慌ててそばにより身体を起こそうと手を伸ばそうとしたとき、タツくんが身をよじらせながら声をあげた

「いたい、いたいよう……」

右腕を押さえながら大粒の涙をボロボロ流し泣き出した…ナニが起きたのかわからない私の目に近くに落ちていたOガンダムがはいる。みると右腕が逆方向にまがっているのを見て父様の言葉がよみがえり響いた

「う、ひつく……いた……い……いたいよう」

今、父様と母様は京都にあるガンプラ心形流へ指導に招かれて家にはいない…どうすればいい? 思い出すんだ、あの日、父様の言ったことを

ーミカヤ、もし私たちが居ないときにタカヤ君にアシムレイトが発現したら……ー

はつきりと思い出しながらタツくんを抱きかかえてOガンダムを手にして逆方向に向かって曲がった腕に指を添え、耳元に囁いた

「タツくん、すこし痛いけど我慢できるかな? 大丈夫、わたしに全部まかせてくれるかな……」

「……か、かやおねえ…ちゃ……う、うんがまんする……」

涙目になりながら頷くタツくん：今からすることをおもうとスゴくつらい：もしかしたら嫌われるかもしれない。そう思うと胸が苦しくてOガンダムを握る手が震え躊躇しそうになる

でも：わたしを信じて痛みを耐え震えるタツくんに意を決してOガンダムの逆方向にまがっている腕を正しい方向に向けた

「……っ！う……うう……っ!？」

小さく呻きながら体を強ばらせるタツくん：ごめんなさい。痛かったよね：ごめんなさい：ごめんなさい

父様から聞いたアシムレイトが発現した場合の対処法：タツくんとは一体化しているガンプラを直す事：でもそれは痛みを伴うんだってこと

…涙があふれて視界が歪んでくる…でも頬にナニカが触れ涙を拭かれた。タツくんが涙目になりながら私をみている

「かやおねえちゃん、どこか痛いのか？」

「痛くないよ……で、でもタツくんが一番……いた……」

「だいじょうぶ……おねえちゃんが治してくれたからいたくないよ。ほら……だから泣かないで、ね？」

涙目になりながらありがとうって笑顔で答えてくれた：わたしはただ無言でタツくんを抱擁し続けた：アシムレイトの痛みが少しでも和らぐようにずっと

しばらくして京都から父様、母様が帰って来てから発現したと告げ、アシムレイトがおさまるのを待ってからタツくんの修行が始まった…

もちろんわたしも一緒に同伴してだ。最初の一年はオン・オフがうまくいかなかった…でも少しずつオン・オフが出来るようになった、それにガンブラ作りもますます上達して門弟の子たちからも羨ましがられたけど…

「タカヤくん、汗かいたでしょ。お姉さんとシャワー浴びよ♪(…:肌を伝う汗、柔らかなほっぺだもだけど…きめ細かい肌をワタシの身体で…:)」

「タカヤくん、今度Gミューズにお出かけしない?あ、お泊まりになるけど(…:…:はあ、うなじから覗く白い肌、可愛い顔もだけど…:…:どんな味かな)」

「え?でもぼく、今からカヤおねえちゃんと逢い引きするから…:…:ごめんなさいね」

「え、そ、そうなの」

「そ、そうなんだ…」

…:…:…:姉弟子たちがタツくんから残念な気配を醸し出しながら離れていく…:…:事前に教えておいた断り文句が功を奏したみたいだ

最近のタツくんは可愛らしさの中にある凛々しさ、太刀を振るいガンブラを作り終えた時のやり遂げた面立ちに《胸きゅん》すると言っていたからね

それに…:…:湯浴みと同衾、逢い引きはおねえちゃんである私だけ

《…》の権利は三年過ぎても変わらない

「タツくん、ほらじつとして」

「うん、カヤおねえちゃんのお肌つてすべすべして気持ちいいね」

手で温めた《ぼでいそーぷ》を身体に落とし伸ばして抱き抱えるように身体を重ね肌で洗ってく…まだ姉弟子たちには負けてるが、少しだけ大きくなってきたし、それに肌を合わせての洗いつこはたまらなくいい

肌と肌を合わせるだけで幸せに満ちる…背中に張り付きながら動かすたび、痛みがくる…最近膨らみはじめてきたから擦れるたびに痺れて、ナニカがお腹のあたりがうずくのを感じながら手桶に湯を汲み泡を流していく…

「んくすつきりした。ねえカヤおねえちゃん、今度はぼくが洗ってあげるね」

「う、うん…お手柔らかに頼むよ」

「はくい、えつとまずはこうして手にぼでいそーぷをたらしてあたためてから…」

「…ん、は…んっ」

「ねえ？きもちいい？」

「あ、はあ……ん、うまくなったね…」

「じゃあく」もっ？」



「そ、そう……ん……まえよりうま……んっ!？」

「そう?・じゃあぼくたくさんカヤおねえちゃんを気持ちよくするね……えっと、こうかな?」

泡まみれのタツくんの腕がいちばん敏感なところを洗い上げていく度何度も達する……夜の帳が落ちた頃に母様が父様と湯浴みしてたのを真似たものだけどココまでのモノとは知らなかった。未熟な私の膨らみを丁寧に触れほぐすたびに痛みがくるけど、すごく感じてしまふ

これ以上先に進みたくなるけど、まだ幼い私の身体では満足させられないし、そうなったらタツくんはまだ幼いからわからないのは明白の理だ

洗いっこを堪能したあと、湯に浸かって温まってから上がり互いに拭き寝衣を纏い床と枕を並べ布団を被るとすぐにタツくんが寝入ってしまう。その寝顔はまさに至高だといえるのだけど、うづく身体から熱が消えない。自然とタツくんの手を寝衣の隙間から胸へと入れてしまふ

「はあ、はあ……」

軟らかくて小さな手から伝わる温もり、鼓動……あの日の出会いからこうなるなんて想いもしなかった……願うならばずっとこうして、天瞳家で暮らしていたい

そして……わたしの……大事な良人《おっと》になつて欲しいと

でも、それは儂く砕けた

アシムレイトを制する修行も佳境に入った時、第二回ガン普拉バトル世界大会でベスト8に進出したタツくんのお義母様の試合観戦に招待され向かった直後、ガン普拉ファイアに誘拐され1年後に保護された

ータツくん、わたしもついて…ー

ーだいじょうぶ、ぼくは八歳なんだからひとりでいけるから。帰ってきたらまた湯浴みしようね。じゃ、いつてきま〜すー

…あの時、無理にでもついていけばこんな事にならなかったと何度も我が身の情けなさに枕を濡らし泣いたことだろうか。あとから聞いた事だけどタツくんは拷問にも似た暴行に加えて発狂しかねない薬物投与を一年間も受け続け記憶を喪失してしまったんだ

タツくんはしばらくして天瞳家から離れた…その間に私は誘拐したガン普拉ファイアを調べるなか、タツくんと再会を果たした…

ーじ、上級生だったんですか？あ、あの、ごめんなさい…：天瞳先輩ー

昔の思い出は喪われたまま…でも、今度こそ守りたい…父様と母様を説得して隣に越してきた、ペアになった今なら身近にいられる

でも、先の試合で私は守れなかったばかりかアシムレイトに目覚めさせてしまった

「う、うう…っ!?!」

痛みに苦しむタツくんの左腕を優しくさすりながら想う………コレもすべてガンプラマファイアがいけないんだ。タツくんに地獄の一年をもたらし、私との思い出を奪ったガンプラマファイア《イエーガーズ》を率いる首魁《宇宙ガンプラファイターX》を絶対に赦さない

閑話 天瞳ミカヤ

閑話 闇ーアクムー 《弐》

「や、やめて」

乾いた音と共に何かが落ち必死に手を伸ばした先にはRX-78-2ガンダム。見てもわかるように完璧に仕上げられたガンダムに指先がふれる寸前で風を切る音と共に粉々にくだけひび割れたガンダムの頭が転がり顔の前で止まる。まるで痛いと言えかけるような目があった

「あゝあ壊れちゃった……脆いねえ」

「う、うう……やめて……もうガンダムを壊さないで」

「やゝだね♪」

涙を瞳に溜めながら訴えるも笑いながら追い討ちをかけるよう無傷で残ったガンダムを踏み潰していくのはうずくまる少年と年が変わらない。ただ一つ違うのは奇妙な仮面をつけていることだけの違いしかない

「さて不良品は壊れちゃったし、新しいの作ってよ……俺に相応しいガンダムをさっ」

「い、いやだ……ガンダムを大事にしないガンダムファイアなんかに作るも……うっ!？」

拒絶の言葉を遮るかのような仮面を付けた少年の蹴りが深々とお腹へ突き刺さり一瞬、息が止まり悶えながら嘔吐しコンクリートの床を汚し。何度も咳き込む少年の頭を乱暴につかみ仮面の奥にある瞳と視線があった

「うわ、きつたな…ばつちい、ばつちい…えと、なんかいった?…聞こえかったらかもう一度いつてくれないかな」

「ガ、ガンプラマファイアなん…つあ!?!」

「聞こえない、聞こえないよ?…さあ、男の子なんだから元気よくハキハキしゃべろうか?ほら、ほら、ほら、ほら!」

「ぼ、僕は…?!キミなん…がつ!?!…ガンプラを!?!」

「あは、聞こえないよ。全然きこえないよ秋月タカヤ…ほら、ほら、ほら、ほら、ほらあ!!」

閑話 闇ーアクムー

つかみあげた頭をコンクリートの床へ叩きつけ、繰り出された蹴りが再びうずくまる少年の腹部へ何度も何度も深くめり込んだ

痛みと衝撃に意識が飛びそうになる。それを見計らってるように蹴りは止み、無理矢理からだを起こさせ右腕を少年の背後にいる黒服の男に強引に押さえつけられた

「ふく疲れた…さあ、もう一度聞けどさ…俺に相應しいガンプラを作ってよ?強くて誰にも負けない最強のガンプラ…二代目メイジンカワグチの甥なら出来るよね?」

「に、二代目?…メイジン…カワグチ?」

「あ、知らないんだっただけメngo、メngo♪…………でもそんなの関係ないか。ガンプラと工具、材料は最高のモノをオレのパパが用意してくれたんだからさ…………早くうちに帰りたいんじゃないのかな」

「…………」

黙り込むタカヤ…あの日、ベスト8に進出した母メイの応援に第2回ガンプラバトル世界大会の正面ゲートに初めて一人でココまで来ていた…建物から感じる熱気と闘志、ガンプラ愛を幼いながら肌で感じ取り喜びに震えていた

「ここが世界からたくさんの方ファイターが世界一、《キングオブガンプラ》を決めるばしょ…えと入場カードは…………あつたくはやくお母さんとお父さんのところにいかなきゃ。あ、カヤお姉ちゃんに着いたよって連絡しなきゃ」

歩きながら端末を手に天瞳家にかけて…しかし呼び出しコールが鳴る前にすぐに繋がった

『タツくんかい！な、なにかあったの？』

「いま会場についたよ」

『そ、そうなんだ…………もう、おどろいたよ』

「しんぱいさせてゴメンねカヤお姉ちゃん。あ、そろそろお母さんの試合が始まるから…」

『うん、帰ってきたらメイ叔母様や世界中のファイターのお話をたくさん聞かせてくれるかな？』

「もつちろん♪一緒に湯浴みしながらた〜つくさん話すよ」

『本当かい！なら楽しみにしているよ…じゃ、またね』

「うん、またねカヤお姉ちゃ…っ!？」

最後まで言いかけた時、電気みたいなのが体を流れゆつくりと床に倒れ込んだ…身体が痺れて自由が聞かず意識が遠のいていく

「対象を確保した…アママ、指示を」

タカヤが最後に目にしたのは深々と防止を被り黒づくめの男の姿だった…次に意識を取り戻した時に目にしたのは見組み立ての無数のガンプラの箱と様々な工具と材料が置かれた机、少し離れた場所には頑丈な扉があるだけの室内にいた

それから地獄が始まった…ガンプラを作れと言う仮面を付けた少年に少しでも逆らえば殴る、蹴るの暴行を加えられ治療は愚か食事すらも与えられない日々の繰り返しだった

『いい加減にしてくれないかなあ…でも、そんな頑固キミを心変わりさせてあげくるよ』

『な、なに？ん、ん、ん〜〜〜x#@≡▽#x&≡▽#x@≡』

無理矢理椅子に押さえつけられ怪しく輝く薬剤を腕に打たれた瞬間。目の前に光が瞬き焦点が定まらずあらゆる方向を向き、身体が絶え

ず震え声にもならない叫びが室内に響いた

『ふふふ…あははは♪ほら、もっと素直になれるように薬液追加、追加』

『んづきがあーフブクニヤタシカナハ!! # ✕ ☹ # # ☹ @ & & !!』

仮面の少年の歓喜に満ちた笑い声は叫びに消された…：それからすでに半年が過ぎても変わらなかった

。それでも仮面の少年の要求に応えなかったのは父と母がガン普拉マファイアの事を教えていたのもあったからだ

ガン普拉マファイアは依頼されれば大会の妨害、さらには優れたガン普拉を欲し、手に入れるためには非合法手段をも取る事すらも厭わない

何よりガン普拉を目的達成の手段として使うだけで愛していない

ガンプラとガンダム作品が心から好きなタカヤにとって相容れないのも無理もなかった。しかし長期に渡る暴行と薬物投与はすでに体と精神をも蝕み始めていた

「だんまりか、まったく頑固だね〜少し君と遊ぶの疲れてきたよ」

「……」

「でも、そのだんまり何時までできるかな〜………えと天瞳ミカヤ、12歳……ふくん、なかなか可愛いじゃないか」

仮面の少年の口から出たミカヤの名前に俯かせていた顔が上がり



瞳に光が戻る…それを見て手にした黒い手帳を読み上げていく

「…ガン普拉天瞳流宗家の跡取り娘でファイターか？ん…あははは傑作だね。君とは許嫁の間柄なんだね、健気に君をいまでも探してるなんて…見つかるわけないだろ、バカの極みだね」

「…ちや…ない…」

「ん？なんか言った？」

「カヤお姉ちゃんはバカじゃない…」

「……………そうか、そうか流石は許嫁なことだけはあるね…でもさこうして夜まで探していると不幸な事故に巻き込まれるかもねく例えば車に轢かれたり、それが不審な車にさらわれてどこかの脂ぎったオヤジの慰みモノ、玩具…ボテ腹にされて廻されるかもね」

それを聞き身体を震わしキツと睨みつけるタカヤ、仮面の奥にある瞳には愉悦の色をみた

「まさか…カヤお姉ちゃんに！」

「さあ、どうかな？オレのリユウノスケパパなら平気でやるけどねくストラトスの家を破産させた時は愉快痛快だったね…さあ、どうする？ガン普拉作ってくれないかな？」

「……………う、く……………う」

「ほらほら、早くしないと不慮の事故に巻き込まれるかなく♪大好きなカヤお姉ちゃん、どうなっても知らないよ」

大げさに手を広げ仮面越しに囁く、だが彼の声を耳に入らない…タカヤは必死に考える。ガンプラを作ればガンプラファイアに悪用される。もし作らなければミカヤは仮面の少年の言葉通りになってしまう

「優柔不断だねくならば10秒まってあげるよ…9、8、7…」

作る、作らない…今まで必死に耐え拒んでいた。しかし身体と精神は限界寸前にまで追い込まれていた…そして

「4、3…」「…る」…え、ナニ？」

「作る…作るから…だから…カヤお姉ちゃんに手を出すな…」

「サンキュー？さあ、今から作って貰うよ。オレが世界を制覇する為の最強のガンプラを」

無機質など仮面の奥で笑みを浮かべ無理矢理椅子に座らせ机に向かわせると部下にその場を任し部屋を後にした…タカヤは目の前につまれたガンプラの箱を手にとり中を開け、説明書を読み終えランナーを手にしニツパーでパーツを丁寧に切り離していく…机に何かが落ちた

「…ひぐ、く…」

大粒の涙を流しながら切り離しパチリとはめていく…涙が机を濡らしていく…涙の理由は…大好きなミカヤを守るためとはいえガンプラファイアにガンプラを作る事

そして、ある想いが胸を占めていた

(……………最強のガンプラ……………作ってあげるよ。でも君たちには使えないガンプラを……………カヤお姉ちゃんを守るためにガンプラマフィアに作る……………道を外れた者に相応しい名を持つガンプラを)

ガンプラマフィアからミカヤを守る為にガンプラマフィアにガンプラを作る……………矛盾している事を知りながらも、意識を目の前のガンプラに集中していく……………そして誘拐されて一年が過ぎた

「コレが最強のガンプラ……………オレのガンプラ、ガンダム龍刃王……………」

仮面の少年が手にしたガンプラに歓喜の声をあげる背後には椅子に力なく座るタカヤの姿…指先は塗料にまみれデザインナイフ、ヤスリでついたキズ、頬は痩せこけ瞳は虚ろで焦点が定まらず髪は背中まで伸びていた。しばらくして仮面の少年は手にしたガンプラをケースに入れながらこちらを向いた

「さすがだね〜凄い出来だよ……………じゃあ約束通り家に帰してあげるよ」

「帰れる……………」

帰れると聞き微かに瞳に光が宿る。ようやく解放される、何より父、母、ミカヤと会えることが生気を取り戻していく…しかし背後から二人の黒づくめの男性に椅子に押さえつけられ、頭に無数のコード

が繋がれた

ヘッドギアを被らされる。そのコードは仮面の少年に繋がっているのがわかる

「な、なにを」

「このガンプラはオレだけのガンプラだからさ……もし壊れたら修理も出来ないだろう？だからお前から制作手順とビルダーとして技能を奪わせてもらおうかなってね」

「や、やだ………はなして」

「こつちだって約束守ったんだから等価交換って奴なんだよね〜あ、もしかしたらココに居た時を含めた記憶が消えてしまうから……」

「いや……だ……やめ……やだ！」

「やだねったら、やだね〜じゃバイバ〜イ…秋月タカヤ……」

必死に身をよじらせヘッドギアから逃れようとした…しかし無情にもヘッドギアから放電が始まり体が震えた、頭が焼き付くような痛みが走り回った

「@&&@∩×▽▽▽∩∩★☆※・§†††・／〜!…▽▲♠☒☒☆  
!!」

「ぼくは 《あきつきたかや》、おねえちやは?ー

ーわたし☒☆§††・☒☒▽▲☆♠☒☒▽††ー

ノイズ混じりの記憶が色あせ割れていく……様々な光景が溢れ出しては色あせ粉々に碎けるなか、タカヤは意識を手放した

夕方から降り始めた雨がアスファルトで舗装された道路をたたき……誰もが傘をさし歩く中で小さな路地裏にあるゴミ捨て場が動き、何かが這い出ると立ち上がった……瞳は虚ろで風が吹けば今にも倒れそうな足取りで少年は歩を進めていく

「……あ、う」

しかし足がもつれ倒れた。しかし必死に立ち上がろうとする身体に雨は容赦なく体温を奪っていく。しかし瞳は路地裏の先……車が走る大通りに向けられゆつくりと立ち上がり歩き出した

「はあ、はあ……」

何度も倒れ、立ち上がりながら路地裏を抜け見えた光、そこには無数の車が走り歩行者が横断歩道を歩く姿、再び歩き出したが反対側からきたくすんだ金髪の女性とぶつかり倒れふした。それをみてただ事じゃないと気づいたのか抱きかかえ呼びかけた

「あ、う……」

「きみ、どうしたの？……ひどい熱……誰か救急車を！急いで！！」

「あ、ああ……う」

女性の声を最後に少年……秋月タカヤは意識を失った……大事な記憶を喪いながらも、この日家族の元に帰ってきた

閑話 闇ーアクムー

了

閑話 受難! ☆ 《参》

「や、やっとまけた……」

あれから半日…空港でエンカウントしたフーカをようやく巻いて一月ぶりになるオレンちの前に立っている

一月も学校休んじまったし、マユとお袋、何よりお婆ちゃんとお爺ちゃんも心配してるかな………あとついでにオヤジも

いざ扉を開け家に入ったらリビングから声、お婆ちゃんと誰かが話している……つうかこの声はまさか

「そうなの、アナタも苦労したのね住み込みのバイトをしながら、わざわざドイツから私の可愛い可愛い孫のくちちゃんを追いかけて……」

「はい、ワシはクロウ師匠のガンプラバトルをみて師匠にするならこの人思うたんです! どうしても勝たなあかんのがいるんです……ワシは強くならなあかんじゃけえの」

んなバカな! 確かに空港で巻いたのに………それよりコイツ……なんて真剣な目を……まるでアイツと同じだ

ーくー! しょうぶじゃ!! ー

ボサボサの髪の毛をポニーテールにしたフー太が頭に浮かびフーカとかさなる……まさか《フー太》な訳ないし、アイツは男だし……女なわけないし。今頃、ドイツにいるだろうし

つうか、今家にオレがいるのはマジでヤバくない? オヤジとお袋の姿がない変わりにお婆ちゃんがいるって事は……

「ク〜お兄ちゃ！お帰りなさい！マユいい子にしてたよ」

「う、うわマユ！し、し〜〜〜!?」

### 閑話 受難!!

振り返ると同時に嬉しき全力全開タツクルする黒髪の小さな女の子：妹のマユにびっくりしながらたたらを踏みながらなんとか止まりし〜〜って指先を口元に当てる

「ク〜兄ちゃ?どうしたの」

「な、何でもないけどさ今お客様が来てるだろ〜静かにしなきゃ〜お婆ちゃんとはなしてるのはだれかわかるかな〜(棒読み)」

「うん、マユは静かにするね♪……え〜とね《ふーか》おねちゃ、ク〜お兄ちゃの一番弟子だっておしえてくれたよ?」

ふ、フーカ!マユになんて事を吹き込んでんのさ!?!………つうかお婆ちゃんと話ししてる時点でヤバいって感じがしてなんないし!?

「わかったわ。じゃあフーカちゃん、弟子になるなら家に住みなさい」

「え、ええんですか?」

「部屋が余ってるから安心なさい、弟子になるならばそばにいなきゃダメよ」

「で、ですけえ…迷惑じゃ」



「いいのよ。あとでタカヤと嫁にしつかり伝えるからまかせなさい。あとメイ義祖母ちゃんと呼んでいいわよ」

ば、婆ちゃんつつつ?!?...まずい、婆ちゃんフーカのこと気に入ってるよ!?つうか嫁にしようとしてるのが丸わかりだ!!今、婆ちゃんの頭の中にはオレとフーカの結婚式から曾孫が生まれるまでのストーリーが出来上がってる!?

まずい、まずい、まずい...こんままだと人生詰み間違いナシだ!

「ま、マユ、急なんだけどヤジマ商事に呼び出しあつてさ...しばらく家を空けなきゃいけないんだ」

「ええくくお兄ちゃとひさしぶりあえたのに...マユのことキレイなの」

「ち、ちがうから。マユのことはキレイじゃないぞ!?大好きだからなお兄ちゃんは!？」

「む〜」

「用事が終わったらくたくさん遊ぶからさ、マユの好きなプチッガイをたくさん作るから」

「.....ママッガイも?」

「もちろん!パッガイも作るから」

「……………アニツガイも？」

「ああー！」

「じゃやくそく……………ゆびきりげんまん…」

ぷくつと頬を膨らませ上目使いで小指を向けるマユ……………うう、ほん  
とゴメンよう。指と指をかけると揺らしはじめた

「ゆびきりげんまん、うそついたら《∞りぼるばーすぱいく》くらわ  
くす。ゆびきった」

小さくつぶやくように約束し涙目になるマユに何度も誤りながら  
ひと月ぶりの我が家をあとにした…お袋んちにはいけない、ヤジマラ  
ボに行くには遠すぎる……………身を隠すに適した場所は一つしかない

「……………サエグサ模型店に行くしかないか」

あたりを伺いながらサエグサ模型店に足を向ける…ミツキ店長な  
らば匿ってくれる筈だ

でも今日やっているかなと不安になりながら急いだ…

「リンネ、対象を確認しました…」

『ありがとうコーチ、あとは随時報告を』

「わかったわ……………ふう彼に執着しすぎよリンネ。秋月クロウ。世  
界大会最年少出場者にして世界ランキング八位……………認めたくないけ  
ど高みにいくには彼の力が必要みたいね」

リンネのコーチ《ジル・ストーラ》に後ろからつけられてるなんて  
気づけなかったんだ……このあとでサエグサ模型店であんな事にな  
るなんて思ってもいなかったんだ

閑話 受難！

了

## ガンビル刃お正月特別バトル！紅の彗星VS紅の鬼神☆

紅の鬼神…この通り名は日本ガンプラバトルU-15大会で鮮烈なデビューを飾り、個人の部で二年連続ファイナリストの座に君臨する王者《秋月クロウ》のもう一つの名前だ

ファイター、ビルダーとして快進撃を進め、瞬く間に王座にたどり着いた…イオリ・セイ、レイジ、ユウキ・タツヤ、ニルス・ニールセン、カミキ・セカイ、コウサカ・ユウマ…彼等と同じ年代で制した彼の實力は海外のU15選手も注目するほどにまでなった

何よりも驚かされたのは…

「……オレは世界大会出場したユウキ・タツヤさんみたいなアメイジングなファイター……いや、見る人を熱くさせる《ブレイジングなファイター》になってみたいです！」

ブレイジング…燃え続ける炎を意味する名を付けた愛機を前にインタビューに答える姿に炎を見た…私みたいなファイターを目指すか…その道は険しいぞ少年、なら三代目メイジンではなく……

「ユウキ・タツヤとして君とバトルをしよう！このHiールガンダム・ヴレイヴで!!」

ガンビル刃、お正月特別バトル

静岡県某市…ニールセンラボ

「よくきたねクロウくん」

「ニルスさん、ドイツ出発まで一週間まだ余裕あるんだけど……」

「ああ、実は向こうで使うバトルシステムの調整をしたくてね」

「だったらオレ以外の選抜メンバーがいいんじゃない……三代目メイジンカワグチさん、アドウのおっちゃんや、ヴィルさん、ユウさん、セイさん、セカイさん、シアおばさ、ねえさん達は？」

「か、彼らはすでにドイツに行ってるんだ…現状じゃ君にしか新型バトルシステムの調整は出来なくてね…なんなら君の父……」「いや、オレがやります。今ごろオヤジはお袋と仲直りデートだって今年に入って30回目の……」…そ、そうか、ならすぐに用意するからバトルルームに入ってくれるかな……クロウくん？」

「まったく、女のお客さんに話しかけただけで「浮気だく」ってお袋が焼き餅焼いて見苦しいし、もういい年なんだから喧嘩するなよな…まゆがいんだしさ……ふえ？は、はい……今からいきます!!」

ニルスの声で我に帰り慌ててバトルルームへ駆け出すのを見送ると椅子に深々と腰掛けた

「あれでよかったのかい？」

「ああ、急な申し出を聞いてくれてありがとうニルス。では行くとしよう……」

蒼のジャケット、灰色のズボン、緩めた紅いネクタイ姿の嬉しそうに笑みを浮かべクロウが入った方とは別な入り口へ向かう彼に苦笑いしていた

—————  
—————  
—————

「……アームレイカーの感度もいい。モニター切り替え速度と粒子密度も粒子ビーム再現率も良好………それに」

アームレイカーを傾けるとオレのガンプラ：アスタロト・ブレイジングが思い通りに動く。うん、今までのバトルシステムよりも扱いやすい。なぜなら新型プラフスキー粒子結晶体対応するために粒子貯蔵用にクリアパーツを増やして各部をチューンし直したばかりだ………それにドイツのエキシビジョン・マッチにでるファイターは《チーム・フロンティア》のリンネって選手とバトル出来るのがマジ楽しみ……おなじ鉄血のオルフェンズのガンダムフレーム使いだからなおさらってやつだ。接近警報がなり気を引き締めモニターをみるとハイモックが三機せまってくる

「おらあー」

ヒートアックスを大ぶりに構え振り下ろしてくるのを機体を捻りスレスレでかわし、捻りを加え重さを乗せたスレッジハンマーが胴体へめり込む

メキメキとアームレイカー越しに伝わる感覚：ハイモックの瞳から光が消える：でも背後から二機がレールガン、バズーカを撃つてくる……スレッズジハンマーを引き抜くと両肩のハイパーバーニアで一気に加速、レールガン、バズーカ、ビームガトリングの嵐をスレスレで回避する

まずはバズーカ、ビームガトリングを持つハイモックの腕にスレッズジハンマーを振り下ろす。相手も気づいたのか砲身を構える。でもなこの距離じゃバズーカは撃てない、まずは

「ビームガトリングをつぶす！オラオラオラ!!」

向けられたバズーカ、ビームガトリングお構いなしにスレッズジハンマーで叩き潰し、のぞけるのを見逃ささず膝蹴りを食らわした瞬間、接触面で爆発：粒子発射ならぬ粒子バンカーだ！上半身が砕け散る姿の向こう側に光、とつさにスレッズジハンマーを交差し重ね楯構えた瞬間、ギシギシきしむ

三機目のハイモックのレールガンが直撃したんだってわかる：ハンマー本体に亀裂が広がる。でもこんぐらいなら何とでもなる、アームレイカーを傾けるとハイパーバーニアを片方だけ全開、まるで独楽のようにまわりレールガンの弾を弾きそらし素早くチェック、ダメーシは軽微、まだいける

「コイツでラストオオ!!」

両肩バーニア全開と同時に両側にスレッズジハンマーを大きく広げまわりながらハイモックの頭、胴体、背中へ何度も何度も殴りつけ、破壊音が響きほぼ無防備状態で受け続けたハイモックの瞳から光が消えた。アームレイカーを握る手に汗が滲んで汗だくになってる

「はあ、はあ、流石はクダル、トロワ、ジュリエッタ（AI設定）は手強いや……」

汗を拭いながらスレッジハンマーをみる…ダメージ度《A》設定にしていたから亀裂が入っている…この程度ならドイツに行くまでに直せるって思った時、アラートがなる…飛び入り参加の表示に慌ててアームレイカーを握りしめたオレは対戦者をみて息をのんだ

白地に明紫のカラーに塗られたガンダム…小説版機動戦士ガンダムーベルトーチカチルドレンーでアムロ・レイがシャアとの対決の為に設計したMS《Hi-νガンダム》…それをさらにカスタムした機体…まさかあれは《Hi-νガンダムヴレイヴ》!?

『先ほどのバトルを見させてもらった…まだ足りないと思わないか? ……』

サブウィンドウに映ったサン格拉斯を頭にかけてオヤジとあまり年が変わらない人をオレは知ってる…第六回ガン普拉バトル世界大会で王者、ガンプラ・オブ・ガンプラ…カイザーさんと熱く燃え上がるバトルを演じたオレの目標にするファイターがいる

『君もそう思うだろ……』

…第七回世界大会日本予選を辞退してからガン普拉界から消えてしまった…あの《紅の彗星》

『否! 私もそう思う!!』

ガン普拉バトルを世界中に広げた立役者、修羅って呼ばれた二代目メイジンカワグチ、その三代目を育成するガン普拉塾のトップファイ



ター《ユウキ・タツヤ》さんがいる…身体が震えだすけど、それ以上に《伝説のファイター》と戦える嬉しさからくる震えが肌を泡立たせた

アームレイカーを傾けると、一気に加速しスレッジハンマーを振るう。スレスレでかわされ強烈な蹴りが胴へたたき込まれる。アームレイカーを強く握りしめ耐え殴りつけるも右、左へかわされる

「ぐー」

『耐えたか、よく作り込んである……』

強い…何度もユウキ・タツヤさんの公式戦の映像を見てきた…動きも癖も何度も…子供ん時からずっと。でもそれ以上の気迫と動きに翻弄されていく……

『まだまだ！いけファンネル!!』

「ファンネルの操作もこなしながらビームライフを!？」

ヴレイヴの背中から左右六基のファンネルが離れ変則的軌道を繰り返しながら迫り、四方八方からのビーム砲撃がくるのをアームレイカーを細かく叩き動かしながら回避しながら実力の差を感じ取る……上には上がいるって

…胸の奥でチリチリとしてくる…ファンネルを回避しながらスレッジハンマーを収め、両脚に備え付けたバーニアがガシャつと開き二丁のハンドガン型レールガン《クトヴァ》《イクタア》が飛び出し握ると回避しながらファンネルを狙い撃つ、浴びせられた弾丸に一機また一機落ちた

『ファンネルに当てるか……見事だ!』

「アナタもファンネルの操作をしながらここまでの動き……スゴいぜ……す、スゴいです」

『ふ、言葉遣いは気になどしなくていい……君の全力のバトルこそが魂の言葉だ!!』

「あ、ああ……いくぞアスタロト・ブレイジング!!」

叫ぶと同時にスレッジハンマー、ハンドガンを構え撃つ、コイツはあくまでも牽制……オレの狙いはヴレイヴとのガチンコバトル……逆手に構えたスレッジハンマーを振るう、タツヤさんもブレイドで受け止めた

『スレッジハンマーにブースターを仕込み破壊力をますか、普通のガンプラならば粉々だ……(力任せではなくハンドガンによる牽制をおり込んだ戦術、それにスレッジハンマーにはまだ細工がある。何より作り上げた機体への理解、愛を強く感じる。新しい世代は育ちつつある!)』

短期間で見抜くなんて……なら出し惜しみはなしだ。軽く深呼吸吸し目を閉じる……真っ暗な中で見えんのはオレの目の前に立つアスタロト・ブレイジングが近づきオレの腕、脚、身体全てが一体化する……今のオレ……アスタロト・ブレイジングだ!

「はあああああー！」

全身に配置した粒子貯蓄用クリアパーツ：《ブレイジングクリスタル》から金色にも似た炎が燃え盛る：スレッズジハンマーの亀裂から粒子が漏れだし抜け現れたのは異形の刀《ガツサン》《ムラマサ》。ずつとオレと戦い抜いた武器：両手に構え切っ先を向け斬り合い鏝迫り合う。一撃、一撃がすべて重い、加速をかけながら追従する

『（粒子解放システム、バーニングバーストと同等の粒子量……もしやアシムレイトに目覚めている。さながら《紅の鬼神》か。セイ君、セカイ君、私に並ぶガンプラへのめり込むか  
）……………ならば私も全力で挑もう！』

凄まじい加速の中でタツヤさんの声が響く。ヴレイブ：いや作り込まれたフレームにプラススキー粒子が蓄積、いや圧縮されて赤くなつて……まさか！

「紅の彗星……っ！まだだ!!」

『いい踏み込みだ！だが！推力に振り回されている!!』

懇親の粒子解放斬撃を紙一重でかわした!?ヴレイブのブレイドが左肩を斬る：斬られた痛みが走る。でもまだ負けた訳じゃない……オレのあこがれのファイター《ユウキ・タツヤ》さんとのバトルを最高のモノにしたい！だから熱くなれブレイジング!!

『！（動きが速くなった、まだ成長するのか……いや、それ以上になんと胸が熱くなるバトルだろうか……）……………そうだ、このまま熱くなれヴレイブ!!』

互いの刃がぶつかり、微かに腕があがるのを見逃さずヴレイブの蹴

りが胴体へ入り吹き飛ばされる。でもこらえたけどヴレイブの姿が無い：上からの接近アライトに顔を向けた。紅の軌跡が真っ直ぐ迫ってくる。コレで決める気なんだとわかった。なんならオレも全部を出し切る！全てをコイツに込める!!

『少年、いや秋月クロウくん！君のすべてを私にぶつけて見せるんだ!!』

「ああ、燃えろガッサン！ムラマサ！……ブレイジング・ブレイド!!」

『燃え上がれガンプラあつ！ヴレイヴ・ナツクル!!』

紅の彗星化し破壊力を上げた《ヴレイヴナツクル》、ガッサン、ムラマサから繰り出される粒子最大解放斬撃《ブレイジング・ブレイド》がぶつかる：身体全てに衝撃が響く。刃の連撃と拳がぶつかりせめぎ合い、ヴレイヴナツクルに亀裂が入る：でも次の瞬間、ガッサン、ムラマサに亀裂が走り砕け、胴を貫くヴレイヴ・ナツクル

― BATTLE・ENDED ―

装甲が碎ける焼けるような痛み、バトル終了を告げる声を最後に意識を手放した

「はっ!? ったあ~~~~~!!」

「クロウくん? まだ横になってるんだ」

「ニルスさん?.....ユウキ・タツヤさんは!」

「落ち着くんだ、まず最初に君に謝らないといけないことがあるんだ」

ニルスさんに無理やり寝かしつけられたオレが耳にしたのはまず謝罪の言葉、今回のバトルはバトルシステム調整に呼ばれたのは間違いない、ただユウキ・タツヤさんがオレのバトルをみて闘ってみたいと申し出がニルスさんにあつたって事。結果、今回のバトルに乱入という形になつたらしいんだ

でも全力をぶつけられて楽しかった。こんなに熱くなれた.....負けたけどもう一度バトルをやりたい。いまオレの中で火がメラメラ燃え上がっている

「あ、気にしてないから.....それよりユウキ・タツヤさんは?」

「タツヤはもうココにはいない.....彼も忙しいからね三だ.....いやガン普拉普及の旅に世界中をとびまわってるからね」

「そっか.....またバトルやりたかったな」

「あ、そうそう。彼から伝言だよ《君の中にあるブレイジングを見させて貰った.....いつか世界で会おう!そしてガン普拉バトルをやる》って.....あと君のブレイジングだが」

タツヤさんの言葉に震えるオレに申し訳ないって言葉と一緒に見せてくれたのは砕けたガツサン、ムラマサ、そして胸部装甲が砕けフレームに亀裂が入ったブレイジングをそっと手にする

「大丈夫、これぐらいならドイツに行くまでに治せます。それに」

「それに？」

「ブレijingはまだまだ進化しますから……オレと一緒に。工作室にいつてきます!!」

ニルスさんに工作室を使う許可をもらって医務室を駆け出した：まだ痛みはあるけどもソレよりも熱い何かが溢れ出てくる：ブレijing、お前はオレと一緒に強くなるんだ。そしてあの人達がいる世界に！

「……………ふう、いい加減出てきたらどうだい」

「気づいていたか」

「僕を誰だと思っているんだい？彼と手合わせした感想は」

「……………さすがはタカヤ君の息子だけはある：バトルセンス、ビルディングテクニクはコレからまだまだ成長していく。いずれは世界：オープントーナメントへ来るだろう……」

「……………そうか。それよりドイツに行かないといけないんじゃないかい？」

「む、そうだった……じゃあドイツで会おうニルス」

それだけというと自動扉の向こうへ歩いていく彼の名はユウキ・タツ

ヤ、ガンプラファンのカリスマにして、キング・オブ・ガンプラ…三代目メイジン・カワグチ。その顔は新しい世代の力を見れたせいかな笑みが浮かんでいた

んで5日後…ブレイジングの修理と改修を終わらせオレはドイツに行くために着替えや工具をトランクに詰めようと家に帰ったんだけどさ…

「バカ…人がみてるだろ？それにこんな恰好似合わないし…」

「いいじゃないか。それにキミが僕のだってみせつけようか。メイド服似合ってるよ…昔よりもキレイだ」

あいかわらずイチャイチャするバカ親父とオフクロ…つうか足入れて壁ドン、顎に手をそえてる……みろ！濃厚な加糖結界に砂糖吐いてる奴いるし

「おにいちゃ、なんでまゆの目を隠して耳を押さえるの？」

「な、な、なんでもないから……はあ」

…まゆの前だから怒鳴らないけど……

いちやつくなあああああ！オレは絶ツツツ対にバカ親父みたいになんねえからな！

了



## 特別話 バレンタイン編

「ん、な、なあ湯煎はこの温度でいいのか？」

「ええ、あとは型に流し込んで……ゆっくり気泡が入らないように」

「気泡が入らないようにって、ガレキ作るんじゃない？」

「ほら、手元が震えてるわよ？」

「わ、わかってる………うう」

湯煎したチョコレート成型へ注ぐのはナカジマホビイの看板娘ならぬ姉妹の一人《ノーヴェ》、その隣には青みがかった髪をアップテールにしフリルがついたエプロンに身を包み立つ母クイントの姿

店舗兼住宅のナカジマ家のダイニングキッチンの壁、シンク、IHヒーター周りには半ば焦げたチョコレートのならの果てが飛散している…明日は乙女に取っての戦いの日《バレンタインデー》

想い人であるタカヤに人生初めての手作りチョコレートをあげようと思いを決し母クイントに頼み込んだ。しかし今まで料理の基本《さしすせそ》すら知らなかったノーヴェにクイントが笑顔で指導にあたったのだが

……

「ち、ちよつと待ちなさい！チョコレートを直接火にかけたらダメよ！焦げるわよ？」

「いや、いや苦味を出さないと直接火にかけたらでるんじゃないのかわ？」

「……え、えと、まずはチョコレートを砕いてボウルに入れ……」  
「わ、割れない……ん、ぎぎぎぎ……ああ、いらつく！ハンマー  
持ってくる！！」

「ま、まつのよ！スレッジハンマーはダメダメ！こうすれば割れる  
から」

「……苦味を出そうと火にチョコレート、湯煎の下拵えにかつたク  
イントがわざわざ購入した大人用のチョコレートを割れずスレッジ  
ハンマーを持ち出そうとする……ガンプラ作りなら得意な自慢の娘  
ノーヴェの将来に危機を覚えながらもようやく湯煎にたどり着き、  
今、最後の型へと注ぎいれられた

「こ、これでいいのかな」

「上出来よ！あとは冷やして型から抜いてトッピングするだけ。タカ  
ヤくん喜ぶわよ」

「そ、そつかな……でもあたし渡せるかどうか、それにこんなの柄じや  
ないし……変に思っちゃうかも」

「……もうノーヴェったら自信持ちなさい。負けたくないんでしょ？」

「う……そうだけど」

「じゃあ固まるまでラッピングの準備やっちゃいませよ。見た目も大  
事だからね」

「……うん」

やや頬を紅くし顔をうつむかせ目を泳がせしおらしくつぶやく姿

…チョコレートを渡す本命の相手《タカヤ》くんに見せたらビームマ  
グナムでハートを打ち抜けるんじゃない？と内心思いながら上手くいく  
のを願うクイントの後ろには……………

「…………も、もう無理…甘いのは…」

デイエチ、チンク、ウエンデイ、スバル、ギンガのチョコレートに  
味見を頼まれ、彼氏がいることを知らされヤケになり試食、さらには  
トドメのネオすら逃げ出すノーヴェのチョコレートを食べ一足早い  
ホワイトデー並みに真っ白になったナカジマホビー店長ゲンヤのぶ  
つぶつかすれた声が響いた

同時刻、ナカジマホビーから二駅離れたマンション《リ・ホーム》に  
あるテスタロッサ家では

「ゆっくり慎重にねレヴィ」

「うん、え、えっとゆっくり……………で、できたよ！ボクってやっぱりす  
ごい♪」

「お、落ち着いてレヴィ?!…………あとココアパウダーを丁寧にかけてみ  
て」

「うん！」

ほっぺにチョコをがついた水色のエプロン《戦闘服》姿の元気いっ  
ぱいに答えるのはテスタロッサ姉妹の末っ子レヴィ。彼女も明日の  
聖なる戦い《バレンタインデー》に挑む乙女《戦士》。タカヤへの本命  
どストリートなチョコレートを作ると聞いた姉のフェイト、アリシア  
は彼氏に送るチョコレートを作るのもあり手伝うことになった

ただもう一人、いつもならレヴィに色んなアドバイス《肉食系手練

手管》をする母プレシアの姿が見えない…ひさしぶりに帰国した夫で国際ガンプラ委員会直属違法ガンプラ取り締り組織、通称《ガンプラ警察》ドイツ支部長ヒロシ・サーシエス・テスタロツサ（旧姓：ヒロシ・野原・サーシエス）との日を跨いでバレンタインデートにウキウキワクワクし年甲斐もな…（す、すいません！お願いだから笑顔でぐらぐら煮えたチョコレートをかけないで!?アアアアアア!!）………イチャイチャデートの真っ最中

なおアリシア、フェイトもレヴィのチョコレートを作り終えたら彼氏である《新田飛鳥》と朝までお泊まりデート…もちろん手作りチョコレート（メテオガーリック並みの強壮剤入り）と新しく補充した薄さ0，い…ゴシヤ?!

「コ、コレ以上いつちやダメ！プライバシー侵害だよ!!」

「ねえ誰に話してるのフェイト、アリシア？誰もいないよ？」

「き、気にしなくていいよ。それよりレヴィ飴がけの用意はできた？」

「うん…じゃあいくよ♪よしできたあ〜♪♪」

水色の髪を揺らしながら火を通した溶けた飴を横、縦に重ねるような線を引いて、さらにカード状のホワイトチョコに嬉しそうに文字を書いていく…書かれたのは一時的に住んでいたドイツの言葉

l i c h l i e b e d i c h. 《イツヒ・リーベ・ディツヒ》  
T A K K A T A K K A

満面の笑みに加えてほんのり顔が赤いレヴィ………訳すると、なんかまたやられそうなのであえていわないよ。実はレヴィがデートにいく前にプレシアから「がんばりなさい」と渡された薄いナニカと

秘密兵器を渡されていたna……………

そして、タカヤの家を挟んで隣の天瞳ミカヤ宅でもチョコレート作りが始まっていた…

「和三盆と抹茶粉はよし……チョコは少し苦め苦めして……よしコレならタツくんの好みに申し分ないね」

三角巾に割烹着姿のミカヤが湯煎したチョコの味を確かめ満足そうな笑みを浮かべている…少し離れた先にある写真立てに目を向ける

小さい頃、まだ記憶を失う前のかわいらしくミカヤをカヤお姉ちゃんと呼び慕っていたタカヤ、後ろからもぎゅぐゅと抱きしめるミカヤの姿が納められている

「……タツくんは昔から少し苦めなチョコレート…とくに母様の抹茶とチョコレートの組み合わせはね。コレは私しか知らない。ふふふふレヴィもノーヴェもおそらくは明日、渡しにくるだろうけど負ける気はないよ…それにこの流星蒜入りチョコレートを食べたなら」

抹茶と和三盆を絡めて冷えたチョコレートを取り出しクッキングシートへ並べまぶしていくミカヤの脳裏に浮かぶのは懇親の力作チョコレートを食べ終えたタカヤの姿

『う、なんか…あ、熱いですミカヤさ……ん……あ、あの顔かち、近いで………☆○☆♪○☆♪☆!!、そ、そこは?!』

『大丈夫だ少年、すべて私にまかせるんだ…我慢するのはよくないからね…もう、こんなになつてるじゃないか』

『うわ!?そこは…つく…あつ』

『ん、ホワイトデーのお返し代わりに少年のをいただくよ…』

「ふふふ可愛いなタツくんはく恥じらう顔をみせたらむしやぶりたくなるなるじゃないか…私を誘惑するなんて…いけない子だ、そんなに暴れるなんて昔より大きくなつてる。ハアハアハアハアハアハアハアハア…」

…身をよじらせ妄想にふけるミカヤのイケない一人芝居は続けられながら手元はしつかり調理を終えるとキレイにラッピングすると未だくすぶり火照る身体を沈めるために湯殿へ歩き出す。その手には男モノのナニカが握られていたのは見間違いだらうか

『や、そこ…もつと…タツくん、タツくん、タツくうん…つはあ、はあ、んんっ!』

シャワーの音と共に聞こえた劣情に満ちた淫靡な声は気のせいだ、うん

そしてバレンタインデー当日…蘊奥学園はおりしも創立記念日、つまりは休み。いつもより遅く起きたタカヤは大きく背伸びしベッドから降り顔を洗い、歯を磨いて制作依頼されたガンプラの箱を取り出そうとした時、チャイムが鳴りひびく

「誰だろ?…まだ期日には余裕があるんだけど…はい、どちら…」

「やつほくタカタカ!」

「レヴィ?どうしたの……ってその恰好は!？」

「え、コレ?お母さんがボクに似合うからって買ってくれたんだよ。ねえどうかな?」

「え、あ、あの…そのう…」

白いコートにも似たマントになぜかぴっちりとした競泳水着、オーバーニー姿のレヴィがクルリと回った、豊かな胸にくびれ緩やかな曲線を描くヒップに見とれ言葉を失ってしまう

「もしかして似合っていないかな?」

「い、いやすごく似合ってる!可愛いし」

「やったあくタカタカにほめられたああ♪」

「う、うわレヴィ!だ、抱きつかないで(うわ

、当たってる、レヴィの胸が当たってる!?)」

「えくやだ。もう少しぎゅつとさせてよく最近忙しいってかまってくれなかったバツだ!!」

「い、いやだから人目が…マンシヨンの人に見られた……」

ぎゅつと首に抱きつくレヴィから逃れようとしたゾクリと震えゆっくりと気配がした方へ目を向けた先には笑顔で立つミカヤ、ノーヴェの姿…ただ背後にドズル・ザビ、ハマーン・カーン以上のプレッシャーがビシビシ肌に突き刺さる

「み、ミカヤさん、それにノーヴェさん?どうしてココに!？」

「少年、今日は何の日かわかるかな？」

「今日って創立記念日じゃ：「あ?なにいつてんだ」：：：あ、今日は2月14日：：：!？」

「そう、今日はバレンタインデーだ：：：さてレヴィ、その羨ましい状況よ：：離れてくれないだろうか？」

「やだ♪今日はタカタカと一緒に明日の朝日を見るんだい」

「な!ぎげんな!あたしだってやったこと無いことを、いいからタカヤから離れろ!!」

「朝までは許せないな。独り占めはいけないね：：レヴィ、少年を渡してもらおうか？」

笑顔でタカヤの身体にしがみついたレヴィを引きはがそうとするミカヤ、ノーヴェ、しかしさらに力を入れ抱きつくくとレヴィの90オーバーのバストが形を変え押し付けられ女の子特有の香り、柔らかさに思考があわぶくを立て沸騰寸前、それをみて二人の手に力がさらに入った時だった

「!?!?／うわ!?!?!」

引つ張り合い名は耐えきれず勢いよく倒れ込む4人、かすかにナニカが潰れる音を耳にしハツとなり互いにの持っていた紙袋をみたミカヤ、ノーヴェ、レヴィの目に映ったのはラッピングが破け潰れた箱：：タカヤの為に作ったバレンタインチョコの無残な姿にへたり込ん



だ

慣れない料理に悪戦苦闘しながら作りそれぞれの思いが込められたチョコ、今から作り直すにしても時間も材料もない事実打ちひしがれる中、それぞれの手提げ袋に誰かの手が伸びる

「え？」

「……………うん、美味しい」

「タ、タカヤ、ナニやってんだよ」

「何ってチョコレート食べてるんだけど？」

「少年、もうそれは潰れて、もうだめ…」

「ダメなんかじゃないよ。一生懸命作ってくれたんだよね…抹茶の風味もいい感じで好きな味だよ、えとこっちはカカオを増やしたカカオがいいね。コレは多分ノーヴェさんだね。そして飴がけしてあるチョコレートはドイツのお菓子に似た風味…レヴィのだ」

「わかるのタカタカ？」

「うん、オウマ爺様からいろいろ食べさせて貰ったから…寒くなってきたしココにいるのも何だし僕の家日にいこうか？」

「ま、待てよ。そのチョコレートどうする気だよ？もう捨て…」

「ん〜。せっかくなんだし簡単なお菓子作ろうか。みんなと一緒に食べよう。いろいろ作り方あるんだ」

柔らかな笑顔を見せチョコレートが入った紙袋をもち手招きする  
タカヤの顔を見て少し迷うもついていくミカヤ、ノーヴェ、レヴィ：  
下手をしたら怪我をしたかもしれないのに笑って許したタカヤに申  
し訳ない気持ちになる。リビングに案内されても黙り込む三人の前  
にそつと出されたのはパンケーキと三種類のチョコソース

「ひさしぶりに作ったから上手くできたかわからないけど…さあおあ  
がり」

チョコソースをパンケーキにかけ切り分け口にするレヴィ、ノー  
ヴェ、ミカヤの表情がバアアツと明るくなる

「美味しい…生地はフワフワでチョコソースとぴったりだよ」

「美味すぎだろ…コレってあたしのチョコか？」

「はい、ノーヴェさんのチョコは風味がよくてパンケーキにぴったり  
なんです。そしてコレがミカヤさんのチョコで作った抹茶ムース  
ケーキ、レヴィのは餡がけが綺麗だからイチゴのデコレートケーキに  
したんだ」

「餡がけのサクサクした食感、ケーキ生地との相性…まさに極みだよ  
…少年」

「まだまだおかわりはありますから、たくさん食べてくださいね…あ  
と、ホワイトデー楽しみにしてくださいね」

「バカ…（あたしたちのチョコでご馳走するなんて反則だろ…母さん  
に料理教えてもらわないとまずいよな）」

「一本取られたね…でも楽しみにしておくよ（ありがとうタツくん）」

「うん、楽しみに待ってるねタカタカ（…お母さんゴメン、この薄いの使えなかつたけど次で使うから安心してね）」

様々なトラブルがあったが三人の乙女たちの聖戦はタカヤからの手作りスイーツを振る舞われることで幕を閉じた……かに見えた

（だ、ダメだ全然眠れない……身体も熱いし……明日学校なのに）

チョコに混ぜられていた強壮剤、流星蒜のせいで血がたぎりすぎ寝付けず明け方によく眠ったモノの、タカヤを起こしに来たミカヤが朝の生理反応をみて「苦しいのならば我慢は良くないな…私に任せられないか」と一悶着あったのは別な話

特別話 バレンタイン編

了

## 甘々、ポリッツの日

ノーヴェエの場合……………（注意！タカヤとつきあうようになった場合）

「あ、あのさタカヤ……………ポリッツって知ってるか？」

「ポリッツ？ん〜ポツキーとプリッツですよね……………っていうか僕の頭をなんで掴んで？…それに顔が……………」

「ごまかいこと気にすんな……………食べるか？」

「え!?!……………ちよつと!?!なんでポツキー啜えて……………ん!?!」

僕の唇に柔らかい何かが押し当てられ固く細くて、ほんのり甘い甘味が口に広がりながら、そのままソファーに押し倒された

ノーヴェエさんの強気で少し惚けた金色の瞳と目があつてようやくキスされているってわかった

「はあ、はあ……………どうだ、あたしのポリッツ。美味しいか？」

少し名残惜しそうに唇からはなしたノーヴェエさんの顔が真っ赤だ……………なぜキスを？…って考える前に再びポリッツを食べたノーヴェエさんと唇が重なった

「ん……………ちゅ……………」

ほんのり苦くて、でも甘い……………そのまま僕はノーヴェエさんの柔らかい唇をずつと重ねて舌を割り込ませて絡め抱きしめながら唇を離れた

……………

「タカヤ、もっと甘いのあるけど……食べるか？」

「……え？どこにあるの？」

「……め、目の前にいるだろ……バカ……(ドゥーエ〜こういういえばイチコロって言ってたのに)……」

あ、そつぽを向いた……でもこういう素直じゃ無いところ、照れる顔が好きなんだけど……ああ、もう可愛いなノーヴェは

「じゃあ、食べていいかな？」

「……か、覚悟しろよ……やみつきになっても知らないからな……」

「うん」

「むくうバカ……ん」

……三度目のキスで口をふさがれたまんまソファーに押し倒された……夕方から朝までたくさん、溢れても止めないで身体の奥からこぼれるぐらいにみたされるまで食われた……スタミナありすぎだろう

もしもの時は責任とれ……タカヤア……あたし、すきい、タカヤのこ  
とだいしゆきい〜

レヴィの場合

「あのレヴィ?」

「なにタカタカ?」

「なんで目隠しされて縛られてるのさ!?!」

「ん〜気にしない、気にしない♪今日は何の日かわかる?」

「今日……………ポリッツの日だっけ?」

「うん!だから……………今日はお母さん直伝の特別なポリッツあげるね…  
はい」

世界大会に向けてブレイドをカスタムしていたらレヴィがはいってきてこんな状況に

目隠しされて見えないけど甘い匂いを感じる…唇に何か触れる。とにかく食べてみるかな…口に含んでみるとビターチョコ苦味に甘さ…それに芯の柔らかいのは

何だろ。舌先で形を確かめようとする?

「ん、んっ!」

舌先を動かすと固くなってる?…でもなんか懐かしいかんじがするし、何かが芯?のさきから出てくる味は何かな

(うわ、そんなに舌を動かさないでよう…でもタカタカ夢中になってるからいいよね……………お母さん直伝《男の子の落とし方48手》―魅惑のおっぱいチョコレート……………くすぐつ…たい…けど…きもちいい)

ボクのお母さんが教えてくれた、必殺《魅惑のおっぱいチョコレ

ト》…少し苦いチョコレートを溶かして胸に垂らす技だけどくすぐつたい。でも舌が触れて吸われるとしびれて身体の…お腹のあたりがなんでかわからないけど疼く…なんかわかんないけどタカタカがすごく欲しい。そのままタカタカをギュツとだきしめた

「…ちゅ…ちゅる…んっ!？」

あ、やっぱり気づいたかな…目隠しがずれて目があうと顔がどんなどん赤くなってる…えっと、もし気づかれた時は…

「タカタカ、ポリッツより甘くて美味しいボクを…食・べ・て♪」

プン…って音が聞こえてから、一日中タカタカにたくさんキスされて、揉まれて、胸に挟んで、たくさんボクの中にもらっちゃった

タカタカ、ボク、だいしゆきだよ…

ミカヤの場合

「少年、今日は異国の催しではないがポリッツを知っているかな？」

「ポリッツ…って何ですか？それより世界大会用の機体を…」

「まあ、それも大事だけと根を詰めすぎはよくないな…ポリッツはポツキーとプリッツの日だ。今の少年は疲れてるから糖分を補給しないと」

ポツキーを取り出し私は口に啞え机に向かう少年…タツくんがニツパーを置いた瞬間頭を掴み強引に唇に差し込んだ…ポリポリと距離を減らしていき唇が重なる…夢に何度も見た接吻《キス》

「ん？ん？！」

レヴィに先はこされたが私が何度も上書きして消す…ああ、柔らかくて瑞々しく割り込ませた舌をからめて唾液を流し込む…もう我慢はできない。あの日からお預けは

ギシギシなる椅子と少年の暖かさ、手を滑り込ませ敏感な部分へ伸ばす…ふふ、興奮している

昔と違って大きく硬さを増してるのが嫌でもわかる

「んくはあ、はあ…ミ、ミカヤさん？」

私の舌技に惚けてる…ポリッツよりも甘い接吻は効果てきめんだ

「少年、私のポリッツはどうだったかな？」

「…す、少し苦くて…でも甘かったです」

「よかった。なら今度は少年のポリッツ、食べさせては貰えないかな」

「え？僕ポリッツもって…はう!?」

「もってるじゃないか…ふふ熱くて硬い少年のポリッツ…さあ食べさせて…少年のすべてを」

耳元で囁きながらハーフパンツに手をかけ向き合うように座る…少年いやタツくんと私の初めての共同作業…慌てふためく顔をみながら手を添え導いた



あとは皆の想像に任せてくれ……閨事は秘すモノだからね

## 特別話 ガンプラハロウィンパーティー 《前編》

「トリック・オア・トリート♪お菓子くれないと悪戯しちゃうよ♪  
♪」

「な、なにやってんのさ？レヴィさん、ミカヤ先輩、ノーヴェさん？」

「な、何って今日はハロウィンだろ？だからさ……あ、あんまり見るなよ……アネキ達やクアットロが無理矢理……その」

「異国の文化とやらは面白い催しがあるみたいだね……どうかな？少年。私の姿は」

「ねえねえ〜ボクはどうか？お母さんが『コレを着れば鈍感男の子でもイチコロよん』って言うんだ〜似合ってるかな？」

……目を覚ましたら別世界……な訳なくいたのは、すごく身体のラインがみえるピッチリしたボディスーツにジャケットを羽織ったノーヴェさん。何でかわからないけどローラーブレードを履いてるしメカメカしたパーツが目立つ……ミカヤ先輩は着流した着物でサラシがほどけて所々赤い血がみえる……レヴィのはマントにレオタード？、オーバニーに水色スカートに大きめな死神みたいな格好……その色々ヤバいから！《ぼるふいにかす》って名前の身の丈ぐらいの鎌もだけど、薄い生地ごしでもわかる突起に膨らみはノーヴェさんやミカヤ先輩よりヤバい……

今日は《チーム・ブレイド》のみんなとガンプラハロウィンパーティーをやることになって、サエグサ模型店のバトルルームを飾り付けし終え一休みしたら眠気に誘われ眠った僕が目をさましたら……こんな状況に。後少ししたらナカジマさんの家族とサエグサ模型店のみんな、トオルくん、シロウくんの友達も来て、近所の子達に

ガンプラの作り方を教えて組み上げたガンプラを互いに交換してバトルするんだ

「タカタカも早く着替えたら?」

「そうだね。私たちばかりでは不公平だ……」

「さつさと着替えろよ。衣装は用意してんだろ?」

「え、うん、まあ……じゃあ着替えないと……って何でここにいるの?」

「ああ、私たちの事は気にしないでくれ(タツくんの生着替えをじつくりと脳内に焼き付ける絶好の機会。はあ、はあ、はあ、はあ、さあ数年ぶりに私にすべてを見せてくれ)」

「え、そうですか……じゃあ」

「うん、気にしちやダメだよタカタカ(……好きな男の子の身体を知るのも大事ってお母さん言ってたし。うわあタカタカの身体って肌が白くてスラツとしてる……)」

「……(細身に見えて鍛えてるんだな…ガンプラバトルは筋トレも大事ってお父さん言ってたし……なんか色っぽいな……)」

んゝ何だろ? すごくみてるような。とにかく用意した衣装…レザースーツに黒鉄色のコート、そして不思議な彫刻がされた眼鏡? をかけてみて姿見鏡のまえにたちチェックする…うんぴったりだ

「どうかな? おかしいところはないかな?」

「い、いや！おかしくないよ少年！思わず疼い……なかなか似合ってるじゃないか」

「そ、そうだね〜タカタカつてなんか騎士つて感じがするよ♪」

「ああ、なんかメイジンみたいでカッコいいな。細かいところまで良く作り込んでるな？」

「ありがとう。じつはコレ父さんが作った衣装なんだ……《マカイナイト・オウガ》のをみてハロウィン版仕様らしいんだけど……」

見た目はマカイナイトオウガの衣装、でも胸元にはジャック・オー・ランタンの可愛らしくデフォルメしたぬいぐるみ、背中には魔女の帽子を被った笑うかぼちゃがアプリケとして付いてる

「ハロウィンらしくていいね。さて、そろそろパーティー開始の時間に近い。皆と作るガンプラと工具の用意を急ごうか？」

「そうだった！早くしないとみんな来ちゃうよ」

「やば、じゃあ急いで支度しないと……今日はたくさん盛り上げような!!」

#### 特別話 ガンプラハロウィンパーティー 《前編》

ノーヴェさん、ミカヤ先輩、レヴィと一緒に必要な工具とガンプラを揃えている内に丁度時間になり、サエグサ模型店のバトルルームにナカジマホビーのみんな、トオルくん、シロウくん、ミツキさん、ユウさん、ユアちゃん、香純さん、そしてガンプラバトルに参加する子

供達が入ってきた

「お待たせしました〜サエグサ模型、ナカジマホビー共同主催のガンブラハロウィンパーティー始まり始まり〜さあ、軽めな食事を用意してあるのでゆつくりとお楽しみくださ〜い♪」

「うわ〜安仁豆腐。すごく甘くて滑らかで美味し〜い♪」

「軽めな食事って……コース料理だよね!？」

「甜点心もできたてで美味し〜い」

ミツキさんの開始を告げる言葉と共にガンブラを手にした子供達が料理を皿に移し食べていく。今日の料理はレヴィのお義兄さん《新田飛鳥》さんが友達でライバルの畢ちゃんと作ってくれた料理。頬張るみんなの顔が笑顔になる。特にナカジマホビーのギンガさん、スバルさん、クイントさんは凄い勢いで食べていく

「ま、まさか、あの雷凰飯店の料理を食べれるなんて。スープも澄んでてなおかつ飽きのこない味だわ」

「お母さん、ずるい!それ私の北京ダック!!」

「早い者勝ちよギンガ、それよりノーヴェ、今日こそ勝負決めちやいなさい♪」

「な、な、な、ナニ言うんだ!……っうかタカヤあんまし見てくんないし」

「あなたの姿を見て照れてるのよ……じゃないと他の子に」

「んなの、わかってるっの……」

「レヴィ、お母さん直伝のアレを使うチャンスだよ？」

「うん、ボクは今日は勝ちに行くよ！」

「アリシア？さすがにレヴィには早いよ!？」

「忘れたのフェイト、飛鳥を攻め落とした時も同じ事したよね……ああでもないと思うかな」と思うよ?」

「で、でも……まだ14だよ」

「あれ？確かわたしとフェイトが飛鳥としたのは1さ……」やめて!ア  
リシア!!」

「父様、母様、私は今日こそ本丸を手に入れて見せるよ……」

『み、ミカヤ？タカヤ君はまだ思い出しては無いの？』

「父様、過去は関係ありません……今、こうしてタツくんと今日まで過ごした日々は十分にたると感じます……」

『ならば、行きなさい。あなたの想うがままに……健闘を祈るわ』

「……………そう、今までの事が大事だ……必ず手に入れて見せる………残る一つの初めてを」

……………な、何だろ妙に寒気がしたけど。料理がなくなりやがてガンブラバトル用にプラモデルを組み立て始めた……ふと目を向けた先には

不思議そうにランナーを手にしみる小さな子がいる

もしかして初心者なのかなと思いき近づく。するとぼくを見上げてきた

「どうしたのかな？」

「作り方、ぼく…わからないよ」

少し困ったよう取り扱い説明書をみる子は思った通り初心者だ。僕は薄刃ニツパーを手に向き合う形でランナーを手にしパチリとランナーゲートを切るとジツとみてきた

「えとね。パーツをランナーゲート少し残して切るんだ…」

「こうですか？………!？」

「そう、なかなかうまいね…で次に残ったゲートを切り落として対になるパーツを同じ手順でやっごらん」

「ん〜で、できた！」

初めてパーツを切り出した事に喜び子。こうやってガンプラの作る楽しさを知ってもらえとうれしい。僕は自分のガンプラ《ガンダムアスタロト》を組み立てながら、この子のガンプラ《ストライクガンダム》

マルチプルバック装備《》を組立ての簡単なアドバイスをして数分後、初めてのガンプラが仕上がった

時間の都合上、簡単な仕上げと改造しか出来なかったけど目の前の

子は初めて手にしたガンプラを完成させた喜びを全身から出している

「お兄さん、ありがとう!!」

なんか、マスタージャパン先生の所でブレイドを完成させた時の僕にそっくりだな

『さあ、コレから組み立てたガンプラを曲が鳴り終わるまで交換し曲がおわったら手にしていたガンプラでバトルを行います。ではミュージックスタート♪♪』

「ちよー待てよ姉貴……システム調整急がないと」

ユウさんの声が聞こえた気がしたけど曲が流れ互いのガンプラがはいった箱が交換されていき唐突に止まる。僕が箱をあけると中にはインパルスガンダム、その両腕に見たことの無い楯？が二つ付いてる

「私のはシュピーゲル!? まあいいかな」

「俺のは……………ブラックサタン!」

「オレはイフリートナハト? なんつう渋いのを」

「ボクのは……………スローネドライ?」

「あたしのは……………な、なんだこれ!! サムライミカヤ!? ガンプラじゃないだろ!?! つうか被弾したらパージするのか!?!」

「なに、サエグサ模型店オリジナルガンプラだ。顔と体型はは好きなように作れるんだ。ふふ、まさか私のガンプラを引き当てるとはね



………コレはガンダムアスタロトか…すんすん……少年の香しい匂いだ」

「ぼくはストライク・マルチプルバックか…」

「わたしは、真亜駒参大將軍なのだ……」

他にもゲイツR、グレイズアイン、Vガンダム、ギャン高機動型、二代目頑駄無大將軍…様々なガンプラを手に一斉にGPベースをセツト、バトルシステムからプラフスキー粒子が満ちていきフィールドが巨大なかぼちやを模した惑星を生み出していく……ハロウィンパーティーらしいや。あ、ミツキさんがサムズアップしてる

『それではガンプラハロウィンバトル開始します！それではレディイイ……ゴオツ!!』

特別話 ガンプラハロウィンパーティー 《前編》

後編に続く！

特別話 ガンプラハロウィンパーティー 《後編》

「……………っ！そこだ!!」

凸凹したオレンジ色の荒地をかける…フォースインパルスガンダムを操りながら、ジムスナイパーIIの精密な射撃をストレスで身体を捻りかわして、一気に間合いを詰め左腕に装備された盾？から大剣が展開、大きく横に振り抜いた

ジムスナイパーIIも負けずにライフルを捨てビームサーベルで防いだ。でもこれは本命じゃない、右腕の盾の間から厚めで短めのソードを出して反動を利用してターン、胴体を切り払った

『うわっ！負けちゃった!?!』

「…ふう、あのまま打たれ続けてたら負けたかも…」

泣き別れになったジムスナイパーIIのファイターの声と同時に爆発するのを見届け、アームレイカーを傾けその場を離れる

今日、近所の子供達とチームブレイドのみんなでサエグサ模型店のバトルルームを借りて開かれたガンプラハロウィンパーティー…みんなが今日の為にミツキさんが用意したガンプラを作って互いに交換してからガンプラバトルを一齐に初めて五分。十六人いたけど今は畢ちやん、トオルくん、シロウくん、ミカヤさん、レヴィ、ノーヴェさん、香澄さん、そして後一人いるみたい

「まけるなくおにいちゃん!!」

「ノーヴェ、がんばれ〜!」

「タカヤく〜ん。がんばって〜♪♪」

「ふふふ、今日こそとつちやいなさいレヴィ（色んな意味で!?!）!」

…負けた人たちとギンガさん、クイントさん、レヴィのお姉さんのアリスアさん、ブレスシアさん？たちが僕たちのバトルを楽しみながら応援してくれている……今日は最後まで楽しいガンプラをやりたい

「うわっ!？」

警報と共に無数のビームが襲いかかる。とつさにアームレイカーを引き背後に飛び機影を捉えた

特別話 ガンプラハロウィンパーティー（後編）

「ハロウィン限定ガンプラバトルもいよいよ大詰めとなりました。現在まで生き残ったファイターは七人、まずはトオル・フローリアンくん。使用ガンプラはイフリート・ナハト！機動戦士ガンダム戦記に登場するMS。発売当時わずか数分で完売したの名機です！」

「イフリートナハト、ランスロットガンダムより遅いけどなんかしつくりきていいな！」

アームレイカーを動かしグレイズアインの蹴りをストレスで交わし跳躍ざまにクナイを投げ牽制しバーニア全開で迫りヒートソードで二閃、胴体が二つに切り裂かれて爆発する中、モノアイが輝く

「続きましては今回、スペシャルゲストとして招いた畢ちゃん。使用ガンプラは伝説の大將軍編で結晶クリスタルフェニックス鳳凰と武者真亜マークスリーが一時的に融合し誕生した幻の大將軍！《頑駄無真亜駆参大將軍》!!」

「……………これで決めるのだ！」

「え、うわあああ!!」

頑駄無結晶から生まれた光をまとう真亜駆参大將軍へビームライフルを乱射するVガンダム…しかし弾き返され接近し交差、いくつもの光が走り技を解いた時、ずれ落ちるように崩れ爆発した

「なかなか良い射撃なのだ…」

頑駄無結晶を輝かせ立つ姿は威風堂々、迷いすらも感じない。その姿に負けたのにも関わらず満足した顔を見せていた

「そして、二人目のゲストは獅童香澄ちゃん。使用ガンプラは機動武闘伝Gガンダムに登場するネオドイツ代表が駆るガンダムシユピーゲル!!」

「ふふ…ガンダムシユピーゲル、忍者の武器がたくさんあるし使いやす…でもドラグーン対策は出来る!」

「な、なんでドラグーンが!?なんか分身してるうううう!!」

「獅童流とあわせた必殺!疾風怒濤の嵐《シャツルム・ウンツ・ドラクウウウ》!」

「ぐぐう?!」

自身が高速回転し竜巻へ身を変え、プロヴィデンスガンダムを飲み込み、その嵐の中では無数の剣閃がきらめきやがて嵐が解かれると僅かな間を起き爆発。ブレイドを軽く振るいおさえるシユピーゲルの瞳が輝いた

「まだまだ続きます……え、なに、時間があまりない……え〜」とりあえず機体とそれを駆るファイターだけに限定しろつたら姉貴」……はいはい。じゃあ簡潔にいくわよ。レヴィ・テスタロッサちゃんは機動戦士ガンダム00に登場したスローネドライ、クギミーボイスじゃないのは少し残念かしら。天瞳ミカヤちゃんは機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ外伝《月鋼》のアスタロトオリジン（タカヤくんが作ってるのわかってるわね〜あ、抱きしめてるし）。で、中島ノーヴェちゃんは……サエグサ模型店の新製品《MS娘》のカスタム機で《サムライミカヤ》（うわ……ミカヤちゃん。短期間でかなり作り込んでるわね。パージしたらタカヤくんがやばいかも）……あとは神崎シロウくんは機動戦士ガンダムUCのシナンジュ、ユアちゃんのSEEDのストライクマルチプルパックの以上です。引き続きガンプラバトルをお楽しみに〜」

ミツキさんのかいつまんな説明を聞きながら降り注ぐ極太の赤黒いビームの雨……すごく正確な射撃だ……最大で拡大して見えたのは機動戦士ガンダム00に登場するスローネドライがこちらに接近してる、まさか……

『見つけたよタカタカ！今度は負けないからね！』

「レヴィ!?……うわっ!？」

スローネドライ……レヴィの攻撃をかわすけど、動きを先読み予想してストレスで狙い撃ってくる……

『そんなに動かないでようタカタカ!!』

「当たったら危ないから!？」

『んうゝタカタカのいじわる！いつもボクが朝に起こしに来てるんだから当たってよう!!』

「た、確かにそうだけど！ガンプラバトルには関Ke…」

『……………それは初耳だね少年…』

風を斬る音にとつさに身を横へ動かすと真紅の装甲が目立つ機体が身の丈の半分ほどある無骨な造りのハンマーをフルスイングし地面を砕く姿…これは僕が作った機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ外伝《月鋼》で300年前に起きた地球と火星をまたぐほどの戦争《厄際戦》を集結させたガンダムフレームの一機《アスタロトオリジン》が食い込んだハンマーを引き抜いてる。それに今の声はミカヤさん!?

『毎朝起こしに来てもらっている?どういう意味かな少年?』

「い、いやーミカヤさん、コレはレヴィが父さん達に頼まれたからって……………」

『…………(な、なに！ユウキお義父さま、メイお義母さま！なんと軽はずみな事を間違いを起こしたらどうするつもりなのか！なんと羨ましいことを。私に言ってくれば…………私ならば毎朝、タツくんの寝顔を見ながら髪を鋤きながら起こして、部屋を後にしたら毛布に染み込んだ香りの上から私の匂いを枕にしつかり染み込ませるのに…………)…………レヴィ、悪いが私が勝ったらその羨まし…………役目を引き継ごう』

『えくやだよ…(タカタカって寝顔すごく可愛いし、でも寝相が悪くて何回も引きずり込まれて、ボクをぎゅって抱き枕みたいにされて耳を甘噛みされて息がかかるとなんかドキドキしてしたし気持ちいいし

……譲れないよ。ボクだけの特別だから!」

「あ、あのく二人とも……」

『……………タカヤ、今の話マジか?』

睨み合う二人を宥めようとした僕の後ろから声が響く…ぎごちなく見るとノーヴェさんのガンプラ：MSガンプラ娘《サムライミカヤ》が刀を鞘走らせ首に刃を突きつけてくる

こ、怖い!サムライミカヤの瞳から光が消えてるし!?

「あ、あの……コレはそのう……」

『……………決めた、アタシも朝起こしにきてやる!なんならメイドでもやってやるし!!(これ以上、リードされてたまるか……それにアタシだってタカヤの寝顔を焼き付けたいし!』

『ほう。言うねノーヴェ……あの時の決着をつけようか』

『あん!?やるのか……なら手加減なしだ!!』

『ボクもやるんだから!タカタカを起こすのは渡さないよ!!』

僕の前で啖呵を切りあうのが合図のようにアスタロトオリジンのナノラミネートハンマー、サムライミカヤの日本刀、GNビームサーベルがぶつかり合い激しい衝撃波が大地を揺るがしてる……は、早く止めなきゃとアームレイカーを動かそうとしたら誰かに肩をおかれた

『落ち着けよタカヤ、あん中入ったらヤバいからさ……シユテルがいたらなんとかなるけどさ……』

『そうだぜ……ディアーチエも怒ると似たような感じだし……』

「トオルくん、シロウくん……でも……」

『まあ、ほつとけ……それより今はガン普拉バトルやろうぜ！いくぞシロウ！今度こそ勝たせてもらおうぜ!!』

『ああ、たくさん盛り上げて最高のハロウィンパーティーにしようぜ！いくぞトオル!!』

シナンジュ、イフリートナハトがヒートソード、ビームサーベルをぶつけ切り結んでいく……そうだった今日はガンプラハロウィンパーティー……ならば盛り上げないと。インパルスガンダムを動かした時、無数のビームが連続して飛んできた。とっさにかわすけど左膝にあたり、僕の膝に痛みが来た

「痛っ！」

『さすがだねチームブレイドの秋月タカヤさん』

空から接近してるのはあの子が組んでいたストライクガンダム・マルチプルパックがビームライフルを構える姿……バスター、ソード、エールを一つにしたストライカーを装備している。

『わたしはユア。さあミツキおばちゃんから話は聞いていたよ。やろうガン普拉バトルを！』

「じゃあ君がミツキさんが言ってたユアちゃん？ならやろうかガン普拉バトルを！」



膝が痛むのを我慢しながらフォースシルエットのバーニアスラストー全開にし、飛翔と同時に左盾から折り畳まれた砲身を伸ばしチャージすると、ユアちゃんも

アグニを構え撃つてくる…当たればひとたまりもないビームをアームレイカーを細かく動かし、かわしチャージ完了したレールガンで避けながら引き金を引く。狙いはアグニの粒子パック。音速を超えたレールガンの弾が粒子パックを貫いたのをみてユアちゃんはアームごとアグニを切り離すと僅かに体制が崩れた

「いまだ!!」

『まだ甘いよ!』

背中から対艦刀《シユベルトゲベール》を抜き構え振りかぶりながらバーニアスラストー全開で向かってくる…とつさに左腕の盾からガトリングを展開しガトリングをばらまく。コレでは足止めにならずかな時しか無い。でもそれだけで充分、やや錐揉み状態になりながら接近、シユベルトゲベールが僅かに遅れて右肩装甲へ深々と食い込むように切り裂いていく

『右肩、とつたよ!わたしの勝ち…っ!』

「いや…僕の勝ちだ…でも、ユアちゃんは強いな。次はお互いのガンプラでやろう」

『もちろん、次は私が勝つからね』

シユベルトゲベールだ肩を半分切り裂いて止まる。肩に痛みを感じながら右腕の盾の正面スリットから展開したビームダガーが深々と切り裂いていき、ユアちゃんとの再戦の口約束と同時に切り払った

「はあ、はあ……痛ッ……」

あの大会で目覚めた力《アシムレイト》からくる肩の痛みには耐えながら、あたりを見た時三人がいるあたりから大きな爆発音が響く……インパルスを向かわせた僕の目にはアスタロトオリジン、スローネドレイ、外装がパージされさらしを巻いた胸と破けはだけた袴姿のサムライミカヤがクレータの周りに倒れ伏している。

「大丈夫みんな！」

『あ、ああ、やられたよ……』

『うう、また負けたああああ』

『あたし達が手も足も出せなかった……』

「レヴィ、ほら泣かないで。後でソーダ飴をあげるから。ミカヤさんとノーヴェさん、いったい誰に？……」

きこうとした時、クレータから影が飛び出した……肩に痛みが走り見えたのはSD頑駄無……しかもアレは伝説の大將軍編に現れた幻の大將軍……真亜駆参大將軍？まさか皆を倒したのか？

『ん～流石に三人相手は疲れたのだ……次の相手は……おまえなのか？』

「え？」

『……私は畢……じゃ、はじめようか……』

声が聞こえた……次の瞬間、真亜駆参大將軍の拳が胴体を殴りつけ

た。肘膝はさみで防ごうとしたけど力任せに跳ね上げられ凄い勢いで近くの山肌に叩き付けられた。背中に痛みが走り意識が飛びそうになるのを耐えて降り立つも膝をつきそうになるのをこらえた

『わたしの拳を一瞬だけ防ぐなんてすごいのだ……』

「はあ、はあ……強い……でも」

肩や、膝、背中が痛いけど楽しい……あの大会以来その想いが強くなってるな……畢さん。すごく強いや……ブレイドは今手元には無い。今の愛機はインパルスガンダム。僕は相手に嘘偽りなく全力で戦う。それに気付いたのか畢さんは刀を抜き構え心・技・体を表す頑駄無結晶から光があふれ全身に満ちやがて足元に広がる岩肌をめぐりあげ浮かばせる中、光を刀へ収束していく

『……………名前、聞かせて』

「……………秋月タカヤです」

『秋月タカヤ、今からわたしのすべてを込めた一撃を受けてみるのだ……』

「僕もアナタに全力の技をぶつけます……………」

様々な警告を示す灯りにいどらながら、目を閉じる……あの大会で使用した自身の魂の輝きとも言える技……インパルスガンダムの周囲の岩肌がめくれあがりプラススキー粒子が白金に煌めき浸透していく

使えるのは一度だけ……ゆっくりと目を開きインパルスの両腕、拳にプラススキー粒子を集約高圧縮していく……まだだ、後少し、燃え上がれ僕のガンプラ愛!!

ガラリと岩が落ちた…それが合図かのように互いに地に蹴り迫る！

『……………真・鳳凰轟爆覇!!』

「……………輝神爆凰・白煌斬!!」

互いの粒子斬撃がぶつかり合い、やがて光が生まれ二人を飲み込んだ。その光景はシロウに僅差で勝利し、続いて香澄とのバトルで負けたトオルの目にも見えた

『な、なんだ……………まさかタカヤの奴アレを』

『トオル、どうしたの一体!?!』

『……………すまない、悪いけどさタカヤのところにいつてくれ。頼む』

『ん〜じゃ、仕方ないか……………じゃ急ごうか』

退つ引きならない状況と悟りと向かった。香澄がみたのは両腕を構えた全身亀裂が走るインパルス、刀を抜き胴に構えた頑駄無真亜駆参大將軍。微動だにしない

『……………流石なのだ……………タカヤ』

「いえ、畢さん。アナタと全力で戦えた事を誇りに思います」

ピシツと音がなり盾と共に肘から下がガラス細工の央に砕け散り、真亜駆参大將軍が刀を鞘へ収めパチンと鳴らしたと同時に崩れ落ちた

つまりは両者相撃ち…

— BATTLE · ENDED —

僅かな間の後、パチパチと拍手があがり子供達の歓声が沸き起こつた

「あ、あの…良いんですか。私が景品貰っちゃって？」

「いいの、いいの…おかげで盛り上がったんだし…遠慮せずにさあ」

終始笑顔のミツキさん。ガンプラハロウィンバトルで最後まで残ったのは獅童香澄さんだった…肝心の僕はというと畢さんとのバトルで相打ちに終わった…でもひさしぶりに全力が出せたからいいかな

「秋月タカヤ」

「畢さん…ってコレは？」

「打ち身などに聞く薬膳料理。あと今日のバトル、楽しかった…また機会があればやるのだ」

「はい、また今度バトルしましょう。自分のガンプラ…ブレイドで」

コクコクとうなずいた畢さん。今回の一位の景品はサエグサ模型店のガンプラを一年間無料で購入でき、バトルルームも含めてのフリーパス、温泉街への旅行券だった

二位の景品は……スカリエツテイ博士とクアットロお姉さんとの  
楽しいガンブラ講座（無期限）

三位の景品は人気ハウススキーパー、ドワーエさんを一年間タダで派  
遣

等々あるんだけど……今は冷めないうちに食べるかなと椅子に座る  
……でも問題があるんだ。具沢山スープで右肩がアシムレイトの影響  
で上がらない左手にスプーンを持ち搦おうとするけど上手くいかな  
い

どうしよう。その時誰かの手が僕からスプーンを奪った

「タカヤ、肩痛んだろ……飲ませてやるから口開けろ」

「ノ、ノーヴェさん？いや、出来るから」

「はあくおまえ、アシムレイト使ったただろ？ばれてないと思ったか  
……前に使ったときマジで心配したんだからな」

「ご、ごめん……」

「なら、黙ってあたしに食べさせてもらえよ……ふくふく……はい、  
あ、あ、あ、あくん」

「ち、ちよつと……」「あくん（怒）」……じゃあ」

さしだされたスプーンを口に入れる……薬膳料理と聞いていたけど。  
苦くもないしむしろ食べやすくて美味しい

「ほら、次だ……あ、あ、あくん、さつさと、口開けろよ」

顔を真っ赤にしてチラチラ僕を見ながらさしだされたスプーン：迷わず口に入れていく…それに周りの視線が痛いんですけど!?

「みた、スバルくあのノーヴェが勇気を出して食べさせてあげてるわよ」

「ホントだ。じゃあお父さんに写メおくら」

「むうくボクがやる予定だったのに先越されたくく（次はボクのターンだからね。今日の夜にアレを試そう。お母さん直伝〈男の子の落とし方〉お風呂で裸スポンジでスキンシップを）」

「ふふ、やるね抜け駆けとは…（まあ、いい。すでに私はタツくんとはすませているからな…塩を送ろう。だが私の方が分はアルさ…けして羨ましいとは…）」

「ミツキおばちゃん?どうしたの顔を背けちゃって?」

「な、何でもないわよユアく（そう、何でもないわよ、ただ食べさせてるだけだし…恥ずかしい訳ないし…）」

「コレで最後だ。はい、あ〜くん」

「んっ…ありがとうノーヴェさん。おいしかったです」

「そ、そうか…じゃあ片付けに行つてく…きゃ!」

急に立ち上がりよろけたノーヴェさんをみて肩が痛むのをかまわず抱きかかえように背中から倒れ込んだ。目の前がチカチカして

真っ暗だ…それにいい匂いがして柔らかいのが二つが顔を挟んでる……ましゃかゆつくりと視界が広がり見えたのは床ドンみたいな感じが多い被さるノーヴェさん…二つのふくらみが揺れてる…金色の瞳と目があう

「だ、大丈夫ノーヴェさん？」

「あ、ああ…それより自分のこと心配しろよ……バカ」

「ご、ごめん……」

そのままノーヴェさんは黙り込んで、僕の身体を起こし椅子に座らせるとガンプラの補修に来た子供達の所へ歩き出した…

（ああもうナニやってんだあたし！ありがとうって素直にいえないのでかよくバカバカバカバカ、あたしのバカ〜）

「まったく素直じゃ無いわね……そうだ！もしもしドウエ。実はアナタに」

子供達のところへ向かった娘ノーヴェに、ため息をつきながらクライアントがどこかに電話かけるなか、子供達のガンプラ補修が終わりガンプラハロウィンパーティーは大盛況の中で無事幕を下ろした

#### 五日後の朝

再び海外へガンプラ普及とマフィア逮捕の旅へとユウキ、メイが旅立ちタカヤ以外誰もいない秋月家…その鍵が静かに開かれ人影がゆつくりとタカヤの部屋へてて進んでいき扉を開けた

「……………んにゅ」



穏やかで幸せそうな寝顔を浮かべるタカヤに、思わずゴクリと喉を鳴らす影は静かに近づくと身体を揺らしはじめた

「……………ん〜」

軽く唸りなが手をもぞもぞとだし揺らす手を掴み毛布へ引き込んだ…抵抗するも抱き枕のように抱きしめ匂いを嗅ぐ仕草、さらに寝ぼけながら耳を甘噛みするとビクンと、体を震わし声が拳がった

「や、やめ……………やめろったら……………は、は、タカヤアアア!!」

「ん……………!!?ノ、ノーヴェさん!!?なんでここに!?!」

「目、目さましたんなら離せバカ……………」

「は、はい……………っていうかなんでノーヴェさんが僕の部屋に?」

慌てふためき離れたタカヤの前にはメイド姿のノーヴェ。黒のオーバーニーに白のエプロンドレス、小悪魔を思わせる可愛らしさを醸し出すミニスカートからむっちりとした太ももに胸元を強調させるデザイン。その姿に動転し上擦らせながらの質問にノーヴェが答えたのはとんでもないモノだった

「じつはな……………あたし、今日からメイドとして雇われたから!」

「え?なんで、ノーヴェさんが!?!ドゥーエさんはどうしたの!?!」

「ハロウィンパーティーの景品あっただろ…ドゥーエは忙しくて、前にバイトしたのが縁になって……………渡りに船とか……………と、とにかく!タカヤ専用メイドになったから……………何でもするから……………」

顔を赤くして指先を突く姿にクラクラする……どうしようと思つた時、扉が勢いよく開いた。ソコには蘊奥学院の制服姿のミカヤさん、レヴィ……僕とメイド服姿のノーヴェさんを交互にみてた

「少年、私は君がどのような趣向を持つとうと構わない……しかし朝から連れ込むのはどうかと（タツくんの趣味はメイドか……ならば買わなければ。すべてのおせわをしてあげるよ）」

「むうゝズルいノンノン！ボクもメイドになる!!」

「うわ！ちよ！だから服を脱がないでったら！父さん、母さん早く帰ってきてええ!?!」

今日も何時もと変わらない朝、一日が始まる……この変化が何をもたらすのかは誰も知らない

特別話 ガンプラハロウィンパーティー（後編）

了



たく知らない場所で迷子になっちゃった〜もう小学生になったのに  
道を聴こうとおばあちゃん？声をかけようとしたけどやめた……  
オレ、ドイツ語話せなかった

道に迷った上に、ドイツ語話せないじゃ八方塞がり……せつか親善  
ガン普拉バトル会場限定ガン普拉をかったのに……はあ、どうしょ。  
日も暮れて来てるし……はあお腹すいたな

「……………!!」

落ち込むオレの耳に声が届く……なんか切羽詰まった感じだ……路地  
裏の向こうから途切れ途切れだけど聞こえてくる。真っ直ぐ歩き出  
し近づくとだんだんとハッキリ響いてきてようやく抜けた先で見た。  
三人ぐらいの大人がオレと同じぐらいの子が後ろの子を庇い顔を  
殴られた光景を

「……………!?!」

庇われた子の声を聞いた瞬間、何かがキレタ……気がついたら走り  
出して三人の一人、殴ったヤツの金的を後ろから蹴り上げ叫んでいた

「●◆☒▽★☆★◆●!!」

「おい、大の大人三人がてめえより小さな子をなぐんじゃねえ!!」

「……………!!」

息を切らしながら叫ぶオレの目の前が暗くなって揺れた……目をむ  
けたら残り二人がなんか叫びながら棒を手をしている。なんかが垂  
れてきたけど気にしない

「こいや、子供しか殴れねえヤツに負けねえぞコラア!!」

日本語通じてつかわかんないけど…ひいじいちゃん譲りの啖呵を切って睨みつける…ケンカは先にひるんだ方が負けだ…何分過ぎたがわからないけど、いきなり訳わかんない声をあげて金的を蹴り上げたヤツを肩に抱えて逃げるように走り出していった

たぶん、仲間を呼びにいったな…頭の痛みを我慢しながら振り返ると二人が固まったように見てる

不味い、怖がらせたか…でも今は早く離れないととりあえず夕方だし挨拶するか…

「あ。ぐーて…ん…ダーク…マリ、クロウ…」

一応、名前をいったけど伝わったかな…髪を結んだオレと同じ年の男の子？はなんか警戒してるし、後ろにいる銀髪の男の子も背中に隠れてビクビクしながら見てる

ああマジでどうしたら…足下に何かがぶつかる…会場でかつたガンプラの入った袋…コレにかけてみるかと二人の前に箱を取り出した。たしかに好きって…リツヒ？イーベ…とにかく話さないと

「イヒ、マグ、イス…ガンプラ!!」

「?…ガンプラ、ガンプラ!!」

「ガンプラ!!」

「!マリ…ズイ、スフウイン、アフウ、サイサーン、せうふ…」

ガンプラって言葉にすごい反応した。目をキラキラって耀かせる…『オレは二人の味方だ』って下手くそだけどドイツ語で伝える、髪を纏めた男の子がじつと見てきて、しばらくして頷いてくれた…後

ろの子も出てきてガン普拉を交互に見ながら近づいてきた

警戒心がとけたみたいだ…早くここから離れないといけない。  
ジェスチャー混じりの下手くそなドイツ語で伝えると、髪を纏めた男の子が手を掴んできた

「Fr·h abreisen…」

フウ…あばつラツ……たしか早く離れようって意味だったけど？と  
にかくついて行くかな…手を引かれるようにその場から歩き出した  
…でもなんでかわかんないけど銀髪の男の子がアタマに触ろうとしている

…空いた片方の手で触って見るとヌルツとする…見てみたら赤い  
血がべつとり付いてた…うわ、ケガしてるって気付いたらなんかく  
らってして、銀髪の男の子にもたれるように倒れこんだ

「!!」

「!!……………!!」

前を歩く髪を纏めた男の子も一緒に巻き込んで…なんか泣き声に  
も似た叫びを耳にしながら、そのまま意識を放り投げた

オレ。クロウ・アキツキとフータ、リータと初めて出会った日に  
なった

閑話 ドイツのマブダチ!? (幼馴染み) 出会い編

了

閑話 ドイツのマブダチーUnser Held  
NEW!!

「おまえら目障りなんだよ…」

「オレらの遊び場にはいんなよ…」

「ソイツら親が居ないんだぜ。や〜い親無しっ子」

「フ、フ〜ちゃん…」

「安心しいやリンネ…ワシが守るきに」

リンネを後ろに下がらせ、嫌なモノを見るような三人を睨みつける  
…シスターイクスのおつかいから帰る途中、夕食まで急いでかえらな  
あかんおもい、近道したんはまちごうてた

ワシやリンネが住んでるクロイツフェルト孤児院の子らを親の敵  
のように虐める最低な奴ら、まさか鉢合わせるなんて

「なあ、なんか言えよ？なあ？親無し」

わざとらしく親無しって言うてくう…しっこいんじやと、おもいつ  
きり睨みつける

「な、なに見てんだよ！親無し!!」

ワシの目にイラついたのか大きく振りかぶった拳で右頬殴りつけ  
た…目の前がチカチカして、口の中が切れて血の味しながら、踏ん張  
り立った

リンネだけはまもらないかん、そんなときじや。鈍い音と一緒にワシ





そのまま走り去っていく三人に赤い髪の誰かが背中に声を浴びせて、少しして振り返りました

真つ赤な髪に、鋭い目つきに金色の瞳…服から判断して男の子。額から血を流して私とフ〜ちゃんをみてなんか困ったような感じでした？話しかけてきました

「…G u… e n… A b e n d、 M a l i… K U… R O…」

たぶん挨拶してる、彼は《ク〜》って名前みたいです。…でも、言葉が詰まったみたいで、彼…《ク〜》が足下に落ちていた袋から取り出したモノに目を奪われてしまった

私たちの国、ドイツで大人気のガン普拉を手にしして、たどたどしく「ガン普拉が好き！」って話しかけてきました

「…ガン普拉、すきやガン普拉は!!」

「わ、わたしもガン普拉好き」

なんかホツとした顔を見せたク〜…途切れ途切れですけどどう言ってくれました「オレは二人だけの味方だ」って…

今まで孤児院のみんなや、シスターイクスさん、シスターシヤンテさんも口にしてる言葉…初めて会ったばかりなのに。フ〜ちゃんとわたしを守ってくれた

なんだか胸の奥がドキドキして、フ〜ちゃんもなんだか顔が赤い…ク〜は身振り手振りで「ここ」「離れる」って言ってる…もしかしたら彼らが戻ってくるって思ってるんだ

「…なら、ここからはなれないかな…」

フクちゃんにも伝わったみたい…でもククの手をいきなり握って歩き出した…なんでか胸の奥がチクツてしながら、あとを追いかける裾を掴みました。ちらつとククの顔を見て息が止まりました…だって血が滴り落ちて止まらず、触ろうとしたら気付いたみたいで、足下がふらついて私に倒れてきました

「な、うわ!?…どうしたんじゃ…!!」

「フ、フクちゃん、血が止まらない…どうしよう」

「い、急いでワシらの孤児院に連れ行かんとな…リンネ、肩を貸して運ぼう」

「う。うん」

ぐったりしたククの肩を首に回してフクちゃんと一緒に歩き出しました…必ず助けなきゃ

コレが、リンネとフーカとクロウとの出逢いでした

閑話　ドイツのマブダチー  
了

閑話 Project 《T・A》

●月×日

アクション商事

コイツはオレ、ヒロシ・サーシエス・テスタロツサが日本に存在したガンプラマファイアの研究施設からほぼ無傷で回収できたデータだ

嚴重に幾重にもかけられたプロテクトを解除するも一部に破損が見られるが復元してみると画像データと共に経過記録らしいモノをサルベージできた

ガンプラマファイアの中で過激な思想をもつ宇宙ガンプラファイターXが進めていた計画だと判明し、ウイルス対策と攻勢防壁を展開し開示して最初にみたのは無数のシリンドアが並び、受精卵？が青みがかった光《プラフスキー粒子》を浴び急速に胚核分裂し瞬く間に十歳前後の少年達が浮かぶのを見てオレはわかった

ガンプラマファイアは国際的に禁止されている《ヒト》クローン製造を行っていたのだ。顔はよく見えないがシリンドア内に伸びたヘッドギア型マスクが隠してしまっただから判別ができなかった

サルベージしたファイル名《T・A series》……施設崩壊数時間前までの詳細な記録と共に撮されたのは様々なケーブルが伸びたヘッドギアをかぶるシリンドア内にいた少年が椅子に座らされている光景だ

閑話 Project 《T・A》

―◆◇月◆◇日。 T・A―01へオリジンの記憶転写開始《ダウンロード》する―

―……………あ、あああ！えああ！！A g g g g g g g g g ……◆S―

―…生体反応無し…ダウンロード失敗……T・A―01を廃棄、T・A―02のニューロシナプシス及び海馬強化後にダウンロード実験を再開する―

椅子に繋がれたまま口から血泡を吹き出し事切れた少年を運び出していく……次の映像が始まる

―T A―13に記憶転写成功《ダウンロード・コンプリート》……自我形成を幼児に固定、生体反応良好……ガンプラ製作訓練に移行する―

―ガ…ンプ……ラ………がンプら？―

―……………検査の結果、自我形成及び製作技術知識の転写不具合を確認、《処分》する―

不思議そうに首を傾げる顔を覆い隠すヘッドギアをつけた少年の首筋にアンプルが装填された薬液注入銃が充てられ乾いた音が聞こえ瞬く間にマスクの隙間から血を吐き出し悶え床をのたうち回り研究員の白衣を握りしめながら動かなくなつた

それから延々と連れてこられ少年達が処分されていくのが流れていく……俺は怒りで頭が沸騰しそうだった……だがガンプラファイア、宇宙ガンプラファイターXが進めようとしている計画を知るために敢

えて堪え拳を握り締め見続けた

奴らはクローンとして産み出した少年達を用いてナニかをたくらんで、さらには記憶転写する事に異常にまで執着してるのがわかる……

―●月×日、T A―22に記憶転写成功、自我形成をオリジンの記憶採取時と同じ年齢にした事が成功につながる……ガンプラ製作技術はオリジンと同等。懸念材料として自我が強くなったたび反抗的な思惟を見せ工具で切りかかってきた―

―うわあああ！ボクは……るんだ……か……ちゃ………つて……―

―麻酔を打ち沈静化後、上への判断を仰いだ結果、《処分》が下され先ほど処分完了した……《T A―23》は《T A―22》と同じ時期に製作したため反抗的因子を廃した調整した上での《記憶転写》《ダウンロード》を急がせる―

―☒月◆☒日、ラストロット《T A―23》に記憶転写。心理テストをおこない脈拍、各種脳内物質検査を行いながらガンプラ製作テスト開始、瞬く間に組み上げかつ改良、粒子対応工作もすべてオリジンに匹敵、精神面にも異常なし……ガンプラバトルにおいても高いファイター資質を備えている事がわかった……計画は成功を収めた。得られたデータを用以て量産するだけだ―

ヘッドギアと一体化したマスクを被らされたT A―23と呼ばれる少年のガンプラ製作技術、バトル技術は俺の目から見ても高すぎる……何よりあの戦い方はどこかで見たきが……しかし場面が移り変わり喧騒が響き渡った

「TA―23が脱走したと！……さがせ！出なければ宇宙ガンプラファイターX様に消される!!」

「TA―23はどうやら前々から経路を確保していたみたいです。それにTA―23、TA―22の生体コードが施設内に現れて掴めません」

「TA―22？まさかTA―23を逃がすために……探せ！生きたまま捕まえ……」

それを最後に声と映像は途絶え砂嵐が走る……日付は3ヶ月前、爆発事故が起きた日に重なる

ガンプラマフィアの施設から逃げ出したTA―23はナニかを知り逃げ出したに違いない……

「ふく今回の件は根っこが深そうだ……」

チーム・シャツフルも動いてくれるが宇宙ガンプラファイターXは目的の為なら卑劣な手を好んで使う、国際ガンプラ委員会も足取りを掴む為に必死にローラー作戦を展開してるが奴が日本、サエグサ模型店で開かれている大会の優勝景品カレトヴルツフを狙い現れた……鍵を握るのは行方をくらましたTA―23と呼ばれる少年……何とかして奴より先に見つけ保護しなければいけない。背筋を伸ばしながら俺はモニターを閉じオフィスからだとサエグサ模型店がある場所へ車を走らせた

了

## 第一章 刃の名を持つアストレイ プロローグ

「合わせ目はこれで全部削り落とせた…あとは組み立てて」

ある晴れた日…高級マンションの最上階にある一室でニツパー、紙ヤスリ、平ヤスリ、ピンバイスが散乱する机には赤いフレームが目立つプラモがゆっくりと組み立てられ、そつと置かれたのは《機動戦士ガンダムSEED・ASTRAY・R》の主人公ロウ・ギユールが駆るMS…よく見ると肩の装甲と頭部アンテナが大きく趣を変えている

「……あとは専用装備だけだ……」

小さく呟くと手に取るの是一片のスケブ、パラパラ開き手を止める。両腕部装甲に巨大な片刃の剣、背中にはバッテリー兼スラストユニット二基の大まかなスケッチが描かれている

「……なんとか間に合わせなきゃ…ん？」

スマホの着信音が鳴り慌てて手に取り、つなぐと懐かしい声が耳に響く

『タカヤよ、元気になっていたか？』

「そ、その声はマスタージャパン先生!!お久しぶりです!もしかして、今日本に？」

『そう急ぐでない!さて本題に入ろう…タカヤよ、お前はビルダーとしてようやく入り口にたったわけだがガンプラバトルの経験が圧倒的に少ない』



「でも先生とはやっていま…」

『バカ者！確かにワシとはやってはいるが互いの手を知り尽くした、いわば同門同士の戦いでは成長はないわ！そこでだ、お前のビルダーとファイターとして真の成長を促す相手とチームを引き合わせよう。チーム名は《チームN》、最近出来たばかりのチームだが実力はワシが保証しよう…詳しい日時は追って説明する』

「はい！マスタージャパン先生、色々ぼくのためにありがとうございます！  
ますー！」

『ウムー次に会うときは成長した姿を楽しみにしておこう！ではさらばだ!!』

「……………先生以外の人とバトルか……………チームN、どんな人かな？先生の知り合いだと……………ドモンさんみたいな人達かな……………でも今は完成させなきゃ僕のアストレイを」

通話が切れたスマホをベッドへ軽く投げ、再び机に向き直った少年  
：秋月タカヤはチームNとのガンプラバトルに備えスケブに書かれたイラストを基に1・5mプラ版に線を引きデザインナイフで切り出し仮組みを始めた頃……………

「ノーヴエー！マスターさんから電話きたんだって？もしかして新しいチームメイトの紹介？」

「慌てんなんてヴィヴィオ、新しいチームメイトじゃねえよ……………つたくマスターのおっさんもムチャいってくれるな……………」

「そうなんだ……………でもバトルやるんでしょ？」

「まあな。マスターのおっさんの紹介だからって手は抜かないからな

…ま、あたしのガンプラは負ける訳ないし、軽く揉んでやるさ」

ヴィヴィオにそう言うと、まるで猛禽のような目でみるのは機動戦士ガンダム00に登場する、全てのガンダムの原型機《Oガンダム》を改造し、紫紺色のカラーに染め上げたOガンダム・Bを手にするのはSt・ヒルデ学園中等部《ガンプラ部》部長《中島ノーヴェ》：

ビルダー、ファイター初心者《秋月タカヤ》が《突撃乙女》中島ノーヴェと出逢う時、恋と友情、熱いガンプラバトルの物語

ガンダムビルドファイターズ《刃》ーブレイドー

はじまります

## 第一話 チームN

「ここがSt. ヒルデ学院……」

朝日に照らされたミッシェン系の作りが目立つ校舎の前に立つのは、黒髪に女の子っぽい顔立ち、白のラインが入った黒い《蘊奥館》の制服に身を包んだ少年《秋月・タカヤ》が小さくつぶやく

今日は師であるマスタージャパンの紹介されたStヒルデ学院、ガンプラ部……チームNとのガンプラバトルをするために訪れていた

チームN……ここ関東第4ブロックで、結成からわずか一年足らずで頭角を現してきた新進気鋭のビルダー、ファイターチーム……他の強豪チーム《天瞳》、《紫天》、《striker》、《夜天》、からも警戒されていると聞いていたタカヤ……そんなチームのリーダーとこれからバトルすると考えると少し不安になる

しかし、マスタージャパンが自分の為に組んでくれたガンプラバトル、どのような相手であろうと全力で戦うのが相手への礼儀、そう教えられていたタカヤはパンつと両頬を叩き気合いを入れ、まっすぐ学院内へと歩き出した

### 第一話 チームN

「……えと、ガンプラ部の部室は……右を曲がって……」

学院内へ入ったタカヤだったが、早速迷ってしまった……マスタージャパンから言われていたのは時間と場所だけ、中等部、高等部の作りが似通った校舎は迷うのに充分だ

「あまり時間がないか……連絡先だけでも聞いておけば良かった……」

「あの～秋月さん？ですよね」

「え？」

背後からの声に振り返ると、長い金髪を藍色のリボンでサイドテール

ルにした女の子がジッと見て答えを待っている…ゆつくりと頷くとホッとした表情を浮かべた

「良かったくやつと見つけました…もしかしたら道に迷ってるんじゃないかってリオやコロナが言ってたんです。あ、自己紹介まだでしたね。私は高町・ヴィヴィオつて言います。じゃ今から部室に案内しますね」

女の子、高町ヴィヴィオに案内され、しばらくあるくと扉が見え、迷わず開き中へ入ると六角形の筐体が六つ並ぶように中央に置かれ、その周りにはショーケースに展示されたガンプラが並んでいる…一体、一体スマイレ、スジ彫りが丁寧に施され、塗装もムラなく、中にはあの難しいMAX塗り（MAX渡辺考案のパールを混ぜた塗装法）までしているのを見て、ビルダーの力量を肌で感じ取った

「…すごい…よく見ると可動箇所も増えているし、ガンプラバトルに有利になるように考え抜かれた武装の配置…みんなレベルが高いんですね」

「はい、でも全部、部長が作ったんですよ。部長のお家、ナカジマ・ポビーにいけば沢山…」

「こらーなに言ってやがんだ！…アタシんちにあるのは姉貴達が作ったのばかりだからな…お前がマスターのおっさんが言った秋月だな…ふくん…」

いつの間にかにヴィヴィオの背後に、赤い髪が目立ち金色の瞳、濃紺に赤のラインが入ったジャージを着た人物がジッとまるで品定めするように見ている。やがて視線を戻した

「こいよ、今日はガンプラバトルをしに来たんだろ？胸を貸してやるから、全力でかかってきな」



「ここだ！オラアア!!」

いつの間にかに背後に回り込んでいたOガンダム・Bの回し蹴りが襲いかかる。寸前でアスカロンを展開、受け止める

「へえ、あたしの蹴りを受け止めるなんてやるな…でも、コレならどうだ！」

アスカロンで防がれ受け止められたら脚…タービン部分が回転、勢いを増しながらバネのように横へ跳躍、両腰に収められたGNピストルを両手に構え乱れ撃つ、寸前で後ろへ飛びながら交わしていくアストレイ・ブレイド…しかし何発か被弾、右膝と攻撃を受け止めた左腕アスカロンが耐えきれず破壊される

「……アスカロンが？」

「……余所見してる暇はあるのか？」

地をうのようにスラスト全開で迫ると右拳で顔面、ボディ、蹴りを繰り出していく…みるみるうちに機体に罅が入りスパークし始める

「どうした？胸を貸してやってんだから全力でこいよ。その剣は飾りか？」

「……ま、負けるもんか！」

タカヤも負けじとアストレイ・ブレイドを操作し拳打と蹴りを繰り出しぶつかり合う…しかしガンプラバトルにおいて相手は一枚も二枚も上…初心者であるタカヤが勝てる要素は皆無に近い

だが、タカヤはスフィアを握り、今までにない集中力で操りながら考える…

(……あの人、中島さんの機体は格闘戦に特化していて素早い、牽制用にビームピストルはまるで近づかれるのを警戒している……まさか)

ある答えにたどり着き、タカヤは背部バーニア全開で地面を蹴り上げる：アスファルトが砕け姿が見えなくなる、姿を探した時、背後に気配。振り返るとアスカロンを構えたアストレイ・ブレイドが腰を沈め逆袈裟に切り払う

「く、踏み込みが甘かった!」

「今のは危なかったな…やるな…まさか当てるなんてな、マスターのおっさん以来だ」

紙一重で交わすも冷や汗を流している中島、だがOガンダム・Bの胸部に切り傷ができている事に気づきながらタカヤをみる

(…:コイツ、あたしの間合いに入ってきやがった…マスターのおっさんの弟子だつてことはあるな…:でも次で終わりにする!)

気合いを入れ直し構えるOガンダム・Bの両脚に配置されたタービンが火花を散らし回転、さらにビーム刃が発生する…それをみてアストレイ・ブレイドも左腕に残されたアスカロンに手を添え構える

廃墟と化したコロニーの街中…やがて雨がポツポツ降り出し、機体を伝いながら落ち、やがて雷が鳴り響くと同時にバーニア全開で二機が交差…拳打がアストレイの顔面をとらえ殴り抜く、ぐらりと体勢が崩れるも踏みとどまりアスカロンで腕を切り払う

「まだまだ!」

すかさず右の蹴りが胴体へ決まり、ビーム刃がえぐり削り抜く、いや見るとアスカロンが火花を散らしながら防いでいる…だが次の瞬間、アスカロンの刃が砕け胴体へ打ち込まれまるで水切り石のように跳ね廃墟の壁面に叩きつけられアストレイ・ブレイドの瞳から光が消えた

《BATTLE END》

無情にも機械音声が響き、タカヤの負けが決まった



「チームNの皆さん、今日は僕とガン普拉バトルしてくれて、ありがとうございました……」

「ごっちょこそ、ありがとな……なあ、もしよければ何だけどき、あたし等と一緒に、他のメンバーとガン普拉バトルやってみないか？」

初めてのガン普拉バトルが終わり、アストレイ・ブレイドをケースに入れ、帰ろうとしたタカヤは中島からの提案に考え込む……確かに、ガン普拉バトルの経験を積むにはいい環境が揃うのはいい

でも何故、こんな事を言ってくるんだろうと考えるも答えは見つからず二つ返事で頷くと、連絡先といつも集まる場所の地図まで渡してくれた

「……じゃあ、また今度」

「ああ、また来いよ」

やがてタカヤの姿が見えなくなると、大きくため息をつくとヴィオオが話しかけてきた

「ねえノーヴェ、秋月さんをチームに入れるの？」

「……バカ、学校が違うだろ？アイツがうちの学院に転入してくれば別なんだけど。無理だろうなあ……アタシに一撃くれる奴なんていないか……」

「部長！俺も飛び込みでソイツとガン普拉バト……って相手はドコいるんだ？」

ノーヴェの声を遮るように開かれたドアからアイスブルーの瞳が目立つ少年《トオル・フローリアン》が辺りを見回し訪ね、ヴィオオからバトルが終わったと聞いてがっくりと肩を落とした

「……なんだよ……それ……せっかく俺のランスロットガンダムデビュー戦できると思ったのに。で、ソイツ今度は何時来るんだ？」



「ん？あたしから連絡してみるから、安心しろって…でも次に会うときは…：…：…あたしより強くなってるかも知れないからな…それに可愛いし」

小さく呟きながらOガンダム・Bの脚部タービン部分に罫が広がっていた…それを見る表情はどこか嬉しいようにみえ頬が赤く染まっていた

★★★

「…：…：…ふう〜ここにマスターの弟子がいるのか…：…ラルさんの頼みじゃ仕方ないか…：…」

バイクにまたがり夜道を走るのはメットにゴーグル、茶色のジャケット姿の青年…

「レイジみたいな奴じゃないといいんだがな…ま、イタリアの伊達男の戦い方を伝授してやるか」

笑みを浮かべ青年は夜の街を走り去った

第一話 チームN

了

## 第二話 強化（前編）

「…アスカロンの関節部ABSランナー加工終わり、次は胴体をやるか」

バラバラになったアスカロンの関節軸の強度を確認し、ほつとした表情を浮かべるタカヤ、先日のチームN、中島ノーヴェとのガンプラバトルで破損したアストレイ・ブレイドの修理をすすめるタカヤ、胴体をパーツセパレーター（一度嵌めたガンプラのパーツをばらしたりするもの、作者は電ホに付いていた川口名人のを愛用しています）で丁寧に分解する

「……………良かった。これならPPSE謹製セメント（流し込み接着剤、主にスケールモデルに使われる）を流しこめば大丈夫だ」

深刻なダメージで無いことにほつとすると、手早く作業に取りかかろうとセメント接着剤のふたを取る。しかしその手が止まる

「中島さんのOガンダム・B、強かったな…アスカロンとブレイドを《完全形態》にしないと勝てない…いや、もつと上手く僕がブレイドを使いこなせるようにならなきゃ」

二日前に、師であるマスタージャパンに組まれたガンプラバトルに負けてから、タカヤはブレイドの細部に改造を加えてきた、今度は負けない、そう心の中で呟き再び作業をはじめ…再び手が止まる

「……………セメントとリード線が切れちゃった…」

接着剤が切れていた事に気づくも時計の針は明日になろうとしている…明日、学校の帰りに模型店によるう。そう考えるとブレイドを箱に入れると、そのままベッドへ倒れ込むと眠りについた…

机の上におかれたスケブに描かれていた《オレンジ武者？》に似た追加装甲姿のアストレイ・ブレイドの絵はやがて室内灯が消える見えなくなった

## 第二話 強化（前編）

「ん〜やつと終わった〜」

最後の授業の終わりを知らせる音が響き教室内がざわざわなり席を立ち、他の生徒と共に教室をでる…《蘊奥館》は歴史は古く文武両道を旨としながら学生の自主性を重んじる校風が特徴であるココにタカヤは通っている…

「……急がないと……」

「待っていたよ、秋月タカヤくん」

教室をでてすぐ呼び止められる。声の主を見ると白の胴着に黒袴に身を包んだ黒く長い髪を白い髪留めで止め、タカヤより年上の少女が笑みを浮かべている

「……ミカヤ先輩…前に言いましたけど、僕はガンプラ部には……」

「即答か、君のそういうところは私は好きだな。話は変わるが、ずいぶん急いでいるみたいじゃないか？誰かと逢い引きの予定でもあるのかな？」

「………あの…逢い引きって何ですか？」

「……………そうだった。キミがそういうのに詳しくないことを忘れていたよ。それより急いでるんじゃないのかな？」

「あーす、すみません、僕はここで……失礼しますミカヤ先輩」

頭を下げタカヤは急ぎ足で駆けていく。その姿を見送る少女…蘊奥館中等部三年《ミカヤ・S・天瞳》は何度目になるガンプラ部への勧誘が失敗した事に肩を落とした

「……………こうも頑なだとはな…ますます欲しくなったよ。マスター  
ジャパン先生の愛弟子《秋月タカヤ》としてではなく《君》自身をね  
……」

柔らかい笑みを浮かべ黒髪をなびかせ歩き出す。ガンプラ部、チム《天瞳》率いるミカヤ・S・天瞳はタカヤをどう引き入れるかを思案した頃

「…ヘクシユ！か、風邪かな…：確か模型店はここらへんかな？今日に限ってサエグサ模型店はお休みだし…」

スマホのナビを頼りに歩くタカヤ…いつも寄るサエグサ模型店が臨時休業していた為だった。臨時休業の看板の向こう側で「コレは売れるわよ！」「やめろつたら姉貴！怖い母狼がきたらどうするんだよ」「ああ〜静かにしろよ！あたしのガンプラを早めに完成させなきゃなんねんだからな！」と聞こえたのは気のせいだったのだろうか

「や、やっと着いた…」

さわざわざ隣街まで足を運んでいたのだが見知らぬ道に迷いようやく目的地にたどり着き店の扉をくぐると…

「いらつしやいませ〜♪ナカジマ・ボビーへようこ…：…：…：…：な、な、な、なんでお前がココに?!…：…：…：…」

黒を基調としたメイド服に白のオーバーニー、フリルが付いたカチューシャ、白いエプロン越しでもわかる豊かなふくらみ…：メイド服姿の中島ノーヴェの営業スマイルが崩れ顔がみるみるうちに真っ赤に染まりしどろもどろになりながら口を開いた

「な、中島さんこそなんでココに？アルバイトしてるんですか？」

「そ、それは…」

「ノーヴェ、お客さんきたの！美人メイドさん作戦は成功だね！」

「当然だ！この姉が立案した作戦は完璧だからな」

「でもでももう少し色気が欲しいツスね…胸をこう、谷間と太ももをアピールすれば」

「バ、バカ！さわるなウエンデイ！客が、秋月がいんだから止めろ!?!」

「ダメツスよ。あたしたちとのガンプラバトルに負けたんだから……つて秋月？へえこの子がノーヴェをキズモノにしたつて言う男の子？」

必死にスカートを押さえるノーヴェ、しかしウエンデイの言葉に騒がしかった店内の温度が一気に下がる。同時にタカヤの背後にメガ粒子砲、いやシユベルトゲベール、アーマーシユナイダーが突き刺さるような気配。恐る恐る振り返ると白髪が目立つナカジマボビーとかけられたエプロン姿の初老の男性が額にぶつくり血管を浮かばせ立っている

「…………オレの娘をキズモノにしたただあ!…………いい度胸だ坊主うう！」

「お、おとくさん？違うからな？あたしじゃなくてガンプラ……」

「そ、そうですよ！僕は中島さんをキズモノにしたわけじゃなくて…………」

「じゃあ何だ！ウチの娘たちの誰かなのか！ウエンデイか！チンクか！デイエチか！ギンガか！スバルか！まさか全員キズモノに…………」

「いい加減にしなさい貴方！」

「グガ!？」

見事な手刀がはいり糸が切れたようにガクリと膝をつく男性を掴むのは、腰まで伸びた髪を白いリボンで結んだ女性が申しわけなさそうな顔をしている

「ごめんなさいね〜ウチの人ったら早とちりしちゃって…チンク、ウエンデイも悪のりしないの」

「す、すまないクイント母上」

「ごめんなさいツス…クイント母さん」

「反省したならよろしい♪ノーヴェエ、お客様を案内してあげて、わたしはこの人を部屋に休ませたら、二人と買い出しに行くから、お店番号らしくね」

ぐったり気を失った男性を抱え店の奥に消えると、ノーヴェエが大きくなため息をはくと乱れた服装をなおしながらタカヤに向き直る

「あ、悪かったな…騒がしかっただろ？姉貴たちはいつもあんな感じでき。そ、それより、なんであたしんちに来たんだよ？」

「じ、実は家の近くのサエグサ模型店が臨時休業だったから…この前のバトルで壊れたアストレイ・ブレイドの補修材を買いに…」

「そつか…んで、なにが必要なんだ？」

「リード線とPPSE謹製セメント接着剤を…」

「ちよつと待つてろ……確か…」

タカヤの言葉を聞いて、棚の一角、様々な厚さのプラ版、アルテコパテ、プラ角材が陳列する下にある引き出しから、リード線とPPSE謹製セメント接着剤を取り出す

「これでいいか？あと必要な材料はないか？」

「はい、あと此処って工作室ありますか？」

「ああ、あるけど。まさか持ってきてるのか？」

ノーヴェエの問いに頷くタカヤ…よほど愛着があると感じ取りながら会計を済ませ、二人が向かったのは工作室。机が十席並び一つに座るとバックからアストレイ・ブレイドの入った箱を取り出すと早速修理をはじめ

「あのく中島さん？何か変ですか？」

「べ、別に…そのパーツセパレーターって電ホに付いていた奴だよな」

「はい、先生が『ビルダーならば必ず持つ必需品だ』って……分解できた、あとはPPSE謹製セメント接着剤を流し込んで」

亀裂にセメント溶剤をスウッと流し込む…瞬く間、亀裂が埋まり固まっっていく。PPSE謹製セメント接着剤は短時間でプラとプラをとかしくつつける特殊溶剤、タカヤはアストレイ・ブレイドの制作にはこれを使っていた

「……………」

(な、何だろ。中島さん、さっきから僕の手ばかり見てる…)

「(へえ〜丁寧に分割加工してるんだな…マスターのおっさんのやり方と似てんな…それに楽しんでるな…ん?)…さて、そこは凸凹モールド入れたらリアルになるんじゃないか?」

「あ、そうですか?じゃあ…あ、あの中島さん」

「ん?」

「な、何でもないです」

顔を真っ赤にしようつむくタカヤ…なぜならメイド服姿のノーヴェの太もも、さらには豊かな胸がいやでも視界に入る体勢は思春期真っ盛りな少年には毒にしかならないのに気づかずさらに身を乗り出す「ほら、はみ出してる部分は削らないとダメだろ?貸して見ろ」

「…………え、あ、はい」

「デザインナイフで削って、800、1000、1200で仕上げればOKだ。ほらあとは何かあるか?」

「い、いえ…中島さんってビルダー歴ってどれぐらいなんですか?」「アタシか?まあ、二年ぐらいかな…よし、出来たぞ……………なあ何で両腕にこんな扱いづらい剣をつけてんだよ?アストレイならビームサーベルやアーマーシユナイダー、ビームナイフとかがあってるんじゃない」「このままでいいです…………え?」

「…………アスカロンは…僕だけの刃だから……」

強い意志が込められた言葉と瞳を見て目をそらしたノーヴェ、その頬は朱がさしている……

(コイツ、なんて目してるんだ……ああ、もう！ほうっておけないな)  
「なあ、少し時間はあるよな？あたしとガンプラバトルやらないか？」  
「え？でも僕のアストレイ・ブレイドは……」

「あたしんちのヤツを使いな…ま、姉貴たちが作った奴だけだな」

★★★★★★★★★★

「…………行きます」

「やっぱりアストレイできたか……ま、いいか……いくぞタカヤ！」

荒野を舞台に地を蹴り戦うのはOガンダム・B、そしてアストレイ  
ゴルドフレイム天ミナ…トツカノツルギを抜き関節をねらうも脚  
部タービンで蹴り弾く、だが直ぐに間合いを取りマガノシラホコを射  
出す

「(タカヤの奴、初めてあつかったばかりの天ミナを使いこなしてやが  
る、アストレイ・ブレイドを使っているときより動きがいい!)………  
へえやるじゃないか!」

「中島さんこそ、この前よりチューンしましたね！うわっ!？」

「余所見してるばあいか?」

腰を沈めた蹴りが天ミナの顔面をとらえ、さらに連続蹴りが襲いか



かる…が寸前で交わしていく

(うわあ〜みてよギン姉、ギン姉の天ミナをあそこまであやつるなんて…あの子何者?)

(たしかマスタージャパンさんのお弟子さんらしいよ、スバル)

(それにノーヴェったらあんなに楽しそうにガン普拉バトルしてる…あの子の事、気に入ったのかしら?)

二人のガン普拉バトルをこっそり観戦する3人の姉たちをよそに、闘いが激しさを増していこうとしたその時、一条の光…極太のビームが襲いかかる。寸前でかわした二人の前に一体のガン普拉が姿を見せる

左右非対称のパーツ構成、外観からウイングガンダムをベースにしたカスタム機…それをみたノーヴェの身体が震え出す

「あ、アレは…」

「知っているんですか?」

「バ、バカ!知らないのか!あれはガン普拉バトル世界大会常連、イタリア代表が駆るガン普拉…」

高台に降り立つと非対称の翼を広げる姿…その機体からは今まで出会ったビルダー、ファイターとは違う空気にスフィアを握る手に汗がにじむ

「ウイングガンダムフェーニチェ、リカルド・フェリーニ!」

「さて、マスターの弟子…秋月タカヤ、その実力を見させてもらおうか!」

ノーヴェ、タカヤのいるバトルシステムの反対方向にいる男、イタリアの伊達男《リカルド・フェリーニ》

…いやウイングガンダムフェーニチェはゆつくりとバスターライ

フル改を構えた

第二話 強化（前編）

後編に続く

## 第二話 強化（後編）

「クー！」

「中島さん！」

高台からジャンプ、高速で滑空するウイングガンダムフェニーチェ。構えたバスターライフルカスタムの砲口から放たれた極太のビーム射撃線状にトリケロス改を投げ防ぐも爆発、爆炎に紛れ離れる二体のガンプラ：天ミナ、Oガンダム・Bの装甲表面を明るく染め背後にある街を風払う

「さ、さすが世界大会常連の実力って奴か……手強いなタカヤ」

「はい、それにバスターライフルの威力がハンパないです。もし直撃したら……」

「……ただじゃすまないな、ならやることは一つだ、今二発撃ったから残りはあと一発、なんとか撃たせて防ぐか、かわして接近戦に持ち込めば勝てるはずだ……問題はどうか撃たせるかなんだよな」

「中島さん、僕に一つ任せて貰えますか」

タカヤの提案に耳を傾け数秒話し込みうなずくと、砂漠の廃墟から二人は外へと飛び出し真っ直ぐ、ウイングガンダムフェニーチェがいる方向へ飛翔する

「へえ、突っ込んできたか……だが手加減なしで行かせてもらうぜ！」

足場にした給水塔を蹴り、太陽を背にしバスターライフルカスタムを構え、接近する二機へと狙いを定め引き金を引き絞る……凄まじいエネルギーの奔流、極太のビームがOガンダム・B、ゴールドフレーム天を飲み込み勝負は決したかに見えたりカルド・フェリーニの表情が

驚きの色に染まる

「な、なにー！」

「はあああああー！」

極太のビームの奔流が何かに切り裂かれてる。みるとアストレイ  
ゴルドフレーム天、背中にあるマガノイクタチが天の両腕に装着し  
見えない力場で切り裂いている姿

（あ、あいつ、マガノイクタチにプラフスキー粒子を定着させてビーム  
を斬っているだど!?まさかプラフスキー粒子の特性を理解している  
のか?）

「あ、あと少しだけ持ちこたえて、マガノイクタチの大太刀！」

少し前……

「中島さん、この天には巨大剣が装備されてますよね？」

「あ、ああ、姉貴…ギンガ姉が作ったんだよ。マガノイクタチの大太  
刀って言うんだけどさ。斬りつけると同時にエネルギーを奪い自ら  
モノにして、粒子ビームを切り裂くって……まさか！おまえ!？」

「はい、僕がバスターライフルの砲撃を受け止めます。最大出力で砲  
撃中は少しだけ動きを止めるはずです…」

「バカッ！んなの認められるか！いいか、あたしは勝つために仲間  
絶対に見捨てねえ…だから、このガンプラバトル二人で一緒に勝つぞ  
！いいな!!」

「でも二人でって…」

「い・い・か・ら・わ・か・っ・た・な！」

「……は、はい」

気迫に負け、最初に提案したプランにある追加をして二人は作戦を  
実行した。マガノイクタチの大剣を構えビームを切り裂く天の背後  
でOガンダム・Bは脚のタービンを高速回転、周囲にプラフスキー粒

子が収束し、ビームの奔流が途絶えた瞬間、二機が動く

「オラアアア！」

砂漠を滑るように加速、ウイングガンダムフェニーチェに迫るOガンダム・Bの蹴りがバスターライフルカスタムを持つ手を蹴り上げ、宙を舞う

(もらった！)

「やるな嬢ちゃん！だがまだまだ甘いぜ！」

左腕にマウンドされたビームレイピアを手に華麗な剣舞のように切り払い、同時に回し蹴りを胴体へ決める。たまらず吹き飛ぶOガンダム・B、だが黒い影が受け止める

「ノーヴェさん、しつかり」

「あ、ああ、サンキュ……つておまえ！」

立ち上がるとうとしたノーヴェの目には左に装備したマガノイクタチの大太刀が半ばから折れ、ヒザアーマー、各部装甲に罅が所々見え痛々しい姿の天に声を失う。いくらマガノ大太刀の表面に展開したプラフスキー粒子でも完全に防ぎきれなかったのがわかる

「……………すみません。少し無茶をしすぎました…大丈夫ですか？」

「……………このバカ……………あたしなんか庇うな！お前のガンプラの方がロボロじゃないかよ！」

「……………そうですね。すみません、天をこんなにロボロにしてしまつて……………必ず直します。でも今は、勝ちに行きましょう」

「あ、ああ……………行くぞ！」

真剣な眼差しを向けるタカヤの顔を見てドキツとするノーヴェ、そ

れを振り払うようにスフィアを握る手に力がこもり、素早くガンプラを操作する二人：対するフェニーチェはバスターライフルカスタムを一瞥し、ビームレイピアを構える

(…プラフスキー粒子の特性を理解しとっさに応用する才能、それに二人とも荒削りだがファイターの实力は未知数：ラルさんの言った通り今年の世界大会は油断できないな、レイジやセイと同じ《ニュージエネレーション》って奴か)

スフィアを握りながら二人の攻撃をかわしながらレイピアで確実にダメージを与えるも、タカヤのマガノ大太刀に防がれ、ノーヴェのリボルバースパイクが襲いかかる

「さすがだなマスターの弟子にお嬢さん！だがなオレは負けるつもりはないからな!!」

「うわっ!」

「ノーヴェさん!」

「あたしはいいから!目の前の相手に集中しろ!!」

フェニーチェのレイピアがリボルバースパイクの間隙を縫い足を切り払う。タービンがバラバラに片足立ちの状態から殴りかかる。が返す刃が残る片足を斬りつけ戦闘不能になり、タカヤとフェリーニ。ウイングガンダムフェニーチェとゴールドフレーム天との一騎打ちになる

「(っ、強い……………コレが世界の实力…先生がいる世界の強さ……………)  
……………天、もう少しだけ頑張つて」

「……………ふ、そろそろ決めるか……………」

その言葉を皮きりに、瞬く間に間合いを積み斬り合う二体。マガノ大太刀とビームレイピアが交差する度に火花が散り、あたりに風が巻き起こる…無傷のフェニーチェに対して繰り出される斬撃を折れたマガノ大太刀で防ぐ満身創痕の天に限界が見え始める

しかしスファイアを握るタカヤの意識はこれ以上にならない集中をみせながらガンプラの状態とスロットパネルを確認する…

(各関節に負荷がかかっている、武装はマガノ大太刀一本だけ…そんなに長くは持たない。でも、負けたくない！)

とつぜんバックステップと同時になにを思ったのか折れたマガノ大太刀を砂漠に深々と突き刺す。そのまま跳躍と共に刃の部分を足場に力を込め蹴った

「思いつきがいいな！なら勝負だ秋月タカヤ!!」

フェリーニも叫ぶと、フェニーチェの双眸が輝く。レイピアを構えフルブースト、マガノ大太刀を槍のように突き出し迫るタカヤ…ゴールドフレイム天とぶつかり合う瞬間、天が身体をひねり出し回転プラフスキー粒子が渦を巻きおこしながら迫る

「……一度も成功したこと無いけどやるしかない……《疾風怒涛の刃！》」

「な、なにー！」

渦卷いたプラフスキー粒子が刃を形成する…疾風怒涛の刃、タカヤが師であるマスタージャパンの技を参考に編み出した必殺技…しかしプラフスキー粒子を制御、刃にかえ相手を斬り伏せる大技だが、まだまだまだ自在に操れない

(あいつ、あんな技を隠してたのか？でも天が持ちこたえられない！) 勝利の為に今まで以上、嘗て無いほどの集中力でウイングガンダムフェニーチェに刃を向け互いに交差、凄まじい閃光が照らし、やがて晴れると降り立つ

二体に真剣なまなざしをで見守るノーヴェの前で天のボディが火花を散らし地面へと沈んだ

《BATTLE END》

ガン普拉バトル終了を知らせる音声がなりフィールドからプラフスキー粒子が消え、その場にはダメージを受けたOガンダム・B、ゴールドフレーム天の姿

だがウイングガンダムフェニーチェ、ファイター《リカルド・フェリーニ》の姿はドコにもなく、変わりに誰かが店を出たと知らせるチャイムだけが響いた

★★★★★★

夜の街の鮮やかな光が交錯する中、小さなバー《アクシズ》。カウンターでグラスを傾け飲むフェリーニの姿…バーの扉が開かれると同時に声をかけられた

「フェリーニ、どうだったか?」

「ラル大尉!いつ此処に?」

「ワシは、たまたま近くに用事があつたから……マスター、バーボンを一つ」

しばらくしてグラスが出され軽く飲むラル…フェリーニは同じモノを再び頼み。出されたグラスを飲む

「……ラル大尉、マスターはとんでもない弟子を育てあげているみたいですよ……」

「そうか。しかし、あのマスタージャパンが弟子を取るとは思つてもなかつた。確か名前は秋月タカヤくんだったな……手合わせしてどうだったか?」

「あいつ、タカヤは戦えば戦うほど強くなる、それに今日は借り物のガンプラでバトルしたにも関わらず、機体特性を把握して食いついてきた……ビルダー、ファイターとしてまだまだ伸びますよ」

区切りをつけるようにグラスを飲み干すフェリーニ

「ふふふ、君にそこまで言わせるとはな。セイくん、レイジくんにもあわせてみたいモノだな……」



「ところで大尉は何でココへ？」

「……ああ、マスターに頼まれていたモノをサエグサ模型店に渡しにな……」

傾けたグラスの氷がカランと乾いた音を立てた



「タカヤ、ピンバイス貸してくれ。径は2・4で」

「はい、あの…中島さん、すいません」

「何だよ？」

「……天をこんなにボロボロにしてしまつて」

「んなの気にするな。それより手を動かせ。姉貴が見たら卒倒するぞ？」

「……はい、中島さ…「ノーヴェでいい」エ？」

ヤスリをかける手を止めるタカヤ、それに対してノーヴェはそっぽを向き器用にOガンダムBの破損箇所を修復している…だが顔が紅いのは気のせいだろうか？

「…バトル中、あたしの名前を呼んだだろ…それにウチの姉貴も同じ名字だからややこしいし」

「で、でも僕の2つ上ですから…ダメですよ」

「あたしもタカヤって呼んでるからお互い様だろ？」

「それとコレは違うんじゃないや…中島さ…「ノーヴェ」…え、あの…」

困惑しながら小さく名前をつぶやくタカヤの声を聞き、ピンツとくせ毛が立つ…何故か作業スピードが速くなったのは気のせいだろうか

そんな二人のやりとりを覗く6つの影

(あらあら、ノーヴェが下の名前で呼ぶのを許すなんて珍しいわね)

(そうだね、お母さん…でも私の天がくボロボロ…)

(泣くなギンガ、あのタカヤ少年のビルダーテクニクは我々以上。だから完璧に直してくれるかもしれないぞ?)

(それに今時いない、子犬系素直っ子ツスね…、タカヤんみたいな弟が欲しいツスねくデイエチもそう思うツスよね)

(そうねウエンデイ、スバルはどう思う?)

(うん、面白い子だね。それに…いい感じじゃない?)

「あ！待て！スジ彫りを何で深くするんだ？」

「サフを吹くとせっかくのスジ掘りが埋まるから、深めに彫った方が良いんです…これでよし」

「おおくすごいなタカヤ」

スジ彫りを深くしたパーツをサツとサフ吹く…モールドは消えずしつかりと残るのを見て感嘆の吐息を漏らすノーヴェ…その瞳にはタカヤのガンプラに対する真摯な眼差しを見て胸の奥が熱くなる

「あの、ノーヴェさん？顔が真っ赤ですけどどこか具合が悪いんですか？」

「え？うわあああ!？」

タカヤに声をかけられ慌てるノーヴェ、そのとき椅子がバランスを崩しそのまま倒れそうになるのを見て、手を掴むも、そのままもつれるように床に倒れ塗料瓶や筆があたりに散乱する

「タタタ…アレ？痛くな…ンンッ!？」

体を起こしたノーヴェが思わず熱さが籠もった声を漏らす。みると自分の下にはタカヤの姿、だが頭がスカートの中にすっぽり入り、鼻と口をふさがれたタカヤの目には水縞が映り、女の子特有の甘い香りと柔らかな感覚…そして何かがつウウと頬を伝った

「……………ぶ、ぶはあああああああああああああ！」

勢いよく鼻血が吹き出し、スカートとショーツ、床を赤く染め上げていく。

「た、タカヤ！しっかりしろ！タカヤ!!」

「んきゅ〜（鼻血が止まらない……………誰か助けて…）」

血で汚れるのも気にとめず抱きかかえ呼びかけるノーヴェエの声を最後に止め止めなく鼻血をだしながらタカヤは意識を手放した

第二話 強化（後編）  
了

### 第三話 星光と雷刃（前編）

「あ、あの……いいんですか？一泊させてくれたのもですけど、朝食までいただいたちやつて」

「いいのよタカヤ君。昨日はガンプラバトルで疲れていたんだから、しかも相手は世界ランカーのフェリーニだったんだし、倒れるのは仕方ないわよ」

明るくポンポンと話すのは、中島さんのお母さん……クイントさん。昨日、疲れて倒れてしまった僕を介抱し、泊めてくれた優しい人で

「……………（ゴゴゴゴゴゴ）」

アーマーシユナイダーで突き刺すような視線を送るのは、ナカジマホビーの大黒柱。中島ゲンヤさんがジイイツツとみている……ま、まだアレを誤解してるの!?

「あ、あの……ゲンヤさん……僕はノーヴェさんをキズモノにしているせんから……」

「…ほう、ウチの娘の名前を呼び合う仲のクセにシラをきるのか…娘はわたさん、わたさんぞ!!」

…や、やばい逆効果になっちゃった!それに背中に娘ラブだけでも顔はぜんぜん似ていないドズル・ザビさんの姿が見えるんですけど!?!  
「いいかげんなさい!アナタ!!」

「ビグザム!?!」

見事な手刀が首に決まりガクツとするのを抱き止めたクイントさん…

「まったくもう…ゴメンねタカヤ君。ウチの人ったら娘のことになるといつもこうなの。でも悪い人じゃないから安心してね…さあ食べましょうか?」

少し奥まった場所にある椅子にゲンヤさんを座らせるとテーブルに向かい座ると、みんな席についている

「おはようタカヤ君。よく眠れた?」

「は、はい」

「うむ、元気で何よりだ」

「さあ、はやく食べるツスよ。タカヤんは学校があるンツスからね」

「あとで私が送るから、少しゆっくりできるからね」

「あ、ありがとうございます。えと…あのノーヴェさんは?」

「ノーヴェ? ああ、先に学院に行ったわよ…珍しいなく寝坊なノーヴェが朝早くに家をでるなんてね…」

「そうですか…」

もう先にいったんだ…壊した天の修理がドコまで進んでるのか聞きたかった。天ミナを作ったギンガさんに持ち帰って修理してからお返ししますと聞いたら、「ありがとうございますね〜タカヤ君。じゃあ直つたらノーヴェに渡してくれる? あ、連絡先知らなかったんだね。はい、コレがノーヴェのメルアドとTELね」って教えてくれた

なんか用意がいいな…でもせっかくだし登録しとこう。学生手帳にメモし終え、みんなでいただきます言ってから箸をとり食べ始めた…でも皆が僕をジツと見てる。何か粗相したかな?

(タ、タカヤん。すごく食べるんツスね…スバルとノーヴェ、ギンガ姉とタメ張れるツスよ!)

(でもさすが男の子ね〜将来、ウチを継いでくれるとうれしいわね〜)  
(……将来の義弟くんか…ノーヴェも気になってるみたいだし、よし

！お姉さんが妹の為に協力しなきゃね！)

(だがノーヴェは素直になれないからな…今朝早くでたのもあんな事があって顔を会わせつらかったからだろう…：ならば！姉が全面的に恋のバックアップをしてやろう！)

という思惑に気づかずタカヤがモクモクと三杯目のご飯お変わりを言った頃、ノーヴェはと言うと

「…：見られた…あたしのお気に入りを…：」

サマーセーターに紺のスカート、ぴっちり両脚を黒のオーバーニーに包み歩く制服姿の少女。ナカジマホビーの美人姉妹の末妹《中島ノーヴェ》…：しかし様子がおかしい。昨日のナカジマホビー工作室血塗れ事件が原因だった

(うう…あんな姿見られたし、あたしのあ、あ、ア、アソコに顔を…：だ、ダメだ、顔を会わせらんないだろ！…ううか、近いうちにあたしとガンプラバトルやりに学院か家に来るだろうし…：ああくどうしたらいいんだよ！ああ、わかんねえ…：でも会えなくなるのイヤだし…：…：はあああああ)

昨夜の事を思い出し、頬を赤く染め悩むノーヴェの心のため息は誰にも届かない…：ただ本人の知らない所で母クイントと姉達のくっつけちゃおう作戦が始まった事にまだ気づかなかった

### 第三話 星光と雷刃(前編)

「アレ？今日は開いてるんだ」

ギンガさんに学院に送って貰って、授業を終え寄り道をして帰る途中、サエグサ模型店の前を通った僕の目に《OPEN》と言う文字が目に入った。迷わず店内に入るとカウンターへと歩いてく。パソコンの前で納品チェックをしてる、僕に気づいたのか手を止め顔を上げ

た

「あ、タカヤ君。ひさしぶりね」

「お久しぶりです………つて二、三日前に会ったばかりじゃないですかミツキさん」

「あら、そうだったかしらん♪今日はどうしたの、ツバキとツバサなら、ユウとお買い物に行ってるわよ?」

「そうなんですか…あ、コレを二人に」

「あら、コレって《エンジェルハイロウ》の限定スイーツ《天使の輪》じゃない。よく手には入ったわね」

「え、まあ…店長さんと少し知り合いなんで…あ、バトルルームって今開いてますか?」

「もちろん開いてるわよ…もしかして完成したのかしら?」

「はい、アストレイ・ブレイドの現時点での完成形…アストレイ・ブレイド《盾無》装備です」

専用ケースから真紅のカラーに染められたアストレイブレイド《盾無》を置くとミツキさんが目を輝かせ隅から隅まで見て、ゆっくりと椅子に腰掛けた

「関節の強化に、スミ入れと塗装もしっかりしてるわね。それに肩に付いてるコレは《—————》でしょ?」

な、何で気づいたの? 僕の反応をまるで楽しんでるように笑いながら、エンジェルハイロウのスイーツの箱を手にも奥へ向かうミツキさん。とにかく、バトルルームにいこうと歩き出し、入り口に入ろうとしたときだった

「ちよつと待ったあ!」

声が響きわたった。振り返ると水色のパーカーにハーフパンツ、帽

子を深々と被った同い年ぐらいの男の子

？が割り込んできた

「え、な、なに？」

「…キミ、ファイターだよな？ならスツゴく強くて速くてカッコいい  
スーパーファイターのボクとガン普拉バトルで勝負だ!!」

「は、はい？」

ビシツと指を指しながら自信満々に僕に勝負を申し込んできた男  
の子の言葉が店内に響いた

★★★★★★

「ああ〜暇だな…いきなり部活は休みになるし、折角、オレのアルビ  
オンガンダムのデビュー戦できると思ったのにな〜」

「そうだね…あのトオルくん。今度でいいんだけど、わたしのガン  
普拉みてくれるかな？」

「ヴィヴィオのガン普拉できたのか？ベースは何にしたんだ？」

「それは秘密だよ〜トオルくんのガン普拉とバトルするまでね♪」

「あ、ずるいぞ、それ」

学院からの帰り道を歩きながら聞いたんだけど悪戯っぽく笑いなが  
ら返すヴィヴィオ。小等部からのつき合いだけど、こういう顔すつ  
時は必ずスゴいのをやるからな…ま、その時までの楽しみにしとくか  
な。しばらくして、従姉妹が遊びに来るから迎えにいくって言うのと、  
そのまま別れた…今日は暇だし久し振りにゲーセンに向かう

目的はもちろん、ゲーセン内にあるガン普拉バトルルーム…オレが  
住む街にはかなりのファイターがゴロゴロいる。模型店とかが近く



に無いと必ずココヘガンブラバトルに興じる奴らがいる

ファイターとしての技術と経験を積むなら、こういう野試合形式がちょうどいいしな…それに、この街に世界ランカー、イタリア代表リカルド・フェリーニが現れたって噂がある。もしかしたら戦えるかもしれない、そう思うとワクワクしながらバトルルームが置かれているエリアで信じられないモノをみた

「オ、オイ、コレで十人目だぞ？」

「あ、あんなファイターがこの街に居たのかよ」

ざわざわと声上がる。湧き上がる声や視線に気にもとめず全身を黒く染め上げ、赤いラインが入ったガンダムX？が後継機であるガンダムDX、エアマスター、レオパルドを正確無比なサテライトキャノンで釣瓶落としのように撃ち抜いていく光景…やがてバトル終了をつげる音声が響く…コンソールにいるファイターをみて驚いた。真っ黒なワンピースに黒のチョーカー、栗色の髪を肩あたりで揃え、やや冷めた瞳で撃破したガンブラを見下ろすの女の子はオレと同年代、少し上ぐらいだ

「…ココには強いファイターが集まると聞いたのですが、この程度のしかないんですね…期待はずれでした」

感情の籠もらない声と落胆した目に誰も声をあげようとしな。でも今の言葉だけは我慢できないな…人だかりをかき分け意気消沈し撃破されたガンブラを握るファイターに近づいた

「なあ、アンタ、オレと代わってくれ…」

「…あ、ああ」

顔を俯かせながら、うなずくとGPベースをはずし後ろへ下がったのを見て、鞆からオレのGPベース、そしてアルビオンガンダムをケースからとりだし突きつけるようにかざした

「……………今度はアナタがワタシの相手をしてくれるのですか？」

「ああ、最初にいつとくけどさ、オレはかなり強いからな」

「……………威勢だけはいいのですね……………その言葉をそのまま返させていただきます……………さあ、始めましょう」

「ガンプラバトルを……………」

声が重なると同時にプラフスキー粒子がバトルシステムに散布、フィールド形成がはじまる……………名前は知らないけどさ、さっきの言葉はかなり頭に来た。絶対にアンタを倒す！

《Beginning》Plavsky particle dis  
persal. Fird5, city》

荒廃した都市部が広がるのフィールドを前にしガンプラ《アルビオンガンダム》を取り出し、セット。発進

口内で瞳に光を灯し、前傾姿勢で構える

「トオル・フローリアン、アルビオンガンダム！」

★★★★★★

サエグサ模型店、バトルルーム

「ボクの準備はできたよ！君も早く用意するする！」

「う、うん……………じ、じゃあ……………アストレイ・ブレイド《盾無》！秋月タカヤ。いぎ、尋常に……………」

……………結局、半ば強引にガンプラバトルをする事になった。でも勝負を挑まれたら正々堂々と戦う事こそビルダー、ファイターの矜持と先生から教わった。ならば受けるしかない。GPベースをセットし終えた深々と帽子をかぶった男の子の催促する声を聞きながらセット、真紅の鎧武者と見間違える様な出で立ちのアストレイ・ブレイド《盾無》を置く。プラフスキー粒子の光が輝き、瞳に光が宿る。前屈みに

なりスラスターを展開し構えた

「それがキミのガンプラかくでもボクのガンプラ、《デスサイズ・ス  
ラッシュ》はもつと強いんだからね♪じゃあいくよ!…デスサイズ・  
スラッシュ……………」

★★★★★

《BATTLE START》

「ゴオツ!／参る!」

：同じ時、サエグサ模型店、ゲーセンで新たな世代、ニュージエネ  
レーションズの戦いの火蓋が切って落とされた。

第三話 星光と雷刃（前編）  
了

後編へ続く!

### 第三話 星光と雷刃（後編）

「はああ〜」

学院からの帰り道、あたしは大きいため息をつく理由は昨年の世界大会イタリア代表リカルド・フェリーニとガン普拉バトルした後に起きたアレだ

落ちそうになったのをかばって、下敷きになったタカヤの顔が、あたしの……ああ！思い出すなあたし！！今日はそのせいで、授業中はチンク姉に「集中しろ」って何度も言われ、気晴らしにガン普拉バトルしようとしたらOガンダム・Bをウチに忘れてて、代わりのガン普拉でやろうとしたら粒子タンクが切れてたり……結局、今日の部活は休みにしてしまった。ガン普拉部部长なのに何やってんだろ

んで、帰り道でサエグサ模型店のミツキ店長の弟ユウと二人の子供とぼったり出くわしてなし崩し的に一緒に帰る途中、かわした会話の中でもタカヤの名前が出てくるし……それに胸が熱くなるっていうか動悸が激しくなる。とりあえず夕飯まで寝るかと考えて家のドアに手をかけた

「やあ、ノーヴェ」

「ミ、ミカヤ？今日はどうしたんだよ？家に何か用か？」

黒く長い絹のような髪を腰あたりまで伸ばし、黒地に白の刺繍が目立つ和を取り入れた《蘊奥館学院》制服に身を包んだ、あたしの親友にしてガン普拉バトルのライバル天瞳ミカヤが立っていた

「世界大会予選までにわたしのガン普拉を仕上げようと思ってナカジマボビーにきたんだ……どうしたんだい？顔色が優れないようだが？」  
「な、何でもない！……っていうかミカヤの家隣街じゃ……確かサエグサ模型店あるだろ？」

「……今日も閉まっていたんだ。アソコにはマスラオ、スサノオ、フラグ、サキガケが取り揃えてあるからね……ん？少し失礼」

スマホを手に取り会話するミカヤ……昔は機械音痴（ガン普拉バト

ル以外を除いて)だったのにすごく手慣れた。聞いた話だと一年前に同じ学院に通う中等部の男子学生に教えてもらったらしい。しかもソイツが弟子を取らないことで有名ビルダーの愛弟子らしく。最近自分のチームに引き入れようとしているが毎回断られてるって聞いた

蘊奥館学院、年下の男子学生、有名ビルダーの弟子：まさかタカヤの事じゃないよな？

「本当かい？ありがとう……：……ノーヴェ、今日は少し時間はあるかい？」

「あ、ああ、てかどうかしたのか？」

「サエグサ模型店が開いてるそうだ。しかも今ガンプラバトルが行われている。相手はチーム紫天の一人《雷刃のレヴィ》、そして私のチームに入れようとしている少年だ……：……こうしてはいられない。急ぐ！ノーヴェ！」

「ち、ちよ。待てミカヤ！いきなり走り出すなったら

？あたしは行くって言ってないから!？」

「チーム紫天、いずれぶつかると相手だ。偵察もかねていくよ」

「待って？？ああもう？？わかったから引つ張るな!！」

「ふふふ、偵察も出来て、少年の実力を間近で観れるとは……：……まさしく運命だ。必ずわたしのチームに入れてみせる、今日の乙女座は最高の運勢だ!!」

某ハム大尉みたいな勢いであたしを掴み走り出したミカヤ：頼むからハム大尉のマネはやめろつたら！みんなみてるから！

### 第三話 星光と雷刃（後編）

同時刻、サエグサ模型店。同バトルルーム

「うわっ！」

「へえ〜ボクの攻撃をかわすなんてスゴいなあ〜でも次は当てるよ!!」

天真爛漫な笑顔を向けながら巨大なビームシザーズで切りかかる水色に塗装されたガンダムデスサイズ。いやデスサイズ・スラッシュの攻撃をかわしていく。でも凄く速いから防戦一方になりながら、アスカロンで切り防ぎながら動きを読む

(凄く速いし、それに重い……でも!)

「うわっ!」

「動きがワンパターンで読みやすい!!」

右のアスカロンで受け、左で切り払う。体勢が崩れ胴体ながら空気になるのを見逃さず、踏み込みと同時にアスカロンの刃で大きく胴を風払うように斬る。でも後ろへ軽く下がりがかわされた

「あ、あぶなかつたなあ……じゃあボクも本気出すよ!!」

「え?」

黒く巨大な翼……四基のアクティブクロークを広げ飛翔、同時に大型のビームシザーズを片手で回した、いやカシャカシャと変形すると巨大な長身なキャノンへ変わると周囲の光、いやプラフスキー粒子が収束していつている?まさか!!

「いくよ!スプライトオオ・バスタアアアア!!」

砲口に光が迸り、凄まじいまでの破壊力を秘めた青白いビーム。アストレイ・ブレイド/盾無が飲み込まれた……

★★★★★

「それがアナタのガンプラですか?」

「ああ、オレのガンプラ《ランスロットガンダム》だ。お前のは?」

「…………ガンダムX・ズイーガ…………さあ、はじめましょう…………ガンプラバトルを」

それだけいうとスラスト全開で飛翔するを追いながら、ヴァリスを構えながらで狙いを定め牽制を含め三発撃つ、それをまるで蝶のように交わす姿に驚きながら、アイツの機体を観察する

みた感じ、両腕、両腰、両脹ら脛に追加装甲兼リフレクター強化版をつけたカスタムメイドのガンプラ。素体の方は色を変えたただけで武器は変わってはいないな

サテライトキャノン撃つには距離が必要だ、さっきの対戦相手は中距離からのサテライトキャノンで撃破されていた。つてことは接近戦が得意じゃないって事だ

「…………はああー!」

廃ビルの壁面を蹴りプラズマジェット全開でジグザグに移動、ガンダムX・ズイーガの前へ躍り出たオレはメーザーバイヴレーションソードで切りかかる…赤く輝く刃が吸い込まれるように機体を切り裂いたかに見えた

「…………甘いです」

小さく声が聞こえ、メーザーバイヴレーションソードが握られた腕が何かに阻まれたように動きが止まる。ウインドウには新たな敵機を示してる。よく見ると腕に黒い兔に似た何かガギリギリと抱きついている

「な、なんだコレ!おい、ルール違反だろうが!!」

「ルール違反ではありません。私のガンダムX・ズイーガの使い魔です…」

「使い魔?まさかビット兵器?でもこんなに小さく作り込んだMA擬きをどこに隠してたんだ?」

「いきなさいハーゼ・アイン!」

「うわっ！」

兎？の目が光つたと同時にバーニアが光ると離れていく、いや向き直ると口？から光、ビームが放たれとつきに左腕を前に出しブレイズルミナスを展開し防いだ

「…防ぎましたか…でもアナタは私には勝てません」

「なに！どういう意味だ!!」

「…アイン、ツヴァイ、アングリフ・モード」

さっきの兎型MAアイン？が狙いを定めるようにオレの機体の周りを旋回するのを警戒しながらアイツをみた時だ。ガンダムX・ズイーガの両腕の追加装甲が無い…センサーが新たな機影を警告してくる

「うわっ！」

小型の黒い兎MAが連携を取りながらビームを撃つ、とつきにかわそうとするけど、避けきれない。ブレイズルミナスで防ぐと同時にヴアリスを構え背部からハドロンブラスターを展開し接続、狙いを定め一気に引き金を絞る

「…アイン、ツヴァイ、ドライ…：パンツアー・ラオケン！」

今度は左腰アーマーが分離し、三機のビットMAがサークル状に広がる。ハドロン砲を受け止めた、いやよく見ると触れている部分に膜状の光が吸収してる？…な、何なんだあのビットMAは？

「…集えアイン、ツヴァイ、ドライ…：なんで防がれたか気になるみたいですね。ワタシの使い魔…《ハーゼ・フェミリエール》は牽制および、プラフスキー粒子ビームを吸収。そしてこんな事もできます」

「うわっ！」

静かに語りながら、三機のビットMAが旋回、飛翔しすり抜け様に両腕、両腰のスラッシュハーケンを展開したビームブレイドで切り裂いた



(なんで、こっちの武装配置を知っているんだ!?)

考える暇も与えないと言わせないとばかりに、展開したサテライト  
キャノンの砲口正面に三機円陣をくむように展開、薄い膜が広がると  
同時にリフレクターが開き赤みを帯び輝く姿、まるで悪魔みたいだ

「……あなたと似たような武器を使うガンプラとは何度も戦いました  
…能力に頼るだけ、しかも《他人に作ってもらったガンプラ》で特性  
を完全に把握しないで挑んでくるファイター、ビルダーの風上にも置  
けない相手と………終わりにします。受けなさい、破壊の閃光《ルシ  
フェリオン・バスター》!!」

砲口から凄まじいまでの光があふれ、正面に展開したフィールドを  
抜けた瞬間、極太の赤黒い奔流が俺を飲み込んだ

—————

「えっへんー! やっぱりボクって強くて速くてカッコイイ最強ファイ  
ターだね♪」

アクティブクロークを閉じながらバルフィニカスをサイズモード  
に戻しながらガッツポーズをとる、でも思わずボクのたくさんある必  
殺技の一つ《スプライト・バスター》を使っちゃった

ボクの動きについてこれるガンプラ、それを駆るファイターの子  
……あの時の踏み込みの速さはシユテルンや王さまと同じぐらい速  
いし……もう少しバトルしたかったなあ

「……あれ? まだ終了しな……」

そう思った時、強力なエネルギー反応にアラートがなる。ボクが目  
にプラススキー粒子の嵐が渦巻いてる中から白金色の粒子を纏いな  
がら歩いてくるガンプラ……よく見るとさつき倒したハズのアストレ  
イ。必殺技を受けたのに何で!?

「……《盾無》稼働確認……ぶっつけ本番でうまくいったよ……」

肩にあるサムライの鎧：盾みたいなのから粒子が渦を巻いてスリットが光っている、それに関節からも粒子があふれてる……スフィアを握るボクの手汗がにじんでくるのを感じながら構えた時、風が吹いた

「エ？」

白金の粒子、ううんアストレイがボクのデスサイズ・スラッシュの左腕をシザーズとまとめて切り払う……宙を舞いながら落ちた腕を見た瞬間、アストレイの大きな刃が逆袈裟に振るわれとつさに後ろへ飛んだ。それなのにあつという間に間合いをつめて切りつけてきた「少し速くなったぐらいでボクにおいつけるもんか！」

さつきまでとは全然違う。ううん、もしかしたらあの盾に秘密があると考えシールドクローで切りかかる。でも見えない光に阻まれちゃった……コレってまさかプラススキー粒子を盾表面に！シユテルンと同じだ!!

「……………これで決めます！……………必殺！疾風怒涛の刃!!」

「う、うわああああ！」

深く腰を沈めたアストレイの双眸が光った瞬間、無数の光がボクのデスサイズスラッシュをすり抜けた……でも機体が動かない……ピシツと音が鳴ったのを皮きりにデスサイズスラッシュがバラバラに斬られ落ちていった

《BATTLE END》

「うそ……負けちゃった……最強ファイターの………ボクが」

—————  
—————

数分前

「今日も通常営業くお客さんは誰も……………」

「ミツキ店長！バトルルームの二人の試合はまだ終わっていないな！？」

「わっ！…………ってミカヤちゃん？それに中島さんちのツンデレちゃん？」

「だ、誰がツンデレだ！つたく、んな事よりバトルルーム観戦させてもらうか……………ってタカヤ!？」

「ノーヴェ？彼を知っているのかい……」

「ああ、最近アタシんとこのチームと試合したんだ…ミカヤこそタカヤをなんで知って……………」

「ノーヴェ、今は二人の試合をみよう……」

ミカヤちゃんの言葉に頷いたツンデレちゃんはタカヤくん、あの子（…確かチーム紫天のレヴィちゃんかしら？）の試合を見てるんだけどいきなりの様変わりに驚いてるみたい

タカヤくんのアストレイブレイドに追加された肩当て…あれはプラフスキー粒子を吸収、さらには全身に循環させて機体性能と防御、攻撃を飛躍的に上げる粒子吸収循環ユニット《盾無》。見た感じ未完成みただけど明らかにレヴィちゃんのデスサイズスラッシュをも上回ってる

あ、勝負がそろそろつくみたいだけど。それよりミカヤちゃんとツンデレちゃんってまさかタカヤくん…フフフ、おもしろくなってきたわねく

『コレで決めます！……………必殺！疾風怒涛の刃!!』

腰を低く沈めたアストレイブレイドが高速回転、まるで竜巻みたいにデスサイズスラッシュを切り捨て立つとバラバラに地面へと落ち

たと同時に試合終了と同時にタカヤクんの勝利が決まった

アストレイブレイド：まだまだ改良の余地はあるけども完成度が高いわね〜それより：

「あ、アタシと戦った時よりも強くなってやがる（あの盾に秘密があるみたいだな。アスカロンを前よりも使いこなしてる：ウチのチームに）……………」

「まだまだ荒削りだが、ダイヤの原石だ……………（ますます欲しくなったよ…秋月タカヤくん、君のすべてを私色に染め上げたいな）」

（二人ともファイターとしてではなく、女の子の顔になっていることに気づいてないわね〜さてアレをそろそろ始めるかしら）

デスクの引き出しに仕舞われていた箱に目を向ける、ラル大尉から受け取った《幻》とまでいわれ現存する数は片手で数えるほどしかないレアアイテム。今回のイベントの優勝景品：

その名は……………

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………塵芥になりましたか……………」

ハーゼ達を戻しながら先ほど戦っていた彼がいた場所

に目を向けます。今まで戦ってきたファイターより持ちこたえ、私に奥の手を使わせた事は評価に値します

が……………

ワタシに一矢報いる事が出来るファイターはいないので：

「ウオオオオ！」

突然ワタシの耳に声が届く。爆発の煙を抜ける白い影…彼のガン

プラ《ランスロットガンダム》がボロボロの状態で切りかかってきた  
：ハーゼを腕に装備しズイーガザンバーで鏝迫り合います。でもル  
シフェリオンの直撃を受けたはずなのになぜ…

「なぜ、こうも動けるのって考えてるだろ？」

「!?」

「…簡単な事だ。クロスボーンガンダムがF91のヴェスバーを防い  
だ方法を使っただよ」

機動戦士クロスボーンガンダム原作第四巻でハリソン大尉が駆る  
F91のヴェスバーを射線上にビームシールドを二枚で威力を削り、  
さらにビームザンバーで切り裂き防いだのと同じ手を使ったのです  
か!?

(でも無傷とはいえないからな…MVSはあと数回しか持たない。ル  
ミナスシールドも防ぐのに全部使ってしまった…：…考えろ、コイツ  
はオレよりも強い。でも勝つ方法はあるはず…：…さて、さつきからコイ  
ツ使い魔を使っけてないな)

(…まさか本当にそれを実践して防ぐなんて…：…あまり長引かせるわ  
けにはいきません…)

自然と笑みを浮かべる少女、息をもつかせぬ斬り合い光を散らせる  
二人の戦いは苛烈さを増していく、その光景に周りのギャラリーも手  
に汗を握り見守る

「そこですー!」

MVSが耐えきれず折れ、辺りに破片が舞う中、ズイーガザンバー  
が胴体へ深々と突き刺さる。がランスロットガンダムの双眸が輝い  
た

「まだまだだあー!」

中から折れたMVSをズイーガへと突き刺す…やがて二体の瞳か

ら光が消えた

《BATTLE END》

アナウンスが響くと同時に周りのギャラリーから健闘ぶりに対して拍手が湧き上がった…そんな中、トオルは対戦相手の少女と向き合い自身のガンプラを手にとった

「あんた強いな…」

「アナタも…あの、さっきの言葉を訂正させてください…アナタは真正銘ファイターだと」

「いや、まだまだだ。まずはあんたに勝たないとファイターなんて名乗れないしな…それにボロボロだしさ」

「…そうですね…でもアナタのがひどいの…」

「トオルだ」

「え？」

「トオル・フロリアン、それがオレの名前だ」

「では私も…シユテル・T・グランツです…トオル、またワタシとバトルしてくれますか？」

「ああ、いつでも受けてやるぜシユテル…でもその前に…ガンプラ直さないか？」

「フフ、そうですね」

互いのガンプラを見やり、クスリと笑いながら二人はバトルルームに設置された工作室に向かう。もちろん直しながらガンダム談義に花を咲かせながら

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……エバーグリーン1. 2と、ABS版で補強して…」

「うわあ〜タカタカかって直すの早いなあ〜」

「そうかな？でも君のデスサイズスラッシュはすごく作り込んであるね（関節強度、負担がかかる部分にはラバーやビス止めで補強してあるし……先生のゴッドガンダム極とにってるかな）……」

「そうでしょ、そうでしょ〜現代改修と関節強度をあげるの苦労したんだ〜でもタカタカのブレイドも作り込んであるじゃない？」

「あ、やっぱりわかる？ここは硬度と軟度が違うプラ板を張り合わせて剛性を出してみたんだ」

「うんうん……なるほど」

あのバトルが終わった直後に泣き出してしまったファイター…慌てふためきながら必死になだめ、一緒にガンプラを修理しないかといったら帽子を深く被りながら頷いてくれた。修理しながら話しているわかったのは今までチーム内でしかバトルしたことがなくて、強いファイターがサエグサ模型店に現れたと聞いて一人で乗り込んできた所で、バトルルームに居る僕を《強いファイター》本人と勘違いして勝負を申し込んだみたいだ

なんか少し前までの僕とにているなと考えながら、この子のガンプラを手にとり分解すると細かな改造に驚く……《ボクは、ガンプラが大好き♪》だって声が聞こえる気がしてきた

「これでよし、あとは塗装するだけだ…」

「あ、塗装はボクの家でやるからいいよ。それに王様から《どこで油を売っておる！》ってメールが着てたから…でも、直すの手伝ってくれ

てありがとね。お礼がしたいけど」

「お礼なんて別にいいから、それより早く帰らないと怒られるんじゃない?」

「うん…あ、タカタカ。髪にプラ板がついてるよ、ボクが取るから少し頭をさげて」

手ではらおうとしたけど、まだ落ちてないといわれ頭を下げた  
「ん…少し顔を上げて見て」

その言葉に頷きながら顔を上げた時、唇に暖かな感覚…目の前にはあの子の顔。キスしてるって気づくと、ゆっくりと離れ慌ただしくデスサイズスラッシュをケースに入れ店の外へ駆け出していく

「またね!タカタカ!!」

その言葉を残して、あつという間に姿が消えたのを呆然と見ながら唇にそつと触れた

…キス…ていうか男の子?にキス!?僕、男の子にキスされちゃった!?僕の初めてが男の子と!?

☆☆☆☆☆☆☆☆

「あら大胆ねえ…最近の女の子って結構積極的ね」

どうしたの二人とも?怖い顔しちゃって(笑)」

「……………な、なんでもない(…………キスしやがった…なんだかムカついてきた…なんでムカついてんだあたしは!?べ、別に気にしてなんかいないしー)」

「ああ、ミツキ店長…すまないが私たちはコレで失礼するよ(私色に染めようとした少年を……………やってくれたな、チーム紫天……………だが譲る気はない!!)」



……闘志というより、先を越されたという想いが炎となり燃えるノーヴェエ、ミカヤの姿を見てサエグサ模型店店长《ミツキ・サエグサ》はこっさりとある告知をホームページにアップした

某月某日、サエグサ模型店にて第一回ガン普拉バトル大会を開催します!!

参加資格は各模型店、小中高等学校に所属するチームから男女ペア（ココ重要ー）を代表として選出する事（なお違う学校および模型店所属チームでも可能）

大会中の使用ガンプラ交換は一度のみ認められます

そして、戦いを勝ち抜き優勝したペアには、今や幻とまで言われ現存するのは僅かといわれるガン普拉強化武装《カレトヴルツフ》を呈します!

☆☆☆☆☆☆

「ん〜ひさしぶりの日本だ〜漬け物の香りがするってホントなんだな  
…」

大きく背伸びしながらつぶやく少年。やがてゲートを出ると真っ先に取り出したのは年季の入ったサンハイザー。コレは彼が師と仰ぐ人物から餞別にもらったもの。くるくる指で回し頭へ被った

「よし、気合い入ったぜ! さつてと。まずは《G研》に顔みせにいくか」  
気合いを入れ歩き出した少年: 彼の名は《シロウ・神崎》。名人カワグチと同世代であり第一次ガンプラブームの立役者《京田四郎》いや《プラモ狂四郎》の弟子にして2代目を受け継いだ少年の帰郷は果たしてなにをもたらすのか

第三話 星光と雷刃（後編）  
了

## 第四話 看病（前編）

（な、なぜこんな状況に!?!）

今僕の前には三つのレンゲ：左は澄み渡った上澄みをたたえた粥、真ん中は血よりも赤い粥……右は形容しがたい粥？しかもパチパチ雷？が見えるし!?!

「私の味……いや君の口にあうといいのだが、冷めないうちに召し上げれ」

「風邪を引いたときは、コレを食べれば一発で吹き飛ばからさ」

「それよりボクの作った特製《プラズマお粥》を食べてみて！」

ずいずいっと口元にミカヤさん、ノーヴェさん、レヴィのレンゲ三つが迫ってくる……本当に何でこんなことになったの!?!

### 第四話 看病

#### 《二日前》

「……コンパウンドはコレぐらいかな……」

コンパウンドパウダーで黒くグロス仕上げのパーツを磨き終え光にかざす。傷もなく斑もないことにホッとしながら机におかれたアストレイ・ゴールドフレーム天ミナのマガノイクタチを取り付けかんせつきょうどを確認する……この天ミナはノーヴェさんのお姉さん《ギンガ》さんのガンプラ。この前のフェリーニさんとのバトルで壊してしまったガンプラを持ち帰り修理していた、でも凄く作り込んであるし関節の可動範囲は半端なく広い

塗装もレシピを聞いてだけど調色が難しかったけどコレなら大丈夫かな……綿を敷き詰めた箱に天ミナを入れ閉じ、もう一つの箱を手に取り出したのは僕のガンプラ《アストレイブレイド》：肩の追加装甲兼粒子蓄積システムは問題なく動いた。でもまだ改良が必要と感じ分解していたら頭にある光景がよぎった

ー少し頭を下げてー

唇同士の柔らかい感覚に甘い匂い……真っ赤な瞳……はっ！イヤイ

ヤイヤ？な、なにかんがえてるの僕は!?!男の子にキスされてドキドキしてるなんて可笑しすぎる！

「マスタージャパン先生！こういう時どうしたらいいんですか!!」

頭を抱えて机に突っ伏した…でも答えてくれない…マスタージャパン先生は今は清炎学園にいらんだけど静岡とここじゃ距離が、それに電話にもでないし

「ああうう〜男の子とキス、男の子とキス…忘れろんだ僕！そう、男の子とキスなんかしてない、キスなんかしてない、キスなんかしてない」

言い聞かせるように僕はアストレイブレイドの改造を始めた。時計を見ると一時前、明日は学院が歩けどコレだけは仕上げなきゃ…雑念を振り払うようにデザインナイフをプラ板に走らせ切り出していきようやく目処がついた時は二時過ぎ、身体がブルツと震える。春と言ってもまだ冷え込む

「シャワー浴びて寝よ…たしか明日土曜日だったけ、残りは帰ってからしよ…とにかく早く寝よ」

軽くあくびをしながら、バスルームに入りシャワーを浴び身体を洗ってあがったけど髪を拭くのも面倒だったからそのままベッドに倒れ込むといつの間にか眠ってしまった

☆☆☆☆☆☆

「喝！流派ア！東方不敗は王者の風よ！全身！系列！天破狂乱!!」

「…東方は赤く萌えている…ん、朝」

アラームが鳴る音で目をあけ起きマスタージャパン先生から貰った目覚まし《風雲再起》を止めた。でも身体が重い、それに喉も痛い

し熱っぽい：体温計を手に取り熱をはかってみた。38.6度……  
まずい風邪を退いちやつたみたいだ。時間をみると8時18分を  
回ってる。慌て学院主任の先生に病欠しますって連絡し横になった。  
しばらくしてインターフォンが鳴る。ふらふらしながら玄関まで歩  
く

ドゥーエさんかな：と考えた。でも何時もならお昼に来て掃除や  
洗濯など家事一切やってくれるから違う。とにかくロツクをあけた  
：でも、そこにはドゥーエさんはいない。帽子を深々と被った僕と同  
じぐらいの年の男の子：数日前に僕にキスをした子が立ってて、僕を  
ぽかんと見ていたけど、徐々に笑顔に変わった

「え？タカタカだよね？やっぱりそうだくあの時のガンプラバトル以  
来だね♪」

「キ、キミ、何で僕の家にな？」

「なんでって…このマンションにお母さんと引っ越してきから、ご近  
所付き合いの引っ越しそうめんを渡してたんだくあ、ボクとお母さん  
の家は隣だから、お隣さんだね」

「い、いや引っ越しそうめん…ってそうめんじゃなく蕎麦だから…あ  
れ？」

「え？タカタカどうしたの？タカタカ!?どうしたの？ねえタカタカ  
!？」

突然、目の前が真っ暗になって、ぐらってした、フニヨンと柔らか  
い何かを感じながら意識がなくなった

同時刻、Stヒルデ学院。同中等部

「い、ことわるー！」

『お願いノーヴェ。私の代わりにハウスマイドのお仕事を頼みたいの

よ。今日だけでいいから。ね?』

「だ、第一、アタシんとこの学院はバイトは禁止なのは知ってるだろ!?!」

『おくね〜が〜い〜従姉妹なんだから…今日の行く予定だった出向先はお得意様なのよ…もちろんタダなんて言わないわよ』

午前中で学院が終わってガンプラ部の備品を買いに行こうとしたとき、あたしのスマホにかかってきた電話。相手はあたしの従姉妹で日独クオーターのドウエ・スカリエツティ…一応近くに住んでんだけど従姉妹姉妹が苦手で、とくに妖しげな発明ばかりするおじさんは大の苦手だ

つと話が脱線したけど、ドウエはあたしより年上で大学生なんだ。バイトしている派遣メイド《グラナダ》で何時も最前になっている家に急な出向が入りいけなくなり、その家とは専属契約しているから、むげには出来ないからって、あたしに泣きついてきた

『ノーヴェ、あなたがガンプラバトルやっているのは知ってるわよ。パーツ代や塗料代って結構掛かるわよね…一月のお小遣いじゃ足りないでしょ?』

「そ、それは…」

『お店の商品に手を出すわけにはいかないわよね? ゲンヤおじさん泣くわよ〜娘がグレたって』

「あう…」

『…今日一日、私の代わりに働いてくれたら臨時収入が入るバイト…コレならゲンヤおじさんに迷惑をかけないし、お小遣いもゲット出来る。悪い条件じゃないのよ?』

「ああ〜もう！わかった、わかったから……バイトやってやんよ……」

『ありがと〜これで一安心だわ〜。あ、仕事用で使う服はクイント叔母さんに預けてあるから、あと一つだけ言っておくわね…誠心誠意、お世話してあげなさい。あなたより少し年下の子だから』

「ちよつと〜ああ〜切りやがって……はあ仕方ないなあ…お小遣いもゲットできつし、まあいいか」

通話を切り、あたしは家へと近くに泊めてた愛車ジェット（マウンテンバイク）に乗ってペダルをこぎ走り出した……

☆☆☆☆☆☆☆☆

「今日も不定期営業〜お客さん少ないけど、頑張つて力まず営業します〜サエグサ模型店♪」

「やあミツキ店長……ツバキとツバサはいないみたいだね」

「あら、ミカヤちゃん。今日はどうしたの？」

「真・武者頑駄無と摩亜屈あるかな？たまにはガンダムも作りたくなつてね…ん？コレは」

あのバトル以降、なかなか足を向けられなかったサエグサ模型店に寄り道した…目的はもちろんガンプラ。地区予選に向けて作り上げたガンプラも仕上がりが気分転換にガンプラを買おうとしたわたしの目にうつったのは模型店で行われるガンプラ大会開催告知。参加資格は男女ペアのみ、しかも小学生から高校生まで可能……そして景品を見て驚いてしまった

「ミ、ミツキ店長？こ、これは…伝説の」

「あら、気づいた？ある人経由で二振り手に入ったのよ。ガンブラ強化武装…その名もカレトヴルッフ!!」

まさか、あの幻のガンブラ強化武装カレトヴルッフを景品にするとは……これさえあれば、わたしのツクヨミ・斬をさらに強く出来る。

「ミカヤちゃんも参加してみる？」

「無論だ。カレトヴルッフ……ふふふ。予選前に慣らしも兼ねて参加させてもらうよ。ミツキ店長」

「でもく男女ペアじゃないと無理よ」

しまった。それを失念していた…それを察した店長が笑みを浮かべて一枚の紙にサラサラと書きしたため渡してきた。手にとり見るとマンシヨンの住所と部屋番号とオートロックナンバーが書かれていた

「こ、これは？」

「実はお得意さんにガンブラを届けて欲しいのよ。ホントはウチの店に取りに来る予定だったんだけど、熱を出しちゃって。ツバサもツバキもお友達のお家に遊びに行つて、私はお店番しないとイケないし。ね、お願い」

手を合わせて頼み込むミツキ店長…はあ、仕方ない。いつも無理を言つてマスラオ、スサノオを取り寄せて貰つてるし。わたしは了承することに決めその旨を告げるとガンブラの入った袋を手渡してきた。中身はアストレイ…まさかなと考えながら店をあとにした

「……………行ったわね。さてとお膳楯は終わり。ユウ、そっちはどう？」

『終わったけどよ、マジでやるのかよ？』

「だって面白いじゃない。タカヤくんが誰をペアに選ぶかね…フッフフ、大会が楽しみで仕方ないわあ」

『……………悪魔だな姉貴……………同情するぜタカヤ』

☆☆☆☆☆☆

『クイント叔母さん。ノーヴェは？』

「さつき向かったわよ。でもホント偶然ね。ドゥーエがタカヤくんのお家のハウスメイドだったなんて」

『こっちも驚いたわよ。でも、あのノーヴェがねえ……………従姉妹として応援してあげなきゃね（笑）』

「ゆくゆくはウチの模型店を継いで、早く孫の顔をみたいわねえ。ゆっくり外堀を埋めなきゃ」

『まずはゲンヤおじさんを説得しなきゃいけないわ』

「大丈夫。しっかり調き……………教えておくから……………フッフフ」

……………それぞれ別な場所で、二つの模型店で方や楽しむため、片や将来の婿を迎えるために企みがあったことを誰も知らない……………

☆☆☆☆☆☆

熱い…それに喉が乾く…水が欲しい。頭が痛い…口の中がカラッ



カラツに乾いてる…身体もなんか汗でいやな感じしかない…水が欲しい

「……タカ……タカタカ……水飲んで……ダメ、飲んで……れな……い……しかた……よね」

誰かの声が聞こえる…心配してるんだと感じた僕の口に何かに触れ少しぬるい液体が流れこんだ…水だと感じゆつくりと飲む…ほんのり甘い匂いがする。まだ飲み足りない、再び口にさっきの感覚と一緒に水？が流れてくる

……意識がはつきりとしてきた僕はゆつくりと目をあけた。目の前には人の顔、真つ赤な瞳に帽子を被った男の子…まさか、まさか…さっき飲んだ水は

「んっ……あ、起きたタカタカ？よかつたあくすごい熱出して倒れたから心配したんだよボク……うわっ!？」

唇に残った柔らかな感覚と湿り気……ま、またキスされたの…気が動転してガバツと上半身を起こした…でも運悪く近くにあった水たらいをひっかけてしまった。宙を舞う水を被ってしまい服がずぶ濡れになった彼がポタポタ水滴を落としながら呆けていた

「……わあくすぶぬれだよ」  
「ご、ごめん！は、速く着替えた方がいいから……バスルーム使っていないから」

慌てた僕は、ふらふらしながらバスルームに連れて行き着替えとタオルを手渡し何度も謝ったあと、ベッドに戻り横になった…また、またキスされた事を振り払おうと目を閉じた僕の耳にインターフォンが鳴る音が響いた

「な、何だろ…ドゥーエさんかな」

ふらふら立ち上がり、玄関に向かうとドアのロックを開こうとした時、声が聞こえた…それも一人じゃない、二人分の声。何か言い争い

してるような気がする……とにかく開けよう。ロックを解除し見えた光景に思わず息が止まった

「笑うなったら！アタシだってこんなフリフリしたの着たくなかったんだ!!」

「キミも乙女だったんだね。笑ってはいないさ……よく似合ってる……」

目の前には白のメイドキャップに黒のメイド服を着たノーヴェさんと、僕の二つ上の先輩でガンプラ部主将ミカヤさんが立ち軽い言い争いになってる。ロックが開いたことに気付いたのか二人が僕を見て驚いているけど、なんで僕の家にいるのさ？

「タ、タカヤ!?なんでこの家に!?(ドゥーエがハウスメイドで雇われていたのはタカヤのウチだったのか!?まさか、こうなること予想してたのか?つうか……チャンスかも)」

「……なるほど、ここが少年の家か……(今日のグラム占い。乙女座に好機到来とあったな。虎穴はいらずんば虎兇を得ず……フッフフ、まさしく運命だ。天が少年を手に入れろと言っているようだ)」

な、なんかわからないけど怖いよ……ふらふらしながら立ちながら寒気を感じた時だ、少し奥にある扉がバスルームが開いた。もう上がつたのかなと振り返った僕は再び固まった

「ふう〜さっぱりした。タカタカ、シャワー使わせて貰ってありがとうね〜」

腰まで伸びた水色の髪をタオルで拭きながらYシャツ姿の女の子が笑顔で歩いてきた……え?まって……彼は?まさか、女の子だったの!?

「タカヤ、その女は誰だ?……ま、まさか!」

「わたしも聞きたいな少年……嘘偽りなく答えてもらおうと助かるんだけどな」

振り返ると、何故か笑顔の二人。でも目に光がないし笑ってないよ……なんか凄く寒気がするし、なんかふらふらすると感じた時、目の前が真っ暗になったのを感じ床に倒れたと気付いた

「タカヤ、おいタカヤ！うわっ!?すごい熱だ……ミカヤ、タカヤをベッドに運ぶの手伝え!!」

「ああ、今はそれが第一優先だな……キミも手伝ってくれるかな」

「うん！じゃあ一緒に……」

そんな言葉を耳にしてぷっつりと意識を手放した

#### 第四話 看病（前編）

次回に続く

## 第四話 看病（後編）

「ふう、これでよし……」

「ああ、しっかし華奢に見えて結構重いんだな…で、なにやってんだミカヤ」

「何って決まってるじゃないか……こんなに汗だくになったら着替えさせないといけないじゃないか（コレが少年の裸……ハアハアハア……汗に濡れた肌、何ともいえない艶やかさ、まだ熟れぬ青い果実。ふふふ私が熟れさせてあげよう）」

頬を赤くしながら笑顔でタカヤのパジャマに手をかけてるミカヤ：なんか息荒いし興奮してるし目が爛々と輝いてる……そんな時、別な方から手が伸びてタカヤを引き寄せた

「ダメだよ、タカタカはボクが看病するんだ〜喉乾いてるみたいだから飲ませてあげなきゃ……ん、ん、ん」

「ち、ちよつと待ったあああ！」

「ん？んん〜??」

あたしとミカヤがワイシャツに水色の髪をポニーテールのコイツを止めた…何故ならタカヤにく、口移しで水を飲ませようとしたからだ

「ケホケホ!?な、なにをするのさ！タカタカに水を飲ませようとしただけなのに〜」

咳き込みながらぷうつと頬を膨らませて抗議してくるコイツの名前はレヴィ・テスタロッサ。この地区じゃ強豪の一つ《チーム紫天》の一人…この前タカヤと戦っていたレヴィが何でいんだよ？

しかもく、く、口移しで……まさか、この年でもうそんな関係なの

か!?

「いくら何でも口移しはやめるんだ。私だつて唇と唾液を味わいた  
…………いや接吻（キス）は同意のもとするべきだ…………」

「ええ〜やだ、やだ…家のお母さんが言つてたんだよ」

「いい、レヴィ、アリシア…病気で弱つて何も食べられなくなった  
男の子の看病をするときは、食べ物や水を口移しで飲ませてあげな  
さい。もちろん気になる男の子限定で」

「気になる…男の子?…………ボクわかんないよう」

「いるじゃない。この前レヴィを負かした男の子で、しかも一緒に  
ガンプ直してくれた…………最近、その子の話ばかりじゃないかしら  
?アリシアも聞いてるわね」

「うんうん、わたしもきいたよレヴィつてば、一言目にタカタカと  
会いたい、二言目にタカタカの連絡先聞いておけば良かったつてい  
つてたじゃん」

「…ア、アリシア!…………でもボクわかんないよう」

「ふふ、まだレヴィにはわからないかしら…………でも忘れたらダメよ  
…………アナタたちのお父さんもこうやつて捕まえたんだから」

#### 第四話 看病（後編）

「つて…………病気の男の子にはコレが一番なんだから…………つてどうし  
たの?」

（な、な、な、なんて事教えてんだ!既成事実寸前だろが!…………ヤバ  
すぎる、やばすぎるだろ!まけらんねえ…………）

(まさか伏兵が居るとは……だがまだ本丸にはおよんではない！  
これからが勝負だ！少年は必ず私の色に染めるのだからな……そし  
て)

……可愛らしく首を傾げるレヴィ。ミカヤ、ノーヴェエは危機感を  
ヒシヒシ感じながら、タカヤの看病を進めるべくキッチンという名の  
戦場へと動き出した。ただならない空気を感じたレヴィも一緒に

「……………んくおなか空いた……………なんかいい匂いする」

ふらふらしながら身体を起こした僕の鼻に出汁の匂いを感じる：  
鰹と鯖節、ネギ、卵、米の香りにたまらずお腹が鳴る

……そういや、今朝から何も食べてなかったけ……でも誰がキツチ  
ンに？そのとき扉が開いた。そこにはメイド服姿のノーヴェエさん、制  
服の上にエプロン姿のミカヤ先輩、ワイシャツにピンクのエプロン姿  
のあの子。手には土鍋がお盆に3つ並んでる

「目が覚めたのかタカヤ？」

「ちようど良い頃合いのようだったね」

「タカタカ、起き上がって大丈夫なの？」

「う、うん。あのソレは？」

「ああ？お粥に決まってるだろうが……風邪引いた時はコレが一番だ  
からさ」

「私の味……いや少年の口に合えば良いのだが……さあ、冷めないうち

に」

「ボクのお粥も凄いいんだよ。お母さん直伝《必殺・プラズマ粥》食べて、食べて♪」

同時に土鍋の蓋が開いてから、今に至るんだけど………バチバチバチって水色の雷が見えるお粥、ゴポゴポとマグマみたいに音がなる真つ赤なお粥、そして澄み切った白粥が掬われた3つのレンゲがずっと差し出された

僕は意を決してマグマみたいなお粥を食べた……し、舌が辛さを通り越して焼ける!?汗が止まらないし、芯がまだ残ってる

ーくらいな、リボルバースパイク!!ー

なぜかわからないけど、すごく身体に密着したスパッツみたいな破廉恥な服をきたノーヴェさんに蹴りを入れられた気がする

「あ、口にあわなかったか?」

気落ちしたノーヴェさんを見てなんとかこらえた……大丈夫。母さんの料理に比べたら平気だ……それにレンゲをもつ指には無数の絆創膏がいくつもある

「お、おいしかったです…」

「そ、そうか!もつと食べるか」

「むう〜次はボクのを食べて!」

「んむ!?!」

辛さで麻痺した僕の口に強引にレンゲが入った瞬間、電気が口いつ

ばいに流れ全身がしびれられる!?

ー届けボクの必殺技!雷刃封殺爆輪剣!!ー

なんかわからないけどビームザンバーをかまえたあの子が見えた気がしながら現実に戻ってこれた…

「ねえねえどうだったボクのお粥、すごくおいしくて栄養満点なんだよ。お母さんのに比べるとまだまだだけ」

「い、いや美味しかったから、色々痺れたけど…だから自信をもつて。えと……」

「レヴィ、レヴィ・テスタロツサだよ…もし病気になってもボクの家とお隣さんだからいつでもお見舞いにきてあげるからね」

笑顔の女の子《レヴィ》にドキッとしたら、ビキキ!なんか割れる音が響いた…音がした方には笑顔だけどハイライトが消えたノーヴェさん、ミカヤ先輩の姿

「へえ〜お隣さんか(ま、まじか!このバイト続けないと不味いな…)」

「少年、私のお粥も食べてくれないかな…はい、あ〜ん」

「え、でも「あ〜ん(怒)」は、はい…いただきます」

二、ニュータイプのプレッシャーをミカヤ先輩から感じながらレンゲのお粥を口に入れた…さっきの二人のとは違って出汁もお米も完全に調和してる、それどころか溶き卵の風味とあいまって《お店》に出しても充分な通じる味だ

ー君のすべてを私にさらけ出してもらおう。天月・霞ー



……何だろう全てがミカヤ先輩に何か斬られた感じがする……でも、あと一味がわからない……ずっと昔に食べた？ いや……でもどこで

「どうかな、私の味は少年の口にあつたかな？」

「は、はい。鰹、鯖節、トビウオ、羅臼昆布にお米は《ゆめぴりか》……よく場所がわかりましたね」

「！さすがだな少年。ひとくち食べただけでわかるとは……」

「い、いえ……でもあと一味がわかりません……ずっと昔に食べた気が……」

「そうか……でも喜んで貰えて嬉しいよ……うん、さあ早く治すために食べるんだ……」

少し、陰りのある笑みを浮かべるミカヤ先輩……何だろう？

「さて、ミカヤ。次はあたしのを食べて貰うんだ。交代しろよ」

「ことわる……少年は私のお粥を大層気に入ったようだ……」

「ずるいよミカヤン！ タカタカはボクのお粥を食べるの！ タカタカの独り占めは許さないよ!!」

ゴゴゴゴゴゴ！ なんか凄い音が3人から聞こえるし、背中になんか龍、雷神、不動明王が見える……ノーヴェエさんの髪……くせ毛がビキキとたつてて、ミカヤ先輩の髪はユラユラ揺れてる。この争いは多分僕が原因だ。ならばとるべき道は一つだ！

「え？」

「な？」

「うそ?」

僕は三人が作ったお粥が入った土鍋をとり、一気に飲み込んだ……レヴィさん、ミカヤ先輩、ノーヴェさんの順に飲むように食べていく……色んな味を感じながら完食した瞬間、目の前が真っ暗になった  
「少年／タカヤ／タカタカ」

三人の声を聞いたのを最後に意識が途切れた……父さん、母さん、僕はがんばったからね……

☆☆☆☆☆☆

「……まったく無茶しやがって……美味しくないなら言えよ……ったく」

「まあ、そういうのは少年の優しさだ（……昔と変わらないな……）……料理は愛情というからねノーヴェも少年を落とすなら精進することだ。せつかくのメイドなのだから」

「な、な、何いってんだミカヤ! あたしはタカヤのことなんか、なんか……」

「そうしりごみばかりしているとレヴィにとられるよ。（まあ私もあきらめた訳じゃないけどね）」

「うゝん、うゝん」

うんうん唸るタカヤを心配しながら猛禽を想わせる目でみてる……間違いないタカヤを狙ってる、でもあたしは負ける気はないし

「……あたしもだ……って言いたいけどさ、鈍いし……」

「なに、そこは少しずつ治していけばいいさ……さてと私はそろそろお暇させて貰うかな。時間も時間だしね」

時計をみると21時前、さすがに帰らないと不味いな。それから少ししてから三人で明日の朝粥の用意をしてからタカヤの家から出て、それぞれの家へと歩いていく

「ああ、そうなんだ。もしかしたらーになるかもしれないから。母上も父上を説得……」

ただミカヤはスマホでどこかに連絡していた見ただけと……まあ明日もタカヤの家に行く約束してるしいいか

でも、このとき気づけば良かった。まさかミカヤがあんな事するなんて……この日からタカヤを巡る四角関係がはじまるなんて思ってもなかった

同時刻：G研

「じゃ、武者小路指導員。また明日な」

「うん、もう夜も遅いから早く帰るんだよシロウ」

「もう心配しすぎだよ。明日はいよいよ俺のガンプラが完成披露会だからスツゴク楽しみだし。とにかくまた明日！」

武者小路指導員に手を振るとG研をでた俺《神崎シロウ》はステイ先にまっすぐ向かう……高級マンションのカードキーをリーダーに通しエレベーターに乗ると、あつと言う間に最上階につく。

そのまま少し歩き、止まる…多分怒ってるかshれないけど、深く深呼吸。扉をあけると仁王立ちした黒みかがった白髪、水色の瞳にメラメラと怒りの火を灯したスティ先の女の子…ディアーチエがギロつと睨んできた

「シエロウ！今何時と思っておる…我との約束を破るとはいい度胸よ」

「い、いや…コレはその…俺のガン普拉製作が遅れてて」

「……ほう？ソレが理由か……だが我と交わした約定を破るとは赦せぬ……覚悟はいいか」

「い、いや…約束破ったのは悪かったから？そんな恰好で外に…」

「聞く耳持たぬわあああ！今日はシエロウの食事当番だったのだぞ……我を空腹にした罪は重い！」

「ま、までディアーチエ！裸締めは止めて！そんな格好じゃ当たってるから!？」

背後に回られ見事なまでに裸締めを決められる。ディアーチエの格好は紫のやや大人っぽいブラとショーツ、上にはTシャツ一枚。布越しに感じる年不相応な破壊力抜群な豊かな胸が押し当てられ悶えながら抵抗するシロウ…結局、一時間後解放され簡単な食事を作りようやく仲直りした二人だった

#### 第四話 看病《後編》

了

## 第五話 カレトヴルツフ

「ん……」

眠い目を擦りながら体を起こした僕はぼうつとしながら時計をみる……10時を過ぎてた。今日は日曜日、それに学院はお休みだから慌てることはない、それより身体も軽いし熱っぽさも無くなってる

「……ん〜風邪治ったかな……お粥のおかげかな」

ミカヤ先輩、ノーヴェエさん、テストタロツサさんのお粥……少し身震いしながらベッドからだとバスルームに向かい顔を洗う……冷たい水の感覚に気持ちよさを感じながら、パジャマを脱ぎ洗濯籠に入れ私服に着替える。朝ご飯の用意をしようと冷蔵庫の扉をあけようとした時、一枚のメモが目に入る

ータカヤ、皆で作ったお粥が冷蔵庫んな中に入ってるから食べるよ。まだ本調子じゃないからしっかり食べて治せ☆☆☆☆☆☆と、とにかく、つうか！なんかあつたらメールよこせよ!!ー

「……そっか……ノーヴェエさん、テストタロツサさん、ミカヤ先輩が……」

冷蔵庫を開きお粥が入ったタッパーを取る。そのまま解凍し土鍋に入れて改めて温めてテーブルにおいて、いすに座り手をあわせレンゲですくって口に入れた

「………うん、おいしい……今度、なんかお礼しないといけないかな」

……すっかりした出汁に、ふんわりとしたかき玉、ネギ、ピリピリした辛み？を感じながら冷蔵庫にあったお粥全部を平らげた。僕は前

に頼んだアストレイをサエグサ模型店に取りに行くために家を出る、その途中で引越し社《アロウズ》のトラックがマンションがある方向に走っていった。また新しい人が入るのかな…と気にしながらサエグサ模型店へ歩いていった

## 第五話 カレトヴルッフ

「自慢のバトルルームにガンプラ工作室、ありとあらゆるガンプラ、プラモに各種材料が揃うサエグサ模型店♪今日も元気に開店中…  
…あら？タカヤくんじゃない」

「おはようございます Mitsuki 店長…あの頼んでいたガンプラ…こ、これは!？」

ミツキ店長の背中…正確には壁に貼られた一枚の告知ポスターをみて思わず息が止まってしまふ

「某月某日、サエグサ模型店にて第一回ガンプラバトル大会を開催します!!」

参加資格は各模型店、小中高学校に所属するチームから男女ペア（ココ重要！）を代表として選出する事（なお違う学校および模型店所属チームでも可能）

大会中の使用ガンプラ交換は一度のみ認められます

そして、戦いを勝ち抜き優勝したペアには、今や幻とまで言われ現存するのは僅かといわれるガンプラ強化武装《カレトヴルッフ》を呈します！

……カレトヴルッフ、僕の先生《マスタージャパン》先生のガンプラ《ゴッドガンダム極》の武装の一つで今は現存する数も少ない幻のガンプラ強化武装…カレトヴルッフが景品としてだすガンプラバ

トル大会をミツキ店長の模型店で開催する

「すごいでしょうこのカレトヴルッフ。《ある人》経由で二振り手に入ったのよ。コレからバトルルームのシステムと補強をしないといけないから大変、大変なのよユウは逃げちゃったし……ん？タカヤくんもウチの大会に参加してみる？」

「え？いいんですか！でも初心者で…そのまだ弱いから」

「弱くないわよ〜それにガンプラバトルが一番大事なのはわかる？おもいつきり全力全開でガンプラバトルを楽しむこと……タカヤくんにはそれがあるんだから不安になる必要ないわよ」

「そ、そうですか………ミツキ店長、エントリーお願いできますか？」

「ハイハイ、これで15組目ね〜」

嬉しそうにPCを起動してエントリー画面に僕の名前を打ち込もうとしたミツキ店長の手が止まり、何かを思い出したように声をかけてきた

「あ、忘れてた。この大会の参加資格あるのよ…タカヤくんは誰とペアを組むか決めたの？」

「え？ペア!？」

「ココよく見て、ココ♪」

ミツキ店長の指先に示された一文…男女ペアを組んででのみ大会に参加できる

どうしよう……参加したいけどペアを組まないと出場できない

……女の人で思い当たるのはノーヴェさん、ミカヤ先輩、テストタロツサさんだけしかない

でも、ノーヴェさん、テストタロツサさん、ミカヤ先輩もこの大会にでるだろうし、当然ペアになる相手はいるよね。でも先生と同じ《カレトヴルツフ》を手に入れたい……どうしたらいいんだ

「……………タカヤくん、まだエントリー締め切りには時間があるから、あわてずゆっくり考えなさい……といつても明後日までだけ」

少しいたずらっぽく笑いながらバトルルームの拡張作業に「あく忙しい、忙しい」っていいながら地下バトルルームに向かったミツキ店長……

「……………あうう〜どうすれば……………」

☆☆☆☆☆☆☆☆

同時刻、G研

「スゴいなあ、ここがG研かああ……おお！農丸大將軍？千生頑駄無？ナイトガンダム？大光帝？まで……お、おれの知らないガンダムってこんなにあるのか？」

「トオル、少し落ち着いてください……（ふふ、連れてきて正解でしたね……バトルの時よりコツチの方が可愛いかもしれないですね）」

巨大なガンダムとビルが一体化した建物……G研の展示ルームで目をキラキラ輝かせケースの中をみるトオルを見て胸が高鳴ります

なぜトオルと一緒にいるかですか？それは……その……トオルにいるんなガンプラを知ってほしくて……それにG研はガンプラバトルの始



祖ともいえるプラモシユミレータバトルを生み出した場所

その空気を感じてもらいたいのもあります。でもコレはデートですよね……

「シユテル？俺の顔になんかついてるか？」

「い、いえなんでも無いです……あれは」

トオルに声をかけられ慌てた時でした、ワタシの目にバトルルームで戦う赤いSDガンダムの姿……その対戦相手は規約に準じたりアルタイプのドム、ゲルグク、ドライセン、さらにはギャプラン、アツシマー

『はあああ！朱雀飛翔斬!!』

サイズも火力も違うSDなのに関わらず無数のビームを切り裂くと、お返しと言わんはかりに炎を纏った刀から斬撃を跳ばし切り裂いていく

「な、何だ？あのSD……いや武者頑駄無……強すぎだろ！ああくんなか無性に戦ってみたくなってきた」

「トオル、アナタのガンプラはワタシの家におきっぱなしでしたよ？それにサエグサ模型店の大会に向けて調整終わってないんですよ」

「そ、そうだった……残念だな……今戦ってる奴も多分でるだろうしな……じゃあ今からシユテルの家で仕上げをやろうぜ。カレトヴルツフを二人で一緒に手に入れようぜ!!」

「ひ、ひゃい！がんばります」

背中に炎を燃やすトオルにドキつてします。男の子って好きなことになるとキラキラ輝いて可愛いです。二人で必ず手に入れましょ

うカレトヴルツフを！

ディアーチエ、レヴィ：今回はチームではなく個人で戦わせてもらいます：勝つても負けても恨みっこ無し

ワタシのトオルの為に……さて、コレから時間が許すまで二人つきりで仕上げましょうか：手取り足取り……

☆☆☆☆

「ふう後少しかなくサツキー先生や狂四郎先生みたいにはうまく出来ないかな……武装鎧剣は」

「それにしても凄い出来じゃないか、今度のサエグサ模型店の大会にでるんだったね」

「まあね、ディアーチエのも完成してるし……それにマスターの弟子も出るみたいだしな……」

「マスタージャパン先生の愛弟子がかい？あれるかもしれないね……（カレトヴルツフが《彼ら》を呼び寄せないことを……）」

武者小路の声を遮るように軽快な電子音がなり、慌てふためきながら携帯端末を手にしたシロウ……画面にはメールの着信表示、開きみる顔が真っ青になっていく

ーシエロウ！何をしておる!!今日は我が夕餉を用意したのだから……冷めぬウチに早く戻れ……お前は我のパートナーなのだからなー

「……………武者小路指導員、今日はここまで……はあ……」

「仕方ないね。ほら片付けは私がやっておくから急いだ、急いだ。怖い、怖いお姫様を待たせるのはよろしくないよ」

武者小路指導員に頭を申し訳ない気持ちいっばいで頭を下げ、いそいそとGPベースと俺のガンプラ《武者魔亜主(マーズ)》を鞍に入れあとにし駐輪場に止めていたマウンテンバイクにまたがり駆け出した

(「ダイアーチエと出会って一週間か…」)

……ダイアーチエとは日本に帰ってきた初日、しばらくステイする子と待ち合わせた店《モデルショップ八神》で出会った……まあ、そんな時はいろいろあつたけどガンプラが大好きで少し高飛車、我と呼ぶ日独ハーフで素直じゃない女の子……ダイアーチエ

でも俺の名前が読みづらいからってシエロウはなあ……でも慣れたからいいか。今度のサエグサ模型店のガンプラバトル大会には幻のカレトヴルツフがでる

それ以上にマスターのおっさんの愛弟子がでる……どんな奴をペアにしてくるのも楽しみだ

「……カレトヴルツフ、ダイアーチエには色々世話になってるし絶対に優勝するかな……」

そうつぶやくと、赤信号が青に変わると同時にペダルをこぎダイアーチエの住むマンションへ急がせた……

☆☆☆☆☆☆

「はあああ〜」

サエグサ模型店を後にし家に歩きながら僕は何度めかになるため息をついた……原因はあの大会に出場する為に組まなければならない

ペア。心当たりのあるメンバーはやっぱり三人しかいない

まず思いうかんだのはノーヴェさん、O・ガンダム《B》は格闘戦から長中距離に対して隙の無い機体特性を持つてる、一度戦って負けただけで次は勝ちたい

それに紅の彗星《ユウキ・タツヤ》さんのザク・アメイジングに通じてる部分があるし、ファイターとして一流

ミカヤ先輩はスサノオをカスタムした《ツクヨミ・斬》。前に一度だけミカヤ先輩の部に誘われた時に部員勧誘のために行われていたガンプラバトル。ツクヨミ・斬と黒塗りのガンダム・エクシア数体を圧縮粒子ビームで複数落とすし、構えた刀《晴嵐》でビームを受け霧散、斬撃を飛ばして切り払う姿に声を失った

圧縮粒子ビーム、晴嵐による防御、斬撃…粒子の特性を生かした戦いができる

テストロツサさんのデスサイズ・スラッシュは、あの可変式ビームシザーズで接近戦闘、さらに粒子をあの羽根に蓄積、それを粒子を最大解放するスプライト・バスター…それ以上にガンプラの可動範囲を理解、補強を入れてる…

ファイターとして反応も切り替えの速さは誰よりも早い

「…………でも相手はいるんだよね…………それ以前に僕と組んでくれるかわからないし…………はああああ」

大きなため息をしているうちにいつの間にかマンシヨンの前ついていた、いつものように暗証番号とカードキーを通しエレベーターで部屋がある階へ向かい、そのまま扉をあけようとした時、声がかかった

「少年、今帰りかな？」

「え？ミ、ミカヤ先輩?!なんで僕の家の前に」

「ああ、マンションに住む方々に挨拶まわりをした帰りなんだ……」

「あ、あいさつ?な、なにの?」

「今日から私もこのマンションに住むことになったんだ、改めて自己紹介をさせてもらおうかな…隣に引っ越ししてきた《天瞳ミカヤ》だ。お隣さん同士、よろしくね秋月タカヤくん」

黒髪をそつと手をすくいながら、僕につこりと笑みを浮かべて引っ越しの挨拶をする緩く着流した和服姿のミカヤ先輩……呆然となる隣の部屋の扉が開いた

「あ、タカタカ!もう風邪治ったんだ!ボクの看病のおかげだね」

「テ、テストロッサさん?ちよ?だ、抱きつかないで当たってる!当たってるから!」

「ええ、別にいいじゃない。それにボクはいつでもOKだもんね♪」

「な、なにがOKなの?どう言う意味なのさ!」

「タカタカがボクにしたいこと全部だよ♪(……………こう言えば男の子はイチコロだったお母さん言ってたしね…その先はコレを使いなさいって……でもナニに使うんだろコレ?)」

「お母さん!まだレヴィには早いよ!!」

「アリシア、あなたもいえたことかしら?フェイトと一緒に1日1ダースは使い過ぎよ。アナタの彼氏赤玉でるわよ?それを考えたらねえ?」

「な、何で知ってるの!?!」

「ふふふ、何でもお見通しよ……それにまさか、あの《メイ》の息子だったなんてね。はい、レヴィー」

四角いフィルムの中に円形のリングが浮くナニかを手渡す母親：  
プレシアから受け取ったレヴィー：

（こんなのナニに使うかわからないよ、お母さん……赤玉ってなんなのかな？それよりお母さんの作戦、耳元に甘いささやき作戦をやらなきゃ）

耳元に囁かれながら背中中二つの柔らかい弾力、女の子特有の甘い匂いにくらくらしてきた。抵抗するけど離れてくれないし、でもそれより気になるのはミカヤ先輩がジイイっつと僕を見て黒い何かを溢れさせながらゆっくり近づいてきた

「タカヤくん」

「ミ、ミカヤ先輩……んむう!?!」

「レヴィ、少年を渡してもらおうか、私はコレから大事な話をしなければならぬのだが（……少年の匂い……身体の芯に染み込む薫りは昔と変わらないな……スウウウウ〜ハアアアアア〜スウウウウ〜ハアアアアア……ハアハアハアハア）」

僕の頭を胸に抱き寄せながら話すミカヤ先輩：逃げようにも柔らかくて清々しい柑橘系の匂いと二つの大きくて柔らかかな弾力と直に触れ合う肌の暖かさに思考がまどろんでくる……それにミカヤ先輩息が荒い、深呼吸繰り返してるし

「奇遇だね、ボクもタカタカにお話があるんだ」

「んむう？んむむむ？（僕に話？ミカヤ先輩とテスト）」

「ロツサさんが？」

僕に話？何のことなんだろう？それよりは、なんか寒い気がする…ゾクゾクとして身体が震えた時、エレベーターの扉が開いた

「……落ち着けあたし、素直になれ……絶対に誘うんだ…つてミカヤ！それにテストロツサ！な、なにやってるんだ!!」

「んむむむ？（ノーヴェさん？）」

エレベーターに居たのはノーヴェさん…声がうわずってるけどドシドシとした足音が近くで止まり僕の身体を掴み引つ張り出そうとする

「ノーヴェ？まさか君もかな？」

「べ、べつに……ただ心配で来ただけだからな！ペアになってくれていいに来たわけじゃないからな」

「ふくん、ノーヴェも……？さてレヴィ、どうやら三人で雌雄を決せなければならぬようだ？そこで提案だタカヤ少年のペアを私たちの中から決めるためにガンプラバトルをしようじゃないか」

「望むところだよ！ミカヤン、ボクがタカカタカのペアになるんだい!!」

「ま、まであたしは……」

「また、逃げるのかいノーヴェ？それとも負けるのが……」

「誰が負けるか！いいよっ乗ってやんよ！絶対にあとで文句言うなよミカヤ!!」

「いったね。私も負ける気は毛頭無いからね…」

「ボクもだよ！」

バチバチバチと闘志を燃やす三人の乙女…

「ん、んきゆう〜」

ミカヤとレヴィに抱きつかれ天国と地獄を味わいながら鼻血をたらし気絶したタカヤは自分を巡って修羅場と化していることに気づかなかった



## 第五・五話 嵐の前で

シャ：シャ：シャ：何かを研ぐ音が薄暗い室内に響く中、黒髪を腰のあたりにまで延ばし白い髪留めでとめ、桜色の着流しの和服に身を包んだ少女がいる

大きく開いた胸の谷間にうっすら汗がにじむ。真剣な眼差しの手には耐水ペーパー、1／144サイズの刀の刃が研ぎあげられていく。何度も粒子変容塗料を塗り重ね、あまたのファイターとガンブラを切り払い、切り捨て激戦をくぐり抜けてきた銘刀《晴嵐》

「……………うん、これでいい。あとはツクヨミ・斬を仕上げるか」

美しく研ぎあげられた晴嵐に笑みを浮かべ刀掛けにおくのはタカヤが通う学院のガンブラ部部长にして先輩さらには隣に引越してきた《天瞳ミカヤ》、その眼前にはスサノオ、マスラオ、ブレイブ、フラッグ、オーバーフラッグ、GNフラッグ：暈が敷きつめられた部屋に置かれた書院作りの棚に並べられ、真ん中には《ツクヨミ・斬》が触れられれば斬る！と言わんばかりの威圧感が満ちあふれている

「《ツクヨミ・斬》。明日は少年を賭けた仕合いだ。それに《明日の乙女座の君は阿修羅をも凌駕する活躍をするだろう！さあ勝利をつかみ取りたまえ!!》とグラハム占いにもある……………母が父を説得してくれたから生まれた好機を無駄にしないために必ず勝とう。そして……………」

ミカヤはゆっくりと和が強く出された黒塗りの漆仕上げの文机に置かれた写真立てに目を向ける……………まだ幼い六歳ぐらいのミカヤ、そして二つぐらい下のタカヤに似た男の子を強く抱く姿が収められている

―あ、カヤおねえちゃー

「少……………うん……………《タツくん》をむかしみたいいに、カヤお姉ちゃん色に染

めてあげよう。ふふふ、ペアになったらやさしく、その汚れない  
肌を湯殿で隅々まで……ハアハアハアハアハアハアハアハア……  
……仕上げはよし、寝るかな」

さりげなく？欲望を垂れ流し状態から普段のミカヤに戻ると、いそ  
いそと寝具をしき床につき灯りを消した

ただ、押し殺したような声と衣擦れ、水音が響いていたのは気のせ  
いだらう……多分

文机の写真立てから、写真が抜き取られているのは気のせいだよ  
……ウン、キノセイダヨ……ウソだって言つてよバーニー！……(by  
e 作者)

## 第五・五話 嵐の前の……

同時刻……タカヤが住むマンション《リ・ホーム》。タカヤの部屋の隣  
に引越してきたテストアロッサ一家では

「お母さん、レヴィだったらライバルおおすぎしやないかな？」

「そうねえ……でも勝負はコレからよ。みなさいアリシア」

リビングでくつろぐアリシアは母プレシアにいわれ目を向ける……  
目にも止まらぬ速さで自身のガンプラ《デスサイズ・スラッシュ》の  
細かな調整を詰めていくレヴィ。しかもよく見ると以前と違い胴体  
や足まわりがベース機であるデスサイズとはまったく違う

(……今度のサエグサ模型店の大会にあの伝説の武器カレトヴルツフ

でるってびっくりしたなあ。ボクにもぴったりだけどタカタカのバトルスタイルにもあつてる……………もし手に入れたら)

ーやったねタカタカ♪きょうもボクたち強くてカツコイイ勝利だね♪いいい!!ー

ーうん、一緒にペアを組んで手に入れたカレトヴルッフのおかげかな。ありがとうレヴィー

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………えへへ…やだなあ、そんな風にいわれるとボクてれるよお……………」

「……………ねえ、お母さん。わたし少し心配なってきたんだけど」

「…大丈夫よ。ふふふ、まずはタカヤくんの趣味と趣向を調べながら、確実に外堀を埋めていくわよ。あらフェイトはどうしたの?」

「……………今日は《お店》の手伝いにいってるよ。わたしもいきたかったんだけどジャンケンに負けちゃったし……………今日は譲ってあげることにしたの」

☆☆☆☆☆☆

「飛鳥、二番、三番テーブルから雷凰炒飯、特製黒酢酢豚、特製刀削麵のラストオーダーだよ」

「わかったー!さて、いっちよう気合い入れて最高の料理を提供するか!!」

熱気溢れる厨房で中華鍋を振るう赤い髪がめだつ少年…新田飛鳥の手伝いにフェイトは来ている。まだ高校生になったばかりなのにかかわらず、若くして老舗雷鳳飯店の厨房を仕切る姿に胸が高鳴る。そんなこんだでキンクリ

「ふう、今日もありがとな。店しまうから少し待っててなフェイト」

「う、うん。あの、飛鳥…コレ似合ってるかな」

黒地に白、黄色の花が絢爛に刺繍がされたチャイナ服姿のフェイト…流れるような金髪に豊かな胸、くびれた腰からヒップのラインがはえ、さらには脚を包む白のオーバーニー…くるりと一回転すると思わず見とれてしまう

「あ、ああ。すごく似合ってる……綺麗だ」

「！あ、ありがとう……飛鳥…明日はお休みだから……その、あの……今日は私が独り占めしていいよね」

「……お、おう……と、とりあえず片付けてから……」

「うん」

片付けをいそいそと終え、二人は店の奥…店舗兼住居へ入っていく…いつもなら三人であるのだが今日は二人きりの時間を独占できる事にフェイトは頬を終始赤くしていた

☆☆☆☆☆☆

「…何時もフェイトったら我慢するから……それに私はお姉ちゃんだし。飛鳥も平等に愛してくれるし」

「ふふ、惚れ気ごちそうさま……さあ、こつちもがんばりましょう。アリア、協力してね」

「うん…義弟になるかもしれないからね」

なにやら企む二人に気づかずレヴィはガンプラの調整を進めていた頃、ナカジマ家では……

ジャツ、ジャツ、ジャツ…ナカジマボビーの工作室にヤスリで高硬度のプラ材を一心不乱に削るノーヴェ…手を動かすのを止め、手前にあるガンプラ《O・ガンダム》《B》とは別のガンプラへ視線をおとす。

「…削り出しは終わりだな。明日までに完成させねえとな」

つぶやくノーヴェの前には機動武闘伝Gガンダムに登場するネオスウェーデン代表アレンビー・ビアズリーが駆る《ノーベルガンダム》？を放熱フィンを大胆にカット、ヒール部分にタイヤ？、腕部を覆うような分厚いアームガード、腰には推進器内蔵型サイドアーマがスカートみたいに広がっている

今度の富士カップに向け作っていた専用機、しかしサエグサ模型店で行われるガンプラバトル大会に出すために製作していた新型を急ピッチでくみ上げている、パーツ自体は出来てたが追加で作ったパーツのすり合わせに苦労し、ようやく形になったのだ

「…本当は富士カップ本戦でお披露目だったけど、そうもいってらんねえし、それに……ああコレも全部タカヤのせいだ！せつかく勇氣出してきたのに、ミカヤとテスタロッサに挟まれて嬉しそうにイチヤイチヤしゃがって！」

ヤスリを持つ手がワナワナ震える…脳裏に浮かぶのはミカヤとレヴィから背中と正面からサンドイッチ状態になつてタカヤの姿…ますますイライラし始めるのをみる影があることに気づいていない

(おかあさん、おかあさん。ノーヴェったら相当怒ってるよ? いくと  
き気合い入れてルンルンとしてたのがうそみたい)

(……タカヤんの家から帰ってからっすよね……ああ、そんなに削る  
とバランス悪くなるっすよ!?)

(スバル、ウエンデイ……少し静かに……でもコレじゃまずいわね、タカ  
ヤくんをナカジマボビーの跡取りにしたいのに……)

(母上、私がさりげなくミツキ殿に聞いてみようか?……)

(それは私が聞いておくから大丈夫よ……最悪なときはジェイルに頼  
めばいいし)

(叔父さんに!? ダメだよ! よけいややこしくなるから。前だつてPP  
SEに乗り込んで怪しいシステムを売り込んだり、知り合いだからつ  
ていきなりアポなしでガンプラ塾主催者の二代目メイジンに粒子圧  
縮構造式の意見を聞きにいったりして警察にお世話になりかけたの  
忘れだの?)

(……………じゃあクアットロに)

(……さらにややこしくなるからダメ! / だ / ツスよ!!)

物陰での母クイント、姉ギンガ、チンク、ウエンデイの会話を知る  
由もなくパーツをすり合わせていくノーヴェにあるのは

(…ミカヤ、テストロッサ、タカヤはぜってえわたさねえからな。富士  
カップの前にあたしの新しいガンプラ《ノーベル・ガンダム《A》》を  
お披露目してやる。タカヤはあたしとペアになってカレトヴルッフ  
もいただきだ!)

「フフフフ」

……小さく笑い、ハイライトが消えた瞳で勝利する事を新しいガンブラ《ノーヴェル・ガンダム》《A》を前にし誓うノーヴェ、最後の仕上げに力を入れる

ガンブラバトルのペアを決めるために雌雄を決しようとする三人の恋乙女達、それを取り巻く人達の思惑が交差する中で別な動きを見せる二人の男女がいた

「……………みてユウキ！やっぱりタカヤに悪い虫がついてる!?しかもガンブラバトルのペアを決める戦いをミツキの店でするですって？」

「わ、悪い虫って……………よく見てよメイ、可愛い子達じゃないか？（ん、この黒い髪の子どこかで……………）」

ホテルの一室で髪をゆらゆら浮かせ叫ぶメイの手にはタカヤをサンドイッチするミカヤとレヴィ、引きずり出そうとするノーヴェの画像（ミツキからおくられてきた）：対するユウキはミカヤをみて既視感を感じたとき、メイが顔を俯かせ銀色のアタツシケースを手にしGPベースを取り出した

「……………どこの馬の骨かしらないけど。タカヤをかけて勝負するなんて十年早いわ…ユウキ、私のガンブラを調整お願いするわ」

「えっ！メイまさか……………」

「私とユウキの大事な大事なタカヤに手を出したこと後悔させてあげるわ……………勘を取り戻したいからつきあって」

「……………仕方ないな。でもあの子達はまだまだ原石だ、ビルダーとしてファイターとしても……………手加減するならつきあうよ」

「むううわかつたわよう」

プウと頬を膨らませ頷くメイに苦笑いしながら、ユウキも自分のガンプラを取り出しホテルにあるバトルシステムを使用できるよう頼むと真剣な眼差しでガンプラを手取る

（ああは言ったけど、ビルダー、ファイターとしてもみてみたくなっただかな？……まあ僕としてはタカヤが三人とどうなるかが気になるかな）

「準備できたわよユウキ」

「はいはい、じゃあダメージレベル《A》で……手加減無しの間時間無制限……」

「六年ぶりのガンプラバトル……やるわよ……」

プラフスキー粒子が満たされ、ステージは宇宙。それぞれのガンプラの目に光が宿ると同時に黒い何かと、銀色のナニかがぶつかり合った

第五・五話 嵐の前に……



## 第六話 タカヤのペアは？（前編）☆

「…さて、大変なことになってしまいました」

声と共に突然光が照らされた。黒い眼帯に赤のジャケットを纏う女性が椅子に座りながら静かに語る姿…

「サエグサ模型店でおこなわれる男女ペア限定ガン普拉バトル大会。その優勝景品《カレトヴルツフ》を手にしたいと願う一人の少年。しかし初心者である自分と組んでくれる相手。女性をペアにしなれば参加できないとしり悩む彼の前に現れた三人の少女。ナカジマボビーの美人姉妹の一人《ノーヴェ》彼の通う学院の上級生ミカヤ、隣に引越してきた元気っ娘レヴィ…少年との距離を詰めさらに踏み込んだ仲になりたいためペアという大義名分を元に来てみれば、三人一同に会ってしまうことに、互いに譲れない思いが火花を散らせ少年…秋月タカヤくんのペアを決めるべくガン普拉バトルを行うことを決めたのです。しかし彼女たちは大きな壁が立ちただかる事を知らなかったのです…」

軽く指を鳴らすと横に黒髪を揺らしながら歩く桜色の和服に身を包んだ女性とガンプラのシルエットから凄まじいまでの覇気を漲らせGPベースを構える姿…

「…………謎多き彼女の目的、果たして三人の恋する女の子はどうするのか……………」

そこまで言うとう女性は目を閉じおもむろに赤のジャケットに手をかけ一気に脱ぎ放つ、白地にSAEGUSAと大きく書かれた業務用エプロンにカジュアルな服装に身を包み眼帯を右手に握りしめたつのはサエグサ模型店店長ミツキ・サエグサは笑顔でビシツとマイクを構えくるりとまわりとまる

「それでは！ガンダムビルドファイターズ《刃》ーブレイドー、第六話《タカヤのペアは？（前編）》に……………ガン普拉バトル！レディイイ  
くゴオオ♪♪」

「姉貴、あんまり焚きつけるなつたら……………それより手伝えよ」

はああくため息をつきながらバトルシステムの調整をする弟ユウ・サエグサの愚痴が漏れていた

#### 第六話 タカヤのペアは？（前編）

タカヤの住むマンション《リ・ホーム》から徒歩10分の距離にあるサエグサ模型店。夕焼けに染まる臨時休業のプラカードがかけられている。ショーウィンドウには店長であるミツキ、弟ユウ、ツバサ、ツバキの力作がならび見る人を魅了していく。当然店内にはガン普拉からスケールもでる、様々なアニメ作品のプラモが棚におかれ、さらに製作から塗装、各種プラ材から塗料まで完備し十人は座れるほどの工作室。地下にはバトルルームがあり店長自らプログラムした各種フィールドは初心者から熟練ファイターもうならせ知る人ぞ知る店

その反面、開業している日はとても少ない。店長ミツキ・サエグサの気分次第で開店、休業が決まるため一部のビルダー、ファイターからは常に営業してくれと声があつた

話はそれてしまったが、地下バトルルームに三人の乙女の姿…手にはGPベースと各々が作り上げたガン普拉が握られてるも、三人の視線はある方向をとらえていた

「あ、あのくミツキ店長？これは一体？」

「あ、気にしない、気にしない。男の子なんだから細かいことは気にし

ないの」

「いや、だって何でリボンでしぼられてるんですか？しかも《優勝景品》ってタグは何なんですか？」

「だって、今日は今度の大会に出るためのペアを決めるための特別な大会よ？タカヤくんをかけたね…それに」

ミツキ店長が目を向けた先につられるように見たもの…

「フッフ、がんばりなさいレヴィ。必ずゲットするのよ」

「あら。悪いけどタカヤくんは私の家の跡取りになるんだから渡さないわよ」

「……残念ねクイント。タカヤくんはすでに、わ・た・しの可愛いレヴィにヴァージン（キス）は奪われてるわよ」

「……やだ、ウチのノーヴェもそんなのよりスゴいのしてるわよ。ほら♪コレが証拠」

ナカジマボビー工作室でタカヤの顔面にむっちりとした太ももでホールド、魅惑のピンクのストライプが入った縞パンを押しつけるような形でまたがるメイド服姿の朱がさした頬、艶のある声をだすノーヴェの動画をにっこりとしながら見せるクイント、プレシアの周りの空気がギスギスしたものにかわっていく、互いに笑顔を浮かべながら

「ふふふふふ………」

と笑う姿に鳥肌が立つタカヤ…そんな中で三人はそれぞれGPベースをセット、ガンプラを静かにおく…

《Press set your GP—Base: Press  
et your GUNPLA》

三人のガンプラの瞳に光が宿り命が吹き込まれた

(…………お母さん、ボク必ず勝つよ。んでタカタカとペアになってカレトヴルツフを手に入れて…お母さんが書いた《タカヤくんを確実に落とす言霊》《レヴィならできる初めてレクチャー初級編》のとおりのできせいでいいよ) (お母さん、頑張るからね)

(タカヤ、あたしは別にペアになりたい訳じゃないし…でも、なんかミカヤとテストタロツサが仲良くしているとムカムカするし…はっ！違うコレはカレトヴルツフを手に入れるだめだから！タカヤとペアになるためじゃねえんだからな！)

(二人には悪いが、この勝負勝たせてもらう。少年…タツくんとはペアになってカレトヴルツフを手にしてみせるのは私だ…そして昔みたいにタツくんをハグハグして、一緒に湯殿で湯浴みして床を並べを…ハアハアハアハアハアハアハアハアハアハア…いかん、勝負に集中せねば…耐えてこそ得る至高の輝きを)

《Beginning[Plavsky. Particle]dis  
persal.field5, city》

プラフスキー粒子の散布と共にフィールドが生まれる。ステージはコロニーが突き刺さった荒廃した大地…機動戦士ガンダム0083—stardustmemorys—の演習に使われていた場所…

《Battle·Start》

「レヴィ・テストタロツサ！テストサイズ・スラツシュ…」

「天瞳ミカヤ、ツクヨミ・斬…いざ尋常に」

「ノーヴェ・中島、ノーヴェルガンダム・A！」

「…いくよ！／参る！／いくぞ！」

三体のガンプラ…デスサイズスラッシュ、ノーヴェルガンダムA、ツクヨミ斬は弾かれたように空を駆けコロニーが突き刺さった荒廃した大地へ着地する。荒れ果て瓦礫だらけの大地を先に着地したノーヴェルガンダムAは滑るように駆け抜けていく。足底にクローラが設けられ地上での走破性は目を見張るものがある。さらに腰アーマから左右にスカートのように広がったアーマ内部にはスラストターが内蔵され急な方向転回も可能だった

「さて、テストタロツサの戦いはあたしやミカヤと同じインファイター。間違いなく真つ向から来るのは…」

「見つけたよノンノン！」

「っ!」

接近警報が鳴る前に避ける、その脇を蒼いビームの鎌が通り過ぎた。体制を整えみると大鎌を構えたテストタロツサのデスサイズスラッシュ。よく見ると手足のパーツが変わってるのがわかる

「よくかわしたね！でも次は必ず当ててるよノンノン！」

「こらっ！勝手にあたしの名前を略すんじゃないやねえ!!オラアアア！ガンナックル!!」

構えた拳…腕部アーマが開きカートリッジが飛ぶと同時に加速、防

御しよう構えた鎌もろとも殴り抜く。あまりの威力に鎌がギシギシきしみ踏みとどまれず吹き飛んだかのように見えた……いや、後ろにバックステップして威力を相殺した事に気づきさらに追撃しようとした瞬間、冷たい何かを感じ飛び退く

「さすがだねノーヴェエ。今のをかわすなんてね……」

「ミカヤ……前よりも容赦なくなってるな」

黒地に金の塗装、さらに鎧武者を思わせる装甲を追加したスサノオベースの改造機……ミカヤの愛機《ツクヨミ斬》が静かに日本刀《晴嵐》を鞘走ら立つ姿にスフィアを握る手に汗が滲むノーヴェエに対して余裕を見せ立つミカヤ

「当たり前だ……カレトヴルフと少年を手に入れるため手加減はないよ。悪いけどコレだけは……親友でも譲れないよ」

「そうだったな。昔から、最初にガン普拉バトルをやった時から変わってねえな……あいにくアタシもまけるわけいかねえんだよ」

「こらくミカヤン、ノンノン！ボクを無視するな！タカタカはボクのペアになるんだい!!」

三体のガン普拉が睨み合い、その背後にゴゴゴゴゴツ！と何かが見えたのをタカヤは感じ身震いする。そんな三人の戦いを

「さあ、もりあがつてまいりました！ツンデレちゃんの新ガンプラも興味深い！でも、誰がタカヤくんのペアになるかますます目がはなせなくなってきた（・▽・）！それにミカヤちゃんもレヴィちゃんもやる気まんまんだから勝敗は誰の手に!?!」

「だから、悪のりするなったら……」

ノリノリで実況するミツキにため息をつくユウ…そしてタカヤは三人のバトルに魅入っていた…

(スゴイ、本気のミカヤ先輩…それにノーヴェエさんの新ガンプラも格闘戦…いや何か隠し玉がある。テスタロツサさんのスラツシユもあれから手が加えられてるみたい……スゴいや皆！スゴすぎるよ)

目をキラキラ輝かせていた…この地域の実力者の本気のバトルに純粹に感動を覚えていた。自分がペアという景品にされているのに関わらず。ミカヤの鋭い斬撃が踏み込みと同時に放たれノーヴェルガンダムA、デスサイズスラツシユは距離を取る…

「距離を取るか……いい判断だ」

「まあな、何度やり合ったか覚えてるだろ？」

「49勝49敗1引き分け……最初はノーヴェエは負けばかりだったね……今度は勝たせて貰おうか」

「まった、まったああ！勝つのはこのボクだよミカヤン、ノンノン!!」

「だ、か、ら、その名前だよぶんじゃねえ!!」

「へへん。鬼さんこちら。ボクのスピードにはかなわないよ！タカヤカが一緒に直してくれたデスサイズスラツシユには当たるもんか」

華麗にかわしていくデスサイズスラツシユを操るレヴィ…しかしツクヨミ斬が動きを見せた。晴嵐を韜走らせながら納めと静かにつ

ぶやいた

「……見切った…天瞳流・天月《霞》」

「うわっ！あふないあぶない。や、やったなあああ」

間合いを詰めての居合い一閃…プラフスキー粒子変容塗料が何層も重ねられ研ぎ抜かれた刃がデスサイズスラッシュの胴体を切り払うも紙一重でかわしたレヴィ…三人の戦いが白熱化しコロニーの壁面を駆け抜けた瞬間、外壁が切り裂かれ大穴が穿たれ、ガラガラと崩れ落ちていく

「な、なあ、姉貴。あれかなり強化してるはずだよな？」

「あつれえ〜おかしいな〜コロニーが碎けるなんて〜」

終末戦争クラスの戦いに耐えうるよう強化したコロニーが崩れていく…剣閃がきらめき、殴り抜く破壊音が辺りを支配する。しかしバトルシステムに新たな参加者を示すアイコンが浮かぶ。それを見たミツキの表情は悪戯がようやく成功した子供のように笑顔になっている。

「ふふふ、ようやく来たわね…ユウ、これからが本番よ」

「本番って？……ま、まさか来たのかよ」

「そのまま…さ…か♪」

パアツと笑顔を見せるミツキの目には光輝く翼を広げた黒いアストレイ？が三人が戦うコロニーに凄まじいスピードで接近するやいなや、シユベルトゲベルを構えカートリッジを二回排狭、勢いよく



外壁に叩きつけるよう切り払うと外壁が砕け四散、ツクヨミ斬、デスサイズスラツシュ、ノーヴェルガンダムAは為す術もなく吹き飛ばされ地面へ落ちた。

「な、なんだ今のガンプラは?」

「ボクよりもすごく早いし、パワーがダンチだよ!……あれ?ミカヤンどうしたの?」

「う、うそだ。あの機体は……」

ふらふら立ち上がるツクヨミ斬、デスサイズスラツシュ、ノーヴェルガンダムAの前に翼を閉じた黒いアストレイ?がコロニー外壁に降り立つ。右腕に大型クロージャーシールド、左手に巨大なシュベルトゲベルを構えた姿から今まで感じた事の無い覇気に全員が震える。しかしミカヤは知っているようだ

(……第二回ガンプラバトル世界大会で悪魔のように強く大胆な戦法、対峙した相手を斬り伏せる姿に《黒い悪魔》と呼ばれた……黒いアストレイ《エクシエス》?まさか……メイ叔母様がもう日本に帰ってきたのか)

ミカヤの心の叫びが響く中、四人目のファイターがいるブースには桜色の和服に、黒く艶やかな髪を下ろした女性がスフィアを握り、その瞳がとらえるのはレヴィ、ミカヤ、ノーヴェ。静かにまるで囁くように声を漏らした

「……見極めさせて貰うわ。あなた達が……私の大事な、大事な、大事な、大事な、世界で一番可愛いタカヤのペアに相応しいかを

このガン普拉バトルで……………」

スフィアを握る女性《秋月メイ》がすうっと品定めするよう目を細めると黒いアストレイの双眸が輝き、自由落下しながら翼を展開、三人にシュベルトゲベルの刃を向け加速し迫った

第六話 タカヤのペアは？（前編）

後編に続く

## 第六話 タカヤのペアは？（中編）

「……いくわよ……」

プラススキーウイングを展開し向かうのは、水色のデスサイズ：一見してみれば特徴が無いようだけど私の目はごまかせないわ。逆袈裟、袈裟、上段切りでシユベルトゲベール《グラム》で切りかかるのを受けて止めるのを見て少しだけ驚く。この反応の速さ、かなり手を加えてるのがわかる

「うわっ！パワーが押されてる!?!このボクが…ま、負けるもんかああ。絶対に勝ってタカタカのペアにボクはなる!!」

…タカタカ？もしかしてユウキと私の可愛い、可愛いタカヤの事よね…ふふふふ。ミツキ感謝するわよ、この子が間違いなくタカヤに想いを寄せてるのがよくわかったわ

「…パワーとそれに切り替えの速さは申し分ないわね…」

「うわっ！あぶないなあ〜」

「ふふ、状況は常に変化するモノ、相手の機体特性を見極めなさい…いきなさいドラグ・リム！」

「な、なにコレ！ボクからはなれろ〜す、すばしっこいよう！」

大型のビームシザーを蹴りあげ、素早く右腕の《ドラグ・リム》を射出…操作をマニュアルにし体当たりさせながら残る二人を見る、ノーベルガンダムベースのカスタム機とスサノオに既視感を覚える。あの刀の拵えはまさかと思いつつながらグラムで斬りつけた…わたしの一撃を抜きはなった刃で止めている。

「やるわね…アナタのガンプラもだけどファイターとしてもいい筋よ……」

「……お、お久しぶりですメイ叔母様」

「……もしかして、ミカちゃん？……」

刃を交えながら頷いたスサノオ。まさかミカちゃんがファイターになってるなんて……人の縁って不思議ね。でも今はバトルの最中、私からタカヤをとろうなんて例え昔なじみでも許さないわ。スフィアに力を込めグラムを押し付ける

「あたしを無視するなあああ!!」

「……あら、もう一人いたのね？……でも攻撃が大振りすぎるわよ……」  
「な！うわあ!？」

声と共に背後から蹴りが迫る。さらにグラムを力強く押ししながら身体を捻らせ、交わすと同時に胴回し蹴りをがら空きの頭部に叩き込み二人から離れる。さすがはこの地域で五本の指に入る実力者ね

でもね。タカヤは渡さないわよ……私を下せるぐらいに強くて、優しくしてスタイルばっくん全部を包み込めるぐらいの女の子なら話は別。ドラグリムを回収し、それぞれのウィンドウを開いてみる

(さっきの子レヴィは色々将来性あり、ミカちゃんは大和撫子で一応候補入り………今の子は荒削り、でも何か気に入らないわ。わたしとキヤラがかぶり過ぎよ)

「ミカヤ、あのガンプラのファイター滅茶苦茶強すぎだ。んままだと」

「ソコまでだノーヴェ、確かに第二回世界大会ベスト8に入った初の女性ファイター《黒い悪魔》(メイ叔母様)にはキズ一つ与えられない」

「なら、どうするのさノンノン、ミカヤン」

「……手を組むしかない。私やノーヴェ、レヴィの連携プレーでなら倒せるはず……それにあんまり使いたくない手だけど切り札もある……二人ともプライベートモードに切り替えてくれ、内容を説明したいから」

三機とも領き通信をプライベートモードに切り替えなにやら会話をし始めた。同時にスポットライトが眼帯をつけた女性を照らし出した

『さてさて、大変な事になってきました。ペアを決めるため、私のお店で行われているガン普拉バトルに乱入したのはタカヤ君のお母さん《秋月メイ》。かつて第二回世界大会で《黒い悪魔》と呼ばれ恐れられるも突如、姿を消した女性ファイター。でもブランクを感じさせない圧倒的な実力差を見せつけるメイさんを前に、ノーヴェちゃん、ミカヤちゃん、レヴィちゃんはどう立ち向かうのか?』

立ち上がりジャケットを勢いよく引つ張る…片手にマイクと眼帯を握りしめくるとターン、右腕を天にかざした

『それでは…ガンダムビルドファイターズ刃ブレイド、タカヤのペアは?にガン普拉バトル!レディイ……ゴオツ♪♪』

「姉貴!色々やばいぞ?!システムが!?!……つて?」

「少し貸してくれるかな……無理な介入でプロセッサに負荷がかかったみたいだね……」

「てか?誰なのさ!?!」

第六話 タカヤのペアは？（中編）

「……………何をしてるのかしら」

動きを止めた3人。何かしら企んでいるわね。さしづめ私に勝つ為の作戦を考えてるのかしら…でもムリね。今の手合わせでバトルスタイルがわかった。いくら対策しようが私とユウキのアストレイ・エクシエスには勝てない、まあキズをつけるとしたらミカちゃんだけかしら？

早く決着をつけてひさしぶりにタカヤにハグハグしたい。本当なら私とユウキと一緒に海外で暮らしたかったけど。《あの事件》からオウマおじいさまがタカヤを溺愛してるのもあった

でもマフィアの動きが日本で活性化してるって《タケシ》から聞いたのもあるし、それに……………いまはそんなこと考えてる場合じゃないわね。さあ、どんな手でくるかしら

「さあ、来なさい……………この私とユウキのガンプラ《アストレイ・エクシエス》に！もしこのグラムを破壊できれば勝ちよ」

グラムを突きつけるように構え宣言する私に、三機、三方向から接近してくる…さて、見せてあげるわ。世界の力を…スフィアを軽く握り素早くSPスロットを選択《VL（光の翼）》を展開しようとした時、ミカちゃんのスサノオが拳を構え無数のダミーバルーンを放出、かまわず起動しようとした手がとまった……………バルーンに映された小さなまだ四歳ぐらいの男の子、少し年上の女の子…ミカちゃんだとわかった

― たつくんの一番好きなヒトはだれかな？―

「ぼくのすきなのは……………んんん……………おかあさだよー」

「……………ぶはっ!？」

モニターが赤く染まる…違う私の鼻血で…エクシエスも口?から  
プラスキー粒子が勢いよく吹き出した。だって可愛い盛りで、くり  
くりした目にふっくらした頬に艶やかな黒髪。抱きしめれば柔らか  
くて愛おしい四歳の頃のタカヤ…しかもコレは破壊力ありすぎ……

「いまだ!天瞳流抜刀術……………修羅烈風!!」

「いつくよおおお!ボクの必殺技 P a r t I I ! 必殺スプライトツ!バ  
アスタアアアアア!!」

「くらいな!ノーヴェル・チェインブレイカー!!」

反応が遅れたエクシエスに向けレヴィって子のデスサイズ・スラッ  
シユから蒼く輝く高密度粒子砲撃《スプライトバスター》が迫るかわ  
しきれない。何とか横に逃げた私にミカちゃんのスサノオ、赤髪の  
ノーヴェルガンダムが間合いをつめ待ちかまえている、グラムにオレ  
ンジ色の粒子斬撃が直撃、グラムが砕けた瞬間、赤髪のノーヴェルガ  
ンダムの残像を残すほどの速さで繰り出された蹴りがエクシエスを  
捉え、無数の蹴りが装甲や関節を砕き最後に重い蹴りが決まりコロ  
ニーの壁に叩きつけた

アームレイカーを動かすけど反応しない。そして

― B A T T L E ・ E N D E D ―

バトル終了を告げる無慈悲な音声が響いた

☆☆☆☆☆☆

「か、勝ったの……………」

「ああ、つうか。なんであんなのもってんだよミカヤ」

「…………それは聞かないでくれるかな？」

「そうだよ、あの可愛くてフニフニな小さい子ってタカタカだよね？  
ミカヤン？」

「さ、さあ…………それよりも」

GPベースとガンプラを手にするミカヤはあたしとレヴィの言葉をはぐらかす…何かおかしいな。それよりもアーマーシユナイダーが突き刺さるような気配に振り返る。薄桃色の着物に身を包み黒髪を揺らす女が恨めしそう、いや悔しさいっぱいの目でじいっとみてる

「……………」

「な、なんだよ」

「……………別に…………ただ一つ言っておくわよ。アナタたちが、この私に勝てたのはまぐれよ！それに私の可愛い可愛いタカヤとつき合うなんて絶ツツツツ対に認めないわ！」

「な、なんでそうなんだよ！…っていうか、つ、付き合う…………ちがうし！  
サエグサ模型の大会のペアを決める戦いだから！」

「いきなり乱入してボクとタカタカが大会にでるの邪魔したのはおばさんじゃないか！」



「……………お、お、おばさ……………いい度胸ね。なら手加減なしでもう一度や……………」

「そこまでだよメイ」

静かな声が止めに入った。黒髪に穏やかな目をしたヤツがバトルをしようとする目の前の女…メイの肩に手をおいた……………なんでかわからないけどタカヤににてる気がする

「…せっかくのガンプラバトルに無理に介入して、なおかつ負けたんだ。こつちに非はあるし《負け》の事実は変わらない。言ったじゃないか？ 《グラムを破壊できれば勝ちよ》って……………それにエクシエスもだけでも三人のガンプラもボロボロだ。もしやるなら万全の状態で挑んでほしいな。僕のガンプラ《エクシエス》も望んでるだろうし」

「……………んくくわかった、わかりましたようく私の負けよ」

「ソレでこそ僕の大好きなファイターで可愛いメイた。あとは」

「……………せっかくのガンプラバトルに介入してごめんさい……………」

肩に手をおかれシュンとなりながら謝る姿に介入されたことについての怒りは消えていく。でも、気になるのはメイって奴の口からでた《可愛いタカヤ》…隣にいる男なんかよく見るとタカヤに似てる。じつとレヴィもみてる

「あのおじさん。もしかしてタカタカのお父さん？」

「ん？ 確かレヴィちゃんだったね。紹介が遅れてごめんね…僕は秋月ユウキ、タカヤのお父さんです。そして隣にいるのが可愛い、可愛い世界ランカー第八位のファイターで奥さんの秋月メイだ」

「も、もう／＼／可愛いファイターって、いくら本当のことでも連呼しすぎようユウキったら……バカ」

「……………え、えええ!!」

甘々な空気をあふれさせながら恋人つなぎする指に輝く結婚指輪を見せつけるユウキを照れ消しに駄々っ子バルカンならぬ駄々っ子パンチをポカポカうつメイの姿と衝撃的な言葉にノーヴェ、レヴィの声があがるなか

「ははは、相変わらず甘々ですねユウキおじ様、メイおば様も……………」

今にでもブラックコーヒー…極濃抹茶を飲みたい気分でミカヤはつぶやいていたとかないか

第六話 タカヤのペアは？（中編）

## 第六話 タカヤのペアは？（後編）

「あら〜熱いわねタカヤくんのお父さん、お母さんは……どうしたの？」

「か、母さん、それに父さんイチャつかないでったら……ひさしぶりに日本に帰ってきたと思ったらコレだよ。みんなの前で恥ずかしいじゃないか……もうう」

二人が一目をはばからずいちやつく姿にうなだれてるタカヤくん……まあ、仕方ないわね〜何時まで経っても新婚さん気分抜けきらないし、でもああ見えてユウキさんは若くしてガンプライスター、メイさんは世界ランカー第八位のファイターなのは驚くのよね

でも、ソレより気になるのは勝敗の行方何だけど……さっきの言葉通りならグラムを破壊した《あの子》に決まりかも

「……………ああ〜ノーヴェったら……でもまだチャンスはあるし」

「勝負はコレからよ。フフフフフ」

私の隣で笑顔だけど目は笑ってないプレシアさん、クイントさん……本気で店の跡取り、レヴィちゃんとの婿養子にタカヤくんを迎えるために何かたくらんでるのがまるわかり

さてと、コレからが大変かもねタカヤくん？なにしろ……まあ、これは本編をみてからよ♪

「それでは！ガンダムビルドファイターズ刃ーブレイドー！レディイツゴオツ!!」

第六話 タカヤのペアは？ 《後編》

サエグサ模型店：様々なガンプラから多種多様なプラモをはじめとしてツール、バトルルームを備えた有名なファイターが訪れる知る人ぞ知る店

その住居兼店舗のキッチンに激しい熱気に満ち白いコックコートに身を包んだ赤い髪に炎をあしらったパンダナを巻いた高校生が中華鍋を振るい炎と格闘しながら蒸籠の蓋を素早く取る

蒸された鯛が丸ごと皿に乗せられ、隣には透き通るような皮に包まれ肉汁が溢れんばかりの焼売がむしあがっている

「よつと！フェイト、点心を皿に盛ってくれ」

「うん、えと……こんなかんじかな？」

「ん、上出来だ……よし出来た極濃エビチリ、蒸し物も全部かな……どうしたフェイト？やっぱり疲れたか？」

「え？ううん！疲れてないから」

火を止め大皿にエビチリを盛り満足そうに笑みを浮かべるのは雷鳳飯店跡取り息子兼店長代理《新田飛鳥》、その彼女《フェイト・テスタロツサ》がぼうつとしながらみてるのを心配する飛鳥にあわてながら手をひらひらさせる

「やっぱり生徒会の仕事大変だろ？蓮なんかタヌ：八神の書記してるから最近帰りも遅いし、最近なんか泊まりも増えてるから心配でさ」

「そ、そうだね。でも蓮が書記になってからはやてすごく助かって言ってたよ……(ホント助かってるよ。はやてったら蓮くんに夢中だし……)」

「……まあなく俺より頭良いし、本好きの八神とお似合いだよな。さて料理を運ぶか……」

器用に大皿を手にもちながら歩く飛鳥、その後ろついていくフェイ

ト……飛鳥がここに来たのは出張料理人として呼ばれたのもあるが、もう一つ目的がある

(……あのレヴィが好きになった男をみにいくか、将来的には俺の義弟になるしな。アリシアも喜ぶだろうな)

……未来の義弟の顔を見るのも兼ねてだった

☆☆☆☆☆☆☆☆

「ん〜ひさしぶりタカヤの感触…はあ〜」

「か、母さん？やめて皆見てるから？」

「べつにいいじゃない。二年もみないうちにこんなに大きくなって…ユウキに似て髪もサラサラね」

二年ぶりに会う息子タカヤの成長具合を確かめるよう頬ずりするメイから逃げようと手を伸ばす。その先には

(……メイおば様、うらやましますすぎです。今すぐにかわってください！少年は…たつくんは、わたしが《初めて》から《最後》までを是非に任せてもらいたいのですが)

(……うらやましい。ボクもタカタカとあんな風にやりたいなくお母さんにどうすればいいか聞かないと)

(っうかくつつきすぎだろ。あたしだってあんな風に……っ！べ、別にうらやましくないし。でも……ああくもう……イライラする!!) 少しヤバめな気配を醸し出すミカヤ、プレシアからさらなる策を得ようとするレヴィ、素直になれずイライラするノーヴェを前にギユウ

ウツとタカヤを抱きしめ満面の笑みを浮かべるメイ。誰も助けられないかと諦めかけた時、救いの手が差し伸べられた

「おまたせ〜今回のバトルの結果発表〜…の前に夕御飯を食べようか？今日は雷鳳飯店の出張料理人が腕によりをかけて作ったから冷めないうちね♪」

ミツキの言葉に時間をみると夜の8時を回っている、ようやくメイから解放されタカヤと皆が向案内された部屋には大きめのテーブルに椅子。蒸し物、点心、炒めモノが大皿に盛られ食欲をそそる匂いに空腹だったのに気づき、先に来ていたプレシア、クイントも座っている。それぞれ席につき箸を手にし小皿にとりわけ口にした時、あまりの美味しさに言葉を失う

「お、美味しい……（火の通り加減もだけど……野菜の旨味が凝縮されて……ダメだ箸が止まらない）」

「タカタカ！ボクのユーリンチーあげるね。はい、あ〜ん♪」

「少年、私の包子（パオズ）をたべてみるかい？」

「な、なんかさたくさん盛りすぎたからさ、食べきんないからやるよ……ほら、口開けなよ」

瞬く間に平らげたタカヤにノーヴェ、ミカヤ、レヴィが箸で甘酢ダレが染み込んだユーリンチー、蟹身入り包子、黒酢スプタをズイスイと口元に近づける。逃げれないと気づくも真剣な眼差しに気圧され覚悟し食べていく中で三人の親同士でも話が盛り上がりを見せていく

「はじめまして秋月メイさん、私はプレシア・テストロッサです。レヴィがいつもタカヤ君にお世話になってます」

「…あ、いえ、こちらこそはじめまして。テストロツサさん…レヴィちゃんのガンプラもですけどファイターとしても輝くモノを感じました。こちらこそよろしくお願いしますね（……………なるほど将来はこうなるのね……………ふふふ）」

（あら、なかなか見ているわね……………いまのうちにアピールしておくかしら？）

「あの、はじめまして中島クイントです。タカヤ君スゴいですね〜ファイター、ビルダーとしてもだけど、この前、私の店で、あのリカルド・フェリーニがタカヤ君とノーヴェと一緒にタッグを組んで戦ったんですよ」

「はじめまして中島さ……………え？それは本当のことかしら（あのフェリーニが日本に来ている？世界戦が日本でおこなわれるのは聞いていたけど、まさかタカヤと……………気になるわ）中島さん、その時のタカヤのバトルのVTRはあるかしら？」

「もちろんありますよ。はい、コレがその時のよ」

世界ランカー、イタリア代表《リカルド・フェリーニ》が駆る《フェニーチェ》とタカヤが借り受けたアストレイゴルドフレーム《天》、ノーヴェが駆るOガンダム・Bの息がぴたりとあわさった連携プレーにやりとりを聞き少しだけ顔をひきつらせながら見ている

（……………なんで、こどもタカヤと息ぴったりであわせられるのよ？ミカちゃんぐらいしかいないと思ってたのにい〜）

「どうかしました？」

「い、いえ、中島さんでしたわね……もしかして《荒野の迅雷ゲンヤ》の」

「はい、妻です。いまはナカジマホビーの店長ですけど……」

（荒野の迅雷《ゲンヤ》……ラル大尉に並んで三巨星の一人……荒削りだけど光るモノがあるのはそれだったのね……）

「さて、お腹も膨れて親交を深めたところで皆注目！今日のガンブラバトル《タカヤ君のペア》決定戦の結果発表しま〜す♪」

スポットライトの光を浴びながら現れたミツキの声に皆の視線が集まる。その後ろにおかれた巨大なパネルに光が走り映像が流れミカヤ、ノーヴェエ、レヴィがドキドキしながら、プレシア、クイントが固唾を飲む

「タカヤ君のペアは………ミカヤ・S・天瞳ちゃんに決まりました〜♪」

「わ、わたし!?!」

「ちよつと！なんでミカヤなの?」

「レヴィちゃん、試合にメイさんが乱入して勝利条件が大きく変わったちゃつたのよ〜《私のグラムを破壊出来れば勝ちよ》に。最初にレヴィちゃんのスプライトバスターが直撃したけど破壊には至らなかった。ツンデレちゃんのチェインブレイカーは武器破壊されたあとの攻撃だから無効。つまりグラムを直接破壊したのはミカヤちゃんの粒子斬撃よ」

先ほどのバトルのVTRを映すミツキの言葉通り、確かにミカヤの



ツクヨミ・斬の粒子斬撃がグラムに直撃、粉々に砕いているのをみてレヴィ、ノーヴェエは納得するより悔しい気持ちで胸いっぱいだった：女の子だけどファイター。なら負けは負けとして認める事を決めた

「ミカヤ、今回だけはゆるずるけどさ…：ぜってえ負けんなよ！」

「ミカヤン、タカタカのペアにはなるのは認めるけど勝負はコレからだからね!!」

「ああ、胸にとめておくよ…：まあ、私も少年を離す気は無いけどね…：……」

新たな闘志を胸に宿し親友のノーヴェエ、レヴィの言葉に力強くうなづくミカヤ…：宣戦布告とも取れる光景に

「あら、完全に火が付いたわね〜ユウ、はやくバトルシステムを来週の大会までに直しなさいよ？」

「まてよ姉貴！いくら何でもオレ一人じゃ無理だからな！フィールド設定や粒子回路もおしやかなんだ…：……」

「少し貸してくれるかなユウくん。こうなったのも僕のメイの介入があったから。粒子回路は任せてフィールド設定お願いできるかな？」

「いいけどさ、奥さんほうっていいのかよ？」

「ん、まあ大丈夫だよ…：コレから母親同士での親睦会やるって言うたから。しばらく日本に居られるし気にしなくていいよ」

面白そうにみるミツキにくぎを差されハイハイと言い作業をするユウ。その隣で楽しそうにカタカタと粒子回路の構築を始めるユウ

キ…ビルダー以外にバトルシステムの開発に友人イオリ・タケシと共に携わっていた事をあとで知り、ユウはかなり驚いていたらしい

波乱に満ちたタカヤのペア決定戦は母親の乱入もありながら無事に幕が下りた……

☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆

「カレトヴルツフ、まだ現存していたみたいだなあ」

「ああ、もういいだろ。俺の負けを認めるから……これ以上はやめてくれよ……何でも言うことを聞くからさ」

「ヤダね……オレの強さを証明したいんだよ……ガンプラバトル最強にいたるにはカレトヴルツフを手に入れる……そのためには」

首に巻かれた赤いボロボロのマフラーをなびかせ、顔を金色の無機質な緑の瞳に三日月のような口が描かれた仮面で隠し、全身を黒のライダースーツ姿の男性？が原型を留めないほど破壊されたガンプラを見ながらスロットをSPに合わせる

「この《宇宙ガンプラファイターX》、《アストレイ・龍刃皇》が使うに相応しいんだよね……あきたから消えなよ……」

「や、やめてくれえええ!!」

闇夜に叫びが木霊し消えていく。新たな悪意が静かに近づきつつあつた

第六話 タカヤのペアは？（後編）

了

## 第二章、カレトヴルツフ争奪男女ペアマッチ!!

### 第七話 開催! ☆

「んにゅ……」

目を軽く開けながら身体を起こす。ぼうつとした頭が少しずつ軽くなるのを感じながらベッドから出ようとする手に柔らかく、包み込むような暖かさを感じる。何だろと感じながら強く握る

「んっ……」

艶を帯びた若い声…一気に覚醒し目を手へ向けた先には黒髪を纏め胸元が大きくはだけた胸を鷲掴みにしている。眠っている少女はタカヤの通う学院の先輩でガンプラ部主将ミカヤを目にし冷や汗を流し始めた

### 第七話 開催!

(な、なんなのコレ…たしか昨日、夕方にミカヤ先輩が00fast、second、劇場版と一緒に観ないかってウチに来て……)

「GN粒子ってプラフスキー粒子と似てるんですね。それに00とスサノオのトランザム対決は刹那とミスターブシドー、グラハム大尉もすごい」

「そうだろ少年。グラハム大尉の名言はわたしの心を何度ふるわせたことか」

(見終わってから話もりあがっちゃって、ぼくのブレイドとスサノオのイメージバトルして…知らない間に眠ってしまったんだ…は、はやく手を)

手を離そうとしたとき、うつすらと目をあけたミカヤ…少し間をあけ柔らかな笑みを見せた

「…おはよう少年…そんなに強くしないでもらえるかな？ パートナーといえさすがにこれはな（……………可愛いなタツくんは。昔はよくせがまれたのだけどな…）」

「（…ごめんなさい！）」

「ぐぐてんもぐげん♪タカタカ、朝だよ」

慌てて手をはなしたのだが運が悪い、勢いよく部屋の扉が元気いっぱいな声とともに開かれた…水色の髪をツインテールにまとめた白のパーカー、黒のホットパンツ、水嶋のオーバーニー姿の少女。タカヤの部屋の隣に引っ越してきたレヴィの前にははだけた寝衣姿のミカヤ、その胸を揉むタカヤの姿

「……………あ、あのテストタロッサさん？ コレはその…」

「…るい…ずるいよミカヤン!! ボクも一緒にタカタカと寝る!! えいっ!!」

「ちよ！ テスタタロッサさん？ 服を脱がな……………はうつ!?」

（お母さん直伝、男の子の落とし方必殺48技『大人下着でスキンシップ』、これをやれば草食男子でも狼になるって……………お母さん、ボク頑張ってきてせいじじつ作るよ）

（やるなレヴィ……………ならわたしも）

パーカーに手をかけ、部屋に脱ぎ捨て黒の下着姿になるなり勢いよくベッドに潜り身体を密着させるレヴィ…負けじとミカヤも迫る。

あまりの騒がしさに時差ボケなメイとユウキが来るまで最後の砦（貞操）を守るために必死な攻防が繰り広げられたそうな……とりあえず、言わせてもらおう……このリア充め!!（グラハム風）

## 第六話 開催

ナカジマ・ホビー

「……遅いぞタカヤ、ミカヤ、レヴィ」

「すまない。少し立て込んでいてね……」

「ゴメンねノンたん♪」

「ノンたんはやめろ！スピリチュアルパワーなんかないんだかなー！」

バトルルームでノーヴェ（ナカジマホビーのエプロンにメイド服姿）に謝るミカヤ、レヴィにため息をつきながらタカヤを見る……なんかわからないがやつれているのを見てムカムカしてきた

「さて、タカヤ。お前のブレイド見せろ」

「え？は、はい」

ケースから取り出されたのは赤い肩アーマー、腕のアスカロンはそのままだが、全身に鋭角的な緑のクリアパーツが埋め込まれたアストレイ・ブレイド《楯無・改（あらため）》の姿に息を呑んだ

（全身のクリアパーツ……まさか粒子を蓄積して制御も考えてんのか……）

(このクリアパーツは……あの技を使うためのモノだな、私とタツクんの合体技を)

(スゴくキレイだタカタカのブレイド…ボクのスラッシュより強いかも…)

「あの、どこか可笑しいかな？」

「い、いや何でもない。大会まであと3日…それまでしつかり煮詰めっからな…い…い…なぜったいに勝てよ!!」

「は、はい」

見とれていたのを隠すよう語気を荒げながらバトルルームに入るノーヴェエ、タカヤ…GPベースをセットと同時に粒子が煌めきフィールド、荒野が生まれ降り立つノーヴェルガンダム《A》、アストレイ・ブレイド《楯無・改》

『さあ、胸をかしてやつからかかってきな!!』

『いくよブレイド!』

双眸を輝かせぶつかり合うブレイド、ノーヴェルガンダム…同じ頃、トオルはシュテルとの最後の調整を進めていた

「トオル、ランスロットガンダム大会前に仕上がりそうですね」

「ああ、あの時の狂四郎大会で会った武者頑駄無とのバトルがヒントをくれたからな……もちろんシュテルも手伝ってくれたからな」

「そ、そんな事無いです…あなたの発想もスゴいですよ」

「さんきゅ…さあ、一緒にカレトヴルツフ手に入れようぜ！」

「は、はい」

大会にかける意気込みに満ち溢れた笑顔にドキリとなるシュテル…しかし、その背後には……

「トオル……わたしもペアマッチに参加したかったなあ〜」

ハイライトが消えた瞳でドアの隙間からみるヴィヴィオ……ちなみに今いるのは高町家。実は従姉妹が日本に留学して来ると言っていたのはシュテルの事、知らない内に仲良くなってた二人に嫉妬のオーラを燃やしていた

頑張れヴィヴィオ！

☆☆☆☆☆☆☆☆

「シェロウ！シェロウ！聞いておるのか!？」

「あ、ごめん。少し集中してたから…デИАーチエ、お腹空いたのか」

「我はどこぞの腹ペコ騎士王ではないわああああ!!3日後の大会に…するための機体は出来たのかと聞いておるのだ!!」

「ああ、出来たよ……名付けで武者真亜頑駄無！コイツにはスングイ仕掛けがあるんだ」

腹ペコ騎士王…デИАーチエの前に出されたのは真紅の鎧に金の



鋭角的な前楯、力強くそして巨大な剣を背にした武者頑駄無。機体に秘められた強さを見抜き、シロウの顔をみる

「さすがはシエロウ。我が伴侶よ！さあ共に有象無象をヴァルハラへとおくりカレトヴルツフを手にしようぞ」

「ははは……伴侶じゃないから……」

軽く突っ込みを入れながらカレトヴルツフを手にすると誓いながら食事の用意を始めるシロウ。ディアーチェの好きなクリームシチューを……

そして3日はあつという間にすぎ、サエグサ模型店の地下にある巨大なバトルルームにひしめく観戦者、そして大会参加するペアが16組並ぶ前に開催者であるミツキ・サエグサが壇上にたちマイクを手にした

「はくいファイターの皆様お待ちかね♪サエグサ模型店主催、ガンブラバトルペアマッチ大会開催をここに宣言します。まずはくじ引きで対戦相手を決めますので参加者は二人一緒にくじを引いてください」

ミツキ・サエグサの宣言と同時に歓声があがり参加者は壇上にある巨大なガチャガチャを回していくとホログラフに組み合わせが決まっていく中、タカヤとミカヤの番になった。二人一緒に手を添え一気に回した

「……∞」

「少年、どうやら私たちが一番手のようだ」

「ええ〜！いきなりですか？」

ホロスクリーンをみると確かに予選第一回戦になっている。自分たちの《チーム・ブレイド》、対戦相手は《チーム・カリスト》：双子の姉弟からなるチームが笑みを浮かべみている

「ふふふ、私たちに当たるなんて不幸ね」

「そうだね、姉さん……僕たちの華々しい勝利に華を添えてくれるとうれしいよ」

「さあ、組み合わせも終わったわね〜さて、まずは第一試合ルーキー《チーム・ブレイド》VS《チーム・カリスト》を始めます。ファイターはGPベース、ガンプラをセットしてね」

ノリノリなミツキの声に中央からせり出したバトル筐体に向き合うようにたちGPベースをセット、プラフスキー粒子があふれだした

《Press set your GP Base: Press set your GUNPLA》

つ 四人のガンプラの瞳に光が宿り命が吹き込まれたカタパルトに立つ

《Beginning[Plavesky. Particle]dispersal. field5, space》

コロニーが浮かぶ宇宙空間が形成され、観戦者のボルテージも高まりを見せていく

《Battle・Start》

「秋月タカヤ、アストレイブレイド・楯無《改》いきます！」

「天瞳ミカヤ、ツクヨミ・斬……………参る！」

「木原リスト、クアバーゼ改いくよ」

「木原エウロペ……………バーラ・トトウガでる」

弾かれたように宇宙空間をかけるアストレイ・ブレイド、ツクヨミ・斬、クアバーゼ改、バーラ・トトウガ

…真っ先にクアバーゼ改がアストレイ・ブレイドにビームソー…いやビームエミッターが無数に並び回転しながら切りかかる。が、紙一重でかわしアスカロンで防ぎ受け流し、一気に間合いをつめ回転し蹴りを胴へ決める

「リスト！」

「…よそ見はいけないな」

「なに！でもそんな刀でバーラトトウガのビームシールドは…」

「本当にそうかな？」

ツクヨミ・斬の手に構えられた刀《晴嵐》に粒子が纏われ抜き放つ。バーラトトウガのフィールドを突き抜け切り裂いた

「な、なんで！トトウガのシールドが、ま、まぐれよ！」

「……………たしかに君の装甲、シールドは硬い。でも粒子変容フィールドを纏わせれば、こんな風に」

バールトトウガがビームキャノン、実体弾をちかづけまいと撃つも流れるようにかわし大きく横へ風ぎ払うと切り裂かれ爆発、視界がふさがれツクヨミ斬の姿を探し見つけたとき、晴嵐に逆袈裟に切り払われ返す刀で首を飛ばされ瞬く間に爆発した

「姉さん！ち、この!!」

「速い、でも見切った!!」

嵐のようにビームソーを振るうクアバーゼ改の刃をかわしながらスロットをSPにあわせ迷わず押した時、全身に配置されたクリアパーツから膨大な粒子があふれ形となる…緑の炎を想わせる刃ーブレイドーが現れアスカロンも燃え上がっているのを観戦席にいるノーヴェエ、レヴィも目にした

「タカヤ、決めるつもりだな……………」

「間違いないよ、ノンノン……………いっけえタカタカ！ボクたちとの特訓の成果を見せるんだ〜♪」

「な、なんだよ……………こけおどしだ！クアバーゼ改が負ける訳ないんだ！」

「……………燃え上がれ」

クアバーゼ改のビームソーをかわしながらつぶやくタカヤ…その瞳に炎がきらめく。徐々に間合いをつめていくブレイドの炎が激しさを増し、高揚していき叫んだ

「燃え上がれ……………僕のガンプラアアアアアア愛ッ！必殺！真・疾風怒濤の嵐いいっ!!」

大きく構えられたアスカロンに全身に燃え上がる炎、プラフスキー粒子の粒子が纏われ逆袈裟、袈裟、胴風ぎ：目にも止まらぬ斬撃が嵐のように撃ち込まれ、最後に両手を構え粒子球を形成し胴へ叩き込み反対側へ分厚い刃：プラフスキー粒子の刃が見えクアバーゼ改の瞳から光が消えた

《BATTLE END》

水を打ったように静まり返る会場：誰もがその戦い方に見惚れ、何より圧倒的な強さに魅入っていた

「…………し、勝者……チーム・ブレイド!!」

「や、やったよノンノン、タカタカ、ミカヤン勝ったよ!」

「わ、わかってるからノンノン言うなああ!」

二人の喜ぶ声が呼び水のように観戦席から沸き立つような熱気と歓声が上がった……秋月タカヤの名前が初めて公の場にデビューを果たした

## 第七話 開催

了

第6・5話 とある乙女座の少女《HENTAI》の  
秘め事《悦》

「ん、朝か……」

軽く目をこすり身体を起こす。確か昨日は少年……《たつくん》とわたしの聖典《機動戦士ガンダム00》first、second、劇場版をみて語らいながらいつの間にかに眠りについてしまったようだ

「んにゅ……」

微かな声にハツとなりみるとたつくんがフにやっとした顔でとなりで眠ってる。しかも顔が間近……瑞々しくプルリとした唇に引き寄せられてしまうのを我慢する

(たつくんの寝顔……ふふ、むかしと変わらないな……わたしとよく同衾したな)

「カヤおねえちや。きょうもぼくといつしよに寝るの?」

「き、今日はすこし怖い書物を見たから……そのだめかな」

「……いいよ、カヤおねえちや。こわいゆめをみないようにいつしよにねよ♪それにカヤおねえちや、ぼくが泣いていたときにいつしよにねてくれたから、おあいこだよ」

「……メイ叔母様とユウキ叔父様の仕事の関係(国際ガンプラ委員会の委員権、ファイター、ビルダー育成の為に)でやむなく天瞳家に預けられたタツくん。たまに夜中に起きて泣いてて、わたしがいつしよに寝るようになった」

さいしよはこそばゆかったが、やわらかくて無垢な寝顔と不思議な暖かさはわたしの心をとかしていった。一緒に湯浴みするようになったのも、この頃からだったな

シャンプーが苦手で、わたしがすっかり抱いていないと逃げ出していたから洗うのも大変だった。でも悪くなかったし洗いつこしたりして、抱きながら湯船に浸かる度に鼻血が出そうになった。うなじにやや赤みがさした頬、父上のは違うまだ未熟な部分をみる度に涅槃、いや極楽に至りそうになった……この幸せがずっと続いていくと信じていた

第六・五話 とある乙女座<sup>H E N T A</sup>の少女の秘め事《悦》

あの事件から、タツくんはメイ叔母様、ユウキ叔父様と暮らすようになり当然、天瞳家から離れていった：

タツくんに会いたい、もう一度を同衾したい、湯浴みをしたい……そればかり考えながらガン普拉バトルに明け暮れたけども、タツくんの事を忘れなかったしライバルであり親友のノーヴェとも知り合った頃、ガン普拉バトルでの私の活躍を聞いた蘊奥学園から特待推薦がきた

最初は乗り気じゃなかったけど。熱心に通いつめてきた教諭に押しされたのもある。タツくんが住んでいる場所の近くだったことが入学を決意させた。もしかしたらと一縷の望みをかけて……でも現実はそのなにごくはなかったしガン普拉バトル部を立ち上げ《チーム天瞳》結成と強化に忙殺され一年過ぎた頃だった

「PPSE……メインページ……んゝわからない」

全日本選手権へのエントリーをするためにPPSEのホームに端末で繋いだのだが、入力ID、パスがわからない：普段は教諭、もしくは後輩に頼むのだが使用でない：ガンプラバトルは得意なのだけど、こういうハイテク機器の扱いは苦手だった

エントリー締め切りまであと十分、どうしたらいいんだと思った時だった

「あの？どうかしましたか？」

背後から聞こえた声に振り返ると、黒い髪におどおどした感じの少年がいる。襟にある線を見ると下級生である証《白一文字》が引かれている：いや、それよりもわたしは目の前の少年を知ってる。忘れるはずもない……タツくんだ……これはまさに運命、やはりわたしと赤い糸で結ばれていたのだと確信した

「少し借りていいですか？……」

「あ、ああ」

「PPSEの全日本選手権エントリー……もしかしてファイターなんですか……」

「そ、そうなんだが、あいにくハイテク機器は苦手で……」

「誰でも得手不得手はありますよ……じゃあぼくが手続きやりますね……えと名前は？」

「ミカヤ……わたしは蘊奥学園中等部三年の天瞳ミカヤだ……少年、キミの名は？」



しっているけど聞かずにはいられなかった……上級生だと知ってあわてふためくタツくんの様相は昔も今も変わらない……少し間をあけてわたしに

「蘊奥学園中等部一年、秋月タカヤです……あの先輩だなんて知らなくてゴメンナサイ。て、天瞳先輩」

「別にいいさ。先に名乗りをあげなかったわたししにも責はある……ガン普拉バトルに興味があるのか？」

「え、ええ、まあ……先生からは《まだ未熟！》って言われますけど」

「……先生？もしかや君は誰かに師事しているのかな」

「………はい、先生はすごい人でゴッドガンダム極で並みいるファイターを前に引かず打ち倒す姿は、いつか僕も先生みたいになりたい……かなって……あ、おわりましたよ」

「あ、ああ。すまないな少年………このあと少し時間があるか？」

「すみません。今日は外せない用事があって」

「そうか、なら次の機会に我が部室にくるといい。わたしはいつでも歓迎しよう……少年」

「はい、天瞳先輩」

ペこりと頭を下げて歩き出す姿が消えるまで見送ると、その場へたり込んだ……タツくん……あの頃より大きくなって、むかしと変わらない優しさは間違いなくタツくん

ドキドキしながら端末を抱きしめたわたしは、その日から時間が許す限りタツくんのもとに偶然を装いながら学内であった：昔の、わたしと天瞳家で過ごした記憶は失われているようだ。知らぬ間に親友のノーヴェ、チーム紫天のレヴィが好意を寄せている事がわかった時から攻めに入ることを決め、父と母を説得して隣に引越して、今度のサエグサ模型店主催のカレドヴルツフ争奪戦のペアを決めるバトル、一時帰国したメイ叔母様たちの乱入もあつたけど見事ペアの座を勝ち取った

「んにゆくましゆまろくやわらかくい」

「ん!?!タツくん、もんじゃやあくコリコリだめ」

寝ぼけたのか私の胸へ寝衣の隙間から手を差し入れもみしだきながら敏感な部分をいじってくる：なんども極楽に果てそうになりながら悦にひたる、いつか記憶を取り戻したら、あの日の約束を果たしてもらおう：タツくんがメイ叔母様の試合会場付近の空港で誘拐される前に交わした約定を

ータツくん、し、将来、わたしの良人になってくれないかー

ー《良人》……んくよくわからないけどいいよ。カヤお姉ちゃだ  
いすきだしー

ーな、なら……ち、ちかいのぎしきを……ー

ーちかいのぎしき?どんなこと?ー

ーそ、それはー

ふふ、おもえばタツくんはわかって無かったかも知れない。でも、今なら理解できるはず……このわたし、天瞳ミカヤは誓う。たとえ記憶が戻ろうが、戻ってもなくとも必ずタツくんの心を、その純粋な視線をわたしだけに釘付けにしてみせることを宣言する。親友のノーヴェ、レヴィにも渡さない

しかし今は……タツくんの指と技巧を充分に堪能しよう……はあ、はあ……指でころがしちゃだめ……抓らな……んん!?……ダメだ昔より技量が向上してるよお、身体の奥で女の部分がうずき出す。自然とタツくんのアソコにダメだ、ダメだと想いながらも手が伸びていく

まだまだ、最高の旨味を持つ禁断の果実を口にしたいと願う自分を押しさえ悶えるも微かに指先が布越しに触れた時。タツ君のまぶたがかすかに動いたのをみて慌てて目を閉じ手を引つ込めた……かすかな布ずれといまだに私の胸を弄ぶ指が止まる。どうやら起きたか。手を離そとする前に、うつすらと目をあけると顔を真っ赤にした少年が口をパクパクしている

「……おはよう少年……そんなに強くしないでもらえるかな？ パートナーといえさすがにこれはな（………可愛いなタツくんは。昔はよくせがまれたのだけどな……）」

「……ごめんなさいー！」

「ぐくてんもくげん♪タカタカ、朝だよー」

「……あ、あのテストタロッサさん？ コレはその……」

「……るい……ずるいよミカヤン!!ボクも一緒にタカタカと寝る!!えいつ!!」

「ちよー！テストタロツサさん？服を脱がな……はうつ!？」

いきなり現れたレヴィにおどろきながら、わたしはこれ幸いとタツくんの身体を堪能するべく抱きつく……ふふふ、この匂いと柔らかさは誰にも渡したくは無いものだ

第六・五話 とある乙女座の少女―HENTAI―の秘め事《悦》

了

## 第八話 星光と騎士 前編

「か、勝てた……ぼくは……うわあ!？」

「少年、勝ったぞ！私達の初Y…初勝利だ!!」

「ち、ちよ！天瞳先輩？抱きつかないで？む、む、む……」

初めてガン普拉バトルで勝てた…実感が湧かない僕をなぜかギョツと抱きしめてきた先輩の髪から香る甘い匂いもだけど、む、胸が顔に多い被さってくる。なんとか顔を出すと目と目があった

「あ、あの天瞳先ば…」

「少年、私を先輩とよぶのは禁止と言わなかったかな？」

「え、でも………下の名前は……その、あの」

悪戯っぽく笑いかけてくる…でも今さら先輩を『ミカヤさん』て呼ぶのはスツゴク恥ずかしい。そんな僕をまた強く抱きしめてきた。《さらし》越しに感じる柔らかい胸からなんとか逃げようとするけど離さないって感じで力を込めてる

(ふふ、困ってる顔もたまらないなあ…これが勝利の美酒というもの。今日のブシドー占いは《今日こそ勝負の時！意中の想い人の胸のうち》に深く切り込むべし！自分色に染め上げよ!!》……まさに好機到来、さあめくるめく私とタツくんの素晴らしき量子の集う場での…ん?)

何かに気づいたようにタカヤを抱きしめる腕から力が微かに緩ん

だ。その背後に猛烈なまでの怒氣を放つ二人…プツクリと額に血管を浮かばせるノーヴェ、笑顔だが全身から雷（！）をパチパチ漲らせるレヴィが立っている

ーミくカくヤく！さつさと離れる!!羨まし…いや周りの皆がみてるだろうが!!鼻の下延ばしてんじやねえよタカヤ!あたしの胸だつて負けちやいねだろうが…なんとかしねえと…ー

ーむうくやるなミカヤん。『タカヤくんは大きな《おもち》が好きみたいよ』つてお母さんが言つてたのは本当だったんだ。でもね《おもち》ならボクのが断然大きいから負けないよ!!ー

ー…残念だが、既に少年、タツくんは私の胸の虜だ。それでも挑むのならば我が敬愛する師《ミスター・ブシドー》のように宣言させてもらおう。何時でも受けて立つ!少年のすべては私が頂く(肉体的なのを含む)!!ー

ニュータイプ空間ならぬ、トランザムライザーが引き起こした量子空間?で火花を散らす三人…そんな中、タカヤはというと

(い、息が出来ない…む、むきゅ)

さらに包まれた魅惑の谷間に押し付けられる形で抱きしめられたまま意識を失っていた…ち、リア充めが!!

「さて、皆様お久しぶりです…サエグサ模型店主権カレトヴルツフ争奪ペアバトル大会に出場し一回戦をミカヤちゃんと一緒に勝利を収めたタカヤくん。恋のバトルも水面下で激しく繰り広げられているみたい。でも戦いは始まったばかり。このあとに控えるのは同じくルーキーの二人です!」

栗色の髪をショートにし、黒のワンピースドレス姿の少女《シユテル》と白のパーカーに水色のTシャツに黒のズボン姿の元気いっぴいな少年《トオル》が互いのガンプラを手にし立つ姿…

「ガンプラバトルを経て出会った二人の前にはカレトヴルツフを手にしようと思ちはだる海外勢ファイター。果たして勝利するのは……それはガンダムビルドファイターズ刃！第八話にレディイイツ！ゴオ!!」

## 第八話 シユテル ランスロット 星光と騎士 前編

「トオル、ガンプラの調整終わりましたか？」

「おう！いつでもいけるぜ。シユテルのはどうだ？」

「ワタシのは終わってます……さあ、行きましょうか」

オレに笑顔でガンダムX・ズイーガを見せるシユテル。オレのガンブラ：いやシユテルと一緒に作った純白に、金の装甲が目立つランスロットガンダム、GPベースを手に控え室から出る。会場はさっきのバトルでいまだに熱気がこもってる……チームブレイドのファイター、秋月タカヤのアストレイブレイド・楯無と天瞳ミカヤのツクヨミ・斬、徹底的に作り込まれてるのもわかっけど何より息があってる。それにシユテルから聞いたけど、秋月タカヤが弟子を取らないことで有名なファイター《マスタージャパン》の愛弟子、ペアを組んでいるのがチーム天瞳のリーダー……天瞳ミカヤ《絶剣のミカヤ》ってのはおどろいた

もし順当に勝ち進めばって思うとワクワクする……まさかこんな身

近に強い奴がいるな…

「トオル？どうかしましたか」

「い、いや何でもない……………」

「今は目の前のバトルに集中しましょう……………相手を待たせるのは失礼ですから」

澄んだ声を耳にして現実に引き戻した。あわててGPベース、オレのランスロットガンダムをセットすると対戦相手のガンプラをみる。アストレイとローゼンズールを改修した機体。相当作り込んでるのが初心者のおレでもわかる

「……………」

「なあ……………おい作戦はあるのかよ？みた感じルーキーみたいだけどさ」

「あんたは好きなように動けばいいさ」

「ああ、わすれんなよ山分けだって事をさ……………」

「もちろん」

……………ふん、言いたいこといつてるなあ。アカツキ《調》をセットしながら思う。それよりも気になるのはさっきのバトルにあのガキが居たことだ

再びガンプラバトルをやっているとは思ってもいなかった。X様にカレトヴルツフを献上するためにフラナ機関に潜り込んでるば



る日本に来てみたらいるとはね

まずはコイツらを潰してからだ。楽しみにしていなアキツキタカヤ？あの時と同じように悲鳴をあげさせてやるよ？

l Gunpra battle. Combat mode.  
Standup. Beginning. Plafsky particular dispersion l

l Field3. sky l  
ランダムフィールドセレクトは《浮遊大陸》：大小様々な大地が青空と雲が広がる

A l  
l Mode damage level. Set to

「トオル・フローリアン、ランスロットガンダム！」

「シュテル・T・グランツ：ガンダムX・ズイーガ」

「弾真蹴斗……アカツキ《調》……」

「安住スグル、ロジエ・ズール！」

「「「おっ！／いきます！／……貫く／いくぞ！」「」」

各ガンプラの目に光が灯り、弾かれたように青空を飛翔した……

第八話 第八話 星光と騎士 前編

了

おまけ

「やるわねミカちゃん」

「仕方ないかな……天瞳師範に預けていた時からミカヤちゃん、タカヤを可愛がってたからね……」

ミカヤの胸の中で気絶したタカヤをみるのは父ユウキ、母メイ……二人がいるのは観客席。しかもなぜかトレンチコートに帽子を被った不審者と間違われても仕方ない格好でいる。その証拠に二人の周りには観戦者はいない

「メイ……義兄さんとは連絡とったかい？」

「……………勝つことに執着するあの人は兄でもないわ」

柔らかな笑みが消え、代わりに強い嫌悪感を露わにするメイをみてため息をつく……戦う相手が親友、親兄弟、恋人であろうと勝つことにのみ執着するようになってから自分も連絡はとっていない

あの日の事件も元を正せば義兄が招いたこと……以前は楽しいガンブラ作りをしていた。しかしPPSEに招かれてから人が変わった。二代目メイジンカワグチを継いだあの日から

「メイ、僕は近いうちに義兄さん……二代目メイジンカワグチに会いに行く……」

「でも！あの人は……」

「嫌な予感がするんだ……ガンプラマファイア《イエーガーズ》のメン  
バーが入国したって聞いた……」

「……………」

真剣な目をみてメイは頷いたのをみて、フタタビタカヤに目を向け  
た

「守らなきゃいけない。楽しいガンプラ作りを……そしてタカヤを」

「うん」

ユウキの声に同意するように肩に寄りかかるメイ……ただ、二人  
の格好は不審者極まりなかった

## キャラクター&ガンプラ紹介

秋月タカヤ（13）

性別：男

身長：142cm

体重：40キロ

髪の色：黒

本作の主人公、やや天然で黒い髪に女の子みたいな顔立ちをしているが、れっきとした男の子で《蘊奥（うんのう）》館中等部に通う中学一年生。

ガンプラには中等部にあがるまで興味はなかったのだが、一年前に父ユウキにつれられ訪れたガンプラバトルの試合で《マスタージャパン》が駆るゴッドガンダム《極》の勇姿をみたことがきっかけとなり、迷わず弟子入り、ビルダー、ファイターとして鍛え上げられ初心者領域をようやくでた。ただ五年前の記憶がない。祖父オウマ、両親も言葉を濁している事から怪我がナニカしたんだろうと思うようにしているが：

使用するガンプラは機動戦士ガンダムSEED・ASTRAYに登場する《アストレイレッドフレーム》を改造した《アストレイ・ブレイド》

なぜレッドフレームを選んだのかはいずれ明らかに

マスタージャパン

ガンプラビルドファイターズ炎に登場する凄腕ビルダー、ファイターにしてタカヤの師匠、外見はひげを剃ったマスターアジア本人とそっくり

一年前に押しかけ同然に弟子入りしたタカヤをビルダー、ファイターとして鍛え上げた

使用ガンプラはゴッドガンダム《極》

秋月メイ（36）

性別：女

身長：175 cm

体重：見たら死ぬわよ

秋月タカヤの母にしてガンプラファイター。今から五年前に行われた第二回ガンプラバトル世界大会で黒く塗られた改造アストレイ《エクシエス》（初代）を駆り、大胆かつ繊細に攻め、相手を斬り伏せる姿は《漆黒の殲滅姫》とファイター達から恐れられた。一見するとスタイルばつぐんの和服完璧超人に見えるが手先が不器用で料理が壊滅的……一人息子であるタカヤと夫ユウキを溺愛する姿をみたモノは彼女のイメージを石破天驚拳並みに崩壊させるのはまちがいない

なお、メイが使うガンプラは二代目になるアストレイ・エクシエス。夫でありビルダーのユウキが現在のメイのバトルスタイルにあわせて念入りに調整、ガンプラとメイへの愛を込め作られている

余談だが、夫ユウキと出逢ったのは《あるイベント会場》で……「コレ以上言うと斬るわよ」……す、すいませんでした！

そして、二代目メイジンカワグチの妹である

使用ガンプラ設定

《アストレイ・ブレイド》

型式番号：MBF-POX《B》

全高：16.5 m

重量：47.5 t

オーブが試作したアストレイは五機だけしか存在しないとされていた：しかしヘリオポリス崩壊時の混乱に乗じてアストレイの機体データが《一族》の手により持ち出されライブラリアンが製作した機体

様々なデータを取得するため本機は改造を加えられており最大の特徴は空間の微かな歪み、ミラージュコロイドを感知する頭部多機能センサー《ブレイドホーン》

追加装甲が施された両肩内に増設された小型高出力化した《パワーシリンダー》、各関節にはVPS材が使用されている

両腕装甲に接続されている高エネルギー粒子加速剣《アスカロン》は粒子が一定方向へ加速し流れているため切れ味は尋常ではない……龍すらも殺すと例えられた聖剣アスカロンから名付けられた

しかし本機は新型パワーエクステンダーを搭載したとはいえバッテリー駆動機のため稼働時間は短く、戦法としては一気に間合いを詰め踏み込み、懐へ入った瞬間、発生させたビーム刃で居合いの要領で切り捨てる接近戦重視の機体へとなった

武装

腕部高エネルギー粒子加速剣《アスカロン》×2  
???×2 (未実装)

特殊装備

空間探知多機能頭部センサー《ブレイドホーン》

肩部装甲高出力パワーシリンダー×2

上記の装備をみるように本機にはイーゲルシユテルンなどの射撃兵装はすべてオミットされている

アストレイ・ブレイド《楯無》装備

MBF-POX《TATENASHI》

全高：16.5メートル

重量：51.8t

アストレイ・ブレイドの強化版。両肩にプラフスキー粒子圧縮、全身に圧縮粒子を循環させ機体スペックを三倍にまで引き上げるユニット《楯無》が追加された姿は鎧武者を連想する

全身にプラフスキー粒子を循環させる楯無はまだ未完成だが、奇しくもイオリ・セイが考案しスタービルドストライクに搭載されたRGシステムに非常に似ている

武装は全くは変わらないがタカヤはさらなる強化プランを検討している、進化を続けるガンプラと過言ではない

ゴッドガンダム極（ゴッドガンダムきわみ）

タカヤの師匠マスタージャパンが使用する「HGFC ゴッドガンダム」の改造機

両肩に シャイニングガンダムのパーツを使用し鎧武者のような無骨な形状が特徴的な格闘型の機体

しかし射撃戦にも対応しており、コアランダーに2門の大型ビーム砲「ゴッドキャノン」、2振りのカレトヴルッフを装備、必殺技は右拳

から放たれる「バーニングフィンガー」、左拳から放たれる「シャイニングフィンガー」、足裏にカレットヴルツフを装着して放つ飛び蹴り「輝震爆鳳烈覇（きしんぱくほうれつぱ）」などがある

\*制作技術がともまわず無理でした…

アストレイ・エクシエス

形式番号：JGMWF-00

全高：17m

重量：45t

装甲材質：発砲金属+VPS

動力源：パワーエクステンダー+デュートリオン

特殊装備：ヴォルチュワル・リユミユエール

武装

量子通信誘導浮遊破碎爪《ドラグ・リム》

《ム》  
カートリッジ式ビーム発生器内蔵実体剣シユベルトゲベール《グラ

超高出力ビーム斬撃剣《ライオットザンバー》

特殊機能：V・T (Vampire Territory)

機体解説



火星圏に再び訪れたロウが同圏内にあるデブリベルトを航行中に両腕、両足、装甲を損壊させたMSの胴体と武装らしき残骸を見つけ中に冷凍睡眠されていたマルスと共に回収、マルスが記憶をとりもどすために傭兵部隊サーペントテールについていく事を決めた時に餓別替わりに修復し手渡した機体

喪われた両腕は連合系いわゆるX105系列と200系を、両足はアミノミシハラで天ミナをメンテしたさいにでた余剰パーツを組み、唯一無事だったボディフレームに発泡金属とVPS装甲をあわせ機体データにあった外観とほぼ同じに仕上げる一方で背部に105系のストライカープラグを組み込み、同時に行われた武装の修復はシユベルトゲベール《グラム》はエネルギー消費を押さえるためアクタイオンが保有するEカートリッジ技術を、量子通信誘導破砕爪《ドラグ・リム》にも組み込まれV・Lの稼働時間延長に貢献している

しかし特殊機能《V・T (Vampire Territory)》の仕様はロウ、《8》でも解析およびプロテクト解除が出来なかった……解禁はマルスの記憶がよみがえった時かもしれない

※コレはあくまでビルダーが考えた設定です。

中島ノーヴェ

年齢：15

身長：168 cm

体重：(赤いナニカに塗りつぶされている)

スリーサイズ：ああ!?!?潰すぞ作者!!

ナカジマボビーの看板娘にして本作のヒロインの一人。性格は

荒っぽいが優しく面倒見がよくS tヒルデ学院のガンプラバトル部  
《チームN》リーダー

少し荒れていた時期があったがガンプラバトルと出会い、はまりこんだ。その矢先に親友兼ライバル（恋の）天瞳ミカヤと出会いを果たし、チームN結成後しばらくしてマスタージャパンを介して秋月タカヤと顔合わせし実力の差を見せつけた

：それから偶然、ナカジマボビーでお客様を呼び寄せる看板娘ならぬ看板メイドをしていた際に再会、世界大会常連《リカルド・フェリーニ》との急造タッグでバトルに対する真摯さ、ガンプラに対する真剣な眼差しに惹かれていったが元来の性格が邪魔して素直になれず、気がついたらライバルが!?

しかし、母クイント、姉達と従姉妹のバックアップを受け攻めることを決めた

ノーベルガンダムA 《アサルト》

型式番号：N2-09A

武装

頭部バルカン

GANナツクル×2

脚部ビームブレード×2

ビームピストル×2

## 秘密装備

### W《ウェディング》

そのなのと……グシャ！バキキ！（血まみれで詳細不明）

### 特殊スロット：《カップリングシステム》

中島ホビーの看板娘の一人にしてチーム《N》リーダー《中島ノーヴェ》が富士カップに向けOガンダムBに変わる機体として制作していたのをタカヤとペあになるために機動武闘伝Gガンダムに登場するノーベルガンダムをベースにカスタマイズされている

原型機とちがい放熱フィンは短く切り詰め自作しクリアーパーツをメッシュ状に、脚部ヒールは移動用のローラー、脹ら脛に粒子バーニア兼ジェネレーターから出るビームブレード、腰から延びたスカート状フィンスラシャーにより超絶的機動を確保、両腕に装備されたGANナツクルで殴りつけ、きめに粒子バーニアとジェネレーターを最大稼働させた蹴り技《リボルバースパイク》は粒子帯おも変質させ強固なガンプラを蹴り潰し砕く

なお、なぜノーベルガンダムを選んだかと言うと姉たちから「たまには可愛らしいガンプラ作るっすよ」との一言があった

しかしタカヤと出逢った事を機に姉たちがコッソリノーベルガンダムA《アサルト》用にW《ウェディング》を製作し隙あらば換装を狙っている

### レヴィ・テストロッサ

年齢：14

体重：スツゴく軽いよ

スリーサイズ B・W・H：大きくて肩こるよう・アリシア、フェイトと同じだよ・フェイトに負けてないもんね〜

チーム紫天の切り込み隊長にして愛されるマスコットで二人目のヒロイン。強いファイターがいると聞いて来たサエグサ模型店でタカヤとバトルし熱戦のすえ負け泣き出してしまい慰められながら一緒にガンプラを修理する中で好意を抱き不意打ちながら《初めて》を奪い、偶然なのかタカヤの住む部屋の隣に引っ越ししてきたから母プレシアのアドバイス（18スレスレな）でかなり……いや、がつつり（マジ）攻めてきている

家族構成はドイツに単身赴任中の父、母プレシア、双子の姉フェイト、アリシアの5人家族

なおフェイト、アリシアは中華飯店の跡継ぎ《新田飛鳥》とつきあっている（出会いは突然で、衝撃的）

デスサイズ・スラッシュ

型式番号：SHK|BO1

武装

頭部バルカン×2

ビームシザーズ《バルフィニカス》×1

ヒートスパイク

翼部ウイングソー×2

特殊スロット：  
??????

チーム紫天の一人、レヴィ・テスタロッサが駆るガンプラ。デスサイズの名前を冠してはいるが半分は現代改修とミキシングビルドで制作されている。関節部の強度に加え可動範囲の広さ、背後の翼にプラフスキー粒子を収束、可変式ビームシザーズ《バルフィニカス》を砲撃モードに移行してから放つ《スプライトバスター》、シザーズから刃のみを射出しぶつけ切り裂く《フラッシュエッジ》、そして……と  
りあえず割愛

なお、デスサイズスラッシュを作った理由は月夜をバックに飛翔し翼を広げたのを目にしてから。なお、型式番号のSHK|B01は「S(すぐくて)H(速くて)K(カッコいい)〜B(ボクー)」とのこと

天瞳ミカヤ

年齢：16

体重：(鋭利な刃物で斬られてる)

身長：少年《たつくん》を胸に抱けるほどだ

スリーサイズ：宣言しよう、我が身は少年をすべて愛せる自信がある

タカヤが通う蘊奥館学園高等部に通う少女でチーム天瞳のリーダー。黒髪を白いリボンで両耳元で結び腰あたりまで伸ばし学内を歩く姿はまさに大和撫子…と思いきや重度のグラハム病を患っている。特にガンプラバトル時には巫女服に陣羽織、アイマスクをつけ発言の節々からはグラハム病独特の言い回しに加えタカヤとの変態的妄想を繰り返す《残念系大和撫子お姉さん》

しかしながらファイター、ビルダーとしての実力は極めて高い…少し前までは機械音痴だったのだが中等部へ入学したタカヤが教えた事で解消、以降暇あらば勧誘している

…じつは幼少期、ある理由で天瞳家に預けられていた頃からの幼なじみであり《ちかいのぎしき》までした仲…しかし五年前の誘拐事件がきっかけでタカヤは天瞳家から離れた…

五年ぶりの再会はまさに天啓と感じ父、母を説得しマンシヨンの隣の部屋に越してきてから手取り足取りのトレーニングを夢想しながらアプローチをかけていくが…

ツクヨミ・斬

型式番号：WS—Y18

武装

GNバルカン

GNナツクル

専用武装《晴嵐》

特殊スロット：《W・T・S》

チーム天瞳のリーダー《天瞳ミカヤ》の使用するガンプラ。ベースは機動戦士ガンダム00second seasonにて謎の男ミスターブシドーがかかるスサノオ、マスラオをミキシングしカスタムした機体

原型機にあつたGNクロウ、トライパニッシャーは外され、腰部に粒子バーニアにより踏み込み速度はましている。最大の武装は専用武装《晴嵐》。硬度の違う薄いプラ版を重ね合わせることで強度としなり、落ちない切れ味を両立と刀身に塗り重ねされた粒子変容塗料が相手が防御フィールドを展開しようと紙のように切り捨て、高密度粒子斬撃を遠くへと飛ばすこともできる

肩にさらに疑似GNドライブ追加、GNナックルを両手に各部装甲強化と関節部強度をあげているためスサノオとは違うレベルで仕上がっている

専用武装《晴嵐》は五年前に誘拐される前にタカヤがプレゼントしたモノ……………ミカヤがしるタカヤとの唯一のつながり

## 第八話 星光と騎士《後編》

「トオル、相手は浮遊大陸を使う戦法をとるみたいです」

「わかってるよシユテル……どんな相手だろうと油断はしないからさ……」

油断や奢りの色もない瞳と笑顔を向けてくれます。今日はサエグサ模型店主催の《ガンプラバトルペアマッチ》。本当なら全国に向けてチーム紫天は練習しなければいけないのですけど……優勝景品をみて息が止まりました

幻のガンプラ強化武装《カレトヴルツフ》……現存するモノはないと言われ、それを手にしたファイターの強さと戦う姿はガンプラバトルを始めたばかりの小さなワタシの目に今でも焼き付いています

でも出場には男女ペア限定という括り……知り合いの男の子なんていませんし、従姉妹のヴィヴィオみたいに明るくて誰にでも話せるスキルなんてもってません。どうし……

ーどうしたシユテル、なんか間違えてたかな？ちゃんとパチじやなくムニってやったけど？ー

……前言大撤回。ヴィヴィオの家にあるワタシの部屋で新しいガンプラ《ランスロットガンダム》を作ってるトオルがいるじゃないですか。互角に渡り合った数少ない男の子……でも断られたらと思うと不安でいっぱいになりますし

ーカレトヴルツフ？……なら一緒にどうぞシユテルー



「え、でもー」

「いいってば。シュテルのおかげでこうして新しいランスロットガンダムを……自分で作るって楽しいってわかったからさー」

「かっつと笑いペアを組んでくれると言ってくれました……でもトオル、ワタシの方こそありがたいがとうっていいたいです。アナタと一緒にガンプラを作れることはアソコで忘れたこと思い出したんです……《作る楽しさ》《誰かのために想いを込めて作るガンプラ》を」

「修羅と呼ばれた二代目メイジン・カワグチが主催していた《ガンプラ塾》にいた頃よりワタシはすごく充実している……カイラ、ヤナさん、アダムス、マツケンジー先輩、ユウキがみたら笑うかも」

『シュテル、大陸から熱源反応だ！』

「ええ、いきましようトオル……私のズイーガ、ランスロットと共に勝利を手には」

……トオルの声に現実には引き戻されアームレイカーを握りしめる。相手のうち一人がフラナ機関のメンバーだとティアーチェから聞いてます。でもトオルとワタシは全力で戦う……それがファイター、ビルダーとしての矜持とともに」

#### 第九話 星光と騎士《後編》

「ふん、来たか雑魚が……わかってんな」

『ああ、あのガンダムXもどきはオレがやる。あんたはあのV2もど

きをつけて打ち合わせだな』

「まあ、楽勝だろうな。あんたのガンプラならな」

『もちろんだ！カレトヴルツフ必ず手に入れてやるぜ………いくぜ』

………ようやくいったかカスが……お前はこの大会が終わるまでの関係だ………幸いにフィールドは浮遊大陸身を隠せる場所に足場がありすぎるが、どうでもいいさ

まずはあのXもどきをぶっ潰す。たくさんなく声を聞かせてくれよ……偉大なるイエーガーズ総帥《宇宙ガンプラファイターX》様に捧げる前菜の賛美歌を聞かせてくれよ？

最大望遠で接近してくるXもどきにアームレイカーを動かしビームキヤノン、ビームライフルを構え撃つ……

(………機体外観から遠距離特化ですか………まだエレ男………マクバガン先生、マツケンジ―先輩に比べたら)

ストレスでかわしやがっただど!?………ま、まぐれに決まってる!!ドラグーンを一齐に射出、全方位に渦を巻くように展開加速させ一気に粒子ビームを撃つ……

「さあ、踊れよ！Xもどき!!」

振り払うように加速するXもどきにドラグーンの粒子ビームが雨のように降りそそいだ………だが、次の瞬間、信じられないことが起きた

『………反応が遅いです、行きなさい使い魔たち！

！』

左腕、右腕アーマーが離れ、オレのドラグーンに向かうやいなやビーム、実弾をばらまいて破壊していく…まさかあれはドラグーンか？いやソレにしたら反応が速すぎる！十基もあつたドラグーンが四基まで減らされ

た事實は信じられない

コイツ何者何だ!?って考えてる内に間合いを詰められビームソードを抜き切りかかってきたのを見てニヤリトほくそ笑む。オレのアカツキ《調》にはヤタノカガミがある。ビーム攻撃なんかきかな…

『……甘いです』

「なっ!？」

微かな振動…見ると右腕がヤタノカガミごと切り裂かれ孤を描いて落ちていく……バカな！ヤタノカガミを切り裂いた？

ビーム攻撃には絶対的な防御を誇る筈なのに、なぜだ!!オキツノカガミを構え二の太刀を防ぎながら思うオレに声が届いた

『……知らなかったのですか？アカツキのヤタノカガミはビーム射撃《……》のみ無効化出来ませんがビーム斬撃に弱い事を』

「な!？」

『……再現度の高さは目に見張るモノがあります。でもアナタのガンブラを通して感じる……他者を虐げ悦に浸る邪なモノを』

「な、ナニ言ってるやがる！ニュータイプ気取りかよ!!」

オキツカガミを持ち構え発生させたビームランスで切りかかり刃

をぶつけ切り結び弾ける反動を利用し離れるとドラグーンを戻そうと目を向けた。オレの目に映ったのは白地に黒に塗り分けられたウサギ……いや小型MAが粒子ビーム…人參にも似た刃で切り裂いていく光景が広がる

まるで戯れるように……いや、まてコイツの戦い方見たことがある……フラナ機関にあったPPSE主催の三代目メイジン・カワグチを生み出すための育成機関《ガンプラ塾》のライブラリで三代目メイジン候補を決めるトーナメントに出ていたヤツと

ま、まさか……アイツは

『……さあ、コレでオワリにします…集いなさいワタシの使い魔たち！』

ドラグーンすべてを破壊されたオレの前で二機のビットMAが右手に構えたビームサーベルに合体し凄まじい粒子ビームが送り巨大な刃を上段に構え接近してくる……間違いなくコイツは《ガンプラ塾》第一期生《星光の殲滅者》シユテルだ!!

『すべてを焼き尽くせ、邪な想いを！ルシフェリオン・ブレイカー!!』

「う、うわああああ!!」

オレが最後にみたのはモニターを灼くほどの凄まじい光の刃だった……

「嘘だろ！アイツがああも簡単にやられるなんて!!」

「やるなシュテル。ならオレも負けてらんねえな!!」

シュテルがアカツキを撃破したのを見てオレはアームレイカーを傾け光の翼を広げるローゼン・ズール……ロジェ・ズールに一気に接近、腰に懸架した実体剣《アロンダイト》を抜き横風には切りかかるのを見て慌ててビームクローで受け止め競り合う

まだ初心者、若葉マークのオレから見てもかなり作り込んでいるのがわかる…

『くそ、負けてたまるか！カレトヴルツフは俺が手に入れるんだ!!』

「アンタもカレトヴルツフが欲しいのか!？」

『ああ、カレトヴルツフってのは数年前、第二回ガン普拉バトル世界大会でゴツドガンダム極が使った武装なんだ』

「うわっ!!」

力任せに切り払われるのを見逃さないと言わんばかりにクローに備えられた三連装ビーム砲、背中から延びた砲門から放たれた無数の粒子ビームが迫るのをアームレイカーを素早く動かし両肘を正面に構えビームシールド《アヴァロン》を広げ防いだ、ギシギシなり弾かれたビームが辺りの地形を変えていくのを目にした

「ぬぎぎぎ……なんつう威力だ…まともに喰らっていたらやられていたな」

シールドを解除してあたりを見回しながら呟くと同時に接近を示

すアラート、反射的に上へアロンドイトを向けるとアームレイカー越しに衝撃が伝わり、そこにはビームクローをぶつけるロジエズールがいる

『お前のガンプラ、もしかしてコードギアスのランスロットをモデルにしてるのか!?!』

「ああ、ランスロットをモデルにしてるけど……ベースにしたのはV2だ。あんたのはバックパックに紅蓮聖天八極式のエナジーウィングを使ってるな」

『!?わかるのか……でもなコレを作ってから誰も俺とバトルしなくなつたんだよ……ガンプラをけがすなって!そんな奴とバトルやる価値はないってさ!……だから俺はカレットヴルツフを手に入れてそいつらを見返してやる、このロジエ・ズールで勝って証明してやるんだ!!』

何度も切り結びながら叫ぶ声から悲痛なモノを感じる……あんたの気持ちはわからないでもない。だからってよ

「……だからってそんな事の為にカレットヴルツフを手にするのか!恨みつらみで、見返すためにガンプラバトルバトルやったのしいかよ!」

『!?』

ビームクローを受け止め火花を散らすアロンドイトで振り抜く、たらをふみながら僅かに距離が離れたのを見てウエポンスロットをライフルに合わせる。両腰サイドアーマーがはずれる。それを迷わず掴むと左右につなぎ合わせると長身の高出力ビームライフル《ヴァリス》に変わるとグリップを握りしめ構えた

「オレさ、オヤジがランスロットのパーツを組み込んだだけのガンプラでバトルをしていた…それだけで満足していたんだ…でもそれじゃ駄目なんだよ!」

引き金を絞るとヴァリス砲口から凄まじいりビームの奔流が溢れ、ロジェ・ズールを捉え飲みこんでいく

『う、うわああああ!!』

ビームの奔流の中で爆発の煙が上がる中から、ナニかが飛び出す。アレは有線式ビームクロウ、瞬く間にヴァリスに絡みつぎ握りつぶされていくのを見てグリップから離すと爆発、煙がはれた先にはボロボロのロジェズールが幽鬼のように片方だけになったエナジーウイングで浮きながら近づいてくる

『だったら、だったらどうすればよかったんだよ!』

亀裂だらけの身体を省みずビームクロウを振りかぶり切りかかってくるのをアロンダイトで防ぎながら叫んだ

「答えは簡単だ。自分だけのガンプラを作ればいいんだ…オレのランスロットガンダムは武器の名前だけは貰ってる。でも自分が使いやすいかっこいいパーツを一から作ってる…お前ならできるはずなんだ」

『俺だけのガンプラ?……出来るのかな』

「ああオレにも出来たんだからさ…だから次に会うときは《自分だけのガンプラ》でバトルを楽しくやろうぜ」

『ああ！』

幽鬼のようなオーラを出していたロジエ・ズールのファイターから前向きな言葉を耳にしながら互いに全力の最後の攻撃を仕掛けた。アロンダイトとビームクロウがぶつけあわせながら右腕部ビームクロウを正面に構え大きくつつこんできた…加速に耐えきれなかったのか僅かに右腕がぶれたのをみのがさず光の翼を展開、懐へ潜り込み逆袈裟に腰から右斜め上へと切り払った瞬間、ロジエズールは爆発四散。ランスロットガンダムがアロンダイトを静かに腰に収めた

― BATTLE・ENDED ―

「勝者、チーム・シユベルトリッター！白熱させたバトルを見せたファイター達に拍手をお願いします!!」

粒子が消えていくなか、力が抜け肩で息する…知らないうちに汗もかいてる…でも全力で戦えたのも楽しかったと感じた時、タオルとポ○リがスツと出された。顔を上げたらGPベースとガンダムX・ズイーガを収めたケースを肩に掛けたシユテルがいた

「タオル、使ってください」

「さんきゅシユテル……ん、ぷは……うまい」

「ランスロットガンダム、使いこなせるようになったみたいですね」

「ああ、シユテルが手伝ってくれたからな……でもまだまだ煮詰めないと……ん？お前はロジエズールの」

「……安住だ……お前の名前は？」



「トオル・フローリアンだ」

「トオル・フローリアン、次に会うときは俺だけのガンπραを作る。もう一度バトルをしよう………」

「おう！よろしくな安住!!」

拳を出すと互いに軽くこずくと安住はスツキリした顔で歩き出した……次に会うときはスゴいガンπραを作ってるだろうな

「そういえばシュテルが相手していたヤツは？」

「…おかしいですね、さつきまでいたのですけど」

筐体付近を見ても姿が見当たらない…負けたことが応えたのかもしれない。シュテルはバトルになると全力全開!…って感じでやるからなく従姉妹のなのはさんって《白い魔王》、彼氏のユーノさんは《神楯》…攻守バランスが取れてるし

それに美人だし…シュテルもいつかは負けないぐらいになるのかな?特に胸とか……

「トオル?どうかしましたか?」

「な、なんでもない!?…それより次の試合の邪魔になるから早くこうぜ。ほら」

「え?きや!?!ト、トオル!?!」

誤魔化すようにシュテルの小さな手を掴み走り出した…ガンπραの塗料や接着剤であれてると思ったけどすごく柔らかくて暖かいん

だけど

「わたしのトオルがシュテルの手を恋人つなぎ、わたしのトオルがシュテルの手を恋人つなぎ……わたしのトオル、わたしのトオル、トオル、トオル、トオル」

「ごめんなさいヴィヴィオ、例え従姉妹でも譲れません……トオルはわたしのパートナーですから……渡しませんよ」

「……背中に凍り付くようなヴィヴィオの声が聞こえたのは気のせいだよな？それにシュテルもなんか怖いよ!？」

「さてさて、続いて第四試合に入ります……では！チーム・レグナント VS チーム・フアング入場です!!」

「-----」  
「-----」  
「-----」

「急ぐんだ少年、次の試合が始まってる」

「は、はい、ミカヤ先輩……あのなんで僕の指を絡めてるんですか?」

「なに、少年が離れないように握らないといけないからね（……はあ……タツくんの指は昔より大きくなって……もしコレでわたしのをと思うとうずいてしまう。しっかり染み込ませなければ）」

ゴクリと喉を鳴らしながら会場に入った……でも観客席は静まりかえっている

目に映るのは真紅に輝く月を背にした銀地に朱が目立つアストレイをベースにしたガンプラ：翼を広げ足突き出し急降下と同時に真紅の粒子を放出させながら加速していく先には二体のガンプラが身動きは愚か反撃すらもせず立ち尽くしている

↓Darkness・Moon・Break

最終宣告としか思えない無機質な声と共に加速したアストレイベースのガンプラの蹴りが胴を捉えて、さらに後ろにいたガンプラを巻き込み蹴り碎いていく。あたりに碎けた四肢が舞いながら衝撃波を受け消滅、地上に巨大なクレーター……いや紋章のようなモノが刻まれた中心には無残な軀を晒したガンプラを見下ろすように立つ姿に身体が震え、隣にいるタツくんも呆然としている

↓BATTLE・ENDED

「……………し、勝者、チーム・ファング……………」

ミツキ店長の声を皮きりに歓声が湧き上がる……でもあのガンプラのパーツに見覚えが……いや思いだした

あれは間違いない、タツくんの叔父様……ガンプラバトルは勝利こそ絶対、たとえ戦う相手が仲間、兄弟、家族だろうとしても押しつけ勝利する事を目指す修羅《二代目メイジン・カワグチ》の最高傑作《カテドラルガンダム》の両脚パーツが組み込まれてる

数ヶ月前にカテドラルガンダムの予備パーツがある模型店に密か

に持ち込まれ隠されていると不確かな噂を耳にしたんだけど、私の前にあるのは現実だ

「やったよワタル！私とはじめての勝利だよ!!」

「ス、スバルさん！あんまり抱きつかないで、その胸が…」

「照れない、照れない…それよりもすごいことしよつか？」

「止めてくださいスバルさあん!？」

アストレイを使っていた少年の隣にいるのはノーヴェのお姉さんのスバルちゃんをみてわかった…予備パーツがある模型店はナカジマホビー。つまりスバルちゃんが保管していたパーツを渡したんだと

「すごい…：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：…ミカヤ先輩、今からブレイドとツクヨミの調整をしましょう」

「し、少年!?!まだ彼らと戦うわけと決まった訳じゃ」

「なんでかわからないけど、当たるような気がするんです…：：：：：だからいいですか」

やや興奮した目で私をみるタツくん…握られた指から熱い鼓動を感じる…：：：：：こうなったらもう止まらない。昔からこんなところは変わらないんだ

私のために晴嵐を夢中で作ってる時と同じ熱さ…：：：：：たまらないな

「わかったよ。なら工作室を借りて調整しよう」

「お願いします。じゃあノーヴェさんとレヴィも一緒に」

……2人つきりだと思ったんだが、まあ仕方ないか。私ばかりが  
独り占めするわけにはいかないからね

そう心で呟いて工作室へと歩き出した。まあ手を繋いだままでね

第八話 星光と騎士《後編》

了

## 第九話 武者と墮天使

カレトヴルツフ争奪ペアマッチバトルも順調に進みファング、ブレイド、ラウンズ以外のチームも順調に勝ち上がったの第四試合も終わりを告げると同時にバトルシステム調整を兼ねたお昼休みに入った

私のサエグサ模型店には珍しくカフェテリアがあるから一般観戦者と出場選手関係者はここで食事をとつてもいいし、もしくは持ち込んだお弁当を広げ食べることも平気だから安心してね

え？手が足りないんじゃないか？んふふ、大丈夫！今日は助っ人を呼んであるから

「よし、小籠包、包子蒸しあがり！」

「ん、こつちもキャピトラ特製ハンバーガー、BLTサンドイッチ出来上がりなのだ」

今日は雷凰飯店の跡取り《新田飛鳥》くん、喫茶キャピトラの料理人《畢・ナカジマ》ちゃんが厨房を担当してるの。そして、そして

「フェイトくBLTサンドイッチ・キャピトラスペシャルを、わたしは雷凰小籠包、包子を配ってくるね」

「う、うん。アリシア……おまたせしましたキャピトラスペシャル、ど、どうぞ」

むつちりとした太ももまでオーバーニーに包んでミニスカチャイナ服に身を包んだ雷凰飯店看板娘にして新田飛鳥くんの彼女、フェイ

ト・テストタロツサちゃんにアリシア・テストタロツサちゃんの二人も来てるから大盛況！接客業もテキパキこなしてくれるから助かるわ〜  
名字からわかるけど二人ともレヴィちゃんのお姉さん。あと四年したらスゴいわよくさすがはプレシアさん譲りなだけあって将来性は◎ね

あら、タカヤくんはどこかしら？……………

「少年、少し手を休めたらどうかな？もう昼餉の頃合いなのだが」

「あと少しだけ…もう少しでブレイドの調整が終わるんです……………」

ウチの工作室でブレイドの調整中、真剣な目で剥げた塗料をリタツチ、パテで疵痕を埋めていくタカヤくん、ミカヤちゃんの声もあんまり効果無いみたい

「……………タ〜カタ〜カ♪えい♪♪」

「うわあ!?!レ、レヴィ？抱きつかないで危ないから……………そ、それに……………その……………!?!」

「夢中になるのもわかるんだけど〜ランチタイムにしようよ〜お腹ペコペコだったら調整も出来ないよ?〜」

あらあら、レヴィちゃん大胆ね〜中学生にしては大きいし挟まれたタカヤくんの顔は真っ赤。ん？何故かメイド服姿のノーヴェちゃんも負けじと腕を胸に挟み込んできた!

「そうだぞタカヤ、お前はガンプラになると周りが見えなくなりすぎだ！……と、とにかく昼にするぞ!!」

「ふえ？でも……（あ、あたってる！レヴィの胸が頭に!?それにノーヴェさんの胸に手がはさまれて動けないしスゴくいい匂いが）……ガンプラを」

「いいからお昼にする!!」

「は、はい……」

ノーヴェちゃん、ミカヤちゃん、レヴィちゃんに工作机から引きずられていく、ふふスゴいわね三人ともうんうん、将来の未来像が見えてきた、きた♪

「おい、姉貴！覗いてないでバトルシステム周りの調整と予備の粒子タンクを切り替えやんないと時間ねえからな!？」

はいはくい。じゃあ覗き見はココまでにして……ソレではガンダムビルドファイターズ刃ブレイダー、第十話にレディくゴオ  
く!!

## 第十話 武者と墮天使

「あ、あの……コレは？」

「見てわからないかな？昼餉だ……さあ」



「タカタカ、今日はボクも作ったよ。はいあ〜ん  
♪」

「……タカヤ、あたしも持つてきたからさ、食べるよな……」

ミカヤ先輩、ノーヴェさん、レヴィがお弁当を並べ、ずいっと僕の口元に箸に挟んだ厚焼玉子、唐揚げ、サンドイッチが早く食べてとせかしてるようだ

まずは唐揚げからと口にした瞬間、全身の服が弾け飛ぶ……しっかりとした下味に加えて柔らかくジューシー、衣には片栗粉をまぶしてあげているからサクサク、噛めば噛むほど変化する飽きさせない味に雷が落ちた

「どうかな？ボクのお母さん直伝《必殺・唐揚げ》。出張に行ってるお父さんの大好物なんだ〜」

「うん美味しい！すごい柔らかくてサクサクして変化し続ける美味しい唐揚げ食べたことない!!」

「やったあ♪じゃあ……なんだけど……毎日タカタカに作ってきていい？もちろん唐揚げ以外もたくさんつくってあげるよ♪」

「え？……」……少年、わたしのも食べてもらえるかな？お預けはいいだけないからね」……あ、はい……」

(むう〜ミカヤんずるい！)

言いかけた声を遮るようにミカヤ先輩の声が被さる……何故かわからないけど怒ってるような気がした。あわてて厚焼き玉子焼を口に入れた……アゴ、サバ、アジ節からの出汁に加えて卵のふんわりとし

て口の中で溶けていく食感が鋭く切り込んでくる

「ふふ、どうしたかな少年？キミの口にあわなかったかな」

「…………アゴ、サバ、アジ節と卵のパーフェクトハーモニー……こんなに美味しい玉子焼は食べ……食べ……」

食べたことないと言いかげとまる……僕はこの玉子焼の味を知っている……どこで……どこで

ー…………だめだ……また失はい……え？た♡☆○♪♡、それはたべたらー

ー…………んーおいし……○♡○えちやのたまごやきおいしよー

な、なに今の？…………

「少年、どうした？やはり口にあわなかったのか？」

「そ、そんなことないです。ただすごく懐かしい味で……すごく美味しいくて……」

「そ、そうかい(覚えてくれてたんだね……今はまだキツカケだ。少しずつ、少しずつ記憶を…………)」

「あ、あのミカヤ先輩？」

「(…………コレはそのための一歩……でも今の私をも受け入れてくれるための布陣、慎重に事を運ばなければ)……いや少年のたべっぷりに嬉しくてね。提案なんだけど私の部屋に夕餉にこないかな？」

「え？迷惑じゃ」

「少年なら大歓迎sa」…タカヤ、アタシのも食べるよ…」…つと一人占めはココまでにしておくかな」

不機嫌そうにレタスにハム、マツシユポテトが挟まれたサンドイッチを手にしたノーヴェさんが口に近づけたまま待つてる…迷わず口にした瞬間、目の前に火花が散った

…マツシユされたポテトは芯が残ってて、レタスは半分凍って噛む度にシヤリア・ブル、ガエリオ、ガリガリ…マヨネーズはマヨラー13も投げ出すぐらい辛い…未知の味にネオすら裸足で逃げ出す以上に母さんの料理に匹敵する！

ーどうせ、私はあなたみたい料理がうまくないわよ！バカツ！！ー

ーメ、メイ!?落ち着いてつたら！君の料理は美味しいから!!ー

「ど、どうしたタカヤ?」

昔のことを思い出していた僕を現実に戻したのは不安いっばいな目でみるノーヴェさん。手には無数の切り傷のあと、一生懸命作ったのが見てわかった。ならとるべき行動は一つしかない

「…え?た、タカヤ!?何を!!」

ノーヴェさんの隣におかれたバスケットをとるとサンドイッチを手に頬張っていく、あつという間に空になると手に握られたサンドイッチをつかみ勢いよく口にしたんだ…でも今までの具とは違うソーセージみたいな細長い何かがある。何だろって思いながら舌でゆっくり舐めていく

ソーセージにしては柔らかいしなんかわからないけど甘い……ん  
ゝすべすべしてるしいつまでも味わっていたい気が

「ちよ、や、んんっ!？」

声に我に戻った僕の目には顔を真つ赤にしたノーヴェさん……まさかコレってノーヴェさんの指!? あわてて口から離すとつううと糸をのびる……

「あ……」

「ご、ごめんなさい! 夢中になって……その、あの?」

「……べ、べつにいいから………タカヤ、その傷はなんだ?」

「……え? あ、ホントだ……」

頬のあたりをさわると微かに痛む……手鏡(パーツの面だし用)を取り出してみたらスウツと一筋の切り傷がみえたそれに血がにじんでる。いつ付いたんだろ?

「……もしかしてボクが抱きついた時に怪我したの?」

「あ、いやレヴィが悪いわけじゃないし、手を止めなかったのもあるから、それにこれぐらいだったら………ひにやおうう!?」

「「なっ!？」」

傷口に触れていた手が頬から離れた変わりにレヴィが顔を近づけて小さく舌を出して舐めてくる、いきなりすぎて思考が追いつかない……それになんかこう気持ちいい気分になる。でもミカヤ先輩、ノー

ヴエさんからのスゴく激しいプレッシャーで正気に戻るとレヴィが離れた

「今のはね、お母さんがお父さんが怪我した時にやってる《秘密のおまじない》だよ」

「……おまじない!?!…あ、痛みが無い…」

「スゴいでしょ〜えっへん♪♪」

(レヴィ〜なんつう羨まし…大胆な事をしてんだよ……あたしが最初に気づいたのに)

嫉妬混じりで少年をみるノーヴェ…でも私は机におかれたブレイドをみた。右頬に先程のバトルで受けたビーム粒子で細く溶かされた疵痕キズアトと同じモノ。コレと似たものを…タツくんが天瞳家に預けられてた時にみたんだ

(あれは……そんな……まさかタツくんは目覚めたのか?)

ーいたい、いたいよう…うでが…いたいようー

右腕があらぬ方向に曲がったガンプラを前に大粒の涙を流し大きな声で泣くタカヤ…

(……ただの偶然だ。だってアレはタツくんが誘拐された時から発現していないんだ……でもこのペアマッチはオープントーナメント、いわゆる世界大会公式ルール《ダメージ度レベル:A》に設定されている。万が一アレに目覚めたらタツくんはガンプラがバトルで受けたダメージを……)

ガンプラバトルにはダメージ度レベルが大きく分けて3つ、《A》《B》《C》に設定されている……

ダメージ度レベル《C》はデータ上のみ存在するガンプラと戦うダメージ等が発生しない模擬戦用

ダメージ度レベル《B》は戦闘の内容次第では、パーツが外れたり、少々表面に傷がついて塗装が剥げたりするダメージしか負わないし修復が容易な程度で済む……

私が問題にしてるのはダメージ度レベル《A》

劇中内での戦闘ダメージすべてが再現され、戦いの内容次第ではまるで何時までも魔法少女で全力全開な砲撃を何発も叩きこまれ、赤髪ゴスロリ永遠の合法ロリ少女に鉄鎚で潰されたかの如く、バラバラの粉々に跡形もなく粉碎される

もし、目覚めたら……いや、わたしが守らなきゃいけない。今度こそ絶対に……カヤお姉ちゃんがタツくんを必ず守るから……

『ながらくおまたせしました！午前中でのバトルで数は絞られてきましたが、第八試合。チーム・ランペイジ、チーム・ロードの試合を始めるま〜す!!』

「ふふふ、まっていたぞー！さあシェロウ、いや私の半身よ、今こそ飛翔の闘よ!!」

「デ、ディアーチエ、少し落ち着いて?でも、まあオレもワクワクしてるからいいかな」

「Beginning [Plavsky. particle] dispersal……………」

テンション高いなディアーチエ、さて気合い入れてやりますか。サンバイザーを被り直しGPベースをセット、ケースから取り出した俺のガンプラ武者真亜朱頑駄無<sup>ムシャマーズガンダム</sup>を置く。となりのディアーチエもセットし終わったみたいだ

「いいかタツミ、お前はワタシのあとをついてこい。でないと…」

「わ、わかってるからエスデス……いくぞインクルシオ、勝ってカレトヴルツフを手に入れてみせる!」

瞬く間にバトル筐体から粒子が溢れ半壊した巨大なコロニーが浮かび、あたりを無数のデブリが漂うフィールドが構築されると互いのチームのガンプラに光が宿る

「ディアーチエ・八神、アルジェント・ノワール!往く!!」

「神崎士郎。武者真亜主頑駄無、出陣だ!!」

「氷埼エスデス、キュベレイ・アルケイン、殲滅する」

「円堂タツミ、ガンダムグリップ・インクルシオ!いくぜ!!」

それぞれの声と同時にリニアカタパルトから打ち出された…目の

前にはデブリが漂うフィールド、奥には半壊したコロニーがみえる

機動戦士ガンダム0083で連邦の主導で行われたコロニー再生計画に登場したモノと酷似している：デブリの海を進むのは両肩に朱塗りの巨大な楯を装備した士郎のガンプラ《武者真亜主頑駄無》、ウイングガンダムをベースにしたディアアーチェのガンプラ《アルジエント・ノワール》

「シエロウ、そろそろ会敵する頃ぞ」

「ああ………つと!!」

士郎の声を遮るかのように粒子ビームが雨のように降りかかる：細かくアームレイカーを操作、指で叩くと細かな回避運動、あたりに漂うデブリを楯にしビームの嵐を抜けた二人の前には氷埼エスデスのキュベレイ・アルケイン、グリープ・インクルシオがバスターキャノンを構え待ち構える姿

「タツミの攻撃をかわすとは……面白いな……つぶすか」

「エ、エスデスさん？ ナニを!？」

「言葉の通りだタツミ。あのSDをお前に任せる……ワタシは」

ウイングバインダーを開きビームサーベルを手にディアアーチェのアルジエントノワールへ切りかかるも、ククロイツフェルトで防がれた

「コイツの相手をしよう………ふふ楽しく凍てつかせてやろう」



「ほう？我に刃をむけるとは片腹痛いわあ!!」

笑いながら力任せに斬りつけてくるビームサーベルを防ぎ弾く  
デイアーチエ：アームレイカー越しにわかる強さに驚きながら高揚  
感にあふれていた

「なら、コレはどうだ！いけ下僕ども!!」

「なに!？」

アルケインの腰部：ファンネルコンテナが切り離されカブトガニ  
にも似た小型MAに変形、ガトリング砲をのぞかせ撃ってくる

「ワタシの下僕ガルムだ……さあいけ二号、三号!!」

アルケインから離れクロイツフェルトを回転させ弾を防ぐ…が別  
方向から迫る二機に挟まれた…誰もが終わりだとおもった次の瞬間、  
アルジエントノワールの翼が開き上下に向き中央部分がガシヤンと  
開いた

「甘いわ！すべての敵を貫け我が剣《バルムンク》！」

バレルから放電、瞬く間に圧縮解放された粒子ビームが溢れ紫色の  
閃光が二機を襲い破壊し爆発の煙が立ち込める中からアルジエント  
ノワールは最大加速と同時に飛び出しアルケインへ何度も切りつけデ  
ブリを巻き込みながら飛翔する

「よくもワタシの下僕、ガルム二号、三号を！」

「ガルム？駄犬ごときで王である我を狩れるか!!」

「あはは、面白い……ならコレはどうだ！」

アルケインの頭部が開き見えたのは機動戦士ガンダムΖΖのハイメガキャノンの砲口…溢れ出す極太のビームが零距离で撃たれたら一溜まりもない…間をおかずに放たれた圧縮粒子ビームがアルジェントノワールを飲み込んだ

「なかなか良かったぞ、さてタツミのところへ向かうとする……な？」

微かな振動がアームレイカー越しに伝わる…みるとアルケインの腹部に深々とクロイツフェルトが突き刺ささりモニターには先ほど光と共に消えたはずのアルジェントノワールの姿

「…………ふ、最後まで油断などせぬことだ。なぜと言う顔をしているな？あの砲撃は見事だったが我の力を増しただけよ」

「まさか、粒子ビームを吸収して自分のモノに……」

「だが、我にこの手を使わせたことは賞賛に値する。次があるならば我に挑め……」

賞賛の言葉をかけながらクロイツフェルトを引き抜いた瞬間、アルケインのモノアイから光が消え力なくデブリの海を漂った

ディアーチエが勝利を収めた頃、士郎はタツミとのバトルも佳境を迎えていた

「やるなあんだ！SDでオレのグリップ・インクルシオとやり合うなんて!!」

「そつちもなかなか作り込んでるじゃないか……………熱くなるぜ…………」

強化型ビームランサー《インクルシオ》を両肩の楯鎧……  
真<sup>マ</sup>主<sup>ス</sup>斬<sup>ザ</sup>馬<sup>ン</sup>へ変え両手に構え握り防ぐ…楯鎧がこんなに持つわけは  
無いのだが防ぐ部分にクリアーパーツを削りだした刃があるため防  
げるのだ

ぶつかり合いながら構えたバスターキャノンの引き金を引こうと  
したがバレルごと大きく切り裂かれた…すでにエスデスが負けたの  
を知っている

つまりは自分ひとりしかない。普通ならば二対一で勝負を決め  
にくるはずなのに相手のペアが来ない

「なんで来ないかって思ってるか？俺のペアのディアーチエは水を指  
す真似はしないんだ。真剣な勝負にさ……だから全力でやろうぜ  
タツミ!!」

「ああ、オレも全力でいくぜ………土郎！」

互いのアームレイカーが動きSPスロットを選択した瞬間、インク  
ルシオが変形さらに背中のリフレクトシールドが分離、刃の基部につ  
くとバーニアが激しく輝きだしビーム刃が厚く巨大なモノへかわり、  
土郎の真主頑駄無も両手に握られた真主斬馬が展開、粒子ビーム  
の刃が形成され左右に構え互いに、そのまま動かない

その光景をみる観客も息を呑み手に汗を滲ませその時が来るのを  
待つ………デブリが漂う空間に浮かぶ二機のガンプラの決着を

その時、静まり返った中、観客の手に握られていたアイスコーヒー  
から氷が溶け崩れた音がなった

「いくぞインクルシオ！絶牙天斬!!」

「……………おお！轟・真亜主斬馬アアア!!」

まるで弾丸のように加速し互いに全身全霊の刃がぶつかり合い、産み出された衝撃波にデブリ帯すべてが弾け飛び光に包まれ、やがて収まり見えたのは半壊した真亜主斬馬を手に構える膝を付くシロウの武者真亜主頑駄無、片や無傷のタツミのグリープインクルシオ

「……………強いな。タツミ」

「お前もな……………最高のバトルだったぜ……………くっ」

無傷で立っていたインクルシオの槍から光が消え同時に倒れ伏し残されたのはシロウ、真亜主頑駄無

― BATTLE・ENDED ―

「……………勝者、チーム・ロード!!」

ミツキの勝者を告げるアナウンスに観客席から歓声が沸き起こる。そんな中シロウは汗びっしりになりながらアームレイカーから手を離し武者真亜主頑駄無を手を取ろうとした

「シエロウ、さすがは私の良人よ！見事な戦いであつたぞ!!」

「ち、ちよーダイアーチェ？オレ汗びっしりだから抱きつくど…」

「濡れてもかまわぬ。我もひさしぶりに熱くなれた……………ん？」

「ディアーチエ・八神、次は必ず勝たせてもらう。いくぞタツミ。ナイトレイドで反省会を開くぞ」

「エスデス？……あ、ごめん、負けたこと堪えてるからさ………シロウ、カレトヴルツフ必ず手に入れて見せろよ」

「もちろんだ。次もまたバトルやろう！」

「おう！」

軽く握手しタツミはエスデスのあとを追いかけだしていくのを見送りディアーチエ、シロウは自身のガンプラの修繕と補強をするために会場にもうけられた工作室へと向かい、それから少し時間をあけ勝ち残った八組の組み合わせを決めるための選考会が始まった

だが、一番最初にきまった組み合わせをみてミツキ、ユウ、観客は息をのんだ

―第二ピリオド：第一試合〈チーム・ブレイドVSチーム・ファン  
グ〉―

「動いて、動いて………お願い………」

オレンジ色のダメージカラーに染まるモニター、アームレイカーを必死に何度も動かす。しかし反応すらしない。激しい痛みにも耐えながらモニターから目を離さない

l w a k e ・ u p l

フィールドは夜へかわり真紅色の月が空に輝きに影がみえる。蝙蝠の翼を広げ凄まじい加速と共に迫る先には両腕は肘から下が砕けあたりに広がり膝を付き見上げるような体勢で動かない愛機

「動いてブレイド……動いてよ………」

l D a r k n e s s ・ M o o n ・ B r e a k l

何度も呼びかけても応えない愛機ブレイド……無情にも最終宣告の音がフィールドに響き渡った……

## 第九話 武者と墮天使

了

カレトヴルツフ争奪ペアマッチ、ベスト8紹介!!

あ、あくテストス……ん、よし……長らくお待たせしました

本来なら第二ピリオド、第一試合《チーム・ブレイドVSチーム・ファンク》のバトル開始となるのですが、バトルシステム周りの調整に少々時間がかかると知らせがありました

「楓くバトルシステム周り追加実装システム構築頼む!!」

「ええくさつきメインフレーム周りが終わったばかりですよ!?私ばかりに任せないで〜!?」

「オレは粒子タンク接続プラグを修理しねえといけないんだって!アルトも急げたら!」

………いま私の弟と知り合いの子たちが必死に作業を進めるから、調整が終わるまで現在まで勝ち残ったチームの紹介をしたいとおもいま〜す!!

「「鬼!悪魔あああ!!」」

なんか聞こえたけど気にしないでね♪

カレトヴルツフ争奪ペアマッチ、ベスト8チーム紹介!!

まず最初は、初出場ながら第一試合を突破したチーム・ブレイド。天瞳ミカヤ、秋月タカヤペアです!

真紅に塗られた肩鎧、全身に粒子貯蔵用クリアパーツを埋め込んだ

アストレイベースのガンプラ《アストレイ・ブレイド》を操るのはガンプラバトル初挑戦にしてあのマスタージャパンの愛弟子《秋月タカヤ》、その両腕に備え付けられた大剣《アスカロン》はあらゆる防御を切り捨て、さながら紅の刃といえます！

ペアの天瞳ミカヤが使うのはスサノオ、マスラオベースのガンプラ《ツクヨミ・斬》！なにより驚くことに彼女はチーム・天瞳のリーダー《絶剣のミカヤ》本人です！アストレイ・ブレイドとツクヨミ・斬のコンビネーションはまさに神業、愛刀《晴嵐》に公式、非公式を含め百以上のガンプラが葬られたそうです

ある意味、今回の嵐の目となるチームの一つに数えられます！

ではでは両選手の意気込みをどうぞ！

「は、はい…え、えと…ミカヤ先輩、レヴィ、ノーヴェさんの力でここまでできました…だからみんなの為にがんばります!!」

「ふふ、そういわれると嬉しいね。なら少年の剣として勝利をささげると、この天瞳ミカヤは誓うよ（そう、私は少年の剣、いや鞘（？）だ…勝利の暁には私の鞘（！）へ少年の熱くたぎる剣（!?!）を導き納め…ハアハアハアハア…ふふふ、また下を変えないといけないじゃないか）」

………さて（汗）、次はチーム・ラウンズ。トオル・フロリアン、シユテル・T・グランツペアです！

白地の装甲に明紫、金の塗装とオリジナル武装が追加されたV2ベースのガンプラ《ランスロットガンダム》。情報によると二代目になるようですがなにより驚いたのが彼はプラモ歴はわずかひと月、なに関わらずこのクオリティーは脱帽です



ベースとなったV2譲りの高機動性に加えて新造された開放型粒子ビーム砲《ヴァリス》、ビームシールド内蔵型シールド・クロウ《ヴァロン》、高出力粒子ビーム剣《アロンダイト》  
アロンダイトをふるう姿はまさに騎士そのもの、ファイターとして未知数ですが躍進を続けていく事は間違いないでしょう！

ペアであるシュテル・T・グランツはなんと、あの二代目メイジンカワグチが三代目メイジンカワグチを産み出す為に作られた機関《ガンプラ塾》第三期生。ですが両親の都合で三代目をきめるトーナメント前に退塾、ドイツへ行きましたが数か月前に帰国して初のペアマッチ参加、ガンプラ塾第三期生の実力はみてのとおり

使用するガンプラはガンダムX・ズイーガ、両腕、両脚脹ら脛に装着されたビットMA《ハーゼ》による牽制に加えて高い粒子制御能力、合体することです様々な武装へ姿を変え対応、相手を撃破する姿にガンプラ塾三期生の実力が垣間見えます

では意気込みを（・▽・）っく

「もちろん一番とるぜ！んで、シュテル！必ずカレトヴルツフを絶対に手に入れてやるからな」

「きゃ!?も、もうトオルったら……とにかく勝ちます。トオルと一緒に……」

あらあら肩を抱くなんて最近の子って大胆くシュテルちゃんも満更じゃなさそう……あら？急に寒気が……

ーシュテルに私のトオルが抱きついてる、私のトオルが抱きついてる、私のトオルが抱きついてる、私のトオルが抱きついてる、私のトオルが抱きついてる、私の……フフフフ、シュテル。トオル同盟規約をモウ忘れたのカナ？カナカナ

カナカナカナカナカナカナカナカナカナ……

ーヴィヴィオ、運命って残酷なんです……とかまだ違反ではありません、コレは不可抗力ー

……い、以上です……気を取り直して続いているのはチーム・ロード、神崎シロウ、ディアーチェ・八神ペアです!!

神崎シロウ選手はなんと初代メイジンカワグチと同じ時期に活躍したレジェンドモデル《プラモ狂四郎》、《サツキー竹田》、《丸山健》氏の愛弟子ということですよ

使用するガンプラはなんとSD、武者真亜主頑駄無。両肩に巨体な肩鎧兼武装《真亜主斬馬》を手にする姿はサイズ差すら感じさせない戦いぶりは目に見張るモノがあることは会場にいる皆様も知っていますね

そしてペアのディアーチェ・八神はあの《チーム・紫天》リーダー《閻統べる王ディアーチェ》。彼女が使うガンプラ《アルジエント・ノワール》はウイングガンダム・アーリータイプをベースに黒く塗られカスタマイズされ、ウイングバインダーに開放型バレルを組み込んだ高出力粒子ビーム砲《バルムンク》、手持ちの十字架槍《クロイツフェルマー》をふるい立つ姿は王としての気品をも感じさせます

では、意気込みを（・▽・）っ

「すごく強いファイターがいるけど楽しんでバトルして、ガンプラバカのオレにつきあっているディアーチェにカレトヴルツフを手に入れてみせる!!」

「聞いたであろう有象無象の輩よ！愛しき私の武者シエロウの誓いは必ずなしてみせよう、我が黒き翼より漲り溢れる暗黒の力が汝らを永久の闇へ導こうぞ！アハハハハハハ」

「ディアーチエ、オレ以外にはわかりづらいから普通に話す。じやないとしロウ特製クラムチャウダー作らないぞ？」

「あう!?……わ、我と全力で相手をせ、せ……」

なお、ディアーチエ選手としロウ選手はルームシエアしています。商店街でたびたび買い物に行く姿が目撃され従姉妹の八神はやてさんも「ディアーチエの彼氏さんができたなら安泰やうちもはよ蓮ちゃんゲットして八神堂を盛り上げんとなあ」との言葉をいただきました。

続いては……えと？今回飛び込み参加となったチーム・シユヴァルト。ジエントル《Y》、レディ《M》ペアです！

某ドイツファイターのマスクと衣装に包まれ年齢不明ですが、唯一解るのは夫婦で参加していること。ですがレディ、ジエントルの実力ははかりしれません

レディMの使用ガンプラは《ゲルグ・カーヴァー》、ゲルグベースに赤と濃紺に塗り分けられビームザンバーとバズーカを組み合わせた複合武器ザン・バズーカ。腰部にマウントされたガトリングアーマー、膝部マイクロミサイルは乱戦において効果を発揮し、ザンバー、バズーカを手足のように操る姿は美しく

ペアのジエントルYの使用ガンプラはTR-6 《ウィンドウォー

ト》、白銀に塗り上げられた機体には様々なMSの武装、いわゆるUC規格で統一されています。レディMに武装を届けつつ援護、直接的攻撃にも参加する姿は機体性能を熟知し限界まで引き出した《コウ・ウラキ》を彷彿させます

では、意気込みを（・▽・）つ

『……………タ…《ムスコ》ニフサワシイカ、ミキワメニキマシタ』

『……………メ、M!?……………ト、トニカクハンブンハソレガリユウデスガ、タノシイバトルヲシタイトオモイマス』

……………チーム・シユヴァルツのレディM、ジエントルYさんでした（誰かしら？最近会ったような？）。続きましてチーム・サープリス。アクバク、ベヒーモスペアです

アシユラガンダムをベースにしたアクバクガンダム、千手アームの手のひらからビーム砲撃《曼陀羅》構えた千手アームから繰り出される《曼陀羅千手パンチ》を前にした相手は無慈悲にまで砕け散ります。アクバク選手は実家が仏教彫刻師なだけあり可動範囲を知り尽くした戦いを得意としています

対するペアはベヒーモスさんは元女子レスラーと言う経歴を持ちガンプラが好きすぎてファイターに転向した異色の選手。使うガンプラもパワーと防御を重視したボルトガンダムをベース改造したボルトガンダム・フォルティス

クラビトンハンマーならぬ、相手をつかみハンマーのように振り回し破壊、または体当たりして完膚なきまでに叩き潰す姿は破壊の化身

といえます

では、意気込みを（・▽・）っ

「南無阿弥陀、南無阿弥陀……すべては仏の御心にあるのです。私が下した相手に悟りがあることを祈りましょう」

「カレトヴルッフなんてどうでもいい、私の前に立ちふさがる奴は叩き潰すのみだ！かかってこい!!」

うわ、バトルジャンキーだ……以上、チーム・サープリスでした

続いてチーム・G……先のシュヴァルツと同じく覆面夫婦ファイター《G》&《Q》ペアです……

覆面ファイター《G》の使用ガンプラは機動戦士ガンダム戦記―水天の涙―に登場する生産数僅か数機のイフリート・ナハトをカスタムしたイフリート―GN45、旧式キットを全面近代改修した結果、驚異的な可動範囲と多彩な武装を使いこなす姿は歴戦の強者。ナカジマホビーの店主《荒野の迅雷ゲンヤ》に匹敵するのではと見てます

そのペアの覆面レディ《Q》のガンプラはガンダムAGE―タイタスペースにカスタムした《リヴォルヴァー・G》。スカート状に広がったスカートアーマーバーニア、頑丈なりボルピングシリンドーを内蔵した腕部からくりだされる《リボルピングナックル》の猛打に防御すらも打ち砕かれます

第二回世界大会予選である《漆黒の殲滅姫メイ》と死闘を繰り広げた《神無拳のクイント》に似てるのは気のせいよね？

では今回の意気込みを（・▽・）っ

「……オレノムスメノカレシガデテイルンダ……シカモ《カテドラルガンダム》ノパーツヲモチダシタンダ……ドンナヤツカシラナイガ、ムスメヲナカスヤツハツブ……グアッ?!」

「アラアラ、バトルノツカレガデタミタイネ〜スイマセン、アトデシツカリ調教……イイキカセテオクノデ。ワタシテキニハフタリトモアトトリにナツテクレルトウレシイワ〜コノバトルハフタリヲミルタメニアルケド、バトルハ真剣にヤリマス」

………チ、チーム・Gでした（絶対ゲンヤさん、クイントさんよね?）

次はチーム・クライ。アマミ・イツキ、アインハルト・ストラトスペアです!

彼の使用ガンプラは……全身をマントに包んだガンプラ……おそらくはバックバックと垣間見えるパーツから判断してクロスボーンガンダムベースとしかわかりません。試合開始数秒で相手が泣きながら壊れたガンプラを手に走り去る姿しか見てません

果たして、その実力は私でもわかりません

ペアの彼女が使うの機体はガンダム00に登場するガンダムプルトーネベースにカスタムした《ガンダム・リイン》。全身に接続された粒子ファイバーにより粒子制御消費ロスを抑え、殴り蹴りつけ瞬間的に爆発させ相手を下した戦法は正統派スタイル。それを操るのはドイツからStヒルデ学院に転入してきたアインハルト・ストラトス。クールなファイターとして無名ながら注目株のひとりに数えられています

では、意気込みを（・▽・）っ

「いや、相手が弱すぎて困るんだよね。ほんの少し眩いだけなのにさ……でも俺に勝てる奴なんかいないのかな。物足りないんだよね（……………）やあつとみつけた。秋月タカカヤ。♪弾魔の奴は負けちまったみたいだけどオレはそんなへましないからなくでもフアングに負けるみたいだし残念だな。まあ、せいぜい頑張りな）」

「カレトヴルツフ、必ず手に入れます……もつと強くなるために、どんな事をして………勝ちます！」

必ず勝つ意気込みを感じました（アメリ・イツキ、少し調べてみるかしら。きな臭いし）

そして最後に紹介するのは第二ピリオド、第一試合チーム・ブレイドと対戦が決まったチーム・フアング。中島スバル、紅ワタルペアです！

ペアを組んだ彼女が使うのは今大会二人目のSD、武者須刃流頑駄無《ムシヤスバルガンダム》、蒼く塗装された巨大な右腕部鎧《爆烈甲》、脚部ローラーによる無限機動により加速、接近して勢いと重さを乗せた拳の前に立てるもの等しい！

彼女、中島スバルはあの荒野の迅雷ゲンヤ、神無拳のクイントさんの子供たちの一人で、少し愛が重い？元気な女の子です！最近、彼氏ができたみたいです（ワザと聞こえるように）

（……………んだと！やっぱり、あのモヤシか！モヤシなんだな！！い

いだろうタカヤと一緒にガチバトル《品定め》して……………グア!?)

(あらあら、ミツキったらバラスのはまだ早いわよ…まだね…チンク、ウエンデイ、ギンガも彼氏が出来てつき合ってることは言わなかったからよしにしましょ♪)

私はなんもみてない〜QさんがGさんの首が変な方向に曲がってるのなんて〜

さて話は戻して、そんな彼女のペアを務める彼のガンプラはファングアストレイ。銀地に艶やかな真紅の塗装が施されたガンプラ。ベースにはアストレイが使われててコウモリをモチーフにして制作されてて、可動範囲もだけどパーツガ干渉しないように徹底的に作り込まれています

先のバトルでは高い可動性に加えてコウモリの翼が粒子制御および蓄積する機能、防御力向上にも貢献しているわね。さらに格闘攻撃時にはプラフスキー粒子をインパクト時に爆発させ攻撃力を増します。そして決め技であるダークネス・ムーンブレイクの前に葬られてきました

それを操るのは紅ワタルくん、穏やかで優しく人見知りでピユアな彼は先に紹介したトオル・フローリアン、神埼シロウくんと同年代でビルダーファイター歴が僅か三ヶ月のルーキー、この場に集まった事は運命としか言えません

さて、今大会での意気込みを(・▽・)っ

「はい、えと……………ぼくを強くしてくれたスバルさんのために頑張ります……………そして隣にたてるぐらい、いえ一緒に世界大会を目指します！」



「わたしもワタルのために今日まで頑張ってきました……でもワタルはガンブラが壊れただけで泣くから、ワタルのガンブラを傷つけるヤツなんかわたしが叩き潰します……だって……ワタルハヨワイカラ、ワタシガマモラナイト、オトウサンガカクシテイタ《アレ》ツカウシカ、ツヨイガンブラヲツクレナイカラ」

明るい純粋な思い／重いをありがとうございませす!! (汗) ……波乱含みのカレトヴルツフ争奪ペアマッチ。制するのは果たしてどのペアなのか？

続きは本編で！ではお楽しみに!!

カレトヴルツフ争奪ペアマッチ、ベスト8チーム紹介!!

了

## 第十話 荒ぶる牙、折れた刃は……

「ふく補修と調整終わり……」

「私も終わりだ少年、さあ、あまり時間もないからいこう」

「はい……ミカヤ先ば……先輩は禁止」……ミ、ミカヤさん」

「ふふ、さあいこうか……」

顔を真っ赤にして頷く少年……いやタツくんの手 私の指を絡める……ああ、まさに至極いや悦の極みだ。昔より手は大きくなってるけどあたたかくて柔らかい、何より昔と違ってキリリとした目を気づかないようにみるたび胸が激しく高鳴る

……このまま、ずっと手を離したくない……永遠に続けばと、会場に向かいあるきながら何度も何度もおもった

『皆様、ながらくお待ちせしました！チーム・ブレイド、チーム・ファングの入場です!!』

バトル筐体を挟んでチームファング……ノーヴェのお姉さんの中島スバルちゃん、そしてペアの紅ワタル、私とタツくんが向き合うように相対する

「さ、いこっか♪ワタル」

「スバルさん……相手はあの《絶剣のミカヤ》がいるチームブレイドだけど勝てるかな」

「もう心配しすぎだよ私の言うとおりにすれば絶対に勝てるから安心して任せて♪」

……チームファンング、私が全く知らないチーム：それ以上にノーヴェのお姉さんスバルちゃんの声から何か得体のしれないナニカを感じる：紅ワタルって子のガンプラは完成度、何よりカテドラルガンダムのパーツが組み込まれてることから《プラフスキー》粒子制御力は極めて高いのがわかるんだ

でもそれ以上に気になったのは、先のバトルで対峙した相手のガンプラが石像のように固まって為すすべもなく砕かれた

結果から、すべてを差し引いたら勝利した要因はスバルちゃんのガンプラが何らかのコトをしたとわかるんだけどもナニをしたかを修繕の合間を見ながら試合のVTRを何度みたけどもわからなかった

：何よりスバルちゃんも、このクラナ地区で指折りのファイター。ノーヴェよりもガンプラ歴が長いし、それに今まで無名だった紅ワタル少年をココまで鍛え上げたのはスバルちゃんが指導したのはまちがいない

「あ、あのミカヤさ…っ?」

タツくんの声で我にかえる…いけない手に力がこもってしまった。名残惜しいけどタツくんの汗、匂いを染み込んでいる絡めた指を離れた

「す、すまない少年……痛かったならあやまるよ」

「いえ、大丈夫ですから…あの、もしかして同じコト考えてました?」

タツくんも私と同じコトを!?……フッフ、やはり運命の赤い糸で太く強く繋がれているみたいだ

「まあね…チームファンングはまだ手の内を隠しているみたいだ」

「はい、でも負ける気はありません…だから一緒に」

「ああ、もちろんさ…いくよ」

GPベース、アストレイブレイドを筐体にセットするタツくんから、いつもより気合いが入ってるのがみてとれる…メイ叔母様、ユウキ叔父様とやっぱり似ているな。スサノオ・斬とGPベースをセットするとプラフスキー粒子があたりに満ちモニター、サイドスロット、アームレイカーが構築手をおき握りしめた時、私の服が光に包まれた

な、なんだいこれ？隣のタツくん、向かい側にいるスバルちゃん、紅ワタル少年も同じ光に包まれてい

『はいはい、今回からバトルシステムに新システム実装のお知らせ…あのスカリエツティ研究所から提供されたシステム《BD》をあわせる事で想い描いたイメージを服に反映する《リアジャケット・システム》を私の弟ユウ、楓ちゃんが頑張つて組み込んでくれたのよ。りバトルに入れ込めること間違いなしよ♪』

ミ、ミツキ店長?!……想いで変化するのならばとイメージする。敬愛する心の師《Mr. ブシドー》、天瞳流ガンプラ術《戦拵衣》が浮かぶと瞬く間に朱袴に胴着、胸にサラシと甲冑にも似た出で立ちになった

ブシドーマスクが無いのが残念だと思いつながらタツくんを向け息を呑む……ボロボロのマントに血よりも赤く千切れ風がないのに揺れなびくマフラー姿……こ、コレは二代目メイジン・カワグチと同じ？まさかタツくんは会ったことがあるの？

「スゴいですねバリアジャケットって、さわり心地はまったく変わらないし」

「し、少年…その出で立ちは何？」

「え？コレですか…：…ん？イメージしたらこんな風になったんです…おかしいですか？」

「い、いや…：…何でもないよ」

不思議そうに首を傾げるタツくん…メイ叔母様はタツくんが生まれてから一度も二代目に会わせたことは無いって父様から聴いてる…

「ワタル、なんか王様って感じだね？赤い外套に巻かれた鎖すごく似合ってる♪あ、私のバリアジャケット姿似合ってるかな♪」

「そ、そうですか？あんまりにあわないかも…：…似あ、スバルさんのはすごく似合ってますから、その…：あの試合が」

「ありがとワタル♪じゃあサクッと終わらせようか…：あとで二人つきりで見せ合いつこしようね」

一瞬、こちらを見たスバルちゃんの目には何か得体の知れない暗さを感じながら身を引き締めたアームレイカーを握り二人がGPベースとガンプラをセットする。粒子が更に放出量を増しフィールドを形成していく

《Beginning》Plavsky. Particle dis  
persal. field7, space》

フィールドは月面か、遮蔽物はあまりないけどクレーターが点在しているみたいだ。さあ、私たちのガンプラバトルをはじめよう

「秋月タカヤ、アストレイブレイド楯無・改！」

「天瞳ミカヤ、ツクヨミ・斬」

「紅ワタル、フアングアストレイ！」

「中島スバル、武者須刃流頑駄無」

「「いきます！／参る！／い、いきます／いくよ」」

タツくんのアストレイブレイド、私のツクヨミ斬はカタパルトから一気に飛び出し月面を低空飛行し索敵を始める…でもこのバトルがキツカケでタツくんのをあれを目覚めさせることになるって予想もしていなかったんだ

第十一話 荒ぶる牙、折れた刃は……

月面を低空飛行するブレイドとツクヨミ斬を操作するタカヤ、ミカヤ。そのとき接近を示すアラートが鳴り響く

「……………三時に反応あり！スゴいスピードだ!!」

「…あれは武者頑駄無ベースの改造機みたいだ……………」

『見つけたよ！まずは先手必勝！リボルバーナックル!!』

一気に間合いを詰めた金のアンテナに蒼の塗装に彩られたSD：武者頑駄無ベースの改造機《武者須刃流頑駄無》が右腕に装備された《破碎輪駆拳》を大きく振りかぶりブレイド、ツクヨミ斬に勢いをつけ振りかぶるのを見て防御。それぞれの機体の腕、膝、肩へ攻撃があたり水にも似たエフェクトが起きると同時に離れた

「く、いまのは…大丈夫か少年」

「はい、まだダメージは軽……………」

言いかけたタカヤの声が止まる…ミカヤも須刃流頑駄無を警戒しながら釣られるよう見た…銀の翼を広げ、血のように赤い装甲に彩られたアストレイベースの改造機《ファンングアストレイ》が降り立つ

(……………見た目からしてアストレイをベースにし複数のガンプラのミキシングビルドとセミスクラッチの改造機。背中の翼はストライカーユニット……………粒子制御貯蓄用クリアパーツも……………スゴい、スゴいよ紅ワタルくん、キミの作ったガンプラは！)

『スバルさん、先行しすぎだから……………』

『ゴメンゴメン♪はやく終わらせようとおもって心配させちゃったね……………じゃ早速やろう、わたしはツクヨミを』

『僕がブレイドを相手する。だったね』

『うん、それにちゃんと勝てる魔法をかけてあるから……安心して戦ッテネワタル』

暗いモノを感じさせる声を背にタカヤ、アストレイブレイドに向き直るワタル、フアングアストレイ……まず仕掛けたのはワタル……翼に内蔵されたバーニアで接近するや否や正拳、裏拳、下に潜り込んだのアップパーから蹴りが繰り出され、対するタカヤも拳、アスカロン、蹴りで応酬しながらツクヨミ、須刃流頑駄無から離れていき、互いの蹴りがぶつかり合い衝撃波が起きる

「スゴいよ、キミのガンプラすごく作り込んでいるし、関節強度も高く自由に動かせる……可動域もスゴくある……」

『あ、ありがとう……えとキミは』

「僕は秋月タカヤ、そして僕の愛機《アストレイブレイド楯無・改》だ」

『……ボ、ボクは紅ワタル……フアングアストレイ……き、キミもスゴく作り込んでいるね』

バトル中に関わらず互いのガンプラについて会話するワタル、タカヤ……アームレイカーを動かし殴り蹴りを繰り返す

「ありがとう！それに翼の塗装は特性の違う粒子へ……『ワタル！』」

しかし会話はスバルの声にかき消され、ビクリとフアングアストレイ。それを操るワタルの身体が震え瞳から怯えの色が見える……その



声の主はミカヤと切り結び殴り合い、撃ち合うスバルのモノ。その瞳に暗く淀んだモノを湛えながら言葉を紡ぎ出した

『ワタル、勝ちたいんだよね？相手とそんなに喋っていいの？何度もいったの忘れたの《ガンプラバトルは勝利こそ絶対》：強くなりた  
いって言ったのにウソなの？』

『……違う……ボクは』

『私がどれだけワタルのためにやったと想ってるの？いつもバトル負け続けてガンプラを壊されて泣いてるばかりの頃に弱いワタルに戻りたいの？せっかくお父さんの隠していたカテドラルガンダムのパーツを組み込んだのに無駄にするの？ねえ？』

『あ、ああ……や……だ』

『なら無駄話は止めて、目の前の相手を倒してよ……誰にも負けないバトルをわたしに見せて……ワタル、あの頃に戻りたいの？』

狂気を孕んだ声が染み込んでいき、やがてワタルの様子に変化を感じた時、かすかに声が響いた

『……倒さなきや、スバルさんのために倒さなきや、勝利しなきや、絶対勝利を、カレトヴルツフを、ボクのガンプラで……勝つんだ！』

「うわっ！」

ギンツとツインアイが輝かせ殴りかかるのをアスカロンで防ぐも関節がギシギシとなりアームレイカー越しに伝わりタカヤは力を込め防ぎながら残るアスカロンで横風に切り払うも空を切る……いや

しやがみこんだファングアストレイの拳が胴を容赦なく殴り抜き吹き飛ばされた宙を舞うブレイドに地を蹴り接近、両手を組みそのまま叩きつける

「っ?! (きつきとはまるで別人だ……いったいナニが!?)」

『勝たなきや、ボクは勝たなきや……またガンプラを壊されるのはイヤだ、強くならなきや、強くならなきや!!』

「は、はや……痛ッ!？」

拳、蹴り、肘打ち、膝蹴り、回転回し蹴りが立て直す間もなくブレイドの身体を捉えダメージを与えていく中、突然タカヤの身体に痛みが走り駆けめぐる。ナゼと思いつつも耐えアームレイカーを動かし辛うじてふせいでいく

「し、少年！スバルちゃん、彼にナニをしたんだ!!」

『ナニって?この大会にでる前からワタルに言っていることだよ……ガンプラバトルは勝利こそ絶対なんだから。弱点を容赦なく狙って叩き潰す。そうすればワタルは強くなるし、もう誰にもガンプラを壊される事はなくなる……そう《二代目メイジン・カワグチ》みたいに強くする。だからノーヴェやミカヤさん、レヴィって子には悪いけどワタルの為に負けてもらうよ』

「なっ?……だが負ける気は私も少年もないよ! (今のを聞いて確信したよ。スバルちゃんはカテドラルガンダムに宿る二代目メイジンカワグチの信念に毒されている……なんとかしなければ)」

『…それに『わたしの魔法』が始まる頃だし…ね!』

晴嵐と破碎輪駆甲が何度も打ちつけ火花と軋む音が鳴る中、ミカヤはスバルの『わたしの魔法』に嫌なモノを感じ、真っ先に浮かんだのは先の試合の相手…石のように固まったまま防御すらせずなすがままに攻撃を受け砕けた

石のように固まる、身動きが出来ない、無防備…攻撃を捌くなか、キーワードが浮かぶもナニカが足りない…ツクヨミ斬を動かした時、右腕の動きが僅かに遅れ破碎輪駆甲が迫るもギリギリかわした時、ナニカが目にはいる

破碎輪駆甲のタービンから水滴がとび、ツクヨミ斬の装甲に付着しやがて固まる…それをみたミカヤの頭に浮かんでいたキーワードが一つになり導き出された答えにワナワナとアームレイカーを強く握りしめた

「ま、まさかスバルちゃん、キミの魔法は…コレは…」

『あ、もう気づいたんだ…さすがは《絶剣》て呼ばれるだけはあるね…でもレギュレーション違反はしてないから。それにもう手遅れだよ』

スバルの言葉と同時にサブウィンドウに防戦一方のブレイドの動きが錆び付いたように鈍くなり動きがアスカロンを交差した状態で固まる

「え？腕が動かない!?なんで?……………コレは」

両腕：肘を繋ぐ関節を拡大すると見えたのは白く変色した関節：先ほど須刃流頑駄無の打撃が当たった場所に集中している。先ほどの水のようなモノの正体は《瞬間接着剤》だと気づいた

『……………勝つんだ……………ボクは強くなるんだ……………どんな相手でも!!』

足刀を固まった腕へ叩きつけアームレイカーを回しアイコンを紋章を象ったSPスロットにあわせる指で叩いた：ファングアストレイが翼を大きく広げ空へ舞いあがる。その時フィールドに変化、月面のはずなのに夜空が広がり月が輝く：その月の中央に翼を閉じ滞空するのは銀翼を閉じ逆さに飛ぶファングアストレイ。艶やかかつ妖艶で聴くものの魂を魅了する旋律を響かせ、ゆっくりと開かれた翼の内には紅よりも赤く深紅の彩りがまるで血のように見えた

……………Wake・Up……………

妖しく輝く月を背にし、プラフスキー粒子が高密度に荒れ狂い翼に収束させながら脚を突き出し一気に加速、右足に収束圧縮された赤みを帯びたプラフスキー粒子が溢れ出させながらアスカロンを構えたまま動けないブレイドへ牙をむいた

……………Darkness・Moon・Break……………

『ハアアアア!!』

「ぐ、う、うう……………!？」

機械的な声と共にファングアストレイの蹴りがアスカロンに接触、互いのプラフスキー粒子がせめぎ合い足元の岩肌が瞬く間にめくれ

あがり爆ぜ、タカヤは必死にブレイドの動かない腕を操り防ぐもアスカロンの刃に亀裂が大きく走りソレは両腕に達し…砕け散った瞬間、両腕に激しい痛みが襲いかかった

「う、うわあああああ!!」

砕けたアスカロン、関節から外れた左腕、粉碎された右腕が舞いちらる中吹き飛ばされ勢いよく岩肌に叩きつけられ背中を激しい痛みを感じながらブレイドの状態を見る…砕け散ったアスカロン、左肘関節下から弾かれ抜け落ちた左腕、粉々に砕けた右腕のなれの果て、亀裂が至る所に走り赤く警告表示で埋まる……

「う、く……」

アームレイカーから離れそうになるも必死にこらえ、ファングアストレイへ目を向けながらフラフラ立ち上がるブレイド…その姿に観客は声を出せない、近くで観戦するレヴィ、ノーヴェ、ミツキに招かれた翼、香澄、畢、ランも息を呑む。スバルと戦うミカヤはタカヤの姿をみて恐れていた事態が起きたことをさとった

「少年! (今の様相……やはり、目覚めてしまったのか!?)」

『ワタルの必殺技を防ぐなんてスゴいね〜でも、あの両腕じゃ何も出さないね……ミカヤさん、アナタを倒せばわたし達の勝……』  
「スバルちゃん」……なに?』

「……こんな事をして得られた勝利を彼が喜ぶと思ってるのか? 先の言を聞くかぎりキミは彼を心の傷に漬け込み縛り付けている、スバルちゃんがいなければ勝つことが出来ない、彼が君に刃向かえないことを知り自らに依存させるよう誘導しているに過ぎないんだ!」

『……ナニいつてるかわからないよミカヤさん。はやくアナタを倒してワタルのここに行かないといけないから……勝利を』

「……スバルちゃん！」

破碎輪駆甲と晴嵐の刃が火花を散らしぶつけ合いながら叫ぶミカヤ……アームレイカースロットをSPにあわせ迷わず指で叩くと同時にさげんだ

「……キミは二代目メイジンの意志に取り込まれている！私の刃で呪縛を断ち切る!!」

黒を基調としたツクヨミの全身が赤く輝き姿が消え大振りの拳が空をきった瞬間、須刃流頑駄無の身体が大きく揺れ吹き飛ばされ赤いナニカが迫る

『……まさかコレってトランザム!?!』

「………はあ！」

赤く輝くツクヨミを操るミカヤの裂帛の声と共に振るわれる晴嵐の刃がいくつのも光の残像を残し破碎輪駆甲を瞬く間に切り裂き細切れにされたのをみて、スバルも粒子を纏わせ捻りを加えた蹴り、拳で刃の嵐を防ぐも高速で動きあらゆる方向から繰り出されるツクヨミの刃が右腕、左腕を切り払った……

『わたしの須刃流頑駄無が!?!』

「コレで終わりだスバルちゃん！二代目メイジン・カワグチの意志、今、断ち切る!!」

残像を残しながら晴嵐で袈裟切るツクヨミ、僅かな間をあげ静かに刃を納め背を向けると同時に須刃流頑駄が爆発四散するのを見届けるとトランザムを解除した

「はあ、はあ……スバルちゃんにまとわりついた邪念は断ち切れたハズ……少年……タツくんの所に行かないと……!?!」

急にガクリと膝を付くツクヨミ……うアームレイカーを何度も動かすも反応しない……見ると各部関節が磨耗しヒビが入っている……

「……ツクヨミがトランザムに耐えきれなかったのか。く、動くんだツクヨミ、動いて。はやくタツくんのところに急がなければ……守らなきゃいけないんだ……頼む動いてくれ!」

オレンジ色に照らされる粒子モニターを前に叫ぶミカヤ……その瞳に映るのは満身創痍のブレイド、痛みに耐えるタカヤ。しかし目からは戦う意思は消えていない

「う、紅くん……」

『……まだ立ってる……倒さなきゃスバルさんの為に!!』

地を蹴り滑空しながらブレイドに迫るファングアストレイ、拳と蹴りが何度も当たり亀裂がはいり広がっていく中、全身に襲いかかる痛みに歯を食いしばり耐えアームレイカーを握りしめるタカヤに攻撃が当たる度に声が響く

(もうガン普拉を壊されたくない)

(ガン普拉を傷つけない)

(負けたくない)

「く、くう (今の声って紅くんの……)」

響いた声はワタルのものだと気づいたタカヤの脳裏に師であるマスタージャパンとのやりとりを思い出していた……ブレイドの素体になるアストレイを前にし座禅をしていた時だった

「タカヤよ、我々ビルダー、ファイターは不器用なのだ……互いの事を理解するには如何にすれば良いとおもうー」

「それは普通に喋れば……」

「喝アアアアツ！だからお前はファイター、ビルダーとして未熟なのだ……よいか言葉ではどうしても伝わらぬ時がある。お前もファイターならば魂を込め作り上げたガン普拉を操り拳を交え語るのだ！さすれば相手の声も伝わるであろうー」

「魂を込め作り上げたガン普拉……ですか？ー」

「んむ、だが先ずは自分だけのガン普拉を作り上げるのだ……そのガン普拉と己を一体となることを目指してみよー」



何度も殴られ蹴られるブレイドを通し伝わるワタルの声……コレが魂の声だと気づくと通じないとしりながら呼びかけた

「紅くん！君の想いはわかったよ……本当にガンプラが好きなんだね」

『！……』

「傷つけない、壊されたくないって気持ちはわかるよ……でも今のままバトルをして強くはなるかもしれない。でも今のキミはバトルを全然楽しんでいない」

『バトルを楽しむ？……でも負けたら壊される、傷つけられる……いつも……だからボクは強くなるんだ！』

「うわっ！」

回転し蹴りが顔面に決まりアンテナのクリアーパーツに亀裂が走り欠け、破片が落ちると同時にブレイドの動きが止まる……反応しないアームレイカーを動かすタカヤの手にナニカが落ちる。額から血が流れるも必死にアームレイカーを動かす中、ファングアストレイは舞いあがり宇宙に再び闇夜が広がり深紅に彩られた月が怪しく輝く……

「う、く……動いて、動け……」

—wake·up—

真紅色の月が空に輝きに影。フアングアストレイが蝙蝠の翼を広げる姿から黒いナニカが両脚のブーツから溢れアームレイカーを握るワタルの様子に変化が起こる

『ガン普拉バトルは勝利こそ絶対……ボクは勝つんだ……絶対勝利……絶対勝利こそすべて……』

「ブレイド……動いて………僕は」

Darkness・Moon・Breaker

何度も呼びかけても応えない愛機ブレイド……無情にも最終宣告の音がフィールドに響く。月を背にしフアングアストレイが迫る……その時だった

ー負けるなタカヤちゃん!!ー

ータカヤお前のプラモスピリッツは消えちやいなぞ!!ー

ーまだ、あきらめるのは速いよタカヤくん!!ー

ーガッツをみせろタカヤ!!ー

突如響いた翼、香澄、畢、ランの声……観客席からバトル筐体はかなり距離があるのに関わらず届いた声が染み渡る……諦めの色が消えていく

ータカヤ……………負けんな！ー

ー……………少年……………頑張れ！ー

ータカタカ！あきらめないで！！ー

レヴィ、ノーヴェ、ミカヤの声…身体の痛みが消え、迫るフアングアストレイを前に目を閉じた。心が今まで以上に落ちついてる中で目の前に自身のガンブラ、アストレイブレイドが姿を見せる

（ブレイド、僕のガンブラ……………僕の魂を込めたガンブラ……………マスタートージャパン先生の言葉の意味がわかったよ……………ブレイド、僕と一緒に戦ってくれる？）

タカヤの問いに応えるようツインアイが輝いた…フアングアストレイの必殺の蹴りが眼前に迫る中、ブレイドの全身のクリアーツ…粒子貯蔵庫から膨大なプラフスキー粒子が放出、その膨大な奔流が楯がわりになりフアングアストレイを吹き飛ばした

『!?!』

プラフスキー粒子の放出が収まり白金色に輝く中に立つブレイド、足元にある砕けず残った左腕をしゃがみながらはめ込み動かしながら刃がないアスカロン基部を構え、アームレイカーを握るタカヤは深く深呼吸しゆっくりと目を開けた

「いくよ、紅くん……………」

『…?!?!』

静かで穏やかな声と同時に白金の粒子が舞いブレイドの姿が消え、

フアングアストレイの真横に現れ刃のないアスカロン基部で切り払う。踏みとどまるフアングアストレイのハイキックをくりだすも再び姿が消えた空をきる

いや、全身の亀裂から溢れ出した粒子がスラスターがわりになり通常の三倍の速度を生み出し残像を残すほどの動き、それを目の当たりしレヴィが声をあげた

「タカタカの動き……ボクと同じだ！」

白金の粒子が舞う中、踏み込むと同時に斬り込む……フアングアストレイの翼に亀裂が走り砕け光が消えたワタルの瞳に光が宿る

『う、あ……うう……よ、よくもフアングを！』

砕けた翼を目にしアームレイカーを握る手に力がこもるワタルは再び肘打ち、裏拳、正拳……恐ろしいまでの速さで繰り出す、それを蹴りで正確に打ち落としていく

「あれって、あたしのリボルバースパイク……!?!」

「あの太刀筋は天瞳流・龍閃……一度しか見せたことがないのに……」

ノーヴェ、ミカヤもタカヤの動きに感嘆の声をあげる中、タカヤの意識はブレイドと一体化、ブレイドそのものになっている……しかしガンプラが受けたダメージはタカヤの身体を蝕むも耐える

(痛い……………まだだブレイド…)

魂を込めたガンプラ  
ブレイドに意識を集中し、ファングアストレイの動きを見極めながら左腕を見る

…辛うじて原型を保っているクリアーパーツ製の刃が無くフレーム基部のみしかない

全力に耐えきれるのは恐らく一回。負けるかもしれない。だがタカヤの頭からそんな気持ちは無く全力を出し切り魂をこめた拳をぶつける戦いを楽しんでいた

壊れ、傷ついても全力でバトルをする。たとえ負けても涙を流して、悔しくてもすべてを出し切ると何度でも戦いたくなる

だからこそガンプラバトルは楽しい。それをワタルに魂をのせた拳で伝えたい

(僕の全てをぶつきたいんだ…拳を通して伝えたいんだ)

試合終了時刻まで五分を切った、ファングアストレイは片翼、右肩のアーマーが砕け至る所に亀裂が走っている…ブレイドも機体から破片が落ち軋んでいる、肩で息をする二人をみて互いの気力も体力も限界寸前だと観客席にいる誰もが思い見守る中、互いに身構え微動すらしない

…：…静寂が支配する中、先ほどの攻撃でめくれ上がった月面の岩盤ががらりと崩れ落ちた

『コレで終わりにするよーファングアストレイ!!』

再び闇夜が広がり深紅の月が浮かぶ中、蓄積された全ての粒子を放出と同時に必殺の一撃《Darkness・Moon・Break》が解き放たれた。先ほどとは比べものにならない圧倒的加速、圧縮粒子に包まれたキックが襲いかかろうとした時、ブレイドの左腕：刃のないうスカロン基部から粒子が溢れ、やがて白金の刃へ変わると同時に地を蹴る。加速し突撃するファングアストレイの右足へ白金の刃がぶつかり、性質の異なるプラフスキー粒子の奔流が溢れだした

『はああああー!』

「コレが………僕の魂を込めた最後の一太刀だ!!」

Darkness・Moon・Break、白金色の刃が接触面でスパークする中、ブレイドの左腕に大きな亀裂が走り微かに押されファングアストレイはさらなる加速をかけた時、圧縮粒子を纏った右足に亀裂が生じ瞬く間に広がり砕け、左足も粉碎されるのを見て啞然となるワタルの前に砕け始めた左腕大きく振りかぶるブレイド、その刃が肩口から腰へ袈裟に斬り捨てる

「コレが僕の魂の刃……ブレイドだ」

振り抜いた左腕が完全に砕けると同時に切り裂かれた傷跡から光が走りファングアストレイは爆発に包まれ、力なく浮かぶブレイドの姿のみ残された

― BATTLE ENDED ―

『し、勝者、チーム・ブレイド！双方の選手のバトルに拍手をお願いします!!』

ミツキ店長の勝者を告げる声にパチパチと観客席から拍手が湧き健闘を讃える歓声が沸き上がる。しかし…

「はあ、はあ、はあ……………っ痛」

粒子フレームが消える中、自身のガンプラ…ボロボロになったブレイドとGPベースを手にしたタカヤ、だが様子がおかしい。足元もおぼつかず息も荒くしながら歩き出すも、目の前が真っ暗になり崩れ落ちるように倒れそうになる。ミカヤが間一髪で優しく抱きかかえ慌てたように呼びかけた

「少年！大丈夫か？」

「あ、ミカヤさん、届いたかな紅くに……………僕の刃……………うっ！う……………あ」

「(やはり、あの時と同じだ)……………ミツキさん！医務室の用意をお願いします!!はやく!!」

「え、ミカヤちゃん……………わかったわ。こっちよユウ、ユン先生を呼んで」

「わかった！すぐによんでくる」

ただならぬモノを感じたミツキの行動は早かった。弟のユウにかかりつけの医者であるユンを呼ぶよう伝えると、タカヤを抱きかかえたままのミカヤを伴い医務室へと歩き出した

「あなた、タカヤが……タカヤが」

「わかってる……でもミカヤちゃんとミツキちゃん、ユン先生なら大丈夫だ……」

次の試合を控える覆面夫婦……先ほどのタカヤの尋常ならない様相に顔を俯かせ嗚咽を漏らすレディMの肩を抱き寄せ安心させるよう言葉をかけるしかジェントルYには出来なかった

第十話 荒ぶる牙、折れた刃は……

了



第十・五話？天災ジェイル・スカリエツティ博士の楽しいガン普拉講座！

やあやあ〜♪♪画面の向こうのちびっ子から大きな子達、こゝんに  
くちは〜

ん？私をしらない？ククク

なんだかんだと聞かれたら、答えてやるのが世の情け！

このスカリエツティ研究所所長にして人類が誇る世紀末の天才：  
ジェイル・スカリエツティとは私の事さ!!!

今日は小さな子から大きな子にわかるようにガン普拉バトルにつ  
いての説明を懇切丁寧に脳に焼き付くまで教えてあげ…

ゴシャ!?(ナニカがつぶれる音)

ドクター！脳に焼き付かせるのはやめてください!!もう、これが無  
ければP P S Eやヤジマ商事にスカウトされるのに…(天才なのに私  
の気持ちにも気づかないんですから)。あ、私はドクター・スカリエツ  
ティの第一助手兼秘書のウーノ・スカリエツティです

血の海に沈むスカリエツティ…ウーノの手にはグシオンハンマー  
が握られているのはみなかったことにしてほしい…うん

こんな人ですけどクイント叔母様のお姉さま……シングルマザー  
の亡くなった母と結婚して本当の娘として接してくれる優しい人  
です

少しマッドがはいってますが…亡き母に何で好きになったのかきいてみたんです。「こんな変な人だけど、放っておけなくて…：それに夢中になってやり遂げた時の顔が堪らなくカツコイいのよ」って。

い、今がチャンスですよね、膝枕してあげても罪にはなりませんよね？では早そ……

ハハハハ！私、復活!!………ん？どうしたんだねウーノ？すごく残念そうに見えるんだが？

なんでもありません！それより今日はガン普拉バトルに関するの事を画面の向こうにいる皆様に教えるのですよね？

ああ、そうだったね。ククク、まず最初にガン普拉バトルが始まる切っ掛けとなったのは何だとおもうかかね？

《プラフスキー粒子》の発見ですよね？

その通り！さすがは我が義娘にして第一助手兼秘書だ!!

プラフスキー粒子とはねえ、ガン普拉バトルの根本を支える粒子物質。10年前に発見され高濃度で散布すると、プラスチックに反応して流体化を促すんだ。つまりだ本来ならば動くことすら出来ないガン普拉、アニメ機動戦士ガンダムアニメでの動き、さらには！組み込まれたシステムプログラムで建造物や、ビームの光芒、爆発エフェクトなどを物質化することができるのだよ！

それに、独自に解析してみたんだがね、このプラフスキー粒子は反

粒子同士の結合によって生まれていることがわかったんだよ……つまりプラスキー粒子は他分野にも応用可能じゃないかと思うと興奮が止まないんだよ

ああ、すばらしい！人類の発展に多大なる恩恵をもたらすプラスキー粒子はいずれ人類を変革へ導く画期的なモノに間違いない！！

……しかし、この天才である私の頭脳を持ってしてもプラススキー粒子生成は無理だね。プラススキー粒子生成技術はP P S Eの独占技術で極秘扱い、悪用されないために秘匿しているとも噂があるがね

しかああああああし！最近、興味深い事がわかったのさ……プラススキー粒子は人の想いに反応する事が！！

昨今のガンプラバトルにおいてソレは顕著に現れている事が見てわかるのさ。この現象はガンプラにのめり込む極度のファイター……深く関与していると見ているんだよ！！

今、サエグサ模型店で行われてるガンプラバトル、カレトヴルツフ争奪ペアマッチ大会でそれを発現した興味深いファイターが居たんだよ、その名も秋月タカヤくん！まさかアシムレイトをこの目で見られるとはね

それ以上に驚いたのは……私の妻の妹クイントの娘……姪のノーヴェエが彼に想いを寄せていることがね！

ククク！信じられるかい！ガンプラバトルは得意だが家事を含めた女子力がコロニーが落ちた跡より酷い有り様で、喧嘩っぱやく、男

すら寄せ付けなかったノーヴェがね！ああ、なんてすばらしい！！

あ、あの、お義父さん？話が……

ならば叔父としてノーヴェに協力してあげるべきではないかね？画面の向こうにいる君たちもそう思うだろう？我が義兄ゲンヤは「まだ彼氏は早い！」って言うだろうけどね

………で、本当はどうしたいんですか？ドクター？

もちろん、彼を我がスカリエツティ研究所に招いて専属ファイターにしてからスミからスミまで調べ尽くして……もちろんノーヴェの為にワザと同じ部屋に監き、いや閉じ込めて媚ku、いやアロマを炊いて既成事実を………は!?ウ、ウーノ？どうしたんだい、そんな怖い顔して？それにタクティカルアームズは振りかぶったら危ないから降ろすんだ

……お義父さん、前にも二代目メイジンに会いにガンプラ塾に無断で侵入しようとして《ガンプラ警察》に逮捕されかけましたよね？

あ、あれは、その……科学的好奇心から来るもので……さ、さっきのは冗談だから真に受けなくてくれるかな？

……お義父さん、少しは反省してください!!

ま、待つんだタクティカルアームズは本当に シャレになら………ぎ、ぎやあああ!!

続く？

## 第十一話 絆のアストレイ、蘇る鉄拳と漆黒 《前編》

カレトヴルツフ争奪ペアマッチ大会が開かれているココ、サエグサ模型店は外観とは裏腹に最大10人までバトル可能なフリースペース、塗装ブースから最新素材を揃えた工作室を備えている…しかし万が一の事に備えて医務室とミツキ店長と馴染み深いドクター《ユン先生》が常におり万全の体制をとっている

PPSE社が擁する《二代目メイジンカワグチ》が第1回世界大会を制してから七年、ガン普拉バトルは全世界規模に広まると同時に《ある力》の発現をも促した。それにより大会が行われる場合には必ず高度の医療知識をもつ医師を置くことが義務づけられるようになった背景があった

そして現在…

「あ、あの先生、少年の容態は？」

「……………暫くしたら目を醒ますから安心しな、まさか実際に看るとなるとは思わなかったね…《アシムレイト》を」

「……………」

聴診器とカルテを見ながら話す女性…ユン先生の言葉に無言でホッと胸に手を当てるミカヤ。少し離れたベッドには頬や両腕の肘から下は湿布が貼られたタカヤの眠る姿に胸が痛くなる。ツクヨミが動けさえすればこんな事にならなかつたと罪の意識に最悩まれるのを悟ったのかさりげなく声をかけた

「このまま大会参加し続けるのはオススメしないね。この子の《アシムレイト》は確認されている症例と違う点が多い。医者としては棄権を進めたいんだけど」

「……少年が目を覚ましてからで。タ：少年の意志をそんちようしたいので」

「……まあ今日の試合は残り三戦で終わりだ。今日はゆつくり休んでから二人でゆつくり話し合うんだ」

「はっ……」

軽く頭を下げベッドに眠るタカヤの近くにある椅子に座り手を優しく包むよう握りしめるミカヤの姿を見ながらユンはカルテに目を通していく

(秋月タカヤくん、第二回ガンプラバトル世界大会に出場した《漆黒の殲滅姫》と呼ばれた秋月メイ、《ビルドマイス》秋月ユウキの子供：四歳から誘拐される八歳までガンプラ造形術の一派《ガンプラ天瞳流》師範に預けられていた……)

ユンの机には先のバトルで肘から下の右腕を粉碎され装甲表面のいたるところに亀裂が走るアストレイブレイドの姿：空間投影モニターには簡易的なタカヤの身体、そしてブレイドの赤く表示されたダメージ個所が重なる

(今の症状からわかるように、《アシムレイト》によるノーシーボ効果が未だに切れていない。つまりオン・オフが出来ていない……ソレを危惧して二人は天瞳流師範にアシムレイトのオン・オフを制する術を学ばせるために……)

「ごめんなさい…私が守るって…なの…ごめんなさい…タツくん」

湿布だらけの左腕をさするミカヤの口から漏れた言葉を耳にしなから軽く息を吸い込み椅子から立ち上がる

「少し席を外すけどいい?」

「え、どちらに…」

「なに、少し野暮用ってヤツさ…なにかあれば私を呼びな」

少し涙目になるミカヤに端末を手渡した。バトルシステム開発発現期からガンプラバトル世界大会までのアシムレイト発現者、症例を調べるためミツキが持つ専用端末使用をもらいにメデイカルルームをあとにした

## 第十二話 絆のアストレイ。漆黒と鉄拳再び 《前編》

「ねえ…ノンノン、タカタカ大丈夫かな?」

「んなのわかんねえよ。つうか、ノンノンって呼ぶなったら!東條○じゃないし!!」

「え〜呼びやすいのにくじやあじやあノンちゃんはダメ?」

「却・下・だ!スピリチュアルパワーなんてモン使える訳ないし同じだろが!」

「いひゃい、いひゃい、ぐりぐりゆむるえ〜!」

おらあ〜と拳で頭をぐりぐりするノーヴェ、レヴィの背中に嵐を呼ぶ幼稚園児、み〇えが見えたのは気のせいだろうか？しかし周りの視線に気づきぐりぐりを止めいそいそと歩き出した

今二人が向かうのはタカヤがいるメデイカルルーム、その手にはタカヤの愛機アストレイ・ブレイドの予備パーツ、GPベースが収められたらキットケース

ーすまない、ノーヴェ、レヴィ。控え室から少年のブレイドのキットケースをメデイカルルームまで持ってきてくれないかな。叶うならば迅速にー

と言われて控え室からキットケースを手にし歩く二人は疑問が浮かんでいた

メデイカルルームに何故持つて行く必要があるのか？修理なら工寮室で出来るのに、それに倒れたタカヤを抱き止める姿を見て思った。ミカヤはペアになる以前からタカヤの事を知っていたのではないかと疑念が浮かぶ二人がある部屋の前を通りかかろうとした時、激しい音とともに勢いよく自動ドアが開き何かが飛び出してきた

「うわあ!？」

「な、なに!？」

何かとぶつかりたまらず倒れ込んだ二人が目にしたのは、真っ赤な髪にややつり目、長袖シャツに肩口までの黒のジャケット、アーミーパンツ姿の少年が頭を押さえ涙目になりながら口を開いた

「つたつた、ミツキおばさん…なんなのさ…でもコレでアイツ等を撒けたはず……だあああああああ!？」



少年がノーヴェ、レヴィを見て固まり間をおかず声を上げ頭を抱え  
屈み込んだ…その様子に慌てて声をかけてみた

「お、おい……大丈夫か？」

「ねえねえ、どこか痛いのか？」

「え？いいいや何でもない、何でもないから（マズい、マズい、マズい  
！何でお袋いるの!?しかも妙に若い……!?……まさかあのとき  
押し込まれたバトルシステムって、楓姉さんが作ったプラススキー粒  
子を使ったタイムマシン？ヤバい、ヤバい！時代が変わっちゃう!!デ  
ンライナーを探さないで）」

※ピンポーン、20年後のガンビル刃内に登場する特撮番組内に登  
場する仮面のヒーローが使う《時の列車》……なお、クロウは紫紺の  
切り札の大ファンです※

「なあ、おまえ……どこかで会ったことあるか？」

「いいいや、初めてだけど……と、とにかくさつきはぶつかってゴメン、  
じゃ!!」

それだけ言うと慌てて駆け出す…その後ろ姿をポカンと見送りな  
がらもタカヤがいるメデイカルルームへと歩いていくレヴィ、ノー  
ヴェ。しばらくして少年が飛び出した部屋から少し離れた二つの空  
き室から二人の少女が出てきた

「クロウ師匠、絶対ワシを弟子にしてもらうまで逃がしませんじゃ  
けえの………」

「………逃がしません。秋月クロウ……いえくくちゃん…今度こそ勝

たせてもらいます。ワタシのガンプラバトルで…」

プラフスキー粒子により時を超え未来から過去に逃げ出した想い人を追う欧州ガンプラバトル王者リンネ・ベルネリツタ、クロウのバトルに魅せられ自身の目的を含め弟子入りを願うフーカ・レヴィントン…果たして逃げきれぬのか

それはガンプラの神様のみ知る

「ミカヤ、タカヤのブレイドとキットケース持ってきたぞ」

「しずかに…いま、ようやく落ちついたからね…」

レヴィも静かにしてもらえるかな?」

「うん、わかってるよ………ねえミカヤン、タカタカのブレイドをどうするの?ココで治すより工作室の方がいいんじゃないの?」

ボロボロのブレイドを見ながらなんとなく出たレヴィの言葉、キットケースから接着剤と補修パーツを取り出そうとしたミカヤの動きが止まる

「……ココで治さなきゃダメなんだ。少年のブレイドは」

「なあ、ミカヤ。お前なんか隠してないか?タカヤが倒れた原因を調べてんだろ?それに前からペアになってからバトルしてる時なんか、タカヤを泣きそうな目でたまに見てたのも」

「……………っ!?!」

「ミカヤンつてもしかしてなんだけど、タカタカを昔から知ってるんだよね……」

「わ、私が少年と会ったのは去年だ……それ以上は知るよしもない、早くブレイドを……」

「……もう、ウソつくなよミカヤ……お前さ焦ったりするとグラハム病になる。今もな……」

「ミカヤン……タカタカを昔から知ってるんだよね……教えてよ」

二人の詰問と真剣な眼差し……向けられる視線からそらすようにキツトケースを再び視線を落とし見た時、焦りだした

「無い……ブレイドの予備の腕が……コレじゃ……治せない……どうしたら……」

床にへたり込むミカヤの口から漏れた「治せない」の言葉……タカヤのブレイドは何日もかけ作り込まれたオンリーワン、所謂ワンオフ品……今朝出るときまではあったのを一緒に見ていたはずなのに見当たらない。一刻も早くタカヤを治したい想いに支配されたミカヤの心は何時もの飄々とした余裕が無くなりかけていた

「今からじゃ……どうしたら」

また、守れないのか？ そう思ったときだった

「ミカヤ！ 落ち着けよ!!」

「ノーヴェ？」

「無いパーツは腕なんだな。なら今から作るぞ!!」

「え、で、でも少年のと私達が作ったモノが合うかは……」

「グダグダいってんじゃねえよ!今のタカヤに必要なんだろ?ビルダーでファイターのあたし等にかかれれば出来る!一度バトったんなら、どんな腕だったかは分かるだろ?」

「……………」

「出来ないってんなら、あたし等だけでやる。ペアなんだろうが!なんならペアをやめるか?」

ノーヴェのやや乱暴な声が焦りに満ちたミカヤを落ち着かせていく…無いならば作ればいい、ビルダーなら当たり前な事を思い出した

「…ふ、そうだね……幸いココは品揃え豊富なサエグサ模型店だ…ならば善は急げだね」

「そこなくつちやな…さあ、さっさと工作室にいくぞ!レヴィ、お前も手伝え!!」

「もつちのろんろん。タカタカの為に気持ちをたくさん込めて作るよ!!」

元気に答えるレヴィ…医務室である事を忘れているみたいだ…あわてて口を押さえるのももう遅い。それをみて笑いを押し殺しながらブレイドを残しキットケースを手に工作室へと急ぎ後にして数分後……

「ん……………ここは…っ……………たたた!?!」

ゆっくりと目をあげ起きあがろうとした時、両腕に激しい痛みが走り倒れ込む…身体中の湿布をみて軽く息をつき動くのは無理とわかる

「そっか、あのあと気を喪ったんだっけ……………ブレイドは!?!……………っ痛!……………あ、あつた」

なんとか身体を動かし机を見る…ボロボロになったアストレイブレイドを見て胸が苦しくなる一方、対戦相手のワタル、スバルのペアを思い浮かべた

「ワタルくん強かったな……………またバトルをやりたいな……………大会は関係なしで」

と口にした時、控え目に医務室の扉をたたく音が響いた…

「ん、誰だろ……………どうぞ」

「……………」

「え? わ、ワタルくん?」

静かに扉が開き現れたのは先の試合で壮絶な死闘を繰り広げ下した相手…チームフアングの紅ワタルの姿があつた

第十二話 絆のアストレイ、蘇る鉄拳と漆黒《前編》

了

後編に続く

# 第十一話 絆のアストレイ、よみがえる鉄拳と漆黒 《後編》

「クリアーツとプラ板はコレで充分だな」

「ミカヤン、タカタカのブレイドに使うアストレイはこれなの？」

「ん、みせてくれないかな？HGCEシリーズのアストレイ・レッドフレーム：うん間違いないね」

「やったあ〜じゃボクがスツゴく速く会計すませてくるね」

笑顔でHGCEシリーズ《アストレイレッドフレーム》を手に走る…まったく広いとはいえずると転ぶよレヴィ。今、私たちがいるのはベアトリスマッチ会場の上にあるサエグサ模型店内にある商品陳列棚：機動戦士ガンダムシリーズに登場する様々なMSのプラスチックモデル、ガンプラがシリーズ別に並んでいる。何時みても思うけど品揃えは地域一番だと私…天瞳ミカヤは断じよう

「ミカヤ、とりあえず工作室にいくか。必要な工具とブースを用意しなきゃいけないだろ？」

「ん、そうだね…じゃあレヴィが戻ったらすぐに作業をはじめよう…少年のブレイドを早く治してあげないとね」

「ああ、わかってるって」

頷くと商品棚がある場所から離れた工作室に足を向け前に来ると自動で開く…幸いダレもないし並んで座れるみたいだ。私は工作

室のレンタルツールボックスを開きデザインナイフ、エッチングノコ、ヒートプレッシャー、ヤスリ、ニツパーをノーヴェエが用意してくれたトレイに入れていく

流石はサエグサ模型店、工具一つにしても手入れが行き届いているね

「ミカヤくん、ノンノくん、アストレイを買って来たよ」

「よし、じゃあやるかミカヤ、まずはどうするんだ？」

「ん？まずは両腕のパーツを切り出し、それから手首をエッチングノコで切り離しからだね」

「ねえねえ、クリアーパーツの削り出しはダレがやるの？」

「そうだね……じゃあレヴィに任せるかな」

「うん、わかった。スツゴクキレイで透明感マシマシキラキラなのを作るね。いくよボクのバルファイニカス！」

デザインナイフを握りしめ元気な声と同時に浮かぶクリアーパーツ材が瞬く間にカッティングされ落ちていくのを手で受け止めていく……というかレヴィ、あまり動かない方がいいんじゃないかな。今のキミの出で立ちはミニスカート……激しく動いたら水縞柄の紐ショーツが見えてしまう……

「レヴィ！そんなにはためかすなった……みえるだろうが!?アタシらしいかないからまだいいげどさ」

「ええっせつかくカッコ良くきめたのにっノンノン、ノリ悪すぎだよ？そ・れ・にっ見せるのはタカタカだけだもん。あと、コレもお母



さんが『こうしたらタカヤくん、元気になるわよ』って教えてくれたんだよ」

「ば、バカー！なにやってんだ！はしたないだろうが!!」

「え？でもフェイトとアリシアも疲れた『あくお兄ちゃん』にしてるよ……あとこういふのとかも♪」

すつとスカートのすそを指先でつまみ上げ椅子の上に膝立ちして紐ショーツを見せつけるレヴィにワタシの中で雷が落ちた……よし紐ショーツとやらを手に入れておくかなと頭の片隅に追いやるとノーヴェが仮組を終えたアストレイの腕を手にする

「と、とにかく今はタカヤのガンプラに集中力しろつたら……ミカヤ、どこを分割するんだ……って手首を独立可動させるのか？」

「少年は原典アストレイ同様に腕を作り込んでいたんだ。切り離したらPPSE速乾セメントで接着して……」

「なるほどな……じゃ可動軸は新規でつくるのか？」

「うん、可動軸はプラパイプにポリランナーを芯にしたのを今から作るね、さつき接着したのが乾くまではクリアーパーツを埋め込む加工を……？ノーヴェ？」

「…い、いや何でもないんだけどさ……タカヤってガンプラ歴はアタシ等より短いのによく作り込んでるんだな」

「ふふ、長い短いは関係ないよ。大事なのはどれだけガンプラが大好き……ガンプラ愛で決まるからね……近くでみていたからよくわかるよ」

そう、長い短いは関係ない……タツくんは大好きって気持ちが強いか  
らココまで作り込めたんだ……私の言葉に納得したのかパーツの分割  
作業に取りかかった。あまり時間もないし可動軸のプラパイプにポ  
リランナーの差し込む加工に取りかかろうとした時だ

「……ミカヤ、タカヤの身体のケガっていいかなわかんないんだけど  
さ……あれって《アシムレイト》だよな」

指先に余計な力が入りすぎて3ミリプラパイプが半ば折れた

「……やっぱりそうなんだな……噂には聞いていたけどさ……」

「アシムレイト？……ノンノン、もしかしてタカタカのケガってまさ  
か……ミカヤん、そうなの？」

「……………」

クリアーパーツの磨き上げを止めたレヴィもアシムレイトの言葉  
に気づいたみたいだ……二人はああ見えて娘《にゃん》タイ……  
ニュータイプ並みに鋭いところがあるのを失念してたよ。なにより  
原因は私が今見せた動揺でバレたに違いないか

「……レヴィ、ノーヴェちゃん……二人の言う通り少年のあのケガは  
……《アシムレイト》が原因だ……それに私は……」

「……………わかった」

「え？ノーヴェちゃん？」

もう隠し通せない……すべてを話そうと口を開こうとした時、ノー

ヴェちゃんの声が遮った

「アタシが聞きたかったのはタカヤのケガがアシムレイトが原因なのかって事だけだから……じゃ、この話はおわり。さっさと完成させてタカヤのところにいくぞ、レヴィもいいな」

「うんわかったよ。じゃあじゃあスツゴく速くてきれいに仕上げるね♪」

「あ、ああ……じゃあ急ごうか……レヴィ、コンパウンドは丁寧に優しくだ」

「了解、了く解♪」

「ミカヤ、はめ込み穴は下穴で1. 2、仕上げが2. 4でいいんだな？」

「ああ、ソレでいいよ……粒子浸透率を上げる加工は慎重にね」

…二人ともいい友達だ。まあ好きな人が同じなのが気になるけど今はタツくんの為にブレイドを治さないと。やりかけの可動軸加工の続きに取りかかる

まっつてタツくん……みんなが必ず治すから

第十二話 絆のアストレイ、鉄拳と漆黒再び

同時刻…サエグサ模型店内メデイカルルーム

「ワタルくん？どうしたの？」

「……あ、あの……」

先の試合で戦ったチームファングの紅ワタルくんが口ごもらせながら見てる…

「ワタルくん、立ち話もなんだし…イスにすわったら？」

「う、うん…ありがとう」

……近くにあつた椅子に座つたワタルくん、その手にある真紅に輝くキットケース、多分ファングが収められてる。隣にいるはずのペアのスバルさんの姿は見えない

「あ、あの秋月くん…身体は大丈夫ですか？」

「え？……身体全体が少し痛いだけかな…」

「……あ……そのごめんなさい…ぼくのせいで……」

「謝ること無いよ。今日のバトル、すごく楽しかった…」

「……秋月くん、なんでガンプラバトルを楽しめるの？ガンプラも傷ついてボロボロになるのは楽しくなんか…」

「……そうだね…僕もガンプラがバトルで傷つくのもボロボロになるの嫌だった、先生にも一度も勝てなくて初めてのバトルでもノーヴェさんに全力を出し切って負けたりしたんだ。すごく悔しくなるけど、またバトルをしたくなるんだ。強いファイターとガンプラと戦えるって思うだけで胸が熱くなる。それにワタルくんが最後に繰り出した技から君の魂をガンプラを通して感じた……ガンプラに対する想いも、そしてノーヴェさんのお姉さんのスバルさんと一緒に強くなりたいって……何よりココに来たのは僕に謝るためじゃない……」

「ボ、ボクは……」

そう、ワタルくんがココに来たのは謝罪の為じゃない…魂を込めたガンプラを通して互いに全力で戦ったからわかる。少しだけ戸惑うようにゆつくりとワタルくんは顔を上げた

「……ボクは……もう一度、秋月くんとバトルがしたい。スバルさんと一緒に」

「いいよワタルくん。でも大会が終わってからでいいかな。互いにベストな状態で全力で楽しくやろう、ガンプラバトルを！」

「ありがとう秋月く……」

「タカヤでいいよ。僕もワタルくんって呼んでるし」

「あ、じゃあタ、タカヤくん……」

おどおどしながら僕の名前を口にしたワタルくん…自然と笑顔になった…そんな時、乾いた音が耳に入った。真紅のキットケースが開いた先に両脚の無い白地に金の塗装が目立つガンプラが落ちていた。なぜかわからないけど気になる…なんか呼ばれてる感じがする

「ワタルくん、そのガンプラは？」

「あ、コレはスバルさんがファングアストレイの参考につて渡されたんだ…名前がカテドラルガンダムって言ってたよ」

「カテドラル…ガンダム……ワタルくん、もしよければなんだけどカテドラルガンダムに触っていいかな？」

「いいよ……でも大丈夫?」

「大丈夫、コレがカテドラルガンダム……」

腕が痛いけどワタルくんに手渡されたカテドラルガンダムを見て驚いた……可動範囲の広さもだけどバトルでプラフスキー粒子を無駄なく使う事を前提にして、シンプルな武装は完成度の高さがわかる……究極のガン프라といっても過言じゃない出来だ

でも何だろう……手に触れていると引き込まれるような感じる……まるでナニかがにじみ出てくるヨウナ……

ー……ガンプラバトルは勝利こそ絶対。たとえ戦う相手が仲間、家族、兄弟だとしても……ソレを押しつけ勝利の頂を目指すべしー

ー完璧な勝利こそ☆☆☆☆の条件……勝利をー

……ナゼかわからないけど真っ暗な場所にいつの間にかに立っている。医務室にいたのになんと思つた時、気配を感じて振り返つた

『……………』

ボロボロの赤黒いマフラーにマント、長く伸びた黒髪、独特な形状のサングラスをつけた人が無言でみている……

「……やくん、タ……タカヤくん!?!」

「え?ここは……」

「びつくりしたよタカヤくん、急に黙り込むからどこか具合が悪く

なったんじゃないかって心配したよ」

「そ、そうなの……あ、ごめん……じゃあカテドラルガンダム、返すね」

「うん、じゃあボクはそろそろ行かないと。スバルさんが待っているから」

「そうなんだ。じゃあまたねワタルくん」

「タカヤくん………大会中はボクとスバルさんも見に来るから……ま、またね……あ、それとコレを」

「コレってハンドパーツの手甲？」

「タカヤくんに使って貰いたいんだ。前に作ったんだけどボクのファングアストレイには合わなくて……でもタカヤくんのブレイドなら使いこなせると想ったんだ」

真紅色の手甲パーツ……中央には磨きあげられたクリアーパーツが輝いてる。すごい作り込みだつて僕でもわかった

「でもコレは……大事なパーツじゃ……」

「……大会が終わるまででいいから使ってみて」

「……わかったよワタルくん、大事に使わせてもらうよ」

「じゃあボクは待ち合わせがあるから………それとありがとうタカヤくん」

どもりながら頭を下げてワタルくんはカテドラルガンダムをキツ

トケースに納めて医務室から出て行った。扉の向こうにスバルさんをみた気がする……頭に大きなタンコブが見えたのは気のせいだね

「少し寝ようかな……」

毛布を被った……ワタルくとまたバトルが出来る。まずは大会をミカヤさんと勝ち抜いてカレトヴルツフを手に入れよう……って考えているウチに目を閉じた……

「ワタル……あのあたし……ヒドイことを」

「スバルさん、ボクなら大丈夫……やっと帰って来てくれたから嬉しいよ。コレからは始めるよ、ボクとスバルさんのガンプラバトル、一緒に強くなりましょう」

「ワタル……うん！一緒につよくなるよ。そしてお父さんとお母さんにわたし達の仲を認めてもらえるくらいに!!」

「は、はい」

「じゃあ新しいガンプラ作ろうか。わたしの部屋と一緒に。ねえワタル、わたしとワタルでしか作れないのを作ろうか♪」

頭に大きなタンコブが目立つも幸せオーラMAXなスバル、照れる



ワタルが歩いていく通路の柱の後ろに立つ二つの影…チーム《G&Q》の一人《G》が柱を握り潰さんばかりに見ていた

『あのモヤシ、オレが居ない間にスバルの部屋に上がり込む気か!!』

『あなた、いい加減なさい。スバルの恋路を邪魔する気? でないとく怒るわよ』

『わかった、わかったから……でもなカテドラルガンダムを持たせたまんまなんだぞ? またスバルが乗っ取られでもしたら』

『大丈夫よ。カテドラルガンダムはワタルくんが将来の義息子しつかり保管するわよ(ファイトよスバル! 最初は痛いけどたくさんしなさい。アレも渡したけど直に感じたいならばアレも飲めば大丈夫だし……フッフ)……さあ、試合が始まるから逝くわよ』

『わかった。相手なんだがネオドイツっぽい衣装だなくどうしたQ?』

『な、なんでもないわよ。さあガン普拉バトルをしましょうか……』

相手選手の情報を見ていたクイ…Qが端末を閉じた。オレ達は会場につくと、相手もすでにスタンバっていた。実はこうしてバトルにでるのは五年ぶりだ。ブランドはあるが馴染みの店《やきんどうえ》で娘達に内緒は調整はしたからな

相手のガンプラはウインドウオートに武装コンテナ装備、もう一人はザクR2ベース…両肩のは高出力バーニアで武装ラッチも見える……それより気になんのは色だ……どこかであの配色をみたことが

「さあ、皆さんおまたせしました〜コレより第二試合チーム・シユヴァ

ルツ、チーム・G&Qの試合を始めま〜す♪」

《Press set your GP—Base: Press  
et your GUNPLA》

つ  
四人のガンプラの瞳に光が宿り命が吹き込まれたカタパルトに立

《Beginning[Plavsky. Particle]dis  
persal. field2.city》

人気のない廃都市が粒子で構築され先のバトルの興奮が治まらない観戦者、アームレイカーを握るファイターも胸の内から熱くたぎらせていく

《Battle・Start》

『ジエントルY、ウインドウォートカスタム』

『レディM、ザク・リベルタス』

『G、イフリート!!』

『Q、リボルバー・G』

『』』』』いくわよー／いくよ／いくぞ／いきます!!

『』』』

弾かれたようにフィールドに降りる…周囲は廃ビル群が乱立してやがる。相手の出方をみようとした時アラートがなる…モニターにはザクR2ベースの改造機

《ザクリベルタス》が両肩のバーニアでスゴい速さでつつこんできた  
…狙いはクイ…QのリボルバーGか！

『ハアア！』

『甘いわ!!』

振り下ろした大型ヒートホークをリボルバーGの腕部ビームシールドで防いでる。しかしあの戦い方はどこかで…考えを遮るように背後からの熱源反応アラートを耳にしとっさにアームレイカーを引き右へ左へ回避運動を取る…ウインドウオートがビームライフを構えて再び狙い打ってくる

『なんつう射撃だ…コッチの動きを予想してやがる!?!』

冷や汗を流しながら少し離れた場所で戦うQを見る…息をつかせない拳と蹴りの連続攻撃をヒートホークでいなしていく…コイツの動きは…まさか、だとしたらマズい。あわてて通信をつないだんだが

『その動き、まさかアナタは?!』

『あら、やっと気づいたのね…いえ神無拳のクイント…五年ぶりね  
こうしてバトルをするのは』

『やっぱりメイなのね。名前を聞いて信じられなかったけどバトルしてわかったわ……………』

まずい、まずい、まずいぞーこのままだと…五年前のアレが再現されちまう!!

『なら五年前の決着つけましょうか？神無拳のクイント……』

『もちろんよ…メイ……いえ漆黒の殲滅姫メイ………』

『あはは、まいったな。二人とも本気バトルする気満々だ』

『つうか！止めろよユウキ!!白銀の裁定者だろうが!!』

『いやあ、さすがにあの状況に割り込んだら……ね』

大型ヒートホーク二丁から繰り出されてる怒濤の斬撃を、弾きいなくてく…しかも廢ビルの側面を駆け上がりながら……どうすりゃいいんだ

第十一話 絆のアストレイ、蘇る漆黒と鉄拳（後編）

了

第十二話 修理とドキドキバスタイム ♥ 《前編》

『ふふふ、少し動きが遅くなったわね？太ったのかしら？』

『そういうアナタも少し鈍ったんじゃないの？腰が入ってないわよ！』

『言うわねクイント！でもワタシも負けられないの……ユウキから沢山の愛と元気をもらったから元気百倍、いえ千倍よ!!』

『…変わったわねメイ！昔は男嫌いだったのに!!』

『…ふふアナタもね！まさかパパ専に走るなんてね!!』

『な！あ、そういうメイも人の事いえないでしょうが!!私はアナタの逆光源氏計画と違ってゲンヤとは清い関係で結ばれたんだから!!』

『む！逆光源氏じゃないわ！この渋逆援助交際パパコン!!』

『いったわね少年愛好者!!』

凄まじい速さで拳と蹴りを放つけどメイの大型ヒートホークの分厚い刃が盾代わりになり防いでいく。メイ、あまり言わないほうが。会場の皆がみて聞いているんだらね!!

それに…

『ク、クイント!?やめろったらコレ以上止めろ！やめるんだああああ!!』

イフリートナハトを操るゲンヤさんも集中できずに攻撃するから

ムラがあるし、僕も気が気でないし…コレ以上は互いのプライベートがさらされてしまうし、やるしかないかな

アームレイカーを傾けメイ、クイント先輩がいる場所…廃ビルを碎き破壊し辺りを更地に変えていくハルマゲドンな戦場へとウーンドウオートをMAに変形させ向かった

ほんと昔から変わってないな二人とも…

### 第十三話 修理とドキドキバスタイム ♥ 《前編》

『…皆様、大変な事がわかりました！現在試合中のチーム・シユバルツ、G&Qのメンバーが判明しました…なんと元世界ランカー八位の秋月メイ、ビルドマイスの秋月ユウキ、そして《荒野の迅雷》中島ゲンヤ、《神無拳》中島クイントだとわかりました！五年前のクラナ地区で開かれた第2回世界大会予選で死闘を演じた二人の女性ファイターが再びぶつかり合ってます!!』

やや興奮して解説しているミツキの声を耳にしながらアームレイカーを操作し、クイントの攻撃を大型ヒートホーク《ガオウ》で裁きしのいで、隙あらば斬りつける。でも寸前にかわされ蹴りが襲いかかるけど刃を正面に構えて防ぐ、アームレイカーにビリビリと衝撃が伝わってきた…ふふ、訂正するわよクイント、五年前より重さもスピードも速くなってるわね

廃ビルの壁面を上昇しながらガオウを回転させ刃をスライドさせる…グリップカバーが開き握り伸びた砲身を、むけ迫るクイントのリヴォルヴァー・Gにねらいを定め撃つ。足元の外壁に水しぶきのように弾け火線が伸びるのを予想したかのように交わしていく

『相変わらず正確な射撃ねメイ！でもそれがアナタの命取りよ!!』

何を思ったのか拳を向けたまま動きが止まる。いったいなにをす  
る気……

『いくわよりヴォルヴァーG！衝撃のおおッ、フアアアアアスト  
ブリットオオア!!』

拳：腕にある六連シリンダーが回った次の瞬間、リヴォルヴァーG  
の姿が消える：ぞくりとした瞬間、ガオウを重ねるように構えた時、  
激しい衝撃と振動に全身を揺さぶられた。な、なにが!?!と目を向ける  
とリヴォルヴァーGの拳の基部から粒子がバーニアのように放出さ  
れヒートホークの刃にめり込んで亀裂を起こさせてる

『さすがねメイ、リヴォルヴァーGの必殺攻撃を防ぐなんて……』

『お生憎様、ユウキが私の為に作ってくれたガオウはだてじゃないの  
よ』

殴りつけた反動を利用して距離を取るリヴォルヴァーGに軽口を  
叩く。でもとっさにガオウを盾にしなければ私は負けていた：そう  
思うと冷や汗が頬を伝うのを感じながら二つのガオウのうち一つに  
目を向ける。刃は愚か基部分にまで亀裂が入ってる：コレ以上の  
戦闘に耐えきれない。もう一つはまだ無傷だけどさっきのを受けれ  
ば攻撃手段がなくなる。ザクリベルタスの切り札を使うには時間が

『コレで決めるわよ！リヴォルヴァー！撃滅のオオオオオッセカアア  
アンド、ブリットオオア!!』

クイントの声が思考の海に浮かぶ引き戻し見えたのはさきほどど  
は違う輝きを纏うリヴォルヴァーGが拳を突き出しながら加速して

くる姿、とつさに進行方向上にガオウを投げ残された一つをガンモードに切り替え構え引き金を絞る。砲身下部カバーが開きグレネードが撃ち放たれ破損したガオウに着弾、閃光に包まれ爆発

コレなら…

『……………甘いわよメイ！私のセカンドブリットは終わってないわよ！！』

爆煙を抜け飛び出てきたのは無傷のリヴォルヴァーG：みると全身を粒子フィールドが輝いている。まさか防御にも使えるの!?背後へ飛びガオウをガンモードに切り替え牽制する。でもそれは防がれまっすぐ突撃し迫る…避けきれないって感じた時、何か黒い影が躍り出た瞬間爆発、瞬く間に爆風が飲み込むけどダメージが少ないことに疑問を感じた私に通信が入った

『ふく間一髪だね』

『ユ、ユウキ?なんで!?!』

爆風が晴れた先には白銀に輝く機体…私のユウキが操るTR-6《ウーンドウオート・ソル》が巨大なシールドを構え守るように立つ姿に思わずドキッとする

『対物反応装甲《リアクティブシールド》うまく使えたね…メイ大丈夫?』

『え、ええ……………ユウキは』

『僕なら大丈夫。メイが無事でよかつ……………ん?』



巨大なシールドをパージ、荒れ果てた地面にゴスンと落ちる…その先にはリヴォルヴァーGをイフリートナハトが抱き抱えるように廃ビルを背中に立っている

『あ、あなた!?!』

『大丈夫かクイント……ケガはないみたいだな』

『なんで、こんな無茶を…イフリートが』

『あのなあ、オレの大事なカミさんが危ないのを指くわえてみてられるかよ。つたく一人で熱くなりすぎだ』

『……そ、それはアナタのコトをメイが』

『そ、それよりだ。ユウキ達が体制を立て直す前に仕掛けるぞ…オレがバックス、クイントがアタッカーでだ……いつも通りに決めて勝ち上がるぞ。最後のブリットの使いどころはオレが指示してやる』

『わかったわ。ゲンヤ……二人で勝ちましょ』

『じゃあ、いくか……オレとクイントのペアバトルを見せてやろうぜ!!』

モノアイ、ツインアイが輝くと加速し接近してくる…さつきとはまるで違うのがわか。アームレイカーを握る手に汗がにじんでいる。懐かしいわね…この気迫と緊張感是世界大会で感じた時と変わらな  
いわ

『メイ、僕たちもいくよ……それまでにアレを』

『わかってるわ……いくわよザクリベルタス!!』

スロットバーからユウキから受け取ったビームバズーカー、六連口ケツトランチャーを構え狙いを定め撃ちながらユウキのソルと共に荒れ果てた都市のアスファルトを滑るように加速していく。ビームバズーカとロケットランチャーの弾幕を抜けた現れたのは予想通りクイントのリヴォルヴァーG。眼前に迫り拳と蹴りが襲うのを紙一重で交わし距離をとろうとした

『そこだ!』

リヴォルヴァーGの背後からイフリート…荒野の迅雷ゲンヤが飛び出して肩にマウンドされたクナイを投擲する。でも当たる寸前に背後から伸びたビームに溶かされた爆発した。

『油断をしないでメイ! 次の武器を!!』

『わかったわ!』

膝アーマ…ガンキヤリアから射出された無数の円盤《地雷》が連結された武器。迷わずつかみ鞭のようにしならせリヴォルヴァーGへ叩きつける

『チェーンマイン? しまっ!』

『クイント!!』

リヴォルヴァーGに巻きつく寸前、イフリートが割り込むやいなや良腕ぶ六連マシンキヤノンで迎撃、信管が起動し爆発、煙の中から左腕を失いながらイフリートがヒートサーベルを逆手に構えて切りかかりわずかに動かし交わすけど左肩高出力バーニア外装が逆袈裟に

切り裂かれ爆発、バランスが崩れた

『メイ！こんの!!』

ショートバレルビームライフルを構えソルが至近距離で私を守るよう撃つ：イフリートの装甲がビームで穿たれて火花が散るもガシリとソルが鯖折りのように拘束された

『な！抜け出せない!!』

『いまだクイント！コイツはオレが押さえる!!いけ!!』

『わかったわゲンヤ！いくわよりヴォルヴァー！抹殺のオオオオツ、ラストツブリットオオオオ!!』

クイントのリヴォルヴァーG：腕部シリンダーが三回撃鉄を鳴らすと、今まで以上の粒子フィールドと放出量が嵐を巻き起こし、ふわりと浮いた瞬間地面と乱立する廃ビルが粉々にくだけ爆発的に加速、迫ってくる

『いまだメイ!』

『わかってるわ…いくわよザクリベルタス……………』

ユウキの声に應えるようにアームレイカースロットをSPスロットに合わせた：ザクリベルタスの両肩高出力バーニアに光が集まり、ランドセルにあるユニットから光の翼が輝き開いた

『ザクの縛りより今こそ解放され羽ばたけ!……………』

リヴォルヴァーGの拳が届く前にアームレイカーを傾ける：重力

から解き放たれたようにスレスレでかわす。でも胸部装甲がひしやげた。なんて拳圧なの？もし発動が遅れていたらと思うひやりとする

『よくかわしたわねメイ！でもまだまだ終わりじゃないわ』

『そう、なら楽しめるわね!!』

水色の粒子フィールドに包まれたクイントのリヴォルヴァーG、紅く輝く私のザクリベルタスが何度もぶつかると同時に廃ビルが砕けていく。同時に私たちの、機体も亀裂が走っていく

『クイント！』

『メイのところにはいかせません!!』

『ち、やるなユウキ！』

『アナタこそ、さすがは荒野の迅雷ゲンヤだ!!』

ユウキも戦っている……バトルが苦手なのに私のために練習してきて今じゃあの荒野の迅雷と渡り合えるファイターになってる。かっこいいわよユウキ、さすがは私の旦那様よ

『よそ見してる暇あるのかしら！そんなに心配？』

『心配、確かにそうね。でも、ユウキは負けないわ……クイント、今回も勝たせてもらおうわよ!!』

アームレイカーを強く握り最後の武器ガオウを振りかぶる……でも

拳が刃を捉え競り合うけど亀裂が走り砕け粒子フィールドが消えた

『私の勝ちみたいねメイ!』

誰の目からも見て獲物を失った私には勝ち目が無いって思うでしょうけど、この瞬間：粒子フィールドが消えるのを私は待っていたの！ザクリベルタスの拳に赤い光があつまり収束、やがて真紅に手が輝いた。コレがユウキが私の為に作り上げた最強の必殺技

その名は……

『燃え上がりなさい！リベルタスブレイカー!!』

真紅に輝く手を堅く手刀に固め、懐深く潜り深々と胴へと叩き込む  
：機体を持ち上げながらプラスチックを穿ち内部で手を広げていく  
……

『そ、そんな……私のリヴォルヴァーGが……』

『………塵芥に砕けなさい!』

内部から光があふれ爆発、力なく地面に落ちるリヴォルヴァーGの瞳から光が消えた……強くなったわねクイント。世界でも十分通用できるわ

『クイント、まさかりヴォルヴァーGが』

『やったね……なら僕もやらなきゃね……いくよソル』

ショートバレルビームライフルをホルダーに収め変わりに背部に牽架した武器を取り出す……コレは僕がメイとの練習バトルで思いついた武器……極厚の刃にスラストスターが目立つそれを握り構えた

『(な、なんだその武器は)……だがその軽量級のウインドウオートじゃ振り回されるだけだ』

『振り回されるかどうかは戦って、みてから決めましょうかゲンヤさん』

ウインドウオート・ソルを大剣を構え加速しイフリートに迫る。ゲンヤさんはあのラル大尉と並ぶ実力者、ファイターとしてまだ未熟な僕は負けるかもしれない、届かないかもしれない……でも負けられない理由が僕たちにはあるんだ！

『どうした！振り回されているぞ!!』

『まだまだ！ソル、もう少しだけ力を貸して!!』

怒涛の速さで放たれるヒートサーベルの斬撃を大剣で防ぐ……必ず勝機はあるはずだ。見極める相手のガンプラの可動範囲を作り込まれているとしても可動範囲の隙間は必ずある

『どうした！俺に勝つんじゃないのか!!』

『うわ!?!』

盾変わりにしていた大剣に重い蹴りがはいりたまらずよろめいた……そのときイフリートの動きに隙が見えた……荒野の迅雷ゲンヤさんを倒せるのか？ 僕に……いや必ず出来る!!

再び大剣を盾に立つ。こちらの様子を伺いながらもゲンヤさんはイフリートで再び切りかかってきた

ウーンドウォートの関節も悲鳴を上げている……あと少し耐えてくれ……そして逆袈裟に切り払おうとした瞬間、隙が見えた、いまだ！ 迷わず大剣を逆袈裟の流れ方向に滑らせるように刃を流し受け、剣身に設けられた大出力バーニア前回で大きく胴を捉えた

『な、なに！ まさかイフリートの動きを見切ったのか!?』

『い、いっけええええ……スーパー・大ッ切ッ断アアアア!!』

メキメキと胴に刃が食い込んでいく感覚をアームレイカーに感じながら力任せに振り抜いた。目に映ったのは左斜め上に切り払われたイフリートの下半身、ゴトリという音と共に落ちた上半身、モノアイから光が消えた

―― BATTLE ・ ENDED!! ―

『し、勝者！ チーム・シユバルツ秋月夫婦ペアです!!』

静まり返った会場から拍手が鳴り、やがて歓声に包まれた……初めの公式バトルだったけど全力を出し切出し切れた、なんか気持ちいいかな。GPベースとガンプラをキットケースに納め挨拶し歩き出そうとした時、柔らかな何かが顔全体にぶつかり包み込んだ

「ユ〜ウ〜キ〜♪」

「う、うわあ？メイ！なにしてるのさ？むぐ?!？」

「スツゴくかつこよかったわ。さすがは私の旦那様♪コレはご・褒・美・」

「ま、待ってみんな見てるから！それにキミのが当たってるから!!」

名残惜しいけど柔らかで甘い匂いがする胸から逃れたんだけど、メイにスイッチが入ってるし!?本気のバトルやったから興奮してるんだ

「なに照れてるのユウキ、最近また出るようになったからって吸って、抓ったり、はさませて亀さん？こんにちわ〜させたりしてるのに」

「い、いや！やめて!!これ以上は放送禁止ワードになるからね!？」

「それに、もう欲しいの……朝の分じゃ足りないの……だからね」

ヤバイ、ヤバイ誰か助けて！そうねがった僕に神様が微笑んだ

「あく話中、わるいんだけどよ。すこしいいか？」

「え。えとアナタは…荒野の迅雷……中嶋ゲンヤさん」

「なんだ知ってたのか、こうして会うのは五年ぶりだなユウキ……白銀の裁定者。前に戦った時より成長したみたいだな」



「まあ、メイが付きつきりで鍛えてくれたんで、そのおかげですよ……で、僕に何か？」

「……………この大会にガンプラマファイアが入り込んでる……………」

「え！でも」

「…とにかくだ俺んところでも調べておく。あとヒロシがコツチに向かっているらしいから詳しくは聞いてくれ。と、言い忘れてた……………最高のバトルだった。次は負けねえからな」

「はい、次も勝ちにいかせて貰いますよ…ゲンヤさん」

「いうじゃないか。じゃ、またな……………」

固く握手すると歓声がわき上がった。でもガンプラマファイアが大いに参加している……………ファイター登録には必ずミツキちゃんが目を通してる筈、不審な改竄データがあれば見逃す筈はない

ガンプラマファイアの目的はカレトヴルッフかもしれない……………でも嫌な予感がしてならない……………

義兄さんの作ったカテドラルガンダムのパーツを組み込んだガンブラが現れた事も何らかの前触れかもしれない。メイが気になり声をかけようとしたけど

「メイ、私に勝ったならば必ず勝ちなさいよ」

「もちろんよ。でもアナタのファザコンは治ってないみたいね。くたしか中学生の時よねゲンヤに告白したのは……」

「な、な！ファザコンじゃないわよ！そういうメイだって少年愛好者で男嫌いじゃなかったかしら？《黒髪の魔王》って呼ばれてたあなたがね」

「ち、ちがうわよ私が男嫌いだったのは下半身的な考しかしないバカばかりで……でもユウキはあの時の私を怖がらなかったし、助けてくれたし……あとシヨタコンじゃないわよ」

「ふふ、すごく大事にしてくれてるのね……ならうちのノーヴェとタカヤくんがつき合うのは大丈夫かしら？」

「いいわよ……って、だめ！タカヤにはまだ早いわよ!!」

「なにが早いのよ？あなたがそんなこと言えるの？」

「ははは、余計な心配だったかな……さて次の試合が始まる前に筐体をあけなきゃな。僕は苦笑いしながらメイと言い争うクイントさん達がいる場所に軽く額に頭に手を添えるゲンヤさんと一緒に歩き出した」

なんでこうなってるのさ？

「少年、湯を流すよ……熱くないかい」

「タカタカ、じつとしててね…むう、うまく洗えないじゃないか」

「こら、動くんじゃないよ……ああ、もう痛いだろうが」

湯気が明かりに照らされ、目の前には黒髪をサイドテールに纏め白い湯浴み着姿のミカヤさん、左側にはレヴィ…白スク水姿で腕に胸があたってる、いや挟まれてる、右側にいるノーヴェさんは……なぜ青ビキニ？柔らかい手がその腰に添えられてて逃げられない

な、なんでこんなことになったのさ!?

第十三話 修理とドキドキバスタイム（前編）

後編に続く!!

第十二話 修理とドキドキバスタイム ♥ 《本番ならぬ後編》

「ん……ったたた!？」

寝ぼけながら起きあがろうとして痛みが全身にきて目が覚めてしまった……うう、まだ痛いけど少し治まったかな?時計をみると目を閉じてから15分ぐらいしか過ぎてない。近くにおかれたブレイドに手をのばそうとしたけど痛み思わず引つ込めた

「ブレイド……どうやって治そう……ワタルくんの手甲パーツの組み込みしないといけないし……」

全身に亀裂が走るブレイドを見て考え込む。何でかわからないけど身体が痛いし満足に動けない……何とかして明日の試合までに治さないとせつかく僕にパーツを渡してくれたワタルくん《僕のライバル》の想いに応えないといけない。試しに指先を動かすとズキンとする

どうしたら……って考えてたら医務室の扉が開いた

「ん?少年、もう起きたのかい?」

「タカタカ、グゥテンモゥゲゥン」

「も、もうおきて大丈夫なのかよ……タカヤ」

ノーヴェさん、ミカヤさん、レヴィが医務室に入ると僕に声をかけながら椅子に腰掛けてきた

「は、はい、なんかみんなに心配かけてすいません……あのどうしたん

ですか？」

「見舞いもだけど、キミに渡したいモノがあるんだ。ノーヴェ、レヴィ」

「え？コレって…まさか」

「タカヤのブレイドの腕パーツだ……うまくできたかわかんないけどさ……」

「タカタカのためにミカヤン、ノンノン、ボクも作ったんだよ。クリアーパーツのカッティングと磨き込みがんばったんだよ♪」

キットケースのトレイ……置かれているのは僕のブレイドの腕パーツ。すごい……スミイレ、ディテールアップと可動範囲の広さが触らなくてもわかる。何よりもミカヤさん、レヴィ、ノーヴェさんのビルダーとしての技術は高いってのがわかる

「ありがとうございます、レヴィ、ノーヴェさん……本当にありがとう」

「べ、べつにいいっての……じゃ用意するからまってる」

「え？用意って」

「決まってるじゃないか、今からキミのウチに帰るんだよ、あ、ユン先生から帰宅許可は貰っているから安心してくれ」

「で、でも修理をしないと」

「それならタカタカのウチで直そうよ。なんかさっきの試合が終わってから工作室が満員になって空くまで時間がかかるってきいたんだ」

「そ、そうなんだ……じゃあ残りの試合を見てから」

「ダメだ、今は身体が動かせないだろうが。試合ならギン姉、チンク姉に録画して貰ったのを後で届けさせる。あとブレイドの修理もアタシ等がやってやつからさ」

「そ、そこまでやらなくても……」

「少年、休むこともファイターとして大事だ。明日の試合までには身体と治し心を落ち着かせる事に専念するんだ……」

「いや、でも」

「「いいから言うとおりにする」」

「は、はい……」

うう、なんか三人とも怖い……いつの間にかにブレイドはキットケースに収められてるし……ミカヤさん、ノーヴェさんに肩を貸して貰いながらサエグサ模型店の外に待たせていたタクシーに乗り込んだ。しばらくしてマンション《リ・ホーム》で止まると降りエレベーターで僕のウチのある階につき、そのままオートロックを解除して中に入り真っ先にベッドに横にされた。

「少年、すこしでも具合が悪くなったらすぐにいうんだ、いいね」

「あと、欲しいものがあんなら取ってきてやるからさ」

「タカタカ、ノドがかわいたらボクに言っつてね。前みたいに飲ませてあげるね」

「い、いや普通にのませてくれるとうれしいかな………あの、ココでブレイドの修理を？」

「ああ、ココなら工具があるし、それに何かあれば気づけるからね（………少年。タツくんの匂いに包まれると作業効率があがるからね……今朝の使用済み<sup>ティッ</sup>！はスゴく濃厚でよく絡みつき甘美、何度極楽涅槃に逝ったか……）」

「それにタカヤにしかわからない加工や作り込み部分があるんだろ？指示してくれると助かるからさ（前は余りみれなかったけどガンプラがキチンと並べられてるな。それにタカヤの匂いつてなんかクラクラする……い、いまは集中するんだアタシ!!タカヤがみてんだから）」

「そうだよタカタカ。たくさん寝て元気になってね（タカタカのお部屋つてスゴいなあ……ベッドの下には聖書？があるつてお母さん言つてた気が……あとで探そ〜）」

笑顔でいつてくるミカヤさん、ノーヴェさん、レヴィ……でも何だろ寒気がするけど気のせいかな？横になりながらブレイドが修理されていくのを眺めていく

「ミカヤ、胸の補修はコレぐらいでいいか？」

「ああ、それで大丈夫だ……足はコレでよし」

「ん〜腰回りのパーツがはずれない……ん〜よし、とれたああ」

「あとは塗装の補修だ……筆で丁寧に重ねて……」

なんかわからないけど身体中が誰かに触られてるような気が……胸と膝裏が撫でられ……あと強い力で下に引っ張られて……肌全体が筆でなでられるような不思議な感覚に必死に耐え一時間が経った

「よし、出来たよ……少年のブレイドが」

「やっと出来たね〜ミカヤン、ノンノン」

「アタシ等の手にかかればどうってこと無いだろ？ふう、少しのど乾いたから飲みモンもってくる」

ノーヴェさんが部屋から出て行く前にコップとトレイがある場所を教えるから改めてブレイドを見る。本当にきれいに治ってる。塗装もだけど可動部分の干渉もなくアスカロンも保持力があがってる……それにワタルくんの手甲パーツも問題なく組み込めてるし何よりも僕のイメージ通り仕上がってる。何でかわからないけど痛みが収まった気がする。試しに動かしてみた

「よつと……」

「し、少年!?!いきなり起きたら」

「ん?えと痛みが少しおさまったから立てるかな……っ?!」

ミカヤさんが、声を上げたと同時に痛みが走る……なんとか倒れない



ようにドアノブに手をのばそうとしたんだけど、扉が開いた。そこには麦茶が入った入れ物つなみなみと注がれた麦茶をトレイに乗せるノーヴェさん…

「え？タカヤ？う、わ、わ、うわあ!？」

慌てるノーヴェさんと目があつた瞬間、よけきれずおなかあたりに倒れた。ぐるりと視界が回って柔らかい感覚、あとに冷たい何かが身体を濡らしていく。目に入ったのはびしょねれになったノーヴェさん…立ち上がろうと手に力を込めた。でも柔らかい……恐る恐る手を見るとはだけたTシャツからのぞく胸を指が真ん中で食い込むように驚掴みして押し倒してゐる図…

「……………んっ、はあ…あ…んん!？」

「……………え、うわあああゴ、ゴメ…っ痛タタタタタ!?」

慌てて胸から手を離れた…でも全身に痛みが走り濡れた床に倒れ込んでしまう……うう、まだ痛い……肌に張り付く衣類がなんか嫌だしなんか寒気して軽くくしゃみした

「む、少年。このままだと風邪を曳いてしまうから湯殿に連れて行こう。レヴィ、ノーヴェも手伝ってくれるかな」

「いいよ。風邪引いたら明日の試合にでられなくなるのイヤだもんね……それにお風呂は命のシュツルムウントドリンクって言うし」

「ちよ、待てタカヤ身体動かせないんだろ?どうやって入るってんだよ!?!つうか無理だろうが」

「ノーヴェ、私は少年一人で入れるとはいってないよ……さあ、これ以上身体が冷える前に急ごう」

何だろう……いま頭の中で最大級、ジエネシス、コロニーレーザー級のヤバサを感じる。僕は肩を貸してくれるミカヤさんに聴いてみたら

「あのミカヤさん、ノーヴェさんの言うように身体が動かないから……お風呂は」

「大丈夫だ少年……なにせ私たちが一緒に入るのだからね」

「……はい!?!」

「む、身体が震えてきてるね、さあ急ぐよレヴィ、ノーヴェもいいね」

それからあつという間だった：脱衣場で濡れた服を手際よく脱がされ、タオルを腰に巻いた状態でバスチェアに座らされた……四人以上はいれる湯船から湯気が暖かな光で揺れてる……乾いた音と一緒にミカヤさん、ノーヴェさん、レヴィが入ってきたんだけど固まった

だってレヴィは《レヴィ》ってネームプレートが目立つ白い水着……腕を組んでるから伸びきり名前が歪んでる。顔を真っ赤にしてチラチラみてるノーヴェさんはなぜか青と紫のカラーが目立つビキニ、なぜか笑みを浮かべるミカヤさんは太ももが目立つ白い襦袢姿……ゆっくりと僕の前に膝をついて座った

む、胸元が谷間が見えてるし!?

「さあ、綺麗にするからじっとしてもらおうか……」

「あくミカヤンずるい！ボクが前洗おうとしたのに」

「ふふ、早い者勝ちだよ。ノーヴェも早く洗わないと」

「わ、わかってる！動くなよタカヤ……」

ミカヤさんの言葉にうなずいてノーヴェさん、レヴィが《男魂》メンソウルつておじいさんおすすめのボディソープを手にとらした絡めていてる

「少年、少しくすぐったいだろうけど我慢だよ」

「え？ち……て、手で洗うんですか？ひやう!？」

手で温めたボディソープを肌へ落とし伸ばしていく……胸板を手が強くもなく弱くもない力加減で泡立ててくミカヤさん。でもなんかだんだん近づいてきてるし、落ちた白いボディソープが太ももに落ちて光つてて、白い湯浴み着が濡れてきて胸の輪郭がはつきりしてうつすら桜色のが見えてるし!？」

「肌はデリケートだからね。こうした方が気持ちいいよね（五年前と違って筋肉がついてるか……でもいいよタツくん）」

「ひや、ひやう!?!ミカヤさん!?!な、なんで膝に!?!」

「どうだい、こうするとしっかり洗えるんだ……少し重いかも……ん、ん……しれ……はあ……んっんっ」

いきなり僕の膝に乗ると身体を密着させて上下にうごかしてきた。しがみついているから湯浴み着越しにやわかい魅惑の膨らみがはつきりわかるし。なんかわからないけどミカヤさんが腰掛けるように乗

る膝のあたりがヌルヌルってして、息も荒いし!?

「むうくならボクもまけないよ!お母さん直伝《必殺♡白スク水お  
ば♡うおっしゅ!!》するもんね!!」

「レ、レヴィー!……う、腕に抱きつかないで!あ、当たってるから!」

いきなり腕に抱きついて十時拉ぎみたいに抱きついて胸に挟まれ  
て逃げられない。それに泡まみれの胸が滑りこする感覚が気持ちい  
いのはなんで?でもなんかぼうつとしてきた

「あ、指も洗わないと……あむ…ちゆ……なんかあまいよタカタカの」

「レヴィ、しゃぶらないで……んっ!や、やめ」

「ええくやくだよ…ゴシゴシ、ゴシゴシ」

胸に挟まれた腕をうごかして指をしゃぶるレヴィにやめてと言っ  
ても止まらない……ミカヤさんも肩に腕を回して息が荒くなってる  
……どうすれば、そうだノーヴェエさんがいる

「ノーヴェエさん、二人を止め…」

「……ああ!もう……やってやるよ……おらあ!!」

「おう??ノーヴェエさん、何をう」

「きまつてるだろ、今から洗ってやるよ…」

背中に張りついてきたノーヴェさん、背後から空になったボディ―  
ソープ《男魂》<sup>メンソウル</sup>が転がると押し付け動き始めた……うう、胸が背中に  
当たってるう！逃げようにも腰に手を廻されてるから動けない身を  
よじらせた時、視界に青と紫の布……あれってビキニのブラ？じゃあ  
今、ノーヴェさんの胸がじかにあててるって事!?

「どうだ、アタシのは……（タカヤの背中以外と大きい……ん、ダメだ  
擦れて余計に）……きもちよくて声が出せないか」

「（やるねノーヴェ……直当てとはやるとは想わなかったよ）少年、ど  
うだい私の身体は気持ちいいかい？」

「タカタカくボクのがダントツで気持ちいいよね？（何だろタカタカ  
の指なめてたら……ココが熱いしキュンキュンしてる……）」

ダメだ、もう止まらない……でも何とかして……身体をよじらせた  
時、ミカヤさんの乗る膝がヌルツと動いた

「し、少年んんっ……!!」

「え？……こら動くな……あ」

「え？タカタカ!？」

そのままミカヤさん、ノーヴェさん、レヴィと一緒に柔らかい床に  
倒れ込んでしまう……なんか腰のあたりが寒い。とにかく身体を起こ  
そうとするけどなんか両腕が重い、それに目の前がちかちかしている

「つたた……いきなり暴れ……あ!？」

ノーヴェさんの上擦った声が浴室に響く…何とか体を起こした僕が見たのは胸に倒れたミカヤさん…タオルがはだけた先にはノーヴェさんが、顔を真っ赤にしてわなわな震え口をパクパクしみるのは僕の……

「あ、あ、あ、あ」

「う、うわ…ノーヴェさん、みないで!!」

「タカタカの大きいんだね…ビクビクしてる…」

しかも腕に抱きつくようにして、レヴィが何でか目を輝かせて。そして

「少年…その、なんだ立派だね…（私のアレでココまで…もう大人なんだね）あ、今退くよ…あ!?!」

頭の中が熱くなってきた…も、もうなんでこんなこと?!僕の身体の上からどこうとミカヤさんが動いたんだけど足を滑らせた…そのまま僕の顔に落ちてきたんだ…

「は、はあああ……んん」

「をぐ…ぶ、ぶはあああああああああああああああああああ…」

「し、少年!?!／タカタカ!／タカヤ!!」

柑橘系の匂いとヌるってした感覚、何かを目にした瞬間、勢いよく鼻血が吹き出した。それを最後に意識を放り投げた

「……………はっ！」

「あ、タカタカ目を覚ましたんだ…心配してたんだよ」

「あれ？レヴィなんで僕ココに…ミカヤさん、ノーヴェさん？どうしたんですか」

「な、何でもない……つうかさつきは悪かったな…」

「すまない、私たちが少年に…深く謝罪するよ」

「あの、さつきって？何かあったんですか？」

「え？覚えてないのかい？」

「確かブレイドの修理が終わってから何かあったんですか？もしかして寝てました僕？」

「……………えとねタカタカ、さつきボクたちと一緒にNi……んぐ」

「ああ、寝てたんだよ。結構疲れてたんだなって起こすのも悪いかかって……そうだお腹空いてるだろ、メシ作ってやるから待ってろよ。ミカヤ、レヴィも手伝えよ」

「あ、ああ…少年、今日は腕によりをかけて作るよ」

「プハア……ボクもがんばるから覚悟しててね……じゃあ最速で食べさせてあげるね……じゃあとでね」

「う、うん……」

タカヤの声を聞き終わる前にあたしとミカヤ、レヴィと一緒に部屋を出た……互いの顔を見合わせた

「どうやら覚えて無いようだね」

「う、うん、あのあと着替えさせるの大変だったもんね……」

「そうだな。いいか、今日みたこと、やったことは絶ツツツツツ対に秘密だかな！」

「ああ」

「も、もちろん」

それだけいうとあたしたちはキッチンに歩き出した……でもアレは忘れられないし、つうかバルバトスのメイス並みだろ……あんなのでしたら壊れる

と、とにかくタカヤが覚えてなくて良かった……でも少し残念、いや全然残念じゃないんだからな！

今はタカヤの為にメシを作ることに集中しろあたし!!



第十二話 修理とドキドキバスタイム♥ 《本bならぬ後編》

了

## 第十二・五話 鏡―シュピーゲル―

本編開始、三カ月前

日本、M県同山中

「いたか！」

「こつちにもいない……どこに消えたんだ！」

「もしコレが宇宙ガンプファイターX様にしられでもしたら……」

身体を震わせる黒服二人：彼らがいるのは自らの属する施設。表向きは新薬開発を目的とした研究所だが裏では非人道的な実験が行われていた……10年前に確認されたプラフスキー粒子を非合法に入手、《四年前》に得られたモノを使い多くの失敗を繰り返すも成果がでたとき、唯一成功した実験用のモルモットが逃げ出したと聞き探し回っていた

幾重にも張り巡らされたセキュリティをかいめぐり逃げることは不可能のはず。何より実験体にそんな機能を与えては居なかったのだから

もしコレが彼らのトップにたつ宇宙ガンプファイターXに知られたら命はない：何度か失敗した部下を戯れ程度に手を下してきたのを間近で見ていたのもあるから必死だった

あたりを探し回った彼らは足早に去っていく。しばらくして機材の影が歪みだし人影をなし倒れ込んだ：顔はよくわからないが腰まで伸びきった白髪、体格から10代だとわかる体つきの少年が肩で息をしながらふらふらと立ち上がった

「……いった………ちや………やをま………く………」

よろめきながら踏ん張り歩き出した…やがて四角い小さな扉にたどり着いた。d u s tと書かれた壁に身を預けた。ゆつくりと押され壁の向こうへ滑り込むよう落ちていく

「……っ………宇宙ガン………ファイターXか………る」

やがてゴミ山へ落ちた…幸い柔らかな部分だったが衝撃は身体に容赦なく襲う。息がとまるもすぐに大きく息をはき這い蹲りながら立ち上がるうとする彼の指に固い感触、みるとつるりとしたのヘルメットにも似たマスク…ゆつくりと手にしかぶるとボロボロの布切れをマントのように羽織り歩き出した

それから数時間後、研究所は謎の爆発を起こし跡形もなく吹き飛び、あとから二人の遺体が発見された。警察と消防は事故とみなし、やがて人々の記憶から風化し忘れ去られていった

## 第十二・五話 鏡―シユピーゲル―

現在

アクション商事（国際ガンプラ委員会日本支部）、同会議室

「………ヒロシ、3ヶ月前にM県で起きた研究所事故にガンプラファイアがかかわっているだど？」

『ああ、間違いねえな………ドイツでも似たような事が数件確認される………んで詳しく調べてみたらプラフスキー粒子と人体に応用した

何らかの違法研究を続けていたらしい。ほぼ無傷で回収できたデータステイクをそちらにおくつてあるから目を通してくれ』

「……………コレは……………バカな国際的違法行為だ！」

『ああ、オレもデータを解凍して見て吐きそうになった人間のやることじゃねえ！胸くそ悪いぜ!!あともう一つ悪いニュースだ。ガン普拉ファイア……………宇宙ガン普拉ファイターXがサエグサ模型店で開かれている大会の景品を狙っているらしい。詳しくはゲンヤと合流してからになるがな』

「サエグサ模型店……………あのミツキ・サエグサの店か……………ヒロシ、そちらに彼等を護衛に送るとミツキさんに伝えてくれ』

『お、おいまさか……………あのチーム・シャツフルをか!?!』

「宇宙ガン普拉ファイターXがいるとなればイエーガーズもいる。万が一に備えてだ」

『……………わかった。じゃあとで連絡をする……………そうそう言い忘れてた……………部下達には今度メシを奢ると伝えておいてくれ』

「わかった……………くれぐれも無理はしないように……………」

『了解だ……………社長』

通信を閉じた彼はゆっくりと別回線で通信をつないだ

『なにようだ……………ん?社長ではないかワシになんだ』

「……………ガンプラマファイア、宇宙ガンプラファイターXが現れた」

『なにーあやつが動き出しただと……………宇宙ガンプラファイターX……………あの犬畜生にも劣るすくたれものめが現れただと!!』

「サエグサ模型店で開かれている大会はご存じですか…そこに出された景品を狙っているとヒロシから連絡があり、大会と関係者の護衛にシャツフルの御方たちのお力をお借りしたいのです」

『……………サエグサ模型店…だと……………たしか《ブラックジョーカー》が居る街にある模型店で間違いなからうな?』

「は、はい……………あの引き受けていただけますか?」

『当たり前だーカレトヴルツフは人の弱みを握り、苦しむ様に愉悦覚える輩に渡すのは癪の極みよ!!社長よ、我らシャツフル同盟、その願いを引き受けた!!では参る!!』

通信ごしでもわかる覇気、それ以上な熱気に汗を垂らす社長……………一方的に切られて数分、ようやく汗を拭いミネラルウォーターを一気に飲み干した

(…かつてクラフトマンで開発されたバトルシミュレーションシステムが生まれ伝説の関ヶ原ウオーズ終結時に生まれ、G研の天地大河達の戦いを影から支えガンプラ界の秩序を守り続けた。そしてプラフスキー粒子の発見によりさらなる進化を遂げ世界大会が開かれるほどに発展した背景にも彼等シャツフル同盟がいた……………キングオブハート、ジャックインダイヤ、クラブエース、クイーンザスペード、ブ

ラックジョーカからなる五人の男女からなるビルドファイター集団……頼みましたよ。ガンプラ界の未来を！」

心の中で社長がつぶやいた、時同じくしてテストタロッサ家では

「よ、ただいまマイハニー」

「ヒロシ…なの……」

「ははは、びっくりさせようと思っただけでなくどうしたプレシア？」

未来の義息子攻略法を伝授し買い物に向かおうとドアを開けた先に悪戯が成功したような笑みを見せる愛する夫の姿に驚く。しかし勢いよく踏み切り胸へとびこんだ。それをしっかりとヒロシは抱き止め髪をなでた

「バカ、バカバカバカく帰ってくるなら連絡しよう……もう」

「ごめん、ごめん…可愛いなあ俺のプレシアは」

「ち、茶化さないでばか……でも……お帰りなさい」

「ああ。ただいまマイハニー……ん」

涙目になるプレシアの目元から涙をすくい、顔を近寄せ熱い口づけを交わす二人……しかし

「みせつけるなよ……たのしいのかよ」

「わあ、わあ……キスしてる」

「ぼ、婆ちゃんなにしてるのさーじいちゃんもやめろったら!!人見てんだから!!」

二人だけの果糖空間は10分以上続き、周りの声は一切届かなかつた…背中に手を回すプレシアの右手甲にジョーカみたいな紋章が浮かぶのもだれも気づいていなかった

クラナ地区のビルを足場代わりにけり移動する一つの影があつたことも

『…急がなければ…』

フルフェイスのマスク、ボロボロの黒いマントをなびかせ向かうはサエグサ模型店…彼の目的はわからない。ただ一つ言えるのはガンプラファイアがいる場所に向かっている  
ここから物語は大きく動き出す

## 第十二・五話 鏡―シユピーゲル―

了

閑話休題。その頃、クロウは…

「……まいった。お袋に会っちゃった〜しかも過去の世界ってあり得んわああああ!?!」

…今、オレはサエグサ模型店から離れた場所にある廃工場に仰向けになりゴロゴロ転がりつぶやいた

だって若い頃のお袋をみてから、もしかしてと思つて情報収集してみようにも持つてた粒子端末が使えない。多分、オレを追つてきたアイツ等から身を隠しながら本屋はいつて愛読してる模型誌手に取りみてから…なんでさ! って叫びそうになつた

《2×××年月刊ガンプラ5月号、第7回世界大会予選開始まで注目するファイター特集! 第一弾はイタリアの伊達男、リカルド・フェリーニ&ウイングガンダムフェニーチェ!!》…20年前の日付で。んでバカオヤジとお袋と付き合う三年前

端末が使えないのはオレの世界で使われてるプラフスキー粒子とこの世界でのプラフスキー粒子が違うため。もちろんオレのガンプラ《アスタロト・ブレijing》はこの時代のプラフスキー粒子と相性が悪くて使えない。ニルスさんの生み出した新プラフスキー粒子に完全対応してんのもあるし、なによりオレがいる時代では使っちゃいけない

前にミツキ叔母ちゃんの知り合いの楓姉ちゃんから聞いた話があるし…

でも戻る方法が無いし、なによりGPベースにチャージしていたお金も引き落とせない(スポンサードしてくれたスカリエッティ研究所からの契約金と今まで稼いだファイトマネー…:あわせて五千万ぐらい)から今の財布は5千円しかない現状…ひさしぶりのトカゲや



鳥、山菜での食事生活になりそうだと思ってたらリンネとフーカの顔が浮かんだ

「……アイツ等、大丈夫かな……って！なに心配してんだよ！オレは！?……しばらくココを拠点にして当分の生活費はひさしぶりにアレやって稼ぐしかないかしらないか……まずは作るか」

ため息つきながら座りのいい場所と机代わりの木箱を前においた。旅行用袋からHG―IBO、鉄血のオルフェンズ―月鋼―の主役機《アスタロト・オリジン》、鉄血シリーズの様々なジャンクパーツケ―スとスカリエツテイ研究所から提供された新型ニツパー、デサインナイフ、セメント、ソー、ピンバイスを取り出し置いた

「じゃ……まずはフレームからだ」

フレームをパチパチと切り出して、ピンを落として接着剤でムニツと密着させながらシリンドラーを真鍮パイプへ変えてエネルギー伝達ケーブルもリード線にプラパイプで再現したのに置き換えディテールアップが終わる。乾くまでオレは装甲の剪定とメイン武器、スラスタ―配置を考えた

「バルバトスのアンテナ、頭はアスタロトオリジン、足まわりはウヴァアル……胸部はバルバトス……右肩はバルバトスのを改造して……左肩はアスタロト………左腕は複合兵装に決まりだな」

ストックしてあった装甲に手を加えながら。1mmプラ板を取り出しヒートプレスし、形を整えていくと下書きし切り抜いてヤスリ掛

け、形を整えてく出来上がったのを先に加工していたバルバトスの肩パーツに接着した。よし角度もエッジもイメージ通りだ

閑話休題。その頃、クロウは？

腕時計をみるともう夜9時過ぎてる…パーツをケースにいれてから持っていた寝袋に入りライトを消す…こうして寝るのはドイツでリンネとフーカから逃げ回って以来だ

「…………ドイツに行けば会えると思ったんだけどな…

フゝ太、リゝ太、どこにいんだよ…心配してんだからな」

八年前にバカオヤジが何度目かになる結婚記念旅行でドイツに来て道に迷って時に出会ったフゝ太、リゝ太…ドイツ語あんまりわかんなかったけどガンプラを見せたら興味津々で三人で一緒にガンプラ作るうちに仲良くなって、作ったガンプラでバトルして、二人のウチが孤児院に招かれて泊まることになって、みんなと遊んだりして、本当楽しかったな

やっとドイツ語はなせるようになった頃、日本に帰ると言われたときは二人とも日本に帰らないでドイツに残ってっていわれたけど。なんとか説得したのは懐かしいし、それに

『フゝ太、リゝ、オレまた来るから…だからなくなつてば…』

『…くゝちゃんに…もうあえなくなるのはいや…』

『……わしもじゃ……くくにまだ勝つとらんじゃき……』

『……あえなくなるわけ無いだろ。オレたちはコレでおわりじゃない……必ずドイツに来るから。その時までガン普拉バトル強くなるから、りく太、フク太。コレがあるだろ？だからさ……』

手に持ったガンプラ……三人で一緒に作ったバエル、アスタロト、アスタロトオリジンを向かい合わせた

『『またいつか、三人でガン普拉バトルやろう!!』』

……空港で男同士の約束して見送られ日本に帰った。その日からガン普拉バトルにのめり込んで国内大会に出まくって強い相手と凌ぎを削る日々を送った……りく太、フク太もドイツで頑張って強くなってはるはずだから。もし再会したら互いに強くなってないと残念がるだろうし、失望させたくないから。そしてオレは世界大会の舞台に立っていた

世界は広くて、オレより強いファイター、すごいガン普拉に圧倒されたけど胸を借りていくつもりで挑んだんだ

リカルド・フェリーニさん、グレコ・ローガンさん、キジマ・ヴィルフリッドさん、カミキ・セカイさん、レナードさん、ルワン・ダラーラさん、ライナー・チョマーさん、ジュリアン・マッケンジーさん、カロス・ガイザーさん……そして三代目メイジン・カワグチさん

みんなと戦えた事は今でも胸を焦がしつづけて激しく燃えている……ドイツで開かれる親善試合に招かれ真つ先に孤児院に行ったんだ。でもソコにあった孤児院は無くなって……ニルスさんに頼んで調べてもらったら三年前に孤児院の経営していた牧師さんが亡くなって、みんなバラバラになって別の孤児院に引き取られていたことがわ

かった

動こうにもヤジマ商事と油田とレアメタル採掘により財をなした《ベルネリツタ家が》共同で行う試合スケジュールは完全に埋まっていた…探しにいけない事を我慢しながら親善試合に臨んだ。相手はオレと同じ鉄血のオルフェンズに登場するガンダムフレーム使いでEUチャンプ、女王《リンネ・ベルネリツタ》…この試合でオレがドイツに来ていてコトに二人が気がついてくれるハズだ、強くなったらオレを見てくれてんなら会場に来てくれるって

…願ってたんだよ！なのになんでさ?!

なんでかりく太やフく太じゃなくてリンネとフーカがオレを追いかけ、リベンジマッチと弟子入りを迫ってきて逃げ回って、日本にかえたら空港でエンカウント、フーカが婆ちゃんを味方につけたし、サエグサ模型店に逃げようと向かう先でリンネとばったりあって、慌てて店内にはいつてミツキ姉ちゃんに理由を言ったら

『なら、ここに隠れたら?』

って初期の旧プラフスキー粒子対応バトルシステムに隠れてやり過ぎしたら、変な音がして光に包まれて…あとは知っての通り……つたく。とりあえず生活費枷がないと不味いしなく早く完成させないと

「今日は…いろいろありすぎて疲れた……とにかく寝よ」

軽く欠伸し、そのまま目を閉じる。本当、帰る方法見つけないとと思いつながら意識を手放した…

閑話休題。その頃、クロウは？

了

特別話 七ターわたしとタツくんの初めての

……………

……コレはタツくんがわたしのウチに預けられてから三年たったある日の事。アシムレイトを制する修行も成果を徐々にみせ、木刀を振るい汗が肌を流れ、凜々しさと愛らしさも増していくタツくんの姿に私はたまらなく感じてしまつて《女》として疼いてしまう。

「今日はココまでだ」

「はい、指導ありがとうございます。天瞳師範」

父との鍛錬を終え着替えに向かうタツくとわかれてからシャワールームに入り胴着を脱いでバケツにたたみ入れサラシとシヨーツを脱ぎ洗濯機に入れてシャワールームにはいりノズルを開く。程よい温度の水滴が肌にあたり弾けていく。なぜタツくんとはいけないのか？

なぜかというところ、その、なんだ……みていて……汗以外に色々濡れたから。それを乙女座のわたしとしてはみられたくなかつた

「ん、はあ……また大きくなったかな……マッサージの効果はでてるみたいだね」

10歳になつてから少しずつ膨らみはじめた胸へ軽くふれてみる、湯浴みするたびにタツくと洗いっこして、小さくて柔らかかな手が触れ包まれると微かな痛みが走り、指で弾かれるたび何度、果てようとするのを我慢したことか数え切れない

でもまだ受け入れられるほどの身体ではないけども大きく踏み込

もうと決めていた。今日は近くの鎮守の社で七夕の祀りがある……今日タツくんと二人で一緒に行く初めての祀りに胸が熱く高鳴る

……母様が教えてくれた七夕の祀りで取り行う儀式が真実ならばいく価値はある……最近、先輩達がタツくんを見る目が危ないのもあるし、牽制の意味もある……

「……………今日のグラハム占い『今こそ勝負を決めるとき！己の思いのまま貫き通すべし！』……………ならばわたしも決めないとね」

シャワーを止めバスタオルで身体をふき終え着替えると私の部屋に向かう。襖を開け着物箆筒を引き出した。桜色の生地朝顔が染め抜かれた浴衣を手にだし姿見鏡に立つ……着ていた服、下着を脱いで浴衣を着付け帯を通し髪をあげて髪留めで止める……唇に薄く紅を引いた。うん、練習したかいがある。母様の手ほどきでここまで出来たことは自画自賛したくなる

さて、コレからが本番だ……タツくんは先に行かせ待つように言伝しである。今日は大事な一步を踏む。長い道のりの先にある本丸《タツくん》を手にするために

今日のわたしは阿修羅をも凌駕するコトを誓おう。

特別話 七ターわたしとタツくんの初めてのの……………

「カヤお姉ちゃん、まだかな」

今日は七月七日、七夕の日……ぼく、秋月タカヤの誕生日なんだよ。でね天瞳のおじさんとおばさんが『お誕生日だからお祭りに行ってきたら？ミカヤと一緒に』って言われて、カヤお姉ちゃんも誘ったんだ。

でも何でか先に行って待つように言われたんだ

一緒に行けばいいのに何でだろ？って思ったけど、でもたまにはいいかなって。こうして待ち合わせ場所の鎮守の社……沙尽震神社《シヤツフルじんじや》鳥居の下で待ってるんだけど

「タツくん、おまたせ」

「カヤお姉ちゃ……」

カヤお姉ちゃんの声に振り返ったぼくの前には桜色の生地朝顔が染め抜かれた浴衣姿で髪をあげて櫛で止めた姿は初めてみた。なんかわからないけどドキドキした

「どうかなわたしの浴衣は、似合ってるかな？」

「う、うん、キレイ……だよ……カヤお姉ちゃん」

「~~~~~!?!そ、そうかい、着てきたかいがあったよ。さあ、七夕の神事がはじまるからいこうか」

「は、はい」

優しい笑顔で手を握ると歩き出した。さつきから胸がドキドキする……私服姿はみたことはあるけど今日はなんか違う……普段もキレイだけど今日はもつとキレイでそれにいい匂いがする

月明かりに照らされてなんか……うう……わかんない……悩んでいるうちに七夕の神事が執り行われる祭壇に来てた、周りをみるとスゴい人だかりが集まっている。うう、迷子になりそうだよ

「タツくん、しっかり手を掴んでるんだ……前に教えたやり方なら大丈夫



夫だよ」

「は〜い」

カヤお姉ちゃんの手…指と指を絡める。いつもお風呂で洗いつこすると上に乗ってきて身体と身体を合わせながら手をここうするんだ。カヤお姉ちゃんのお肌と合わせると気持ちいいし、お姉ちゃんもスツゴク気持ちいい顔をして離れてくれないから湯あたりしたコトもあるけどキライじゃない

「わははははは！よく来たな想い人たちよ！我が名は東方不敗！これより沙尽震神社の七夕の神事を執り行う！！厳正なるわが沙尽震神籤《シヤツフルミクジ》を引くが良い…見事当たりし者には沙尽震神竹に一番に行く権利を与えようぞ！！さあ参れ！！」

……スツゴク大きな声と一緒に現れたお祖父さん…沙尽震神社の神主さんで《東方不敗》さん…ぼくの通う学校で用務員をしているおじいちゃんだけど素手で通学路に飛び込んできたドスファンゴみたいな猪を蹴り飛ばしたりするんだけど…なんか何時もより元気な感じがする

「よし、オレが当たりをひいてやる！」

「頑張つてドモン！」

「はあああ！とおりやああああ！！」

「意気込みはよし、たがハズレだこの馬鹿者がああああああ！！」

「そ、そんな…オレのくじ運は届かないのか……」

「落ち込まないでドモン、来年があるわ。わたし待ってるから」

「レイン、ああ来年こそ当ててやる！」

「ふはははははははははは！その意気やよし！さあ、我はと思うモノは挑むがよい!!」

高笑いしながら沙尽震神籤をつきだしてくる…手錠を嵌めた大きなおじさんと軍人のおばさん、中国っぽい服を来たお兄さんと外国の女の子、オレンジ色の髪に貴族みたいな人とお姫様みたいな人、三人のお姉さんとアメリカ人のお兄さんが続いてひいたけど当たりは出ない

「……………任務失敗……………」

「止めなさいヒイロ!!自爆したらダメよ！」

「んじや、オレが引くかな……………げ、ハズレかよ、疫病神でもついてんのか？」

「デュオ、疫病神ってドクターたちの事？」

タンクトップにスパッツのお兄さんがなんか変なスイッチを押そうとするのを止めるお姉さん、なんでからわからないけど三つ編みの牧師のお兄さんをなだめるお姉さん…何だろ、どっかでみたような…

「さて、残るはお主らだけだ……………ん？タカヤではないか、隣にいるお嬢さんは……………何時も言うておる確か……………」

「天瞳ミカヤです。タツくんがいつもお世話になってます」

「……ふむ、なるほどの……さて二人で最後だ。さあ沙尽震神籬を引き見事当ててみるがよい!!」

東方不敗のおじいちゃんから突き出された神籬を持つ。ふらつきそうになるぼくをカヤお姉ちゃん背中から抱き止めて手を添えてくれた

「さあ、いくよタツくん、わたしと一緒にあわせるんだ」

「うん、じゃあいくよ……せくくのくくえい！」

一緒に上下に降り止める。神籬から出てきたのは黄金に輝く神籬棒……これってまさか。カヤお姉ちゃんをみると少し驚いているのがわかった

「ふはははははははははは！見事だ！今年の神竹へ短冊をつけに参るはお主等に決まりだ、さあ沙尽震神竹に向かうがよい!!」

豪快に笑いながらぼくとカヤお姉ちゃんの分の短冊と筆を渡してくれりと神籬箱を抱えて案内してくれたのは竹林が風に揺れ石灯籠の灯りが並ぶ道の前に立った

「さあ、まずは願い事を書き懐にしまうのだ……あとは二人で沙尽震神竹にたどり着き結べば神事は終わる」

……東方不敗おじいちゃんに言われ仕切がある席に座りながら考える……願い事はもちろん決まってるからスラスラ書けた、ぼくと同時にカヤお姉ちゃんが椅子から立ち上がった

「じ、じゃあいこ、タツくん」

「うん、カヤお姉ちゃん」

手をつなぎ石灯籠が照らす道を歩き出す…笹が風で揺れ音になる中を二人で歩いている…少し怖いけどカヤお姉ちゃんと一緒なら怖くなんかないもん

「アレかなタツくん？」

「うわあ。すごい金色に輝いてる……」

ぼくとカヤお姉ちゃんの前に金色に輝いてる竹がちからづよく立っている…短冊を取り出し枝に結びつけようとする…でも届かない。むく牛乳たくさん飲んでるのに…跳ぶけどなかなか届かないよう

でもぼくは男の子だから諦めないもん。カヤお姉ちゃんがみてるから。何度目かになるジャンプでタイミングを掴んだ、よし今ならでき

「せくの……えい！や、やったあ結べた!!」

やっと結べた……ひとりでできたよ。でも着地した時、足がもつれ体勢が崩れた。倒れると思ったけど柔らかい何かを受け止めてくれた…笹の葉の匂いより甘い匂い…顔をあげるとカヤお姉ちゃんがいた

「大丈夫、タツくん？」

「う、うん…ありがとカヤお姉ちゃん…」

浴衣についた笹を落とすと少し離れた場所に竹で出来た椅子を見つける二人で座った…月が明るくて空を見上げると天の川が輝いてる……

「キレイだねタツくん……」

「そうだね……カヤお姉ちゃん、痛くなかった？」

「大丈夫だよ。私も鍛えているんだからね……」

それつきり話さなくなる…何だろすぐドキドキする…カヤお姉ちゃんも頬が赤いし、それに手を握ってはなしてくれない……でも何かスゴく落ちつく

「タツくんは願い事、なんて書いたのかな？」

「え？それは……ヒミツだよ……カヤお姉ちゃんがはなしてくれるなら教えてあげるよ」

「意地悪だねタツくんは……ならわたしも教えてあげない……」

「……いじわるだよカヤお姉ちゃん」

「ふふ、お互い様だよ……ねえタツくん、実はね…まえに話した事、覚えているかな？」

「まえ？……んゝもしかしてちかいのぎしきのこと？」

「そ、そう。それ……タツくん、わたしの事、好きかな……」

「もちろん、ぼくカヤお姉ちゃんのこと、だいすきだよ」

「……………わたしもタツくんがだいすきだ……………だから誓いの儀式……………してみないかな？」

「ん〜〜いいよ。どうしたらいいのかな？」

「じゃあ、わたしが教えるから任せてくれないかな…」

月明かりに照らされたカヤお姉ちゃん、すこしだけ目が潤んで頬を紅くして手を握りしめて顔を近づけてきた…最初に感じたのは柔らかくて少し甘い、ぼくの口びるとカヤお姉ちゃんの口びるが合わさってる……………お父さんとお母さんがよくしていたのだ

「ん、ん……………ちゅ……………ゅん」

「ん、んん……………」

口びるから何か入ってくる…カヤお姉ちゃんの舌だ。ぼくの舌を探し見つけようとしてる、つんと当たるふれあってくる…少し苦しいけど何かきもちいい。ずっと続くとおもった…五分、十分…すぎたかな。カヤお姉ちゃんの口びるがぼくから離れた…スゴく顔が赤いしトロンってしてる、ぼくもたぶん同じようになっている

「ん、んん……………はあ、はあ……………」

「っは……………はあ……………カヤお姉ちゃん……………」

「コレが誓いの儀式……………でも何回かやらないとだめだから。帰ってから続きをしよう。少し汗もかいたし湯浴みをしながら」

「う、うん……帰ってから……一緒に湯浴みしよ……カヤお姉ちゃん」

それからぼくとカヤお姉ちゃんは来た道を引き返し沙尽震神社に降りて、東方不敗おじいちゃんに挨拶してそのまま帰って直ぐにお風呂に入った。カヤお姉ちゃんと洗いつこしてから、もう一度、誓いの儀式をした

「……っは……はあ……カヤお姉ちゃん、誓いの儀式ってスゴいね……」

「ん、んん……うん……でも父様と母様には秘密。二人だけのね………さ、もう少し暖まろう」

湯船に浸かる二人の唇が離れ銀の糸が伸びる……その手は指が絡まれしつかりと握られていた………沙尽震神社は古くからあり厄除け、武運長久などある。しかしもう一つ、想い人達にしか知られていない御利益がある……恋愛成就。さらに沙尽震神社の七夕神事で当たりを取り沙尽震神竹に願いを書いた短冊をつけ口づけをするコトで叶うと噂があつた事を

タカヤとミカヤが短冊に書いた願い……

ーカヤお姉ちゃんと一緒にいられますようにー

ータツくんとずっと一緒にいられますようにー

短冊に書かれた願いが叶ったのかわたしはタツくんと一緒にいた。周りからみても砂糖を吐きまくるほどに甘々空間を展開していてかわかれても気にもしなかった……ただ崩壊の足音は少しずつ確実に迫っていた事に、幼い日の幸せいっぱいなわたしは気づけなかった

んだ

特別話 七ターわたしとタツくんの初めての………

了



閑話 恋乙女達?……

タカヤが三人にドナドナされ家で未成年お断りなお肌の触れ合いならぬ大人の洗いつこプレイしていた頃、サエグサ模型店の選手控え室ではスゴいことになってた

「ヴィヴィオ、少し離れてくれませんか?ワ・タ・シ・のトオルから」

「ええ〜邪魔じゃないよねトオル?あ、そこはヤスリは少しずつかけないと形が変わるよ」

「……………あ、悪い悪い。ヴィヴィオ、さんきゅな」

「どういたしまして〜」

笑顔を見せるヴィヴィオ:トオルの隣の椅子に座り身体を預けるよう寄せ合う姿にクールな仮面の下で般若が覗いて見えるのは気のせいだろうか?ヴィヴィオのアドバイスに応えるトオルの横で気づかれないようシユテルにえっへんとまだ膨らんでもな:(ぎろ!)いいいや膨らみ始めた青い二つの果実を揺らしドヤ顔を見るのをみて無表情でこたえる……………だが水面下では

「ヴィヴィオ、くつつきすぎです!ワタシだってトオルにくつつきたいのに!!ペアはわたしなんですよ!!」

「早い者勝ちだよ。それに私たちの盟規約忘れたの誰なのかあな?カナカナカナカナカナカナカナカナカナア?」

「確かにそうですけど……………」

「それにもうじきしたらくる頃だよね」

「ええ、ワタシたちのトオルの貞操《初めて》を奪おうとする敵が……」

「トオルくん。ベスト8進出おめでとう」

「メ、メガーヌさん？あ、あのガンプラの調整してるから……それに危ないから」

勢いよく開かれた自動扉からあわわれたのは紫の髪に豊かな胸、くびれた腰に肉付きのよいヒップラインの目立つ長袖カーディガンにワンピース姿の女性……メガーヌ・アルピーヌ。トオルの背中から手を回し抱きつく姿にヴィヴィオ、シユテルの心にあつたのは一つ

(ちー／く……来ましたか／ねシヨタコン／年増胸部装甲!!)

閑話 恋乙女達……？

皆さん、初めまして高町ヴィヴィオです！……今日は私のトオル……

ー違いますよヴィヴィオ……ワ・タ・シ達のですー

……私たちのトオルの応援に来てます！シユテルがペアなのはなつとくいかないですけどね……もちろん大会が始まる前、ペアの座を懸けてバトルしましたよ

でも元ガンプラ塾第一期生次席、シユテルは強くて一撃与えるのが精一杯で……結局負けてしまったんですけど意外な申し出があったんです

ーヴィヴィオ、ワタシと手を組みませんか？ー

ーえ?ー

ー: ヴィヴィオがトオルの事が好きで諦めきれないのは知ってます。だから私とヴィヴィオで落としちやいませう……あの胸部装甲フルアーマー女から守るために……

あつげに取られた私にシユテルの口から聞いて驚きました……まさかトオルを狙う年増胸部装甲フルアーマーがいたなんて信じられませんでした

大会前にトオルと帰宅していたらパツタリと会って挨拶しました。メガーヌ・アルピーヌさんって名前ですトオルの家のお隣さんで小さな娘と二人暮らししているってききました。トオルったら私が隣いるのにメガーヌさんの胸部装甲をチラチラみて鼻の下をのぼしてて、その視線に気づいてるのに嫌な顔しないのをみて確信しました

ートオルくん、どうかしたの?ー

ーメ、メガーヌさん? な、なにしてるのー

ーん、少し背のびたかなって。迷惑だったかしら?ー

ーそ、そんなことないから…… (なんかいい匂いするな……クラクラする)ー

私たちの敵だって。それに何ですか、あの胸部装甲フルアーマーは! アーマードパツクですか! 反則じゃないですか!! 嬉しそうにトオルの頭をはさみこむのを見せつけるなんて、絶ツツ対に! 私たちに当てつけてるんですよね!?! 見せつけてるんですよね!!

それにですよ!

『ん、トオル。ママと結婚してわたしのパパになって』

『ル、ルーちゃん!?結婚できないから?それにメガーヌさんだって困ってるし!?!』

『…も、もうルーテシアだったら……トオルくんも困ってるんだから』

『ママ、夜になるとトオルの名……』『い、今のは忘れてねトオルくん、ルーテシアもね』……うん』

この会話と真つ赤になったメガーヌさんを見て確信しました……  
有罪確定ギルティです!最近なんかお弁当を持ってきてアピールしてるんですよ!!

確かにわたしやシュテルにはあの忌々しい胸部装甲、フルアーマーアーマードパックは無いですけど、若さとガンプラ知識で勝負!ガンプラ知識を持つてないはず……と思つた時期がありました

「トオルくんのガンプラスゴいわね。もしかしてパールを混ぜて粒子ビームへの耐性をあげつつ粒子消費を抑える感じかしら?」

「え、わかつたの?じつはランスロットは粒子消費が激しいからアカツキガンダムはやタノカガミ機能を参考にしてるんだ」

「それにまだ隠し機能があるんじゃない?ベースにしているのはVシリーズだからF91の……」

「しくつ!まだ秘密だからね!俺とシュテル、ヴィヴィオで編み出したの秘密の合体技だから」

「あら合体技なんだ、じゃお披露目楽しみね」

「トオル、自分でバラしたらダメですよ……油断しました。まさかガン普拉知識が豊富だなんて……何者何ですか!？」

「メガーヌさん、結構ガン普拉詳しいみたいだけど……もしかして大会とかでたことあるの?」

「ええ、五年前にルーテシアが五歳の時にわたしの親友クイントと一緒に……でも世界戦日本代表最終予選で負けちゃって……でも今日のバトルをみたらもう一度やろうかなって……」

「やった方がいいよ絶対!メガーヌさんはどんなガン普拉使うの?見てみたいな」

「

……無邪気に笑うトオルをみて胸部装甲メガーヌさんは顔を真っ赤にしています。間違いない確定ですデス!

「……え?わ、わたしのは……ブルツケングだけ……」

「ブルツケング、もしかして俺のランスロットのベースになったVガンダムに出ていた機体だよね……もしかしてアインラッド装備?」

「ええ、アインラッド装備よ。しかも場所を選ばないし粒子ビーム対策に加えて秘密の機能もあるの」

「あ、じゃあ一緒に戦う事出来るかも。MS二体乗れるみたいだからツーリング気分でバトルやってみたいかな……あ、でもバイクな乗ったことないとやりづらいかな」

「あ、あのねトオルくん。わたしバイクの免許持ってるから来月の土

日一緒にツーリングしてみない？もちろん…ルーテシアも一緒に……」

「ん～ママ、わたし来月はキャロと一緒にエリオのお家にお泊まりするから無理だよ……ママ、チャンスだよ。マナイタ娘よりリードしないよ……」

「…………ル、ルーテシア!?…………（そ、そうねチャンスよね…………）」

伏兵はココにもいたんですね〜というか色々やばいよね？使うガンプラがブルツケング……機動戦士Vガンダムザンスカール帝国ベスパ所属イエロージャケットで13歳の主人公を味方に引き入れるために手錠をかけて一緒にお風呂に入って拷問して大事な所を噛まれたルペ・シノ大尉と同じじゃないですか!!

しかもさりげなく手を添えてるし！私だっただけのこと無いのに……くっ！やっぱりこのままだといけないですね。隣に立つシユテルの瞳から光が消えて背中に黒いオーラ…サテライトキャノンを構えるガンダムXが見えてるし…ならばやることは一つ、静かにメガーヌさんに近づきます

「ヴィヴィオちゃん。どうしたの？」

「…………メガーヌさん胸部装、わたし負けませんから」

「ワタシもです。正々堂々やり合いましたよ……大会が終わってから」

「…………え、もしかして…………「ママは負けないよ、シユテルお姉ちゃん、ヴィヴィオお姉ちゃん、トオルはわたしのパパになるんだから」え、ル、ルーテシア？なにいつてるの？…………」

ふふふ…伏龍はここにもいましたね…でも負けません。この大会でメガーヌ<sup>反応弾搭載</sup>・アルヒーヌ<sup>胸部装甲</sup>さんより親密になりますから…：…ヴィオと一緒にトオルとカレトヴルツフを手にするのは私たちですから

「ど、どうしたんだヴィオもシュテルも…メガーヌさんまで？」

「トオルパパ、女の子にはヒミツがたくさんあるの…それより次の試合はじまつちやうよ？」

「あ、ああ。そうだな…：…つてルくちゃん、パパじゃないから」

ルーテシアのパパ発言に軽くつつこみを入れるトオル、三人の乙女？の戦いが水面下で静かに繰り広げられてることを全く気付いていなかった

閑話 恋乙女達？

了

### 第十三話 もう一つの……………アクイ

「へ、いい年こいてなにやってんだか……………ストラトス、どうおもうか？」

「……………関係ありませんね。無駄なことに費やすよりガンプラの調整をします……………勝たなければ意味がないですから。アマミは調整はしないんですか？」

「オレか？言われなくても調整はすんでるさ」

相変わらず無愛想だな愛想良く笑えつての……………まあ勝つことにはこだわらなくなったのはコイツン家、ヤジマ、PPSEと並ぶ企業《ストラトス社》がガンプラバトルでの八百長疑惑、七年前のPPSEスタジアム建設資金の不正流用が発覚して破産になってからだもんなあ。

『……………私が弱かったから……………強くなければ守れません』

……………くくく、あはははくマジ笑えるつての。滑稽すぎてさ。なにせ潰してやった張本人であるオレ様とペアにつてるんだからな……………オレが提示した条件を何度も断るからこうなんだよ。事故に見せかけて重体にしてやった両親ん前で誓う姿なんて！たままないぜく

ストラトスから離れ専用ケースを開ける、漆黒に彩られたオレ様の専用ガンプラがある…四年前から愛用して改造も加えたオンリーワン。まってるたくさん暴れさせてやるからな

ーおしらせしまくす。第三試合に出場する選手は会場へ入ってねー



サエグサ模型店のミツキ・サエグサの声を聞き流しながら、調整を終えたストラトスと共にケースを手にして控え室を出る

……この大会にでる四振りのカレトヴルツフさえ奪えれば試合なんか無視しておさらば出来たんだが、セキュリティーがPPSEに匹敵する事。それにミツキ・サエグサの経歴がまったくいいほど掴めないからクソ面倒な手順をへて潜り込んだ……

それに楽しみが出来た……まさかアイツが《秋月タカヤ》がでてるなんてさ、びつくりだよ。あんだだけ<sup>腹</sup>楽しく遊んでやってガンプラに関する記憶を全て奪ってやったのに関わらず戻ってきて、天瞳<sup>シヨ</sup>ミカヤ<sup>ダ</sup>をペアにしてやがるってのはマジ笑える！最高だね!!パチパチパチパチ

三か月前のあの計画《Project:TA》が失敗したのを帳消しに出来るぐらいに、四年前みたいに叫びながら這いつくばって、ヤクを決めた時みたいに身体を震わせ苦痛に歪む姿を天瞳<sup>シヨ</sup>ミカヤ<sup>ダ</sup>の前で見せてやるよ

さあ、まずは前菜からいただくか………楽しませてくれよ？チーム・サープリス………あはははは

### 第十三話 もう一つの………アクイ

「おまたせしました！コレより第三試合、チーム・サープリス、チーム・クライの試合を開始しま〜す♪」

開始をつげる主催者のサエグサ店長の言葉を流しながら私はGPベース、ガンダム・リインをケースから出し

筐体にセット、機体データを読み込んでいく中、正面にリインを静

かに置きます

《Press set your GP—Base:Press  
et your GUNPLA。Beginning」Plaves  
ky。Particle」dispersal。field5，sp  
ace》

試合前に見た相手：チーム・サープリスは剛と柔を併せ持つてると  
わかります。でも私は勝たなければなりません。事故にあつていま  
だに意識不明のお父様とお母様の入院費を得ること、ストラトス家に  
あらぬ罪をかけ潰しに追い込んだ人物を探し出す迄、立ち止まるわけ  
にはいかない。でも子供の私ではなにもできずもがいてました

お父様の知り合いと名乗る彼、アマミとペアを組んだのはカレトヴ  
ルツフが欲しいわけではなく、お父様、お母様を毘にかけた人物を  
知っていると言われたから、その人物に情報を渡す代わりにカレトヴ  
ルツフ争奪戦のペアになる交換条件としてのみました

ガンプラバトルは興味はありません：私が望むのは：勝つことだ  
け、勝って情報を聞き出し然るべき場で裁いてもらうだけ：アマミに  
「顔見知りには知られないように」渡された衣装とバイザーで顔を隠し  
モニターを開きアームレイカーに手をおきます

《Battle・Start》

「アインハルト・ストラトス、ガンダム・リイン、いきます」

「南無、阿修羅ガンダム、いぎ悟りの境地に」

「ボルトガンダム・フォルティス！押し潰すぜ！！」

「……………さあ、いくか……………」

……………ガンダム・リインの瞳に光が宿り、宇宙へと飛翔します…右から接近反応にアームレイカーを傾けると

「オラオラオラ！ 押し潰れる!! グラビイトン・プレッシャー!!」

「くっ…」

接近アラートと共にモニターに映されたのはみただけで重装甲のガンダム…：ボルトガンダム・フォルティスのショルダータックルが僅かに肩に触れただけでアームレイカー越しが振動、肩部にダメージ表示。損傷は軽微です…：いきをつくまも与えないと言わんばかりに拳と蹴りが襲いかかります

「よくかわしたな。潰しがいがあるぜ！ もっと喰らわせてやらあ!!  
フォルティス・ハンマー!!」

強い蹴りを受けて距離が開いたのをみて、肩から飛び出したチェーン付きの巨大な球体から無数のトゲが展開、勢いよく振り回し投げつけてきます…：トゲと鎖の質感からみて金属製。当たればただではすみません。ですけど…

「甘いです」

「なに!?! あたしのハンマーを!?!」

スレスレで回避、慌ててチェーンを引き戻そうとする…：この僅かな

隙が命取り。粒子バーニアを全開解放と同時にチエーンを掴むとぐんっと加速が増します…手を放すと同時に懐に潜り込みこまれ、重い蹴りが襲いかかるのをそらし流しながらアームレイカーを横へ、スロットを変更と同時にリインの拳に光、プラフスキー粒子が収束させ踏み込みと同時に胴へとめがけ拳を叩き込みます

「……霸王断空拳っ!!」

「あ、うそだ！あたしのフォルティスが!!」

モニターには彼女のガンプラの胴に深々と突き刺さった拳。亀裂から溢れ出る光は高密度に圧縮されたプラフスキー粒子：イツキが言うには拳に収束圧縮したプラフスキー粒子を撃ち込み内部で爆発的に解放させ破壊する技らしいです

「ちくしょう！ちくしよおお!!」

相手の叫びと共に亀裂が大きく開き膨れ上がりながら両手を撒き散らしながら爆発する姿を見届け、イツキのいる場所へとアームレイカーを傾け向かいます

（お父様、お母様、後少しです。必ず勝ちます……犯人の手掛かりを必ず）

ただソレだけを胸に

「ベヒーモス！先に涅槃へ逝ったのか!？」

「余所見してるヒマはあるのか？ほらほらほら!!」

「ぬ、かような攻撃ヌルい！千手アーム!!」

ペアのボルトガンダム・フォルティスの反応が消えたのみで焦ってるねえくオレのガンプラの粒子ビームを背中から伸びたサブアームで両手を合掌させ生意気にも弾きいなしてやがる……しかも此方の動きにあわせて撃ち返してガンプラを覆い隠しているマントに粒子ビームが掠る度に裂かれてんな

弾きいなせるのはプラフスキー粒子特性を理解し、変容塗料で仕上げたアームとクネクヌとした変態的可動関節工作技術があつてだろ  
うな

「南無、極楽往生せよアクバク 《火炎強弾波》!!」

合掌した手を解き、構えた無数の手から生まれた極大の炎……ち、バカデカすぎだろうが……避けるまもなく喰らっちゃまった……

「みたか！我の極楽往生秘儀 《火炎強弾波》の前に塵芥になるが必定……さて、ベヒーモスを討った輩を……ん？あれはまさか!」

「……………やつてくれたな……ふふ、あははは……アイツに見せるまで隠しときたかったんだけどな………よくも五年分の楽しみを台無しにしてくれたなああああああ！生臭さ坊主うう!!」

ガンプラを隠していた僅かに残ったマントを引きちぎる……漆黒の体躯と巨大な龍を模した盾を両手、巨大な両刃斧を手にしたオレのガンプラ…… 《アストレイ・リュウジンオー》を晒させやがったな

アイツを……アキツキ・タカヤを苦しめるために隠していた……オレ

とあたっての時にみせて苦痛と恐怖にゆがむ顔を見たかったのによお  
…あはは決めた、決めたよ…裏コードを使って生臭さ坊主にしか聞こえないよう周囲との通信カットした…

「……………おい生臭さ坊主……………手前の全部を砕いてやる……………ガンブラも心もなあ!!」

「な…千手アームが!？」

一気に接近し龍楯《ドラグフアング》を展開、くねくねうざったらしい腕を挟み噛み砕いた…くくく、あはははははは!いいね、最高のシンフォニーだ!

「なあ、あんた妹がいるんだよな……………お嬢様学校に通わせてるさ?」

「な、なぜそれを!」

「さあな……………もしもだ帰宅途中に黒いハイエースに連れ込まれてめちゃくちゃに全部を奪われたらどうなるかなあ?」

「ま、まさか!このすくたれものが!!」

「すくたれもの?俺わかんないなあ、妹って大事だよなあ? さつき負けた筋肉女の弟と清く正しいつき合いしてるのに全て壊れるんだぜ!!」

「がつ!？」

残った千手なんたらをクリアアパーツからうまれたビーム刃と一緒に膝蹴り、溶かしきりながら囁く…選手のプライベート情報は秘匿されてんだけど、オレ様の手にかかれればたやすい、お茶の子さいさい

「ほらほら？…どうした？悟りの域に達したんだろ？みせて見ろよ悟りの境地を！」

「うっ！」

「仏の御心をよお!!」

「く、おの……」

「おおっと。攻撃していいのか？そしたら可愛い妹と付き合ってる筋肉女の弟との未来が台無し決定だ。さあ、どうする？どうする？なあどうする!!なあ!!」

龍刃斧を何度も叩きつけるように斬りつける。あはは抵抗出来ないよな？最高だね相手の弱味を握って蹂躪して心をおるのはさあ！弱味に漬けて込んで絶対的有利かつスタイリッシュなバトルをするオレってヒーロー？間違いなくヒーローだよな？

「や、やめてくれ妹とベヒーモスの弟の未来だけは…やめてくれ…たのむ、たのむ!!」

……通信越しに聞こえる擦り切れ懇願する声……ああ、早すぎだろ…折れるのが……ああなんか興奮めだな……

「ああ、わかったよ……手はださねえよ……つまんねえし……でもなあ……オレ様のガンブラをさらしてくれた罪だけだ償わせないとなあ！そう思うよなあ！」

「や、やめろ…たのむ……」

「やだね〜あきらめてくらないな……………モード・FC!! 碎け散りなあああああああああ!!」

「うわあああああ!!」

全身のクリアーパーツ…粒子蓄積システムを全開法…超絶的加速空間内で棒立ちになる阿修羅…なんたらを龍刃斧で切り裂き碎いてく…腕関節、胴体、頭部…粉々に碎け生臭さ坊主の絶叫が響いた  
ああ、楽しい……………こうやって潰すのは

― BATTLE・ENDED!! ―

『し、勝者…チーム・クライ。アマミ・イツキ、アインハルト、ストラトスペアです!!』

静まり返った会場、しばらくして歓声が沸き立つ……………ふと目を向けると憔悴仕切った生臭さ坊主が粉々に碎けた阿修羅なんたらを光ない目で見てる

「アクバク! しっかりしろよ…アクバク! 何時ものあんたはどうしたんだよ!」

「……………ベヒーモス……………俺は……………俺は……………」

「アクバク!」

ふらりと倒れた生臭さ坊主の名前を何度も呼ぶ筋肉女…ああ〜つまんね〜少し遊んだだけなのにさ……………ま、少しは楽しめたからいいか



「ストラトス、いくぞ」

「ええ……」

さあ、帰ってねるか……残り一試合は興味ないし……明日の組み合わせが楽しみだな……

つとその前に、アキツキタカヤの関係者をさらえたかな。サエグサ模型店をでてストラトスを先に帰らせてから端末を開き報告を聞いた……結果は失敗。ふざけんなよ！最高の舞台に必要な演出が台無しになった。その理由は

ーチーム・シャツフルに邪魔を……あとガン普拉ゲルマン流を名乗る輩が……邪魔をー

チーム・シャツフル……ガン普拉バトルシステムが確立する前に起きたガン普拉バトルシユミレーシヨン世界大会、そして模型秘伝帳を巡る戦いの後に結成されたガン普拉バトルを秩序を守る5人の最強のビルドファイター……まだ存在していたのかよ、それにガン普拉ゲルマン流？Gガンのシユヴァルツかよ？

まあ、いい……チャンスはまだあるからな。オレ様が最後に勝つんだからな

第十三話 もう一つの………アクイ

了

## キャラクター紹介

タツミ・キョウジ

年齢：14？

宇宙ガンプファイターXの悪辣な手から影から守り続ける異形のマスクで頭部をすべて隠したガンプファイターの少年…

数年前に途絶えたガンプラ・ゲルマン流の使い手であり、ガンプラマフィア数人同時にバトルを申し込み瞬殺する高度なバトル技術、ビルダーとして世界レベルの腕を持つ

タカヤ、特にミカヤに対して想うところがあるようだが……その仮面に隠された素顔が晒される日は…？

第十三・五話 あきつきたかやの日記（5歳〜7歳）

あきつきたかやの日記（5歳〜7歳）

○月×日。

ぼく、あきつきたかや五歳は今日から《につき》を書きたいとおもいます

なんでかっていうとね……かやお姉ちゃんが《につき》を書いているのを見てぼくもかいてみたいな〜っておもったの

じゃ、さっそくきょうのコトを書くよ

きょうは、てんどうのおじさん、かやお姉ちゃんといっしょにカタナをふるうけいこをしました

ガンプラてんどうりゆうなのに、なんでカタナをふるんだろ？となにをみると、かやお姉ちゃんはおもい刀をすぐ軽そうにふるってます

楽しそうにふるかやお姉ちゃん。よしぼくも まけないようふれるようになろ〜

○月◆†日

きょうはかやお姉ちゃんとおふろにはいりました

でも〜かやお姉ちゃん、おふろを「ゆあみ」つていいいます。なんでなの？つときいてみました

「湯浴みっていうのは湯を浴び身をキレイにする意味なのさ…さあ、タツくん。からだ冷やすといけないから早く脱ぎ脱ぎしよう。わたしがも手伝ってあげるね」

…：やっぱり、かやお姉ちゃんはなんでも知っててすごいや♪ぼくの汗でびっしりになった服をぬがし終わっていつしよにおふろに入ります…きようはかやお姉ちゃんをぼくがあらう日です

まず《ぼでいそおぶ》をてにたらしめてあたためてからはだをあらいます。かやお姉ちゃんはとても気持ちよさそうにしています

(ん、そ、そこは…やさしく…ん、あ、はあ♡…だめだよタツくん、そこはまだ…強くこすっちゃ…でも、少し弱…んくっ♡♡)

あらいおわると、かおをまつかにしておからだをふるわせながらぼくに抱きついてきます…いきもあらいし気分がわるいのかな？

「だ、だいじようぶ…たつくんはからだをあらうの上手だね(よかった…すこし濡…果てそうになったのバレてなくて…)」

でも少ししたらいつものかやお姉ちゃんにもどって、ぼくのからだをあらいはじめます…でも《ぼでいそおぶ》をあらったばかりのからだにたらし、びったりむきあうようにからだにくっついてうごかして、もたれかかってきました

「ん、はあ…：どうだいタツくん…あたらしい洗い方なんだけど…」

「うん、すぐくきもちいい…」

「じゃあ、一緒に入るときはこうして洗ってあげようか…：…」

「ほんとう？かやお姉ちゃんだ〜いすき♪」

「た、た、た、タツくん……」

……なんでかわからないけど、もつとぎゅゅゅってしてきました。それから髪をあらいつこしてからおゆに百数えてからあがりました

○月×日

ぼくがかやお姉ちゃんのウチにきて一年すぎました。

きょうは、ぼくの入学式です。ピカピカの一年生になります。

外国から帰ってきたお父さんとお母さん、てんどうのおじさんとおばさんも来てくれます

それに、ココの《くろもりみねがくえん》には、かやお姉ちゃんが通ってるんだ。学ねんはちがうけども毎日一緒につうがくできるのがスゴくたのしみです

でも、なんかだれかにすぐみられてる気がして、うしろをみたらかやお姉ちゃんが笑顔で《かめら》を持ってて、手をふってきます

(半ズボン…白いソックスに黒のランドセル…はあ、かわいいよタツくくんは)

それから入学式が終わるとクラスわけしてから学校案内？になりました。するとかやお姉ちゃんと同じぐらいのお姉ちゃん達が教しつにはいつてくると。ぼくや他の人にきました

「キミ、お姉さんと一緒に回らないかな？甘くて美味しいお菓子もたくさんある家庭科部に行こ♪」

「ねえねえ、ココまだわからないよね。わたしが案内してあげる」

「ねえねえ水泳に興味ない？ボクの学校のプールは大きいよ」

「タツくん、おそくなつてゴメンね…さ、いこうか」

……ん～どうしよつておもっていたらかやお姉ちゃんが来て、手を握ると歩き出しました…ふりかえるとお姉さんたちがじつとみてなにかいっています

「う、うそ…あの剣とガンプラにしか興味ないミカヤさんが男の子の手をとってる!?!」

「なんかスゴく親しげなんだけど!?!タツくんつて呼んでるし!?!」

「…もう『食べてる』いえ、しっかり《味見》してるよね……ギルティ《有罪確定》!!」

つて知らないことばがみみにはいるけどわからないです。それからがくえんの中にある、としょかん、しょくいんしつ、しょくどう、りかじゅんびしつ、たいいくかんをあんないしてくれます……かやお姉ちゃんはなんでもしつてスゴい！

あんないがおわつて、ぼくはかやお姉ちゃんといっしょにおとうさん、おかあさん、てんどうのおじさん、おばさんとおうちにかえると

「二」タカヤくん、黒森峰学園入学おめでどう〜「二」

つて道場のみんながたくさんのごはんをつくつて、ぼくのお祝いしてくれました

あしたからかやお姉ちゃんといっしょにがくえんにいけるとおも  
うとスゴくたのしみ

はやくあしたがこないかな

ガタキリ月ヲタラタ日

ぼく、秋月タカヤが黒森峰学園に入学して一年過ぎました：友達も  
たくさんできたし、何より黒森峰ガン普拉部に入る事ができました

黒森峰ガン普拉部はガン普拉コンテストに優秀作品を幾つもの出  
してて、なかでも部長の西住まほお姉さま、西住みほお姉さま、逸見  
エリカお姉さまはガン普拉コンテストで上位入選を五年連続で果た  
してて、ガンタンクやラゴウ、バクウ、ガンタンクR44、ザクタン  
ク、ザメル：タンク系ガン普拉を得意でウエザリングやダメージ痕、  
塗装：見習うところがたくさんあります

あ、かやお姉ちゃんも同じ部にいるんだけど：今日は風邪をひいて  
やすんでるんだ：：叔父さんと叔母さんは京都にあるガン普拉心形  
流の珍念さんのところにいつていま家には、かやお姉ちゃん一人だ  
け。うわの空でガン普拉作ってた

「秋月、ランナー切り出しに乱れがある：：身が入らないようだな：：」

「お姉ちゃん、そんなふうにいつたらダメだよ：：タカヤくん、今日の  
部活動は切り上げていいよ」

「身の入らないガン普拉作られたら困るんだから：：天瞳のところに早く  
帰りなさい」

…っていわれて、でもみんなやさしいお姉さまたちです。作りかけのガンプラを箱にしまつて片づけしてから部室をでてまつすぐ家にかえりました

もちろん、りんごとモモを買つてから。はじめて皮をむいて皿にのせて、かやお姉ちゃんのおへやに入るとなんかいつもと違う甘ずっぱい匂いがします…ぼくに気づいてあわててかやお姉ちゃんがとびおきました

「た、た、た、たつくん!?!き、きようはクラブ活動じゃなかったの!?!」

どうしたんだろ?なんか顔もまっかだし…それになんでぼくの道着を顔にちかづけてるんだろ?

で、理由をいったら『西住先輩、逸見先輩…気をまわしすぎだよ………』っていつてたけど。でもいまはかやお姉ちゃんの看病をしなきゃ、皿に盛つたモモをフォークにさしました

「かやお姉ちゃん、まだ治つてないから無理しちやダメ。コレを食べてはいあ〜くん」

「あ、あ〜くん………ん、おいしいよたつくん…もう一つもらえるかな?」

「うん、じゃあ次はウサギりんごだよ、はいあ〜くん」

りんごとモモをおいしくたべていくかやお姉ちゃん。食べおわると僕の手を握つたままねむってしまったので叔父さんと叔母さんが帰ってくるまでそばにいました。早く元気になつて一緒に学園にい



こうね

キングオブハート月シャイニー日

今日はお休み：昨日一緒に第1回ガン普拉バトル世界大会をみていつの間にか寝てたぼくは、となりで寝間着を握るかやお姉ちゃんを起こさないように布団からでて襖を静かに閉めてから道場に向かいました

ガン普拉天瞳流の太刀を構え素振りをし、型を混ぜながら横風、突き、袈裟、逆袈裟、胴風ぎ…足運びを早く遠くへ踏み込みながら振ります

かやお姉ちゃんみたいにはまだまだかな…しばらくして太刀を収めると入り口に誰かいます

「……………」

赤いボロボロのマフラー、真っ黒なコート…変わったサンングラスをかけた人が僕をみてる。なんか怖い…もしかしたら叔父さんと叔母さんの知り合いかなと思って声をかけようとしたら叔父さん、叔母さんが道場に入ってきました。なんかあわててます

「タカヤくん、ミカヤがさがしているから早く戻りなさい…」

「え？」

「ほらほら、早くしないとミカヤが泣いちゃうから…さあ」

叔父さんと叔母さんにいわれて僕はかやお姉ちゃんのところを駆

け出しました…うしろから叔母さんと叔母さんの怒る声が聞こえた気がしたけど

――

「……………なんでココにきた…あのようなガン普拉バトルをし流派を汚した。天瞳流の門を二度と跨ぐこと許さないと言った筈だが？」

「……………今のがメイとユウキの子か…」

「……………今のアナタに関係ないはず…メイから絶縁されたのを忘れたの？……………秋つ…いえ第1回ガン普拉バトル世界大会覇者二代目メイジン・カワグチ…はやくでて行って」

「……………わかった……………」

――

――

しばらくして叔父さん、叔母さんが帰ってきました。さっきの人はどうしたの？って聞こうとしたけど聞いちゃいけない気がしたからやめました

でも、なんでかわからないけど…お母さんに似てる感じがしました

あと、夕方に道場の入り口を掃除していたら見慣れないニツパーが落ちてました…ぼくが使うのとは違うけど使い込まれてるなって感じがしてそれに…すぐく馴染む気がします。グリップに《N・K》って刻まれてる…誰のかきいてみようと思います

野良犬月 目つき悪い二人日

黒森峰学園に入ってから二年、僕は二年生、かやお姉ちゃんは五年生になりました。沙尽震《シャツフル》神社の七夕神事で誓いの儀式をしてからは何時も隣にいてくれます。

今日もガンプラ天瞳流の稽古を終わると、かやお姉ちゃんと一緒にお風呂に入りました

「うううかやお姉ちゃん、まだく？」

「もう少し待ってて……はい終わり、じゃ身体洗おうか？」

「うん」

髪を洗い終わり泡を落とすとかやお姉ちゃんが向き合うような感じで肌をあわせます…《ぼでいそおぶ》が肌にふれて上から下に動く泡がたつんだけど、なんかかやお姉ちゃんの様子がいつもより違います。息も荒い、僕の胸あたりになんか二つの小さな固くて柔らかいのが動いてこすれると声がおおきくなるし

「ん、はあ……く……は、はい……おわ……りだよ……(ダメだ……感じてしま……う……痛いけど……)」

顔を真っ赤にしながら手桶にお湯をくんでかけてから湯船にはいます…でもなんでかわからないけど僕の膝に向き合って座るようにだけど…最近になってかやお姉ちゃん、お母さんみたいじゃないけど大きくなってきて、もしかして声がおおきくなったのは当たってたからかな？って考えてたらかやお姉ちゃんが

「タツくん、どうしたのかな？あんまりみられるとこまるんだけど

「……わ、わたしはまだ小さいか……」

「……僕はきらいじゃないよ。かやお姉ちゃんのピンクでぷっくりしてるしかわいい。さわっていい？」

「……あ、まって？いきなりは……ひやう!?や、やめ……んんっ!」

……指でさわるとびくんと身体をふるわせながらかやお姉ちゃんがぎゅってぼくに抱きついてきました。息もなんか荒いしさわってたトコが固くなって膝のあたりがなんかぬるってしてる  
なんなんだろ？

それから少したって、顔を真っ赤にしてぼうつとしてるかやお姉ちゃんとう湯船からでて身体を拭いて、着替えました。あと少ししたらかやお姉ちゃんが僕の部屋来て一緒に寝るから今日はここまでにします。

—————

その日の夜……

「ん、はあ……ダメ♡タツくん、吸っちゃ……か、かんだ……やあ」

「ん、ちゅ……おかあさん……」

身をよじらせるミカヤの艶声が夜の帳に響く……はだけた寝衣……まだ固く膨らみかけの敏感で未熟な母性の象徴への与えられる刺激は芯から熱さを引き出していく、その感覚に身体を振るわせながらタカヤの頭を夜空が白くまで抱きしめ続けミカヤはただ耐えながらも不思議な満足感に満たされていた

—————  
—————

ジャンマルコ月リナシメント曰

やったあ！お母さんが第二回ガン普拉バトル世界大会ベスト16入りしたよ！

お父さんが作ったガンダム・エクシエスをお母さんが操り、宇宙をかけながら相手を倒していく姿はスツゴクカッコイイです！僕を抱きながら座るカヤお姉ちゃんもテレビに釘付けになってます

「メイ叔母さま、スゴク綺麗な動きだね……無駄がなくてまるで円舞のようだ……」

「カヤお姉ちゃんもそうおもうよね♪お母さんもだけどお父さんもスゴい！よし、エクシエスより強くてカッコイイガン普拉を絶対作ってガン普拉バトル大会にでる！」

「じゃ私もタツくんにつけて貰ったこの《晴嵐》で世界大会目指してみようかな」

「本当！やったあ……あ、でもカヤお姉ちゃんと戦うことになっても負けないよ」

「ふふ、もちろんさ……でも勝っても負けても怨みっこなしだよ」

「うん！」

そういつて軽く手をあわて指を絡めます……カヤお姉ちゃんは僕より強くて、スゴク綺麗で優しくてかわいいけど負けないよ。だから、

そのために世界大会に出てる母さん達の所に行くことを決めました  
それを天瞳の叔父さん、叔母さんに話したらいいよって言ってくれました。でもカヤお姉ちゃんは「わたしもついていく！タツくんは無防備だから!!」って…でも僕は何度も話したらわかってくれたんだけど「着いたら必ず私に連絡するんだ、もちろん寝る前とか声を聞かせてくれるんだったら…」って条件付きで

んで、早速着替えやキャリーケースに入れ終わると早めに布団を敷きました…明日は静岡にあるP P S Eスタジアム《第二回ガン普拉バトル世界大会》会場……どんな人達が来るのかスゴく楽しみ

あ、カヤお姉ちゃんが涙目になりながらお布団からみてるから今日はここまでにします

新しい日記帳を入れておかないと

—————  
—————  
—————

『……………』

薄暗い和室に乾いた音が響く…無言で日記帳を閉じ顔を俯かせ机を撫でる影はまるで昔から知っているかのように、懐かしむようにあたりをみる

『……………なにも変わらない……………』

微かに漏らした声からもソレが強くなる。少し開かれた障子から月の光が差し込み見えたのは頭部全てを覆い、ガンダムにも似た仮

面で隠した少年

手にした日記帳をもとあつた場所へ直そうとした時、襖が大きく開かれ風切り音と共に何かが迫るのを紙一重でそらし離れた彼の目には薙刀を構えたガンプラ天瞳流師範の妻ハルナが柄を構えながら軽く回し刃を突きつけた

「あなた何者なの？……ここはあの子の……タカヤくんの部屋よ……なにが目的が答えな……」

『……………さ……………失礼した……………』

懐から小さな玉をとり指先で擦る。瞬く間に激しい光が室内を満たしハルナの視界を奪い微かな物音と同時に気配が去り光が消えた

「にげた？でも……………これは」

室内は荒らされた形跡がない。変わりに障子が開かれ月が煌々と照らしている中、机に目を向けたハルナはあるものを目にした：幼く辿々しい文字で書かれた名前を見て唾然となる。コレはハルナが預けられて一年過ぎた頃にタカヤに渡した日記帳：あの事件から天瞳家を離れてからも何時でも戻つてこれるようにこっそり部屋だけはハルナは夫を説き伏せ残していた

しかし長らく日記帳だけは見つからなかった：タカヤが見つからないように隠していたから。本人しかわからないはずの日記帳が机の上におかれてる

先の少年から感じた懐かしいモノからくる不安を振り払いながら薙刀を壁にかけると大事に日記帳を棚へとしまった：ミカヤが戻ってきたら教えようと思ひながら

了



## ミカヤのタツくん日記

○月×日

私、天瞳ミカヤは日記を書きしたためようと思い、筆をとらせてもらう

今日、わたしは運命にであった…不思議な被り物服をに袴を短くしたズボンにも似た出で立ちの稚児

純粹でまるで玉のような彩りの瞳、きれいな肌…何よりも

ー…ボクはあきつきたかやだよ。おねえちゃー

柔らかで、まるで日だまりのような笑みに雷が走った…知らないうちに抱きしめてしまった

…いい匂いを胸一杯に吸いながら、身体の奥が疼いた…離れたくない

父と母があきつきたかや…タツくんの両親と一緒に道場に来るまで続いた

…ああ。タツくんは運命の良人、誰にも渡したくは無い

鉄血月オルフェンズ日

タツくんが預けられ一年。わたしはいままでに無いぐらい充足の日々を過ごしている

タツくんを湯浴みに誘い、きょうも互いの肌を重ね磨くよう洗い上げていく

洗うときは《ぼでいそおぷ》を手に落とし温めてから身体へ蜂蜜の

ように垂らし、向き合う形で肌をあわせ洗い上げていく裏・天瞳流房術《肌磨泡術》。母からと教えてもらったんだ

母みたいな柔らかかで大きさは無い、膨らみかけだけど、肌を滑りされる度に痺れるようなえもしがたい衝動が来て、おもわずしがみついてしまう

丹田のあたりが熱く、疼いてしまうの耐え湯船からあがって水気を拭きながら、しっとりとした肌と手に触れる流れるようなサラサラした黒髪を楽しみ、そして若筍（？）を焼き付けた

ああ、狂おしいほど愛しい

月鋼月 二期日

今日はタツくんがわたしの通う黒森峰学園に入学する日だ。講堂で今か今かと胸がワクワクするのを待つと新生が入ってきたのを見てカメラを構えタツくんを探し見つけた

ああ、なんて凜とし愛しいこと…母とメイ叔母様と共に見繕い仕立てた服へ身を包んだタツくん

わたしに気づいて向ける笑顔は至高そのもの…何枚も撮り納めた

ふふふ、記念すべき六歳のタツくん、入学式の写真は一枚も撮り損なう訳ない!!新しいアルバムを作らなければ!!

…その前に、黒森峰学園の伝統《姉弟の誓約》をタツくと結ばないといけない

姉弟の誓約。 新入生男子を「弟」として上級生であるわたし達が「姉」として学園での生活、勉強、礼儀作法諸事を教えていくしきたりだ

なにより、わたしの学園には清楚で良家子女の皮を被った肉食系乙女が多い…なによりシヨタコン率が高い、誰よりも可愛く純粋な「わたしのタツくん」が真っ先に狙われてしまう

―ねえ。みまして…あの水兵服の子、愛らしいですわー

―ええ、しつとりとした黒髪に触ればプニプニってするきめ細かな肌…たまりませんー

―ちよつと！あの子はワタシの弟にするんですから、手出しは止めて!!ー

―…可愛い子。妾がすみずみまで味わおうぞ…ー

笑顔で話す顔、でも肉食獣な顔だ…ことを急がないと骨まで吸い尽くされて取られてしまう

お姉ちゃんとして、タツくんの《すべての初めて》を守りきらないと

だってわたしはタツくん専用の鞘《さや》だから…あと六年したら、熱く猛々しい、鋼よりも固く詭えた刀を受け入れ納めたい

説明会と式が終わり直ぐにタツくんのクラスに向かうとすでに囲まれていた…静かに熱くなりながら割って入りタツくんの手を掴んで教室をあとにした。向かったのは黒森峰学園にある社《素戔》神社にある大鏡に立って向き合うように座りながら、誰もいないことを確認した

「カヤお姉ちゃん?どうしたの?」

「なんでもないよ…タツくん、今から私の言うことを続けていってくれるかな?この学園で過ごすための決まり事なんだ」

「うん!いいよ…なんて言えばいいの?」

「じゃあ、ゆつくりいうよ…」あなたと共に笑い、健やか、離れたとしても姉である愛しいあなたと弟として永く歩むことを誓います…  
……いいかな?」

「えと……ぼくはカヤお姉ちゃんと一しよにわらつてくげんきでそばにいて、世界でいくちばん大好きなカヤお姉ちゃんの弟としてあるいていくのをやくそくしましゅす」

「…た、タツ…くん…うん、一緒に歩こう…タツくん!」

「うん、カヤお姉ちゃん」

それから、学園内を案内して日が暮れメイ叔母様、ユウキ叔父様、母、父と共に家へ戻ると門下生の皆が祝いの席をもうけてくれた

「タカヤ〜いいわよ♪はい、にっこり笑って〜ミカちゃんも一緒に」

「は〜い、カヤお姉ちゃん。一緒にとろ♪」

皆の祝いのことばと一緒にタツくんを抱き抱えるように座る私を見てメイ叔母様が写真を何枚も撮っていた…

祝いも終わりいつものようにタツくんと共に湯屋へ向かい湯浴みし、身体をふいて共に寢床に入った

明日から、新しい日々が始まると想うと身体の奥が熱くなる…

—————

—————

ウヴァル月 ユハナ日

沙尽震神社での七夕神事から一年、タツくんは8歳になった…少しだけ背が伸びて筋肉もついてきた

アシムレイトをコントロールするための鍛錬も成果が出てきてオンオフが出来るようになったし、ガンプラ作りも目をみはるものがある。ビルドマイスのユウキ叔父様譲りの制作技術かもしれない。ファイターとしての才能はメイ叔母様譲りだ……手先が壊滅的、ケーキや《かすていら》を作ると石鹼や消しゴムを作ってしまうほどの不器用さは受け継がれてなくて本当に良かった

でも、数日前から様子が可笑しい……何か作ってるのは知ってるけど私が近づくと慌てて隠す

聞いてもぜんぜん教えてくれなくて、私がお風呂の時にむこう(！)としたから嫌われたんじゃないかと思った  
でも違ってたんだ

ーカヤお姉ちゃん、はい♪ー

ーコレは……刀？ー

ーうん、前に言ったよね…カヤお姉ちゃんのガンプラにあう武器を作ってあげるって……名前は《晴嵐》！ー

照れながら笑顔でガンプラ用に拵えた刀を渡してくれた。タツくんは私の為だけにガンプラの武器を作ってくれたんだ…幾重にも薄く、硬さの違うプラ板を重ね接着して削りだしにはスゴく時間がかけ

られているのが手にとってみてわかる

指をみると切り傷や塗料の跡をみて、まだささやかな胸の奥が熱くなつてギョツとだきしめた

タツくん、ありがとうつて何度もいうと「どういたしまして」大事に使つてね」つて満面の笑顔で返してくれた

ふふ、今日もしつかり身体を使つて洗つてあげるよ……でも

「カヤお姉ちゃんつて、ぼくみたいについてないの？」

「え？……」

「ぼくには無いオモチはあるし……なんでなの？」

「そ、それは……」

困つた……男女の身体の違い、正直、わたしでもうまく答えられないけども、興味深々な目を向けて答えを待ってる

どうしようか……タツくんのお姉ちゃんであるわたしは……

選択肢A：タツくんのために自分の身体を使つて違いを教える

選択肢B：少し早いけど大人の保健体育（実践!?!）をする

選択肢C：まだ青い禁断の果実を実食（!?!）させる

……浮かんだ三つの選択肢B、Cは無い。わたし自身的身では受け入れることも出来ない、なによりタツくんは通つて無い（毎朝、部

屋にある塵箱を確認してるから断定)し、実食(?)するなら《薄くても互いを感じるアレ》を手に入れないと

父と母は無しでするのが互いを感じやすく、良いらしいから持つてないし、手に入れること難しい……なら取るべき選択肢はAしかない。ゆつくり湯船から出てタツくんと向き合うように座る……今からやるのはスゴく恥ずかしい……でも、コレは将来の為にひつようだから

「た、タツくん……いまからする事はお姉ちゃんとの秘密にしてくれるかな? 《誓いの儀式》と同じぐらいに。それだったら少しだけ、おしえるよ」

「うん、やくそくする……?」

「……コレが……タツくんとわたしの違いだよ……」

……タツくんの前でゆつくりと広げる……恥ずかしさを我慢しながらみせた、心臓が破裂しそうな私のをキラキラ目を輝かせてじい……と息があたるぐらいに近づけてる

「ホントにぼくみたいのついてないんだ。スゴくきれい……もっとみていい?」

「……タ、タツくん? ひ、ろ……な……ん♡」

「……中也きれいだよ? ねえ、この小さくて固いのはナニ?」

「や、そこは……ク……あ……ん! つつかな……んっ♡」

……それから30分あまり、タツくんに広げられたり、間近でみ

られて、擦られて果てそうになるのを耐え、中まで全部をみられ  
ちやつた

でも、許婚同士だからコレぐらいは赦されるはずだし、タツくんの  
為になったからいいかな

アルジ月 ミーナ日

.....  
.....  
.....

.....第2回ガン普拉バトル世界大会に出場しベスト8に  
進出したメイ叔母様の応援に行ったタツくんが会場で姿を消した

父と母に着いていく形で、現地に入ってユウキ叔父様、メイ叔母様  
と合流し警察、ガン普拉警察と協力しての捜査が始まった

タツくん、どうか無事でいて

モードレット月 クラレート日

会場周辺で父と母とタツくんのピラを作って配り始めた



手がかりは会場から走り去った黒いハイエース、防犯カメラにあった奇抜な衣装姿の輩

街頭にたちタツくんの顔写真と特徴を記したビラを街行く人々に配り情報を求めた

タツくん、あいたいよ…八百万の神に、わたしの大事な人《タツくん》が無事に帰るよう祈った

ヴォルコ月 ひびき日

今日もタツくんの目撃情報を調べ探す

……でも、黒いハイエース、件の人物だけでは手がかりが小さい無く、難航している

メイ叔母様の実家：強きを挫き、弱きを助け、ただ一度の恩義に報い命を捨てる侠、政財界に強い影響を持つ仁侠衆団《秋月組》でも行方は探れなかった

タツくん、どこにいるの？

カミオン月 ルペ日

今日も目撃者、情報が無い

冷たい雨が降る中、ビラを配り街頭を走り回る…

タツくん、タツくんに会いたい……

蜜蜂月 マーマ日

今日も目撃者、情報を求め走り回る…父と母、ユウキ叔父様、メイ叔母様もむやみに動いてもと、何度も止めるけど、わたしは雨が降る日でも止めなかった

タツくん、タツくん、タツくん……どこにいるの？寂しいよ

そばにいないと眠れないよ

いつも抱きしめていた温もりと匂い、やらかさが欲しい

タツくんの胴着を抱きしめても、匂いがもうわからないぐらいに…わたしのが染み込んでる

寂しいよ…タツくん

レクス月 グシオン日

……今日もタツくんの手がかりがつかめない…

バエル月 クトウルフ日

今日も手がかりなし…タツくん…どこ？

シユウ月 スイチヨウ日

ガン普拉警察から、誘拐を主導した主犯の名前が判明したと一報が届いた

その名は宇宙ガン普拉ファイターX

ガン普拉警察、ICPOからも特A級犯罪者として全世界に指名手配をかけられている輩に

唯一カメラに撮られた、あの歪な仮面の向こうにある瞳からは狂気を感じた

タツくん、どうか無事でいて……おねがい……

戦慄月 蒼日

……タツくんが、タツくんがみつかった!!

わたしの住む街から離れたY市でふらつきながら歩き倒れガン普拉警察に保護されてすぐに、コトニー総合病院に運ばれ、検査を受けると父と母に聞きすぐにも会いに行きたいとたのんだ  
でも……

「……………すまないミカヤ、まだ…会わせられない…」

父もだけど母は苦しそうな表情をしていた…そんなに具合が悪いの?と聞くけど黙り込んでる

でも、無事で良かった。はやくあいたいよ…一緒に稽古して、学校に通学して、お風呂に入って、添い寝して…たくさん、たくさん誓いの儀式をしたあの日々が戻ってくる

ダイン月 フォール日

保護されて数日、ようやくタツくんが入院しているコトニー総合病院に父と母と共に来た

「ま、待つんだミカヤ！タカヤくんは……」

病院につくと私は父と母を残し駆け出していた。病院内は走ってはいけないのも頭から消えていた

だってタツくんと一年と6日ぶりに会える…それだけしか頭になかった

あの笑顔を、あの温もりを、そして溢れ出す想いと共にタツくんの病室の前まで来ると足を止める。軽く深呼吸し少し乱れた髪、衣服を直してゆっくりとドアを押して、目にしたのは艶を無くした黒髪、生気の抜け落ちた瞳、至るところに包帯、絆創膏が目立つ小さな男の子…ゆっくりと顔を向け出た言葉

「……………お姉ちゃん……………ダレ？」

…生気の無い瞳を向けるタツくんの言葉に、わたしの中でナニかが壊れ崩れ落ちて、ひざをついた

なにがどうなってるの……………だれかこたえて

蜻蛉月 無意味日

……タツくんがわたしの家に帰ってきた

…でも、あの日以来わたしは部屋に引きこもった

キラキラ輝いていた瞳は光が無く、痩せた身体に巻かれた包帯と絆創膏…なにより、わたしと過ごした四年間の記憶が完全に抜け落ちてた、一緒にガンプラ作って、通学して、湯浴みし、誓いの儀式を重ねた日々も全部が

わたしをユウキ叔父様、メイ叔母様のそばから離れないで見る姿に胸を締め付けられた

あの時、第2回世界大会会場に一人で行くのを止めていけば、一緒に行っていたら、こんな事にはならなかったはずなのに

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……一週間近く布団にくるまり、膝を抱きながら何度口にしたかわからない

「ミカちゃん。起きてるっ…」

控えめな声が襖の向こうから聞こえる…わたしは何もこたえない…メイ叔母様が誘拐されたのはわたしのせいじゃないと語りかけ、少しい間をあけゆつくりと告げられた言葉に身体が震えた

タツくんが、わたしの家から出ると。

メイ叔母様の父親、ガンプラ仁侠道《秋月組》組長オウマさんが療養と自分たちのシマであるS街へ来るようにいわれ迎えの組員が来ていると

そして、わたしとの許婚を解消された。ただそれだけを告げメイ叔母様は襖から離れていくのを感じながら何かがわき上がってくる

…タツくんと離れ離れになる。今生の別れになる……………いやだ、そんなのはぜったいにイヤだ!!

布団をはねのけ、襖を勢いよく開き板張りの廊下を駆けた…あけ放たれた門を抜けた先には、父と母、門人達、黒塗りの高級車が土煙をあげ離れていくの

「……………タツくん!」

「ミカヤ?!待ちなさい!」

「行かせてやるんだ…………お別れぐらいいいじゃないか」

わたしをとめようとする母がとめようとするのを、父の手がふさいだ。走った…子供の足で車に追いつくには山道を行くしかない。木々の枝葉が顔にふれ、石ころだらけのあれ道で血が滲むのも気にせず

木々の枝葉が途切れ見えたのは黒塗りの高級車、その後部座席に顔を俯かせたタツくんの姿をみて、力いっぱい走り叫んだ

「……………つくん……………タツく……………タツくん!!」

……………でも、足がもつれ地面に転ぶ…痛い。でも顔上げるけどあまり見えない…引きこもって食事も取らずの日々を過ごしたせいで視界がグニヤリと歪む中、後部座席から生気の無い瞳でタツくんが、わたしをみていたのを最後に意識が途絶えた

after. fourth. years.....

蘊奥月 虎鉄日

.....まさに運命だ！今日のわたしの運勢は最高だと断じよう！！

やっぱりタツくんとわたしは運命の赤い糸で生まれる前から結ばれていたに違いない！！この街にいるとは知っていたけど学校が同じだということは、そうかんじずにはいられない！！

あの頃より背が伸び、儂い空気を感じるも間違いなくタツくんだ：わたしが大会エントリー手続きで手間取っていた時におどおどしながら手をさしのべてくれた

.....やっぱり、記憶は失ったままだった。でも今からはじめようと思う、綺羅星のように輝く過去も大事だけど、コレから始めるんだ

タツくん：少年と一緒に歩いていけるように、少しずつ距離を詰め、鍛え抜かれた剛刀をわたしという鞘へ導き入れ互いを理解したい。まずは先輩、後輩から始めるかな

覚悟してねタツくん♡

○月  
××日

なんで、なんでなの……わたしはどうすればいいんだ  
今と過去、どちらを選べばいいかわからない……

閑話 ミカヤのタツくん日記

了



## 第十四話 若き翼達!! 《前編》

第三試合、チーム・サープリスVSチームクライ戦はアマミ・イツキ、アインハルト・ストラトスが圧倒的勝利を収めた

その試合結果は控え室でガンプラの調整にいそしんでいたトオル、シユテル、隣の控え室でもシロウ、ディアーチェも手を止めモニターをみてる

「…なんだよあれ、圧倒的だな…アマミ・イツキ、アインハルト・ストラトス…」

「そうですね。ガンプラの完成度も高いですけど…あれは…」

「どうしたシユテル？顔色悪いけど、具合悪いのか？」

「い、いえ、大丈夫ですよ…次の試合まで時間があまりないですから」

「あ。そうだった…じゃ、急ごうぜ」

シユテルに言われて、自身のガンプラ《ランスロット・ガンダム》の調整作業を始めるトオルから目を離し、シユテルは自身のガンプラ《ガンダムX・ズイーガ》を手にとる

ガンプラ塾時代から、ずっと使い続けてきた愛機の関節の緩み、塗装剥離が無いかをチェックするも、頭の中には先の試合、チーム・クライのファイター《アマミ・イツキ》のこと

(…あのバトルスタイル…ガンプラ塾に在籍していた最低なファイターと似ています…)

「あは！なに言ってるんだよ？相手の弱み握って、脅して、相手の人生や家族を滅茶苦茶にして、身動きとれないガンプラを派手に潰し

て、完璧に勝利するって最高にクールじゃん？苦しむ様を見れて一石二鳥、飯もうまく進むしね〜それに二代目メイジンカワグチもいつてらるだろうが。『ガン普拉バトルは……』」

『……ガン普拉バトルは勝利こそすべて、例え相手が親、兄弟、親友、恋人であろうと退け勝利すべし……』

修羅と呼ばれた二代目メイジンカワグチ、シュテルが知るファイターの言葉が重なり聞こえる。塾在籍中に、何度も聞いた。ソレが当たり前で三代目メイジンへなるための条件。両親の都合でやむなく退塾、ドイツへ行つて数年ぶりに帰ってきてても変わらなかつた

(……ガン普拉バトルに勝つのは必要、だから世界を目指すためにもドイツから帰って来てからすぐ、紫天を再結成しました。そしてトオルと出会ってから『勝つ』だけではダメだつてわかつたんです……だつてガン普拉バトルは)

「パーツの緩み無しつと、ヴァリスもクリアランスOK……なあ、シュテル」

「え？な、なんですか？」

「……さっきの試合さ嫌な感じがしたんだ。あのファイター《アマミ・イツキ》とあの黒いアストレイを通してさ……あんなバトルは楽しくない……だからさ見せてやろうぜ。オレとシュテルのガン普拉バトルをさ」

「……そうですね。ワタシとトオルのガン普拉バトル……「シュテル……なに言ってるのかなあ？」……ヴ、ヴィヴィオ？いつからそこに？」

「……ワタシのあたりからだよ……それよりいないみたいだね？」

「ええ、先ほどの試合が始まる前から……」

「ヴィヴィオ、どうしたん……だ……っつて」

ガンプラのチェックを終え振り返ったトオルはシユテルとヒソヒソ話すヴィヴィオをみて固まる。金色の髪をリボン藍色のリボンでむすび、白のオーバーニーに明るい黄色に白のラインが入ったミニスカートが目立つチアリーダユニフォームに両手にポンポンを持ったヴィヴィオに見とれていたのである。

「どうかなトオル、似合ってるかな？」

「あ、ああ！すごく可愛い……（ヴィヴィオ、スツゴク可愛い……）」

「良かった〜次の試合はたくさん応援するね。トオル、ファイト♪」

ポンポンを揺らし軽くジャンプし、満面の笑顔と仕草にトオルをドキドキさせるのに十分な破壊力……ドバーガンでハートを撃ち抜かれていた

（……ヴィヴィオ、ソレずるいです……桃子おばさまとなのは姉様の入れ知恵ですね……でもトオルはスク水メイド、ザ・ビーストが好みです）

甘酸っぱい空気を醸し出す二人に羨ましそうな視線を向けるシユテル……しかしトオルの部屋でガンプラ談義し、離れた時にベッドの下から《世界のスク水メイド全集》、大人の特殊礼装<sup>ザ・ビースト</sup>なるものを見つけ、すでに内緒で購入し何時でも行動に移せるようにしていたが、ヴィヴィオに先を越され少し悔しかった

しかし、その思春期真っ盛りな固有結界は数秒後にガラガラ崩れ落ちる…控え室の向こうから声が聞こえてくる

「ル、ルーテシア、さすがにコレは…」

「大丈夫、これならトオルパパはいちころ。ママの持っている武器を生かすためのだから」

「で、でも……わたし……こ、こんなの似合わないわよ」

「……恥ずかしながらずにいくの……えい」

「きやっ？」

扉が声と同時に開いたソコには…白いオーバーニーで包まれた見事な脚線美の足、ふわりと揺れる白地に赤のスカートに《f i g h t !》の文字が圧倒的な母性の象徴で歪ませ、大きく揺れる。真っ白なリボンで長く綺麗な紫髪をサイドテールにしたポンポンをもつメガーン…顔を真っ赤にし俯きチラチラとトオルをみてる

「メ、メガーンさん!? な、な、な、そ、それは……」

「え、えと……トオルくんの応援に……そしてらルーテシアがコレをもって……へ、変かしら……おばさんだし」

「へ、変じゃないし！メガーンさん、おばさんじゃないから！それにスツゴク似合ってスツゴクきれいだから……だから自信持って！」

「……トオルくん…ありがとう」

「う、うわ??」

感極まったのかトオル足早に駆け寄り抱きしめる…家でチアコス  
を渡され出るまでは恥ずかしく無かった（もちろんコートをきて）。  
いざ控え室の前まで来ると急に不安になった

しかし。トオルの言葉が不安を碎き、優しく豊かなバストに埋もれ  
させるよう抱きしめてたのを目にした二人は

（……………く、フルアーマー胸部装甲、まさかそんな直接接触を!?!うらやま  
し、いえ油断できません。というか、ワタシのトオルからはなれてく  
ださい!!）

（油断してたよ。まさか私たちのトオルを眼前NTR（！）するなんて  
……トオルも、トオルだよ！そんなに大きな胸が好きなの？BBAの  
だよ!?私だって最近膨らんできたし、今から小さい方が好きな風に教  
育しないとね）

（もちろん大会が終わってから、ゆっくりと時間をかけて教えてあげ  
ます／るよ……）

軽くアイコンタクトし、コツリと拳を軽くぶつけ闘志を燃やす二人  
を遠目でみていたルーテシア

（……………ふ、計画どおり。トオルがママを意識してる。まな板娘には  
渡さないようにしないと）

メガーンと未来のパパが抱き合う姿に、うつすらと笑み…悪い笑顔を  
浮かべみていた

☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

「ディアーチエ、ガンプラの調整おわったか？」

「我の方はあと少しかかる……ん？どこにいくのだシエロウ？」

「ああ、少し買い出し……お腹空いてるだろう？今、サエグサ模型店のレストエリアにスツゴくうまい点心（肉まん）を作るって噂の雷凰飯店ってのが、出店してるからさ」

「雷凰飯店だと！絶品甜点心に、包子から今や喪われた中華料理まで甦らせた、あの店が!？」

「そ、そんなに有名なのか？」

「当たり前だ！この街に住む下々の輩は必ず一度は、かの店の料理を食しているのだ！至高の中華を出すホンモノぞ!!」

「ディアーチエは食べたことあるのか？」

「……………い」

「え？」

「実は……無いのだ……恥ずかしながら私の口に捧げる前に天に召されてしまうのだ……幾度もなく訪れた私の威光にひれふさんとは憎たらしい。不敬にあたるわ!!」

先ほどとは打って変わり、しよぼんとするディアーチエ…要するに並んでいたのに関わらず、あとわずかと言うところで売り切れによる閉店になった。と理解した

「んじや、今から買いにいつてくるよ。だから少しここで待ってて」

「うむ…ならば早く手にし我の元に帰ってくるのだ！シエロウ!!」

目を輝かせるディアーチエを控え室に残して歩くシロウ。向かうのはフードコートにある雷凰飯店、足早に階段を上ると雷凰飯店と書かれた登りが見え、カウンターには熱々の湯気が漏れる蒸籠が一個残されてる

「うわ、もう残り一つしか無い。雷凰肉まんを一つくれ」

奥にいる店主へ声をかけてから、蒸籠へ手を伸ばした時、別方向から手が伸び同時につかみ引き寄せようとするのをシロウは阻止し手の主をとらえた

「……離してください」

碧銀の髪を白いリボンで纏め結び、色違いの瞳を向ける少女…片方の手にはフードコートで売られているお菓子、食べ物が入った大きな袋が抱え、まるで自分のだと言わんばかりに蒸籠から手を離さないままシロウを見据えている

「……悪いけど離すわけにはいかないんだ。この雷凰飯店の肉まんは」

「…奇遇ですね。でも雷凰飯店の肉まんは私がいただきますから」

ぐいっと蒸籠を引き寄せる少女、シロウも負けじと引き寄せる…バチバチと火花が散らし互いに最期の雷凰飯店の肉まんを奪うべくスキをうかがおうとした時だった

「おーい、少年に嬢ちゃん、はやくしないと俺んちの肉まん冷めるぞ？」

店の奥から真っ赤な髪にコックコート姿の少年が顔を出しシロウ、少女をみる。目つきが悪いせいかわ視線に思わず固まった蒸籠をつかむシロウの手から力が抜け僅かな隙が生まれた。少女は素早く蒸籠を引き寄せた

「…すみません雷鳳飯店肉まん、私がいいます。清算を」

あつけにとられるシロウの前でカードをだす。やられたと思った時だった

「悪いんだけど、ウチはカード清算を受け付けてないんだ」

「え、ほかの店は…大丈夫でしたけど」

「ああ、ウチは昔はやってただけど…昔、少し揉めた事があってからな…」

「……………」

本当にすまないという眼差しを向ける雷鳳飯店の店主？に顔を俯かせる少女は静かに蒸籠をシロウに渡してきた。無言で受け取ったシロウは現金で支払い終え、買い物袋を手にとぼとぼ店を離れる少女へ近づいて買った肉まんを袋ごと手渡した

「え？コレ…受け取れません、アナタの肉まんじゃ」

「別にいいよ。雷鳳飯店の肉まんは明日でも食べられるし…つと時間がないや…じゃあな!!」

「あ、待ってください…代金をどうしましょうか…アママに現金を用意して貰わないと、見ず知らずの他人に貸し借り作るのは嫌



ですから」

雷風飯店の肉まんが入った袋を大事に持つ少女、チーム・クライのアインハルト・ストラトスは小さく言葉を漏らしサエグサ模型店を出て真つ直ぐ用意されたホテルへ歩き出した

余談だが、肉まんを手にかけることが出来なかった事を知ったデイアーチエは試合開始まで軽く拗ね、機嫌を治そうとシロウが何度も宥め、今度《Gミューズ》へ買い物をする事であろうやく機嫌を治してくれたと記しておこう

『みなさま、バトルシステム調整と粒子供給タンク接続がようやく終わりました。さて、ながらくお待たせしました。コレより第四回戦の選手入場です!』

主催者であるミツキ・サエグサ店長の声を皮切りに待ちに待たされた観客の歓声が沸き起こる中、大会初日第四回戦の選手入場が始まる

「頑張れよ〜チーム・ロード!」

「デイアーチエ先輩! 神々の黄昏を下々にお与えくださいまして〜」

「おう! 熱いバトル期待してくれよ!!」

「あはははは! まかせよ、私の身体から漲る暗黒の力を持って、我が伴侶シエロウの力を神々の黄昏と輝ける栄光と共に見せつけようぞ!!」

「頑張れ〜トオル!!」

「トオルくん、ふ、ファイト!!」

「トオルパパ、がんばったからお母さんが、ごほうびをあげるって言うよ…」

「ル〜ちゃん？オレはパパじゃないからね!?あ、シユテル、どうした？」

「トオル、勝ちますよ…トオルはワタシトヴィヴィオのモノ…ダレにもわたしません…あのフルアーマーにはワタシマセン…」

「ナニイッテルノカナア？トオルは私とシユテルがモラウンダカラ…ワカイホウガイイニキマツテルンダカラ」

『……………さ、さて本日、最終バトルとなるチーム・ラウンズ、チーム・シユベルトリッター…互いのガンプラ補修も万全のようです。各チームの応援模様も熱く盛り上がってます！』

↓ Press set your GP Base, Press set your GUNPLA ↓

それぞれ筐体に立つとGPベース、ガンプラをセットする。青みがかったプラフスキー粒子が溢れ出しバトルフィールドが形成していく…バトルフィールドはランダムで決まるが、まだ定まらない。トオルのランスロットガンダム、シユテルのガンダムX・ズイーガ、シロウの武者真亜主頑駄無、デИАーチエの《アルジエント・ノワール》…まるで命が吹き込まれたかのように瞳に光が宿りカタパルトへ立つと同時にアナウンスが響き、フィールドが現れた

↓ Beginning Plavsky Particle dispersal field Extra《Castle》 ↓

『どうやら、今回のアップデートで追加された隠しフィールドがヒットしたようです!! 舞台は騎士ガンダムストーリーでおなじみのラクロア城です……しかもなんでかわかりませんが空飛ぶ竜の城みたいなのも飛んでるけどファンタジーだから問題ないわよね』

空飛ぶ竜の城? の下にはラクロア城、城下町が広がる…四人のバトル・ジャケットに変わりアームレイカーに手を置いた

Mode damage level. Set to A1

「トオル・フローリアン、ランスロットガンダム!」

「シュテル・T・グランツ、ガンダムX・ズイーガ…」

「カンザキ・シロウ、武者真亜主頑駄無」

「ディアーチエ・ヤガミ、我が半身。アルジェント・ノワール」

1 Battle・Star1

「いくぞ! / …いきます」

「参る! / ひれふさしてみせようぞ!!」

四人の掛け声とバトル開始のアナウンスが重なり、四機のガンプラがラクロア城の空へと飛翔した

若き翼たち! 《前編》

了

《後編に続く!!》

第十四話（裏） とある乙女座の少女《HENTAI》  
の秘め事……寸止め!?! new!!

まだ陽も上がらぬ朝…微かに変わりつつある空

「……………」

アキツキ・タカヤの眠る自室の扉が静かに開く…現れたのは腰まで伸びた黒髪、白地の寝衣姿の少女《テンドウ・ミカヤ》は慣れたようにベッドに潜り込み深く深呼吸…まるで味わうかのように息を吐いてはすうを繰り返し熱の隠った瞳をみせた

「少ね……………タツくん……………あいかわらず誘ってるのかな?」

「んにゅ……………ん」

「……………ふふ、ここも立派だね…いつもみたいに鎮めてあげる…タツ君だけのカヤお姉ちゃんが…」

ゆっくりと手を伸ばし触れる…マグマのように熱く脈打つソレを握り、眠り続ける少年の手を自身の誰も触れさせた事の無い溢れるソコへ導いた

第十四話（裏） とある乙女座の少女《HENTAI》の秘め事…寸止め!?!

「……………んっ……………っ…はぁ」

タツ君の指がわたしの一番敏感なコリツとした部分に触れただけで果てそうになる…切なくなつて溢れてくる

ユウキ叔父様、メイ叔母様から合鍵を貰って数日。ノーヴェとレヴィが起こしに来るまでの一時間は二人だけの時間だ。

まだ記憶を無くす前のタツ君と一緒に湯浴みした時だけ見せ合っ  
た…クパアツて沢山広げられて間近でスゴく見られて触られて…  
何度か鯨吹きしてしまった

もちろん。タツ君のお返しにしたけど…キレイにしないといけ  
ないと思つて？いたら、泣いてしまつて、あわてて夜に母が父にする  
ように何度か舌でして泣き止んでくれた

こうして触れてると、あの頃《若筍》とは違つて傘が張つて太い…  
親指が鈴？に触れると滑るとタツ君の指が奥に入つてきた

「ツ、ん…ハア、ハア…」

ダメだ…指では…出来るならばタツ君ので破られながら納刀さ  
れたい…

上下する度に息があらくなつてきてる

「うっー！」

天瞳流閨帳に書かれていた作法は効果は抜群だと実践してわかる  
…膨らんでビクツて震えて熱いのが指に絡みついでる…ゆっくりと  
手を抜くとタツ君の濃厚な匂い、白いのが見えた

「…コレがタツ君の…スゴく熱いんだね」

指先を合わせ離して、糸を引くソレを含む…不思議な風味が広  
がつてく。でも嫌じゃない

「ん。ちゅ…ちゅる…ん…」

堪能しながら嚙下する…タツ君の味に酔いしれてしまう…いつも  
ならば屑入れから集めたのを使うけど、こうして直は初めてだ

もつと味わいたい…でも、今のタツ君とは深い仲では無い。でも

ノーヴェヤレヴィに譲るなんて気は無いし諦めるつもりはない。

「そろそろ来るかな…タツ君、また今度だね…」

名残惜しいけど、今日はココまでにしよう。後始末をしてから寝衣を整えてタツ君の頭を膝に乗せて。髪をすくように撫でる

いつもこうすると目を覚ましてくれる。メイ叔母様も知らない起こし方…あの日の思い出が溢れ出して、涙が出てくる

もう、あの頃のタツ君には会えない…でも…

「ん……………また……………夢」

「……………やっとお目覚めかな？寝ぼすけ少年」

「ん……………!?ミ、ミ、ミカヤ先輩イイイ!?」

「んっ……………少年、流石にコレは早いんじゃないかな?ど」

「ご、ご、ご、ごめんなさい!ミカヤ先輩!!い、いきなりで…あ、あの……………」

「べつにいいさ(ふふ、今ベッドに押し倒されるなんて今までなかったよ。今日の主菜はコレで決まりだ)…ソレより身体は回復したみたいだね」

こうして一緒にいられて、あの誘拐された日から灰色だった私の日常は彩りを取り戻したんだ

今のタツ君と一緒に歩んでいこう…

そう決意した矢先に彼が…ガンプラゲルマン流《タツミ・キョウジ》が現れた

記憶を無くす前のタツ君と同じ技を使った彼は…まさか…………

第十四話（裏） とある乙女座の少女《HENTAI》の秘め事……  
寸止め!?

了



## 第十四話 若き翼達!! 《後編》☆NEW!!

古くも歴史を感じる石造り巨大な城《ラクロア城》、その遙か上に広がる蒼く澄み切った空を四つの光が煌めく

濃紺に塗られたガンダムX・ズイーガ、白地に金の塗装のV2ガンダムのカスタム機《ランスロットガンダム》、真紅の装甲の和鎧に身を包んだSDガンダム《武者真亜主頑駄無》、堕天使を思わせる翼と十字架槍を手にしたWガンダム改造機アルジエントノワールの姿

アルジエントノワールの翼が正面せり出し、開放式バレルから撃たれた極太のビームがランスロットガンダムを飲み込もうと迫る。しかし四つの影が現れ光楯を展開、吸収し消え。無傷のランスロットガンダム、そのとなりに控えるようにズイーガに四つの影…ビットMA《ハーゼ・フェミリエール》が両腕、両脚脹ら脛側面にドッキングと同時にウインドウが開いた

「大丈夫ですかトオル?」

「さんきゅ。シユテル…つうかアレ、バスターライフルだよな?」

「ええ、さすがは私たちチーム紫天のリーダー…ディアーチェ・ヤガミです…」

「…ええ!?シユテルってあの《…》チーム紫天のメンバーなのか?」

「…はい、わたしとレヴィ・テストアロッサ、目の前にいるディアーチェ・ヤガミ、三人からなるチームです…ごめんなさいトオル、いままで黙ってて」

「まあ、シユテルが《紫天》のメンバーって驚いたけど…気にするなよ。今はオレのペアだろ」

オレの言葉に俯いていたシュテルがガバって顔をあげた。な、なんか顔真つ赤なんだけど、それに目の奥にハートが見えた気が？

「そうですね。では勝ちましょう……わたしとトオルの幸せのためには！！」

「お、おう……」

なんかスゴい気合入ってる……でもなんか背中にスゴい視線を感じる……恐る恐る振り返った

「……………イイナア……」

……な、なにも見てない……スゴく光がない瞳で笑顔を向けてくるヴィオを

「……ワタシニモイツテホシイナアアア……」

観客席から離れてるのに、ヴィヴィオの声が聞こえてくる……な、なにかやったのオレ!?

「さあ、ハーゼ・フェミリエール。幸せを掴みにいきなさい!!」

シュテルの声で我に変える、多機能小型MA《ハーゼフェリミエール》が飛翔し、陣形を取っていく。い、今はバトル中だ……集中しないと。スロットを変更して可変式ビームライフル《ヴァリス》を構えた

第十四話 若き翼達!!

「くくく。やるではないか流星は星光のシュテルよ」

そう口にしなから我は十字架槍《シユベルトクロイツ》の基部からカートリッジを排狭。新たなカートリッジを差し入れた

「なあ、ディアーチエ。もしかして知り合いか？」

「そうだ。我の仲間：チーム《紫天》の一人、シユテル・T・グランツ：使うガンプラはガンダムX・ズイーガ。防御と火力はチーム一、しばらく見ないウチにさらにカスタムしておく」

「ああ、しかもあのビットMAのバリアー、ディアーチエの粒子ビームを防いだ、いや…」

「吸収したのだろうか。こちらのやり方は熟知しておるからタチが悪い…だが我とシユロウならば勝機はある」

シユロウと話しながらも遠距離からのビームをアームレイカーを傾け減速、加速、旋回しながらかわしているがかなり正確に狙っておる…まあ、シユテルは我らのガンプラの癖とバトルスタイルを知り尽くしてるから仕方ない

しかしなシユテル、お前もカスタムしたように我のもまだ切り札が

：

「ディアーチエ！油断は禁物だぜ!!」

「む、すまんないシユロウ。では一気に駆け抜けようぞ!!」

我が背を護るように紅の巨槍を奮い襲いかかりビーム。ミサイルを弾き、切り払う武者・真亜主頑駄無《ムシャ・マーズガンダム》を操るシユロウと共にバーニアを最大スロットまであげ飛翔、モニターに2機の姿。オレは真つ先に小型MSビットを使うガンダムX・ズイーガの火線をかき繰り渾身の真亜主斬刃で逆袈裟で胴を薙ごうとした。でも側面から伸びたビームの刃に防がれた。

「トオル!？」

「シユテルはやらせねえぞ！武者頑駄無!!（なんて踏み込みの速さだ！それにSDにしちゃ攻撃が重い!!）」

「…やるな！でもオレの武者真亜主頑駄無は負けるつもりないぜ!!（なんて速さだ、よく見ると相当作り込んでやがる!!）」

「ビームと刃を数度撃ちぶつける、コイツは強い…背後からの熱源反応が来ている…しまった、ペアマッチだつてコトを忘れ…」

「シエロウ!!」

背後からのビームを無数の黒い羽根が吸収して霧散した…ツインアイを光らせ腕を組んだアルジェントノワールに紫の翼が展開する……な。なんだアレ？

「ダイアーチェ、完成させてたんですね…《紫天の翼》を…」

「まさか、私の翼を披露するコトになろうとはな…シエロウ、シユテルの相手は我にまかせよ…久しぶりにやりあおうとしようではないか」

「ええ、久しぶりに…ふふふ、こうして闘うのはチームに勧誘された時以来ですね…トオル、彼の相手をお願いします…」

相手の声に応えるようシユテルが冷静な瞳に燃えさかる炎を見た。あの二人の戦いに水を差すわけにはいかないな。オレは刃を構える武者頑駄無使いヘビームソード《アロンダイト》を向け構え一気に加速し斬りつける

でも、分厚い刃で受け流していく…それにビームコーティングがされてるってわかる。バルカン、手甲部ビームガンで狙うけど分厚い刃を正面に構えて楯がわりにして急加速してきた

「おおお!!」

「く、くう……うわ!？」

アームレイカー越しに激しい揺れと衝撃、踏みとどまろうとスラストー全開にする…相手も負けずに推力を上げて、一気に押しかえされた

後ろを見るとそびえ立つラクロア城…目に入った瞬間、激しい衝撃がモニターを揺らした…壁を貫きながらラクロア城の最下層に打ち付けられるように吹き飛ばされた

「く、くそ……なんつうバカ加速だ…」

砕けた石畳を払いのけ機体を起こすけどランスロットガンダムのコンデイションがオレンジに切り替わっている、各間接にもダメージ警告が出てる

「……ホントはこんな状態で使うのはマズいんだけど、やるしかないか……行くぞランスロットガンダム!!」

アームレイカーを素早く切り替え、迷わずSPスロットを選択する…ランスロットガンダムの切り札を今、解き放つてやる

「……やったか?…」

もくもくと土煙がたちのぼる半壊したラクロア城上空で待機している、まだ撃破表示が出ていないし

上空にモニターを切り替えると光の軌跡が幾つも見えた…遠目からみてもディアーチェ、たしかシユテルさん?は互いの力が拮抗しているなど思った時、僅かな衝撃と風が起きた

「な、なんだ!？」

ダメージ表示を見ると右腕にレッドアラートが現れている…モニターには右腕装甲が無残に碎かれ切り裂かれている…全神経を集中する、なにかがくる

とつさにアームレイカーで機体を右旋回運動する俺の真亜主頑駄無の目に見えたのは光の翼…いやビームの刃を翼に変え分身したように加速するランスロットガンダム

「く、外した!!」

「ぶ、分身…:…している!？」

光の軌跡を残しながら分身しせまるランスロットガンダムに真亜主斬馬《マーズザンバー》で切り払った。手応えもない…まさか質量を持った残像か!

「コレがオレがシユテルとの特訓で生み出した《M・E・P・Eナイト・オブ・ラウンズ》だ!!」

「ま、また質量を持った分身!?!くう!!」

十二体のランスロットガンダムが迫る…しかも、ビームとサーベル、ミサイルが追尾し爆発する度にダメージ警告が鳴り響く…肌がピリピリしてくる。アメリカでサツキー先生、狂四郎先生、グレコさんとバトルして以来か…

日本に来て久しぶりの強敵…相手も全てを出し尽くして挑んできているならば、俺も本気を出さないと失礼だ!!

だよな真亜主頑駄無!! S P スロットにあわせた瞬間、ミサイルとビームの閃光がモニターを染め上げた

「…やったのか？」

M E P E 《ナイト・オブ・ラウンズ》を解除し爆発の中心部に目をむける…ランスロットガンダムのベースになったVシリーズはサナリイ系の血が受け継がれていると聞いて、もしかしたらと思って塗装を何層かパールと粒子変容塗料に混ぜたらF-91同様に最大稼働時に起きるM E P E現象を再現できた必殺技…シユテルに見せたらスゴく驚いてたのを覚えている

ホントは最期までとって置くつもりだったんだけどな…あの爆発じゃ間違いなく撃破出来たはず…ゆっくりと煙りが晴れかけた時、紅蓮の炎が爆ぜるようにあふれ出てきた！なんだアレは？

炎が晴れ見えたのはSDじゃない…真紅の巨大な卵？に気を取られた時、通信が入った

「まさか質量を持った残像を使うなんて驚いたぜ！日本にはスツゴいファイターがいるってマジだったんだな…だから俺も本気でいくぜ！…コレが真亜主頑駄無の真の姿だ！烈火爆凰・真亜主頑駄無！！」

卵内から溢れ出した炎から、さつきまでとは違うガンプラ…いやよく見るとSDだったはずの真亜主頑駄無がリアル頭身になって斬馬刀を構えている姿…背中からは炎が翼のように揺らめかせ立つ姿に思わず見入ってしまったけど、気を取り直して再びM E P E 《ナイト・オブ・ラウンズ》を展開、迫る…相手は本気で戦いに挑んでくる。ならばファイターとして全てを出し切り勝負するのみ！！

「M・E・P・Eか、ならば！コレならどうだ！！真亜主斬馬！全っ

力っ…………開放っ!!」

ギンッと緑色のツインアイが耀く…手にした真亜主斬馬の中心が左右に開くと同時に紅蓮の炎が分厚く幅広い長身の刃を形成、一気に加速し迫ってくる。でも大振りの一撃じゃ…

「真亜主流・極・扇・斬!!」

極厚の炎の刃が膨張、巨大なフライパンに変わった!? 肌が粟立つ、無意識にアームレイカーを操作、下方に最大加速する。残された残像が炎に飲み込まれた塵になった

装甲に塗られた塗料が剥離してく…あんなの喰らったらひとたまりもない。それに二度のE・M・E・Pで粒子残量がヤバいけど、いま、スゴく楽しい…ランスロットガンダム、もう少し付き合ってくれ

「今のを躲すなんて、やるな!…オレはシロウ・カンザキだ。おまえは？」

「トオル・フローリアンだ、あんなバカげた方法で破るなんてさ…スゴいな」

「トオル、もう粒子残量が無いだろ？」

「う、気付いてたか……」

「いや、実はオレもさ…だからさ、シンプルに決着つけようぜ」

シロウの真亜主頑駄無が斬馬刀を手放したのを見て、俺もランスロットガンダムのサーベル、ライフルを手放す。互いに首と拳を鳴らし向き合う。ちょうどラクロア城近くにある闘技場にいるし、絶好の



シチュエーションだ

「んじゃ、行くぞー！」

「おおー！」

互いに踏み込みと同時に地をける、大振りに構えた拳が顔面に突き刺さる、同時に真亜主頑駄無の拳が胴に突き刺さって《くの字》に曲がり軋む音が筐体に響くのを耳にしながら、なんとか踏ん張るけどかなり効いた

「いい拳だ！セイヤア!!」

「そつちもな！オラア!!」

ローキック、ハイキック、裏拳、正拳：ただひたすら殴り、蹴り合う：互いの大技を出し粒子残量がつきかけたランスロットガンダム、真亜主頑駄無のバトルに観客席にいるヴィヴィオ、メガーヌは息をのんで見守るしかなかった

一方で、上空での戦いにも決着の時が迫っていた

「やりおるなシュテル。あの頃よりも腕をあげたみだいな」

「アナタもです：ディアーチエ」

トオルにディアーチエのペアをまかせて20分が過ぎました：ワタシの使い魔ハーゼの連携をいなし、反撃に転じるも防がれながら互いの機体はダメージが蓄積してるのがハッキリわかります

流星はワタシたちのリーダー。ビルダー、ファイターとしての技量は全国、もしくは世界でも通じると久しぶりのバトルで痛感しながらハーゼ達を戻します

粒子残量はまだ余裕、絶えず周囲の粒子を収束しているので問題は  
ありません

トオルのことが心配です。でも今はバトルに集中をと考えながら  
ハーゼを再び展開します。残り時間は5分強…ならば仕掛けるなら  
ば今です！

「行きなさいハーゼ……ブラスター3!!」

「またも同じビット攻撃か……我を楽しませ……な、なに?! 機体が!!」

ワタシの使い魔…ハーゼの瞳が緑から赤へ変わる。ハーゼ《ブラス  
ター・ブラスターモード》…ズイーガの新しい機能、デИАーチエの  
アルジエントノワールの周囲に飛翔、新たに装備した粒子共振フィ  
ールドが展開拘束していくのをみながらルシフェリオンを構えます…  
2基のハーゼが砲口正面にパワーゲート展開、粒子を収束していきま  
す

「く、まさか粒子共振フィールドか……ぬかたったわ……」

「コレで終わりです……コレがワタシのの新しい力……疾れ明星、  
全てを焼き消す炎となれ! 真・ルシフェリオン……ブレイカー!」

全てを焼き尽くす閃光がパワーゲートを抜け更に極大のビームへ  
変換、まっすぐ空を灼くように突き進み拘束されたアルジエントノ  
ワールへ直撃、爆発するのを見届けながら、ルシフェリオンを見ると  
溶解している…まだ補強が足りなかったみたいです

トオルが心配です…背をむけた時でした

「…シユテルよ、勝利を確信するのはまだ早計ぞ?」

突然響いた声に振り返ったワタシの目に映ったのは。片方の半壊した翼を広げるアルジェントノワール：一体どうやって脱出を？

「どうやって脱出したか気になるみたいだな……簡単なコトよ。我の破壊の閃光で粒子共振フィールド境界面を相殺したのだ」

「ま、まさか、そんな方法で……」

「まあ、脱出の瞬間に少しダメージを貰ったが……まだまだ戦えるぞ？」

バチバチと片翼から火花を散らしながらシユベルトクロイツを構える：デイアーチェの不適笑みを浮かべる姿が見えます。ハーゼは2基失いルシフェリオンは半壊してますが一発ならまだ！

「くくく、その意気やよし。あの頃と変わらぬ目よ……だがな忘れておらぬか？我にはまだ剣があることを!!」

「……は、まさか……」

漆黒の羽根が舞っている：アルジェントノワールの周りに浮遊している：シユベルトクロイツをゆっくりと空に掲げる姿に、残されたハーゼ、ルシフェリオンを構えた

「紫天に吠えよ、我が鼓動！出でよ巨獣！ジャガーノート!!」

ふわりと舞う紫翼が粒子ビームへ変換、紫色の閃光へ変わりガンダムX・ズイーガへ襲いかかる：ルシフェリオン。ハーゼをビームが噛み砕くように溶かしていく……ああ、やっぱり勝てませんね

紫より黒に近い閃光に飲まれながら負けを確信しました……でも満足していました

「シュテルよ、見事であったぞ。次はレヴィと共に世界を目指そうぞ」

その言葉と同時に筐体から光が消えました。同時に歓声が沸き上がりました…一体なにが？おもわず目をむけた先には

『おおお!!』

『ヌギギ!』

互いの武器を放り投げて、殴り蹴り合うランスロットガンダム、真亜主頑駄無の姿…残り時間は1分しかありません

引き分けになったとしても、ワタシたちの負けは確定なのになぜ？

「なぜかわからぬようだなシュテル？」

「デ、ディアーチェ？わかるんですか？」

「私の伴侶とシュテルのつれあいの顔をみるのだ、あんなに楽しそうに全力バトルしておる…勝ち負けが決まろうと関係ない…つたく心配して損したわ…でも私の心を激しく揺らしておる」

「ええ…でも…トオル！負けないでください!!」

「ぬ、勝敗は関係ないといったはずだが…シエロウ！我がついておるぞ!!」

「トオルくん、ガンバレ!!」

「トオル、ファイトだよ」

シユテル、デИАーチエ、ヴィヴィオ、メガーヌの応援が届いたのか、二人の戦いは激しさを増していく…互いのマニピュレータは潰れ、ニーアーマー、フロントアーマーも損壊、関節も悲鳴をあげる倒れた。しかしふらりと立ち上がる

「はあ、はあ…おおお！」

「っ、はあ…つらアアア!!」

ランスロットガンダム、真亜主頑駄無の渾身のストレートが顔面に突き刺さる…マニピュレータが完全に吹き飛び、亀裂が走りは弾けたと同時にアナウンスが響いた

B a t t l e ・ E n d e d !!

「し、勝者！チーム・シユベルトリッター、デИАーチエ、シロウペアの勝利です!!」

勝者を告げるサエグサ模型店店長ミツキのやや興奮したアナウンスが響き、大歓声が沸き上がる中、筐体からトオル、シロウが汗だくになりながら出てきて互いに向きあった

「いいバトルだったぜ」

「そっちこそ、ナイスファイトだ」

トオルと彼が互いに握手して、ワタシのところにきました…

「ゴメン、負けちゃった…」

「いいんです。ワタシも負けましたから…でも久しぶりに全力を出

し切れました」

「じゃ、反省会やろ「トオル、じゃ私の家でやらない翠屋ならまだやってるから」…え、ヴィヴィオいつの間？」

「…さつきからいゝまくしくた。ソレよりスゴい汗、吹いてあげる」

「ち、ちよヴィヴィオ!？」

「ママもトオルパパの汗を…ワタシの教えた通りに」

「え？わ、わかったわ…トオルくん、ワタシも…ん」

「メ、メガーヌさん？なんで舐めるの！ってシユテルもなんで一緒にいや、首筋はやめて!?!…ココじゃマズいから!?!」

「ヤレヤレ、シユテルも変わったか…恋は盲目と言うが…」

「シユテル、ガンプラはケースに入れておいたから、家に帰ったら修理しようぜ」

「無論だ、今宵も朝までになりそうだ…共に暁を眺めるとしようぞ」

「はは、そうだな…やり過ぎたかな」

『今日の試合はコレで終了になります。そして明日からいよいよベストフォー同士のバトルになります…それぞれの組み合わせは明日の午前10:00より行います!では、明日も熱いバトルをご期待ください』

こうして、大会初日は無事に終わりました…負けはしましたが互い

に得るものがたくさんありました

このあと、翠屋で反省会も兼ねた食事会になりました…でも、あんな事になるなんて…何があったかは恥ずかしくていえません

でも少しだけ…トオルって逞しいんです



―◆◆▽§♪◎く§。つかれたかい？―

―うん…今日の◎鍊、◆瞳のお●◇ん…師④きびしかったね。◎やね④ち6んは？―

―へいきさ。ガン×★○☒☒の後×♪だからね…ほらおいで―

まただ、最近たまに変な夢をみる…今日は道場みたいな場所で誰かと話してる…いつもみたいに女の子の顔は見えない、声もノイズ混じってる

でも。なんでかわからないけどスゴく懐かしい気がする。女の子の膝に頭を預けて横になる…手が頬に触れた  
柔らかくてなんか気持ちいい…

―さあ、天▽☒女枕でゆっくりおやすみ…―

スゴく優しい声が眠りを誘ってくるのを堪え少し重い瞼を開けた、女の子の顔が少しだけ見えた気がした。なんだろうなんか冷たいのが

落ちてくる

「ん……………また……………夢」

「……………やっとお目覚めかな？寝ぼすけ少年」

「ん……………!?ミ、ミ、ミカヤ先輩イイイイ!」

ぼうつとした頭が一気に目覚めた。膝枕されてるってわかった。あわてて起き上がるうとしたのがいけなかったのか体勢が崩れた…

「んっ……………少年、流石にコレは早いんじや無いかな?」

「え?」

僕がみたのははだけた寝衣から溢れ、たゆんと微かに動く豊かな胸：ソレを鷲掴みしてて、少しだけ潤んだ瞳で見上げるミカヤ先輩：あわてて離れて思いつきり背をむけた

「ご、ご、ご、ごめんさい！ミカヤ先輩!!い、いきなりで…あ、あの……………」

「べつにいいさ(ふふ、今ベッドに押し倒されるなんて今までなかったよ。今日の主菜はコレで決まりだ)：ソレより身体は回復したみたいだね」

「あ、はい……………」

「じゃあ、早くした方がいいノーヴェとレヴィが朝餉を用意しているから、今日はベストフォー同士の組み合わせ抽選会だからね」



「え、ベストフォー決まったんですか？」

「ああ、でもあまり時間が無いから行きすぎりに話すよ…さあ行こう」

部屋を掃除するからとミカヤ先輩に促されてリビングに向かった…ベストフォー決まったんだ。誰が相手になるだろうと気になるけど…でも、ミカヤ先輩。なんで目の周りが赤かったんだろう？

「タカタカ、グ〜テンモ〜ゲン♪よく眠れた？」

「あ、おはよタカヤ。コーヒーで良かったか？」

「うん、ノーヴェさん、レヴィ、おはよう」

笑顔で挨拶するレヴィとなんかドキマギして挨拶するノーヴェさんと一緒に食卓を囲んで朝食をとる。トーストにベーコン、スクランブルエッグを挟んで食べる…こんがり風味パン生地とスクランブルエッグ、ベーコンが美味しい。ついおかわりしてしまったけど僕が食べるのを嬉しそうに二人がみてた

「タカタカ、スクランブルエッグはボクとノンノンが作ったんだ〜スゴいよね。本当はソーセージにしたかったんだけどベーコンにしてみただ〜どう？美味しい？」

「なあ、スクランブルエッグさ、ア、アタシが作ったんだ（コレしか作れないし…でもいつかは）」

「え、うん、二人ともスゴく美味しいよ」

「そ、そうか！だ、だったら良かった。うん（やった！美味しいっていつてくれた）」

「ホント。ねえねえ、じゃあボクが料理を毎日作りに来ていい？」

話をしながら食べて、ふと時間を見た……09:10、抽選選考会は10:00だと気付いて慌てて準備する。ガンブラと選手票は持った。ミカヤ先輩も慌てて来てくれたけどなんかツヤツヤしていたのは気のせいかな

「い、行つてきますー!」

扉を閉めマンションを出た。とにかく急がないと……レヴィ、ノーヴェさんと一緒にかけた……今から電車に乗れば間に合う距離だ。素早く改札を抜け電車に乗り込み15分、手早く降り改札へ向かう。人の動きも疎らで少し駆け足でむかう

改札を抜け、青信号を渡ろうとした時だった……すごい速さでバイクが僕とミカヤ先輩達に向け突っ込んできた……

「危ない!レヴィ、ノーヴェさん、ミカヤ先輩!!」

三人を歩道に押した……勢い余つてミカヤ先輩と僕のガンブラが入ったケースが宙を舞いアスファルトに乾いた音と一緒に落ちた……バイクはケースを擦るように走り去っていった

「タカヤ!大丈夫か?」

「タカタカ、ケガしてないよね?」

「なんて無茶をするんだキミは……もし何があつたら……」

「……ごめん……でもみんなケガしてないよね」

「アタシは無事だ……レヴィもミカヤも……ん、ミカヤ、どうした」

よかった……でもミカヤ先輩の様子がおかしい。手にしたケースを開けて膝をついてるのを見て、駆け寄りみたのはほぼ無傷のツクヨミ斬、でも専用武器の晴嵐が鞘ごと真ん中から折れていた



ヤスリがけ、塗装、仕上げが進んでいく。恐ろしく正確に丁寧に加工されていく様に魅入られました…

『……………ハア!!』

眩い光が消え、変わりに彼の手には寸分違わない晴嵐の姿。それを僕に手渡した…

「あ、あの…コレは」

『……………今の技、覚えたな……………』

「……………待てよ！いきなり現れて…他人のガンプラ直して何様のつもりだよ！仮面を外せよ」

「そうだ、そうだ！仮面ぐらい外したらどう？シユヴァルツヴルーダじゃないんだし…」

『……………オレの名はタツミ、ガンプラゲルマン流のタツミ・キョウジ…いつかまた会おう…』

ソレだけ言うとおつというまに姿が消えた…ガンプラゲルマン流？タツミ・キョウジ…あんな高等テクニック、一体何なんだ…でも、直してくれたからいい人なのかな。今は会場に急がないと

「ミカヤ先輩、どうしたんですか？ミカヤ先輩？」

「え、ああ…なんでも無いよ…とにかく会場に急ごうか」

「はい、じゃ行きましょうか、ほら」

「ち、ちよ少年？手、手、手が!？」

へたり込んだミカヤ先輩の手を握り会場に走り出した…抽選選考

会まであと五分、急がなきゃ……僕は試合のことと彼《タツミ・キヨウジ》さん？がみせたビルダーテクニクだけしか頭になくて、ミカヤ先輩の様子がおかしいことに気づけなかった

(……………あ、あの技は………タツ君は今、私の手を握りしめてるのに、あり得ない……だってあの技は………)

ーカヤお姉ちゃん、見て見て、ぼく新しい技を作ったんだ……………ハアアアアアア、ハアツ！ー

誘拐される一週間前にみせてくれた技……二代目メイジンカワグチの……血の繋がりが為した技

ーなづけて、高速作成術！スゴいでしょ♪ー

ソレに私の晴嵐の作り方を知っているのはタツ君だけ……………なんで彼が知っているんだ!?

## 第十五話 悪夢―鬼の血脈―（挿絵ガンプラあり）

『さあ、皆様。サエグサ模型店主権大会も二日目になりましたが……先日のバトルロワイヤルでベスト4進出チームが揃いました!!』

サエグサ模型店の店長ミツキ・サエグサの声と共にライトアップされた

激戦を繰り広げ、勝ち残ってきたビルドファイター達。チーム・シュヴァルツ、チーム・シユベルトリッター、チーム・クライ、の面々に歓声をあげる……が一組足りない

『……おや？チーム・ブレイドのタカヤ選手、ミカヤ選手の姿がないわ』『すいません！遅れました!!』おおっと！チーム・ブレイド今、到着!!』

ミツキの声が響く中、タカヤとミカヤが滑り込みセーフで空いていた列に並ぶ……しっかりと手を指を絡めるような形で握り肩で息を切る二人をみた観客から黄色い歓声と笑い声上がる

ーミカちゃんと私のタカヤが恋人、恋人つなぎ!?!いつの間に？神前結婚式をと白無垢を用意しなきゃ……ミカちゃんなら安心だしー

ーメイ、少し落ちついて……見る感じ記憶は戻ってないし……でも懐かしいかも……ミカちゃんと手を繋いで何時も一緒だったね……

とか

ーむ、日本人の男女交際とはドイツよりも進んでいるのか!?!シエロウと我の手も重ねてみよう……ふふふー

ーうわー二人ともマジのペアなのか……手強い相手になりそうだ

ぜー

とかとか

ーミカヤんズル〜イ！ボクだつて繋いだことないのにくなら、お母さん直伝の《おっ〇いうおっしゅ》の最上位技《モミジ崩し》するもんねー

ーべ。べつにいいし…あんなことあつたばかりだし…でもいいな…：今回だけだかんミカヤー

等々と様々な思惑と視線を向けるなか、一人だけ違った…

ー来やがったか…：さあ最高のバトルにしようぜ。一生忘れられないなあ？…さて仕込みは充分、どうでるT A―23?ー

まとわりつくような悪意の眼差しをタカヤへと向けるアマミ・イツキ…またの名を宇宙ガンプラファイターXの口角がつり上げるよう歪に歪ませていた

#### 第十五話 悪夢ー鬼の血脈ー

『さあ、まずは組み合わせ抽選会を始めます。それぞれのチームは前へどうぞ〜』

ミツキ店長に促され僕とミカヤ先輩が壇上に上がる。どうやって抽選するんだろと考えた時、目の前に大きなガチャガチャがせり出てきた

『抽選はそれぞれのチームが抽選ガチャを回して出た数字で組合せが

決まるの。どのチームと当たるかは運次第、じゃその前に今回のガチャガールを紹介しま〜す♪』

ライトが消え照らされた先にいたのは二人の女の子…え？

「ジャジャーン♪強くて速くてカッコいいビルドガール・レヴィー！参上!!」

「ビ、ビルドガール…：ノーヴェ…：（スカートの丈、短すぎだろコレ!?!）」

恥ずかしそうにザフトの女性用軍服姿（色は赤、黒のオーバーニーにフリースカート）のノーヴェさん、スク水に白いフレアスカート、マント姿のレヴィが元気いっぱいライトに照らされて挨拶してる

観客席をいる二人が何でここにいるのさ!?! 悩む僕に気づいたのかステージからジャンプしながら笑顔で、ノーヴェさんも俯かせながらチラチラ見てる…レヴィ、あんまり飛んだらダメだから！見えるからね!! 縞々が縞々がああ!!

（おい、姉貴。こんなの予定に無かっただろ?）

（いいじゃない。大会を盛り上げる為に。少しぐらい花があったほうがいいわよ♪ソレにあの衣装は現役時代のクイントさんとプレシアさんのバトルコスチュームだし）

（はあ〜? て言うかあの二人もグルだったのかよ!?!）

（だって〜クイントさんとプレシアさんったらね、タカヤくんとくっつけたがってるのよ。だから私も協力したいな〜と思ってね）

（はあ〜わかったよ……）



う、なんかミツキ店長とユウさんの声が聞こえた気がする!?

「じゃあ各チームはガチャの前に来たわね〜いくわよビルドガール!!」

「んじや、いくよノンノン!!」

「ノンノンじゃない!と、とにかく…いくからな!」

「せえええええの…ガチャ!いきまあああす!!」

かけ声と一緒にガチャのつまみ…ハ口を模した部分に大きく振りかぶつてから拳が叩いた。前におかれたガチャガチャから丸い何か?が勢いよく飛び出す。他のチームのペアの人たちもパシツと手にする

『ハロ!ハロ!ツカマッタ、ツカマッタ!』

「ハ、ハロ?」

「少年、このハ口頭に数字が書いているね。4番?」

パタパタと羽を広げるハ口の額に《四》てかいてある。あのミカヤ先輩そろそろ手を離して…なんか二人の瞳からハイライトさんがお仕事して無いままジイツて見てるし!

「あの〜ミカヤ先輩?そろそろ手を…色々」

「え…あ、ああ!…迷惑だったね…タ…少年」

名残惜しそうに離れた…でもなんだろ。ずっと昔誰にこうして手

を握っていた気がする

ー……はなしたらだめだよ……@@☒んは。迷子になりやすいからー

まただ……ノイズまじりの声と顔が見えない女の子が過った。今までは夢でしか見なかったのに

「さて、組み合わせを発表します。まずは第一試合は《チーム・ブレイド》VS《チーム・クライ》、第二試合はチーム・シユヴァルツVSチーム・ロードにきまりね。じゃ第一試合は10分後に行います」

「はいはい、そういうと思ったよ姉貴……はあ今日はあの天災「スカリエッテイ所長」も来るんだからさ……」

「文句言わずにさっさとやる」

「へいへい」

……ミツキ店長とユウさんの声を聞きながら、僕はミカヤ先輩と控え室へ入るとGPベースとブレイドが入ったケースを手にし入場ゲートから会場へとはいる。観戦しているみんなの熱気、視線が集まる

非公式だけど初めての大会、そしてベスト4進出にドキドキしっぱなし……チラツと隣を見る。ミカヤ先輩は堂々としてる

全国大会本戦を勝ち抜いた実績もだけと凜としてて、なんか綺麗だって感じた僕の手を先輩が取った

「少年、このバトル……一緒に勝ちにいこよ」

「は、はいー」

「ふふ、いい返事だ…（ああ、照れちゃって可愛いなあタツくんはあくこの繋いだ手に誓おう。必ず勝つと…そしてカレトヴルツフを手に入れたら次は全国大会予選だ。そしたら私の部の強化合宿に参加して貰って昼間はバトルで汗を流して夜は…夜は…ふふ、ふふふふふふ…その猛るタツくんの剛刀を私の破りながら柄刀して契りを…その為には勝たないとね）…さあ、いこう！」

ミカヤ先輩と一緒に六角形筐体前に来るとブレイド、ブレイドのデータが入ったGPベースをセットした。向かって反対側を見ると対戦相手のチーム・クライの姿。もうすでにセットは終わっているみたいだ

並べ置かれた二体…一体はプルトローネをベースにしたガンプラだけど完全にマントで隠してる方はわからない。

なんでかわからないけど…あのガンプラをボクは知ってる気がする…いや、今はバトルに集中、集中！軽く頬を叩いた

l Press set your GP Base、Press  
set your GUNPLA

プラススキー粒子が溢れ出す中、バトルコスチュームがセットアップ…ボロボロの赤いマフラーとコート姿にみたことの無いサングラス、ミカヤ先輩は何時もの戦巫女装束だ…でも僕をみて固まってる

「ミカヤ先輩？僕のこの格好変ですか？」

「い、いや似合ってるよ」

Beginning「Plavsky Particle」dispersal fieldIng. select. Extra  
!

プラフスキー粒子がバトルフィールド形成、見えたのは無数のガン  
プラが朽ち果て乱立した不思議な輝きを持つクリスタルが大地から  
墓標のように生えている…

『おお！今大会始まって以来のExtra stageよおお！実はこ  
のステージはある方の協力で実装が出来たの…では紹介するわスカ  
リエッティ研究所所長《ゼイル・スカリエッティ》博士です！』

『いやすまないねミツキ店長…やあ、はじめまして私がゼイル・スカ  
リエッティだ。今回実装したExtra stageはバトルジャ  
ケットシステムを纏うビルダー、ファイターの深層意識を読み取るこ  
とで形成されたんだよ！…ただ意図して産みだすことは出来ないか  
ら安心して戦いたまえ……そうしないとクイント妹にまた怒られる…  
また怒られる、怒られる…』

『せ、説明ありがとうございます！(よっぽどクイントさんが怖いの  
ね)』

《fielding. setup……Battle Start》

フィールドが完全成形と同時にアームレイカーを握った。ブレイ  
ドとツクヨミ・斬のカメラアイに光が灯る

「秋月タカヤ！アストレイ・ブレイド！」

「天瞳ミカヤ、ツクヨミ・斬…」

「アインハルト・ストラトス…ガンダム・リイン」

「アマミ・イツキ……リュウジンオー……」

「「いきます！／参る／でます／……………」」

弾かれたようにカタパルトから撃ち出された…バトルフィールド上空を飛翔するブレイドとミカヤ先輩のツクヨミ・斬。辺りを警戒しながら見渡した時、接近警報と極太の粒子ビームが襲いかかる。けどもアームレイカーを引き回避した

「ミカヤ先輩！二時方向に接近する機影2！」

「こちらも捉えたよ…まさかこちらの位置を正確にとらえるなんてね……………来るよ！」

「はあっ！」

ミカヤ先輩のツクヨミ斬にチーム・クライのガンダムリインが迫るや否や蹴りを撃ち込んだのを見て、新しく生まれ変わった晴嵐で斬りつけ防ぐ

「なかなかやるね…でもまだまだ！」

タイミングを合わせるよう抜き放たれた刃と蹴りが拮抗、でもすぐに強く蹴り反動を利用して再び接近、フェイントを織り交ぜた拳打の嵐を刃に滑らせ躲しカウンターの一閃が胴を捉えるけど紙一重で避けてながら離れて…まさか僕とミカヤ先輩を分断するつもりだと気づいた

『…！』

「うわっ！」

ミカヤ先輩を追うのを遮るアラート、とつぎにアームレイカーを後ろへ引く…全身をマント？でかくしたガンプラが逆袈裟から斬りかかってきたのをかわし、僕もブレイドのアスカロンを横風ぎに奮う…鈍い音と衝撃が機体越しに伝わり見たのははだけた外套から見えた

腕に装備された深緑色の透き通った分厚い刃……

「………つてあけ……プラマ……ちや……を……も………ため……」

まただ、霞がかつたような声が頭に……ソレより、この武装は細部は違うけど僕のブレイド……アスカロンと同じ拵えだ。いやそれ以上に作り込まれて

『考え事か……アキツキタカヤ?』

「……」

アームレイカーを握る僕の躰がこわばる……接触回線越しに響いた声……その隙について切り払うようにアスカロンを押しつけ、強烈な蹴りを食らって地上に落ちていく速度を落とそうとするけど躰が動かない。そのまま背中から叩きつけられ全身に痛みが走る

「かは、う……う……あ」

アームレイカーを握り機体コンディションチェック、ダメージは軽微……でも体もだけど頭が錐をもみこむように痛むのをガマンしながらモニターをみる。ふわりと外套を靡かせ降り立つガンプラが地をけり再び斬りかかってくる。なんとかアスカロンを前に構えて防ぐ。一合、一合が重くて弾かれそうになりながら機体を立ち上げた

「く……重い……」

『へえ、防いだか………なら、コイツはどうだ?』

打ち付けるのをやめて。剣をまっすぐに構えアスカロンの基部めがけ突き立てた、なんの抵抗もなく切り払われバラバラと落ちていく……まさか

『どうだ、コレが合わせ目切りってヤツだ…接着か甘いぞ、オラオラどうした？アキツキ・タカヤ？守ってばかりか…ああ？』

「ぬ、ぐ…まだまだ！」

残るアスカロンの合わせ目に突き入れようとするのを避け、地を抉るように逆袈裟に斬りつけた…でも該当部分が深く切り裂いただけだ

再び斬りかかろうとした僕の手が石のように固まった…切り裂かれた外套がビリビリ破けて見えたもの、そして相手のファイターの声が体を縛り付けた

『やってくれたなあ…でも手間が省けたからいいか…懐かしいよなあ？』

黒く塗られた装甲と特徴的な赤いフレーム、息が粗くなって早鐘を打つように鼓動が高まり汗が止まらない。頭が痛い…イタイ…イタイ…

『このガンプラと会うのは四年ぶりだよな……なあ、泣いて答えろよ…もしかしてぶるってる？あは？アハハツ？あんなに楽しく笑って、薬キメテ幸せに作ってたのにさ』

笑い声と共に外套全てが破け見えたのは金色の龍角、バーニアを内蔵した両肩、膝と胸に埋め込まれた深緑色のクリアパーツ…そして龍の顎と巨大なブレードを両腕に装着したガンプラ…僕はシツテイル…アレは…アレは…！

『この顔を覚えてるよなあ。オレ、宇宙ガンプラファイターX様の為に作ったんだぜ……アストレイ・リユウジンオー龍刃皇をなあ!!』

「あ、あつ、うあああああああああああ！」

モニターを埋め尽くすように孤を描いた口をが目立つ仮面、シルクハットに叫んだ。残されたアスカロンか合わせ目ごと切り裂かれていく：がら空きになった胴を何度も斬りつけ、ニーブレードを使って関節を容赦なく穿つ、機体各部アラート表示音、激しい痛みが全身を駆け巡る

痛みと共にバラバラのピースが嵌まっていく。そうだボクが作ったんだ：：：第二回世界大会、ガンプラマフィア、たくさんのガンプラ、踏みつけ壊されていく

たくさん殴られて、蹴られて、変な薬を打たれて：：ガンプラを作らされた：

『楽しいよなあ〜秋月タカヤ〜タカヤく〜くん、返事できまちなんか〜ならば、声を出させてやんよ、オラオラ！オラオラ！！ほら元気よく声を出していこ〜ワン・ツー♪ワン・ツー♪』

「ツ！ガツ：：ギアッ」

アスカロンが180回転し、龍の顎へかわると膝蹴りでブレイドの体が浮き、胴と顔を殴り抜いていく：アンテナが半分折れ胸部クリスタルに亀裂が入る：アームレイカーを握る手から力が抜けていく：いや怖い、ボクは怖い：彼が宇宙ガンプラマフィアXに恐怖しているんだ。突然、攻撃がやんだ

『なあ、ガンプラバトルで勝つ為に必要なモノってなんだと思う？知らないだろうからさ〜教えてやるよ：：：相手の弱み、弱点を攻めて、攻めて、攻めまくるんだよ！さっき見せた合わせ目切りは最適な技なんだよ二代目メイジンも言ってたからなあ：勝利こそ絶対だ：だからこそガンプラを作らせたんだよ：：二代目メイジン・カワグチの妹の息子であるオマエに。オレが使うに相応しいガンプラをなあ？でもなあ』



「あ、ああつ……つ！」

龍の顎が開き頭を挟み持ち上げた……激しい痛みが襲う中、二代目メ  
イジン・カワグチ、ガンプラバトルは勝利こそ絶対……あんなに渋って  
いたボクが、なんで彼にガンプラを作ったかわからなかった。バラバ  
ラな記憶が痛みとともに鮮明になっていく……でもそんな暇も無くその  
まま半透明な水晶柱に叩きつけられた……意識が遠くなりアームレイ  
カーから手が離れ膝から崩れていく

『ああ……まんね。せつかくオマエの悲鳴をもつと聞きたくてお  
膳立てしたのがムダになったぜ……ま、聞こえてるか？もしも……？  
……気絶したか、んじや残りを潰しにいくか……』

残り……その言葉が意識を引っぱる……残り……まさか

『あの天瞳シヨタミカヤを潰せばオレの勝ちだ……そういや、だいぶ女らし  
くなくなったなあ。あの時ハイエースに攫わせてまわして仕込んで脂  
ぎったペド親父に売り飛ばさなくてよかった……安心しろよ。オマエ  
を攫ったって騙して差し出すように仕向けてたくさん味わってやる  
よ……大事なカヤお姉ちゃんをなあ？アハハッ』

……カヤ……

……お姉ちゃ……ん

……思い出した……ボクが……宇宙ガンプラファイターXにガンプ  
ラを作った理由は……許さない……気がついたら真つ暗な場所に  
ボクはいた

目の前には小さい頃にあった赤いマフラーとサングラスのあの人

がゆつくりと手を伸ばす姿。迷わずボクは手を握った…

—————  
—————

『さて、心は折れたか……な？なに！』

痛めつけるのを飽き手を離そうとした宇宙ガン普拉ファイターXの龍刃皇の腕が幽鬼のように手を添えたブレイド…軽く捻るように腕ごと地面へと叩きつけられた

『て、てめえ…ドコにそんな力が……っ!?!』

躰を起こした龍刃皇《リュウジンオー》、宇宙ガン普拉ファイターXの声が詰まる…全身が鳥肌たち冷や汗か流れた…目の前にいる満身創痕のブレイド、その躰から血よりも赤いプラフスキー粒子が濃密な殺気を浴びせかけていたからだ

「……ガン普拉バトルは絶対…見せてやろう宇宙ガン普拉ファイターX……我が信念を」

顔を俯かせアームレイカーを握る手が動く、ブレイドの姿が掻き消える…その姿をさがした時、背後に姿を見せ手刀が振り下ろされた。とっさにリュウジンで防いだ。しかし真ん中から真っ二つに切り裂かれた。紅ワタルより託された手甲パーツ中央部にあるクリスタルから溢れたプラフスキー粒子を纏わせている  
『な、ばかな！オレの、オレ様の龍刃《リュウジン》が！もう二度と立ち上がれないようにバラバラにしてやる！アキツキ・タカヤ!!』

残る龍刃リュウジンを粒子を纏わせる腕の合わせ目へ突き入れる…しかし突き刺さらないコトに啞然となる宇宙ガン普拉ファイターX

「……一つ教えよう。合わせ目切りばかり狙うからこうなる…」

『な！』

奮われた手刀が胴を掠め、後ろへ跳びかわしたのを見て淡々とタカヤ？は語り出した

「合わせ目切りは組み木細工のように加工し積層する事で対策が可能だ……所詮は小手先だけの技だ。さあ、教えよう……私が掲げるガンプラバトルの真髓を」

サングラスから底冷えするような眼差し、声に宇宙ガンプラファイターXは恐怖する彼は気づいていなかった

アキツギ・タカヤ 彼 二代目メイジーン・カワグチ の中に流れる鬼の血の系譜を目覚めさせたコトを

## 第十六話 再臨、影の刃！（―ブレイドハート―）

なんだろ…

「っ、このー！」

目の前にいるガンプラの刃を砕ける中で、僕じゃない誰かが体を動かしてる

「……接着が甘すぎる。結合部ジョイントを金属パーツで再現し用いることでクオリティを高める技巧は認めよう…」

「こ、この出来損ないが！もう一度刻んでやるよ！アキツキ・タカヤ！！」

「……………もはや言葉は不要……………バトルで示せ」

アキツキ…タカヤ…ソレがボクの名前？いや違う…なんでボクはこんな事を言ってるの？黒いガンプラ、ボクのブレイドと何度も斬りつけながら拳打、蹴りを織り交せてくるのをいなしていく

——…ガンプラバトルは勝利こそ絶対…誰であろうとを立ち直れぬよう折るべし…—

まただ、声が響く…でも凄く懐かしい。頭がスツキリして思いだした。ボクの目の前にいるのは《宇宙ガンプラファイターX》…

ボクの前でやめてって言っても、ガンプラを踏み潰した

毎日、毎日、ボクに痛いことを繰り返して、変な薬を飲ませて注射した

そして…ガンプラを作らなきゃカヤお姉ちゃんを誘拐するって笑

いながら脅してきた。赦せない…だつて

ボクだけのカヤお姉ちゃんに手を出そうとしたから。宇宙ガンブラ  
ファイターX…ボクが、いや。二代目メイジン<sup>我</sup>・カワグチ<sup>念</sup>を刻もう…  
ガンプラいやガンプラバトルを穢したその身にな

## 第十六話 再臨、

<sup>「フレイドハート」</sup>  
影の刃！

「くー！」

「ふっー！」

鈍い打撃、金属音が木霊しアームレイカーを強く握り逸らしかわす  
…なんて重い打撃だ。以前の愛刀《晴嵐》だつたら間違ひなく折れて  
いた。制作手順もだけど同じモノ以上のを作れるのは…

今は集中しなければ。拳、いやあのガンプラ。ガンダムプルト  
ーネベースのカスタム機から尋常ならざる信念を感じる…それにこん  
なに肌がひりつくような殺気は初めてだ

「しかし相手がガンダムとは…<sup>グラハム・エーカー</sup>我が心の師の言を借りるならば。まさ  
に運命と言わせて貰う!!」

「…っー！」

フェイントを織り交ぜた拳、蹴りが迫る…後ろへ、右、左にかわす。  
でも私のツクヨミ・斬の装甲を掠め傷がつく…よく見るとプラフス  
キー粒子が攻撃が当たる面に限定して展開し纏われてる、必要最低限  
な装甲しかない私のツクヨミじや二、三発受ければ只じやすまない

それに、さつきから通信が繋がらない…その時、プルトーネの背後  
に赤い血の色みたいなプラフスキー粒子の柱が天高く伸び空気が震  
え嵐が起きた

「ア、アレは？」

「(あそこはアマミがいる場所？なにが……でも今は！)」

光の柱が消えていく。間違いないタツくんの身に何か起きたんだ。でも目の前の相手が立ちはだかる。晴嵐を袈裟、正眼に構え抜き打つけど防がれる。心臓が早鐘のように鳴る……嫌な予感が増していく

「バトルの最中だけどソコをどいてくれないかい？……  
世界で一番愛する伴侶となるタツ君  
私の大事なパートナーのもとに馳せ参じる為にね」

「通しません……(お父様とお母様の仇を知るために引くわけにいかない)」

拳を構え立ちはだかる……何かこみいった事情を抱えてるみたいだ……引くことすら考えない、負けられない理由を

「ならば押し通らせて貰うよ！」

踏み込みと同時に晴嵐を抜き、そのまま逆袈裟に切り払う。それを紙一重でよけ拳が頭部へ迫るのを躲すけどアンテナを掠める……ツクヨミに新たに追加した粒子バーニアで独楽のように回転、そのまま腕を切り払うも浅く切っただけだ

「く………」

「……やるね」

再び距離を取る……強い。国内は愚か海外、いや世界ランカーに比肩すると断じよう。でも先程から嫌な胸騒ぎがする……なんとかして彼女を倒すか隙をつきトランザムでタツ君がいるエリアにいかなければ

ば。未だに拳と蹴りを震う彼女から僅かに反応が遅れた

「し、しまっ……」

「終わりです」

ガラ空きの胴に粒子を纏わせた拳が迫る。私はまた守れないのか？ 碎かれる衝撃に身を強張らせた目を閉じた……でも何時までそれはこない。目を開け見たのは深緑、いや巨大な刃がある

「……私の拳を!？」

濃紺と白に彩られたAGEー1が私のツクヨミと彼女のガンプラの拳を剣を楯がわりに立つ姿……突然、通信が繋がリサヴウインドウにファイターに息をのんだ。一時間前、私の晴嵐を作り上げた仮面のファイターがいた

『……何をしている。早くいけ……』

「ぎ、君……なんでここに？もしかして割り込んだのか？ルール違反だよ!？」

『そんなコトはどうでもいいっ！アキツキタカヤの元にいけ!!』

な、何を言ってるかわからない……なぜバトルフィールドにいるのか、そして私を守ったのかも……それに時間がないって一体？楯がわりにした刃が押されていくも押し返し正面に割り込んだ

『考えてる暇は無い！行くんだ……アキツキ・タカヤが消えてしまっ前に!!』

「え？タツ君が……消える？……な、なんで」

『……時間が無い！カヤお姉ちゃ……っ……テンドウ・ミカヤ！タカヤのパートナーであるならば行け!!』

有無をも言わせない声から感じたのは必死の感情…何故かわからない内に私はツクヨミを動かし、少年…タツ君がいるエリアへ跳ぶ…サヴウインドウにはもう閉じてる。後方モニターには彼女と斬り結ぶ彼の姿が見えた

なぜ、私は彼の言葉に従ったのかわからない…わからないけど今は…

「トランザム！」

この好機を作ってくれた…必ず借りを返さなければいけない。赤く輝くツクヨミと共に光の柱が生まれたエリアへ跳ぶ…少年、いやタツ君のもとへと

『いったか…』

トランザムで加速するツクヨミを見送り、ふと視線を移す…ガンダムプルトーネから怒りにも似た気配を感じる

「…………ソコをどいてください。私は彼女を倒さなければいけないです」

『…………問おう。なぜだ？』

「…………仮面で顔を隠すアナタにわかるわけありません!!」

『……………』

地を蹴り殴りかかえるプルトーネ…それをいなす受けながら後ろへ跳ぶ…哀しみに彩られた拳だ。ヤツ、宇宙ガンプファイターXが



何らかの手段、いや…

間違いなく彼女の弱みを握り、つけ込み使いやすく何時でも捨てること  
とが出来ると手駒としてると

あの日の怒りが沸々と沸き上がるのを抑える……ガンプラを愛するモノとして…オレいや、ボクは宇宙ガンプラファイターXの悪業を許すことはない！

『ならば、相手をしよう……流派、ガンプラゲルマン流二代目として……タツミ・キョウジ、ブレイドハート、参る!!』

名乗りとともにブレイドハートの刃を大きく構えた

第十六話 再臨、影の刃！  
―ブレイドハート―

了

## 第十七話 消えゆく魂、奪われる至宝

『……………』

「あらよ、ほいさー！」

オレのリユウジンオーに接近、拳打と蹴りを打ち込んで来やがるのを捌き防ぐ。ち、あの時の記憶…ガンプラを踏み潰して、何度も蹴りと殴りつけて刻んだ痛み、劇薬紛いの新薬を無理矢理打ち込んで何度も、何度も痙攣させた楽しい、楽しい思い出をこのオレの姿、この顔と出で立ち…宇宙ガンプラファイターXをみて蘇らせた

震え怯える様を見ながら、弱みにつけ込んで心を折ろうと楽しみにしてたのになあゝ

「ほらほら…どうした？教えるんじゃないやなかつたのかなあゝ？二代目メイジン・カ・ワ・グ・チ？あは？」

『……………』

煽つても無口を決め込むか、攻撃の勢いが収まるどころか、激しさを増してく…まさかあの時、失敗したと思った二代目メイジン・カワグチの <sup>ダ</sup>思考 <sup>ウ</sup>人格転写 <sup>ロ</sup>が <sup>ド</sup>上手く <sup>ド</sup>いってるとは驚いたよ

数ヶ月前、死に損ないのオリジナルとやり合った時と同じ空気を纏いやがってるし口調とやり口もしっかり再現されてる…こんなことなら研究所と職員を処分しなければ、金の無駄遣いにならなかつたかもなあ？

さて、ソロソロお遊びは終わりにしないと、ストラトスは？とサヴウインドウを開き驚いた……………おいおいマジかよ！のこのこ出てきたか

—ガン普拉……ゲルマン流?……ふざけてるんですか?—

—……………そう捉えるなら捉えるがいい。しかしココからは通す訳にはいかん!—

くく、くく………アハハツアハハハハハハハハハハハハハハハ……あ  
あ最高おつに楽しいなああく肌が粟立つ程の殺気をビンビン感じる。  
俺への憎しみを向けてるのがわかる、わかるよう?。

『……………』

なあアキツキタカヤ、お前はあとどれぐらいで、何分、何秒で二代  
目メイジン・カワグチに塗りつぶされるかな?あの テンドウ・ミカヤ ショタコンが来  
るまで持つかな?今までの失敗作より持つかな♪♪持つかなああ  
あく♪

第十七話 消えゆく魂、奪われる至宝

同時刻、会場観客席通路

『う、うそ……あれは………なんで、なんであの人と………兄さんと同じ……  
タカヤ、タカヤが』

『メ、メイ、落ちつくんだ……』

ふらつくメイを抱き留めた……大画面に映されたのアمامミ・イツキ、  
いや宇宙ガン普拉ファイターX……アストレイ・リュウジンオー、そして  
メイのお兄さんと同じくオーラを纏い拳、蹴りを繰り出して斬りつ  
けるタカヤのアストレイ・ブレイド。傷ついた関節やグラついたパー  
ツに情け容赦なくダメージを与えてく姿に声を失った

音声はなぜか拾えない、でもあの戦いぶりは修羅と呼ばれ恐れられ  
た 義 二代目 兄メイジン・カワグチと同じだ。

「ノンノン、タカタカ…なんか怖いよ」

「……な、なんなんだよ……どうしたんだよタカヤ！こんならしくないだろが！」

タカヤの事を想うレヴィちゃん、ノーヴェちゃんも同じように驚いてる…ゲンヤさんが言った事が現実になった。危険思想故に国際指名手配されてる<sup>宇宙ガンプラファイターX</sup>ガンプラファイアが暗躍してるならば、もうコレは地方大会、いやガンプラバトルの範疇じゃない。国際ガンプラ警察にしか手に負えないとヒロシさんに連絡しようにも電話が繋がらない。「姉貴、会場の入り口がロックされてやがる！どうなってるんだよ！」

「そんなはずはな…あれ(ウソ、ゲートが外部からハッキングされてる？私のプロテクトをすり抜けたの!?)」

バトル筐体があるゲートがロックされ、強制停止も出来ない…外部と通信もダメ、筐体があるゲートはロックされてる

ソレに今、ここには多くの観客がいる。ミツキさんの目を掻い潜って何かを仕組んでるはずだ…迂闊には動けない

無関係の人を人質に取ることを平然とやり、弱みにつけ込むことに酔いしれ愉悅に浸りタカヤに地獄の責め苦を与え、僕とメイを苦しませた張本人がいるのに！

ギリギリと爪が食い込んだとき、ミカちゃんと宇宙ガンプラファイターXのペアの間に何かが入る。AG Eーレイザーベースの改造機の姿がある。何度か会話したようなやりとりを経て入れ替わるようにツクヨミが赤く輝く、トランザムで離れてく…

『あのガンプラ……いったい……』

あのガンプラをみると何か、こう親しさを感じた。漠然とだけ助けに来た感じがしたんだ

『……………』  
「……………」

風斬る音と共に蹴り、拳が迫るのをブレイドハートの刃でいなし受け流す…触れただけでも衝撃がアームレイカーに響く

なんと研鑽された動きだ。しかしプラフスキー粒子を纏う拳と蹴りを通し伝わるのは苛立ち、怒り、哀しみ、負けられぬ執念のみ。宇宙ガンプラフアイターX、アマミ・イツキに何らかの弱みをつけ込まれたか

『ソコをどいてください…』

「否、断る…：…哀しみ、怒りに彩られた拳、蹴打を震うバトルをやめるならば考え…」

『あなたに、あなたに何がわかるんですか！…：私の邪魔をしないでください!!』

「ぬっ!？」

拳、蹴りが鋭く正確に撃ちこみの速度が増し、防ぐ刃が軋んだ、こうまで頑ななまてになつた理由を知る術は無いに等しい。カヤお姉ちゃ…：テンドウ・ミカヤがタカヤのもとに辿り着き、二代目メイジン・カワグチに塗りつぶされるのを防ぐためには、オレも向かう必要がある。もはや一刻の猶予も是非も無い。アームレイカースロットを右に回しアイコンを叩く。ブレイドハートのクリアパーツから深い緑の粒子…プラフスキー粒子が嵐のように荒れ狂う…オレは今、ブレイドハートと一つになる！

『な、コレは…プラフスキー粒子…く、動かない!?』

「怒りと憎しみを拳と蹴りに込め放つファイターよ!しかと刮目せよ。我がガンプラゲルマン流、最終秘奥ツ!!シュツルムツ!ウンツ!ドラアンクウウウウ!!」

ガンダム・ブレイドハートと一体化、プラフスキー粒子の嵐に四肢を拘束されたプルトーネが逃れようと藻掻くも遅い、脛部シングルブレイド、腕部大型シングルブレイドを左右に構え展開回転、そのまま接近し胴を、腕を、脚を何度も何度も切り刻ぎんだ

『そ、そんな……き、きゃああああ!?』

ファイターの叫び、嵐に巻き上げられ空高く舞いながら切り飛ばされた四肢、胴体が落ちていく。すまない、関節へのダメージは最低限にした…次に相見える時は、いやソレは無い。慰めや謝罪の言葉をかける時間も無い

背を向けテンドウ・ミカヤが向かった先にブレイドハートのバーニアスロットを全開にし飛翔、加速する

「待っている宇宙ガンプラファイターX、キサマの思い通りにさせません。アレは!!」

最大望遠で撮されたのは宇宙ガンプラファイターX、アマミ・イツキが駆るアストレイ・リュウジンオー、アキツキ・タカヤのアストレイ・ブレイドが殴り、斬りつけ、穿ち全身のクリアパーツから赤い、血のようなプラフスキー粒子を放出する様はまさに悪鬼、二代目メイジン・カワグチそのもの。アストレイ・リュウジンオーを殴り飛ばした。力無く倒れたのを見逃さず左腕の大型ブレードを振り上げ、何度も何度も何度も突き立て、斬りつけた時、テンドウ・ミカヤのツクヨミが背後から現れた

『やめるんだ少年!!』

『……………!?!』

羽交い締めにし叫ぶように呼びかけるのがオレにも届く…トランザムのパワーで押さえ込もうととしてるのがわかる。赤いプラフスキー粒子の奔流が収まるどころか激しさを増していく

『…私のガンプラバトルを邪魔をするな…ガンプラバトルは勝利こそ絶対、再起不能なまでに叩き潰す…離せ』

『そんなことを言わないで、やめるまで絶対に離さない!!』

『…少年…?…私はそんな名前じゃない。二代目メイジン・カワグチだ』

『うわっ!』

羽交い締めにしたツクヨミを振り払うよう地面へ叩きつけた…振るわせながら起き上がりとするがんぜん、ユラリと大型ブレードを突きつける、割っ手入ろうとバーニアスロットを引こうとした、ソレを止まらせるような声が響く

『違……うんだ……キミはアキツキ・タカヤ。二代目メイジン・カワグチじゃない……タツくん!!』

その声に振り下ろされたブレードが寸前で止まった…荒れ狂っていた赤いプラフスキー粒子の嵐が止みブレードが震えだし後ずさりした

『う、う……タツくん?……僕私……二代目アキツキ・タカヤ。……違  
う……うう、うっ……はあはあ……宇宙ガンプラファイターXを、宇宙ガンプラファイターXを!……うわあああああ!!』

叫びと膝をついた。その全身から赤い粒子が再び吹き荒れだした……やはり無理か……荒療治だがオレが……な？

『お、落ちついてタツくん……もう大丈夫だから』

『……………はあ、はあ……』

全身がひび割れたツクヨミが抱きしめていた……赤い粒子がその体を蝕んでいく中、離れようとしないうれでいくのを気にせず話しかけていく

『もう、何も怖くないから……ね？お姉ちゃんがいるから……タツくん』

『は、は、はっ……う、うん……カヤ……お姉ちゃ……ん……』

粒子の嵐が収まった……ボロボロのブレイドを離さないように抱き留めるツクヨミをみて胸を撫で下ろした。もう大丈夫だと思いながら残る問題、宇宙ガンプファイターX……アストレイ・リュウジンオーを見た

「な、ヤツがない！ドコに消えた!!」

『アハハッ、アハハハハハ！』

ヤツの姿を探すオレ、テンドウ・ミカヤ、意識を失ったアキツキ・タカヤは愚か会場全体に、かんに障る声が響きモニターが開いた……忘このふざけた衣装と仮面に顔を隠したアイツが肩をふるわしていた

『いやあ感動したよ。流石だなあアキツキ・タカヤ、テンドウ・ミカヤ……今回はマジで肝が冷えたなあ……』

「宇宙ガンプファイターX、ドコにいる！姿を見せろ!!」



『やだね。俺のガンプラはズタボロだしなあ〜おかげでいいモノ見れ  
たし。今回は負けけた♪にしてやるよ……T A—2……』

「その名前でオレを呼ぶな!!」

『あら残念。……さて長居すると小うるさいガンプラ警察が嗅ぎつけ  
てくるからお暇させてもらうよ……お宝も手に入れたしね』

お宝……その言葉にはつとまった。まさか!?

—姉貴、カレトヴルツフの保管庫がやられた!—

—やられたわね……ユウ、通信は回復したわね。ガンプラ警察に通  
報、ヒロシさんとゲンヤさん、ユウキさんも呼んできて!—

『カレトヴルツフ、最強のガンプラファイターである俺に相応しい武  
器だ……有効活用させてもらうよ……んじやバイバ〜イ♪』

手にした二振りのカレトヴルツフを見せびらかしモニターにノイ  
ズが走った……やられた!ヤツの狙いは二つ、タカヤを苦しめ、カレト  
ヴルツフを奪う為に仕組んだことだったのか。歯ぎしりしながらノ  
イズしか撮さないスクリーンを睨んだ

「う、く……」

視界が歪み頭に鈍痛が響く……く、もう限界か……早く戻らなけれ  
ば。アキツキ・タカヤ、テンドウ・ミカヤ……また会おう。ヤツは、宇  
宙ガンプラファイターXは必ず現れる。あの《関ヶ原ウォーズ》で手  
に入れ損なったモノを奪う為に

その時まで暫しの別れだ……躰を癒やせ、そして二代目メイジンカワ  
グチの残滓を克服することを願いながらバトルシステムから離れた

コレがアキツキ・タカヤと宇宙ガン普拉ファイターXとの因縁を終わらせるための戦いの始まり…

でも知らなかった…テンドウ・ミカヤがオレの正体に気づきつつあることを

第十七話 消えゆく魂、奪われる至宝

了

## 第十八話 動きだす悪意。 模型秘伝帳…そして

アクション商事…海外に多くの支社を持つ大企業。しかしソレは表向きの顔だ

ガン普拉バトルの健全化および違法バトル、付随する犯罪を取り締まる国際ガン普拉警察が置かれている。今、ここでは危険極まりない思想をもつ宇宙ガン普拉ファイターXへの特別捜査本部が置かれ捜査が進められていたのだが…

「ヤツらの足取りが掴めねえな…くそ」

「ヒロシ課ち…捜査官、こちらダメです…わざわざ足のつくような逃走経路、欺瞞工作はヤツの十八番ですよ」

「ち、あの野郎のせいで何人のビルダー、ファイター、そしてその家族が不幸になったか…オレの娘《レヴィ》の彼氏《将来の息子》まで…くそが!」

ダンツとデスクを叩く、その音に捜査官も躰を振るすも仕事に戻る…サエグサ模型店でのカレトヴルツフ争奪ペアバトル会場に乗り込んだヒロシが見たのはもぬけの殻となったバトル筐体、そして

—タツ君、タツ君!—

—タカタカ!お願い…目を開けてよ—

—おい、タカヤ…寝てんじゃねえよ…—

ぐったりとした娘《レヴィ》の彼氏を抱き抱え大粒の涙を流して何度も呼びかける少女たち…あの明るく元気な末娘《レヴィ》が泣きじやくる姿を思いだしギリツと歯ぎしりする

今、アキツキ・タカヤ《将来の息子》はコースト総合病院に緊急搬送され意識が戻らないまま一週間過ぎた。何度も足を運んでは他の子と共に呼びかけてる…痛々しくて見ていられない

—ボクたちね。絶対にタカタカのブレイドを直すから……—

この状況を生み出した張本人…宇宙ガンプラファイターXを必ず逮捕する。最強のガンプラを手にしながら弱みにつけ込み他者を不幸にする事に悦に浸るコイツだけはとヒロシを初めとした捜査官は誰もが決めていた

しかし、ソレを嘲うようにドアが勢いよく開け放たれ、息を切らした捜査官が飛び込んできた

「ヒロシ…課ち…捜査官…が…創寺から金ノ巻…奪われ…宇宙…プ…ファイターXに」

「金の巻が、模型秘伝帳が奪われたのか！宇宙ガンプラファイターXに!?なんてことだ!…コレじや関ヶ原ウオーズの蒸し返しじやねえかよ！水戸の爺さんが持っていた五巻の行方もわからないのに……」

声を大にしヒロシの叫びが木霊する…模型秘伝帳を巡る戦いが始まろうとしていた

第十八話 動きだす悪意。模型秘伝帳…—浸食—

コースト総合病院 同アキツキ・タカヤ病室……

消毒液の匂いが漂い、規則正しい電子音がなる室内。そのベッドに眠るのは一週間前に運び込まれたタカヤ。あの戦いの直後に意識を

失い昏睡したままが続いてる中、静かに扉が開いた

「タツくん……」

黒髪を揺らし入ってきたのはミカヤ。そのまま備え付けの椅子に座り手を握った

「タツくん、気分はどうかな……今、ブレイドをレヴィ、ノーヴェと一緒に直してるんだ……アシムレイトで繋がったままで痛いかも知れないけど。必ず直すから安心して」

優しく握る手に涙が落ちていく

「みんなに話したよ……わたしとタツくんのことを……ノーヴェやレヴィは幼馴染みだったのを気にしてないって感じだね……今までだまってたからなんか言われるかと思ったんだ……」

「なんとなくわかってた。バレないとおもったか？あんな風に接してたらバレバレなんだよ——」

「うんうん、ミカヤンってタカタカの事を全部知ってる感じだしね——」

「って言われたけど……あ、ケンカはしてないから安心してね……」

優しい声はタカヤに向けられるも意識のないいま届いてるかわからない……それでもミカヤは声をかけ続けた

必ず目を覚ますと……そのやりとりは個室の外に届く

「テンドウのお嬢さん、アソコまで若の事を……」

「ああ、テンドウのお嬢さんだけじゃねえ。テストロツサ嬢、ナカジマ嬢もだ……若、早く目明けてくださいよ。親爺も心配してんでさあ」

サングラスに黒服の男二人が涙ぐむ：彼等はタカヤの曾祖父、《ガンプラ任侠アキツキ組》組長にして緹喃学園長《アキツキ・オウル》の配下。運び込まれたタカヤの身辺警護の為につけられている。向かい側にある応接室では

「オウルお祖父さま、何かわかった？」

「すまんの。ワシの情報網を使っても足取りが掴めねえな……ヤツがワシのシマ入ってきたとわかってればキツチリ落とし前つけて《沈めてやる》貰う予定だったんだがよお」

紋付き袴に杖をつく老人：タカヤの曾祖父アキツキ・オウルが物騒なワードと共に吐き出したのをみてメイもユウキも若干冷や汗を流した

「オ、オウル義祖父さん、落ちついて……いまヒロシさん、ガンプラ警察もだけどシャツフル同盟も動いてるし……」

「……ヤツは模型秘伝帳《金ノ巻》を盗みやがって……水戸の爺さんが持ってた五巻は行方知れずだ。次に狙うとしたらモアイが持つてる《木ノ巻》、造形の里にある《土ノ巻》……そして《天ノ巻》も狙ってるだろうなユウキ」

「《天ノ巻》……たしか仏教発祥の地《天竺》で釈尊様の涅槃姿を彫り上げた弟子の一人が最古の技法、造形法と失われた技術を持ち、釈尊様の身を護るクシャトリアと共に日本に渡り書き記した九番目の模型秘伝帳になった……でも噂じゃ」

「あるんだよ……水戸の爺さんが逝く10年前、久々に飲んでた時にな。《天ノ巻》は釈尊の弟子で姿を彫り上げた仏師と戦士《クシャトリア》の子の子孫が護ってたらしい……」

「らしい？」

歯切れの悪い言葉に疑問が浮かぶユウキに応えるよう紡ぎ出された

「三十数年前、《天ノ巻》の噂を聞きつけた馬鹿に事故に見せかけられて殺された。ソレを継承した夫婦、生まれたばかりの双子の兄妹もろともな……あんな悔しそうな水戸の爺さんは見たこと無かった。それ以来《天ノ巻》は行方知れずだ」

そう口にしオウルは目を閉じ息を深くはき、ユウキは《関ヶ原ウォーズ》から十数年、宇宙GファイターXが日本に現れた理由。カレトヴルツフ、そして《天ノ巻》を含めた八巻全てを手にし宇宙最強のガン普拉ファイターとなりガン普拉ファイアの力を世界に知らしめることだと気づいた

「ガン普拉バトル第7回世界大会がはじまるまで二ヶ月：ソレまでになんとか手を打たないと…」

「そんな時はあのゼロ以下のクズ《宇宙GファイターX》は性懲りもなく現れるに違いねえ……タカヤのまえにな」

「現れたら……潰す。今度こそ絶対に…」

ガン普拉バトル公正委員会よりも父親として、曾孫を苦しめたクズへのけじめを、修羅の兄をもつも母としてタカヤの為、ガン普拉バトルの為に必ずケリをつけることを誓う

しかし、この時は知らなかった…病室に眠るタカヤの身に新たな異変が起きつつあることを。声をかけるミカヤも、あとで来るレヴィ、ノーヴェ、バトルを通じて友情を結んだワタルも気づくことなく

薄暗い灯りの中、足下に敷き詰められた赤く血のような絨毯を歩くのは漆黒のマントを翻し、シルクハットにタキシード姿の男：宇宙GファイターXことアマミ・イツキ。その先にある豪華な作りの玉座へ身を預けるよう座り足を組んだ

その手にはペアマツチの優勝賞品で奪われたカレトヴルツフが踊るように遊びながら端末を手にし短くコールする。間を置かずに繋がるように映されたのはホテルの一室。碧銀の髪を揺らし俯く少女の姿…無論、観られてることに気づいてない

「…ストラトス、無様な負けっぷりだな？」

『……はい』

「せっかく俺が用意したガンプラを無駄に……コレじゃ教えられ無いなあ？今までバックアップしてきたのがさあ？意味わかるよなあ？」

画面の向こうで躰を振るわした

『お願いします！次は必ず、必ず勝ちます！だから、だからッ!!』

端末を握り締めすがらよう嘆願するアインハルト、仮面の奥にある顔は愉悦に満ち口角が上がる…大事な家族のために必死になる姿はたまらない心地よさに躰を震わせ、近くに置かれた卓上にある傷だらけのアストレイ・リュウジンオーを目にする

『なんでも、なんでもします！だから、だから…』

「……………ふう…冗談だよ。冗談……………まあ次は無いから……………必要なパーツは送るからささしばらくは自由にしていよ」



『……………はい』

軀を震わせるアインハルトを見て今までの鬱憤が綺麗さっぱり消え、盗撮カメラを切りイツキは仮面に手をあて笑いだした

「あはは、あはは、あくあスツキリした……さてカレトヴルツフは手には入ったし、あとは模型秘伝帳を手に入れるだけかな？……オレの為にパパが取り損なった《天ノ巻》をね」

仮面の向こうにある瞳が妖しく光った

深夜、コースト総合病院…月明かりに照らされるも薄暗い病室に寝かされたタカヤがゆつくりと軀を起こした…顔を俯かせベッドから降り机に座り灯りをつける

「……………」

その前には痛々しいまでに傷ついたアストレイ・ブレイド。ミカヤ、ノーヴェ、レヴィの手で外装とフレームは修復されるも進んでいない。タカヤにしかわからない改造が施されているからだ。無言でソツとフレームに手を触れ、離すとデザインナイフ、ニツパー、スケール、エツチングソー、クリーパーーツを切り出していくなか微かに唇が震えた

「……………ガン…ラバ…ル……は…勝…すべて」

抑揚無き声と共にプラ板を切り離し、熱を加えた真鍮線を溶かしこむ。コレをやや曲線を加えた曲げ加工、形を整えていき、残像を残しながら手を動かし、やがて禍々しい装甲が出来上がる

「……ガン普拉バトルは勝利こそ……絶対……宇宙<sup>ガンプラ</sup> G ファイター<sup>エックス</sup> X。見せてやろう……私のガン普拉バトルを新たな刃と共に……」

顔を俯かせたまま言葉を紡ぐタカヤ……月明かりに照らされ絨毯に伸びた影……揺らめくマフラーとコートをたなびかせる<sup>二代目メイジン・カワグチ</sup> 悪鬼にも見えた

第十八話 動きだす悪意。模型秘伝帳……浸食――

了